

---

# **花ぐるま事件帳～恩讐の彼方～**

笠原綾乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花ぐるま事件帳～恩讐の彼方～

### 【Zコード】

Z8039A

### 【作者名】

笠原綾乃

### 【あらすじ】

ただいま、改行調整中につき、読みづらい部分もあるかと思いますがご了承ください【PC版のみ】 m (—) m 時は享保。八代將軍吉宗の御世。幕政改革を推し進める吉宗を陰で支えた若者たちがいた。彼らは「庶民のための御庭番」として、江戸の町の平和のために、自らの命を賭けて悪しきものたちと戦う。

この物語は江戸時代を舞台にしていますが、主人公をめぐる設定は架空のものであり、実際の史実とは関係はありません (1 / 1  
5 更新分より「残酷描写あり」の注意書きを、3 / 06 より R 15

の指定をさせていただきました。苦手な方は「」覧いただく際お気をつけ下さい）

## 序章 前夜 -遭遇-（前書き）

### 【用語説明】

- ・呼子笛……同心や田代しが携帯し、緊急時に仲間を呼ぶ笛のことを。

## 序章 前夜・遭遇 -

亥の刻（午後十時）をつげる鐘の音が、漆黒のなかへゆつくりと溶けていった。

一月ほど前までは、この時間を過ぎても灯りの消えない料亭から千鳥足で出て行く醉客を、青や紫の着物に身を包んだ芸者が見送る、あるいは同伴する光景でいっぱいだった本所・深川界隈も、ほとんどの店がのれんをしまい、そびえ立つ建物を強い北風がなめるように吹いていく。

そんな中、唯一灯籠に灯がともっている料亭「浮雲」の玄関先に、黒の布地に大きな蝶の刺繡をあしらった振袖を細い身体にまとった芸者、京香が、本日最後の客である、大店の主人らしき人物を送りに、外へと出た。

「どうもありがとうございました。またどうぞ」

京香のあでやかな声に頬をゆるめた初老の主人が、恰幅のいい身体を駕籠の中に沈める。一人だけついてきた番頭らしき人物の合図で、駕籠が出発した。

「やれやれ、あの御仁も度胸がいいね。いつ何時、辻斬りが現れるやもしれないのに。あんたも気をつけてお帰りよ」

白髪混じりの頭を結っている女将の呆れた物言いに愛想笑いを浮かべ、地につくくらい長いすそを持ったのと逆の手で提灯を持つた京香が軽く会釈をして、闇の中へと歩き出した。

料亭が並ぶ通りを抜け、小さな橋を渡るとそこは、武家屋敷街になっている。

京香のはるか前方には、先ほど見送った駕籠があるのを示す提灯の灯りが揺らめいている。

犬の鳴き声すら聞こえない静寂の中、突然、空気が動いた。

( 来た )

先ほどまでにこやかに微笑んでいた京香の大きな目が鋭く光った。提灯を投げ捨てて、胸元の扇に見立てた短刀を取り出し、駕籠のほうへ向かつて駆け出すと同時に前方の灯りが放物線を描く。

少しの沈黙の後、刀を切り結ぶ音がした。そして。

「ぐわっ！」

番頭に化けた供侍のものらしきつめき声が、辺りに響く。

「お待ち！」

たまらず叫んだ京香が、男と駕籠の間に割り込んだ。編笠をかぶった男は一瞬、虚をつかれたように立ち尽くすが、すぐに体勢を立て直す。

静かなただずまいだが、鋭い殺氣。一瞬でも隙を見せれば、今度は自分が刀の露に消えてしまう。

「邪魔立てすると……、斬る！」

男は低い声で言つと、京香に向かつて刀を振り下ろした。それを短刀でなぎ払い、逆手に構えて呼吸を整える。そこへ。

「かかつたな」

声がして、駕籠から出てきた大店の主人　　に化けた、元、紀伊和歌山藩江戸屋敷城代家老の清水天膳が、京香の横に並ぶ。

「お主の正体、今度こそ見極めさせてもらひつぞ」

「伯父上！　出てこられては！」

京香は思わず叫んだ。

「心配するな。腕はまだ衰えてはおらぬ」

そういう問題ではない。ここで天膳に怪我をされた場合、困るのは姪の京香だ。

昔は、なみいる強豪をねじふせる腕を持ち、当代一の剣豪と名高かつた天膳だが、自らの長男である清水忠直に家督を譲り、悠々自適の隠居生活を送ること約五年。

齢五十を過ぎても腰を曲げずに歩いているが、見かけは立派な

「おじいちゃん」なのだから。

そんな京香の心配に構わず、天膳は刀を引き抜いた。

二人の間を、男の切つ先が襲いかかる。

京香に構うことなく、男の刃が天膳のほうへ向けられた。辛うじてよけてはいるものの、ひいき目に見ても、天膳の分が悪いのは明らかだ。

大きな音とともに、刃と刃がぶつかった。

押された天膳の足元がふらつき、後ろのほうへと倒れこむ。

それを見た京香は供侍の刀を拾い、再度二人の間に割つて入ると、刀を逆袈裟に振りぬいた。

身動きできずにいた男の編笠の一部が切れた。雲の間から差し込む月明かりに照らされて、男の顔が京香と天膳にさらされる。

きりりと上がった眉に、大きな目。

深いしわが刻まれた頬には、火傷のあとのような大きなあざがある。

「そなたは、もしや……」

背後で、天膳の声がしたのと同時に、呼子笛の音が聞こえて来た。

「姐さん、旦那！ 大丈夫か」

その声とともに、目が細く、鼻のすつと通つた美青年が、十手をかざして踊りこんでくる。

「新さん！」

「お前さんが、今世間を騒がしている悪党か。ここで会つたが最後、新吉さまの十手でお繩にしてやるから、覚悟しやがれ」

新吉が、歌舞伎役者のような口上を言つたのと同時に、京香らの前に、煙幕が張られた。

「待て！ ……っ」

天膳は立ち上がりうとしたが、咳き込み、腰を押さえてうずくまる。

「伯父上ー、しつかりして下さー！ 伯父上ー！」

## 序章 前夜・集合・（前書き）

### 【用語説明】

- ・**月代**……おでこから頭頂部までの髪を剃り落とした部分のこと。  
江戸時代では元服

（成人）した男子のあかしでもあった。

- ・**立髪**……月代を剃らず、頭上の毛が立っている髪型のこと。おでこは四角に剃つて  
いる。

## 序章 前夜・集合 -

「父上！ 何を考えておられるのです！」

あのあと、駆けつけた配下の者とともに、傷ついた供侍と天膳をどうにか屋敷へ連れ帰った京香と新吉を待っていたのは、天膳の長男であり、京香の従兄弟である、現、紀伊和歌山藩江戸家老の清水忠直の怒鳴り声だつた。

「近頃、頻繁に『浮雲』に通つていらつしゃると聞いて、いやな予感はしていたのですが……。まさか京香や新吉を巻き込んでの犯人捜しとは、好奇心も度が過ぎますぞ！」

おでこの月代に布をやり、冷や汗を拭きながら、忠直は声を荒げた。

「そんなに怒らなくともいいではありませんか」

「京香。父上から話を聞いたときになぜ止めてくれなかつたのだ。お前なら、父上がこうなることを知つておつただろうに」

京香は見かねて口をはさむが、忠直の怒りが、今度はこちらへ向いてしまつた。

「こうなるとは何だ！ 忠直！ ……いたたたた」

思わず起き上がつた天膳が、痛みに耐えかねて腰を折つた。京香は慌てて天膳に手を貸し、部屋の中央にある布団へと再度横たえる。「とにかく、辻斬りのことは大岡様を中心に奉行所で探索しておりますゆえ、金輪際、手出しが無用に願います。わかりましたね！」まるで小さな子供を叱るかのような口ぶりで、忠直は天膳に言い渡した。しかし。

「だがな忠直。我らが動かねば、辻斬りの手がかりを得ることはできなかつたのだぞ。なあ、京香」

天膳は、目を細めて京香に問いかける。

「ですが旦那……いや、清水様。手がかりといいましても、わかつたのは頬に火傷のある男というだけでは」

それまで黙つていた新吉が、やや遠慮がちに口をはさんできた。

「新吉！ 余計なことを申すな」

「父上、やつあたりはおやめ下さい。新吉の言ひとおり、それは手がかりとは申せません」

不満げな表情を浮かべる天膳を、忠直が勝ち誇つた顔で見つめた。その姿が滑稽だったのか、新吉が声を押し殺して笑つてい。

しかし、気にかかることがある京香は、笑えずについた。

それは、あの男を見たときの天膳の反応だ。

まるで、思わぬところで意外な人物に出会つたときの、あの態度。考えたくはないが、見る限り、あの男と天膳には、何か関わりがあるとしか思えない。

「失礼します」

物思いにふけつていた京香の意識が、そこで途切れた。

襖が開き、浅草にある示現流の道場を切り盛りしている天膳の次男、源三が姿を見せる。

頭を立髪に結い、薄い灰色の着流しに身を包んだ源三の面立ちは、父に似た精悍な顔つきの兄とは違い、やや目が細く、黙つて座つていれば色事に明るい優男に見えなくもない。

「兄上。先ほどからの大声は何事ですか？」

「ちょうどよかつた、源三。お前からも言つてくれ。年甲斐もなく、無茶はしないでくれと」

なおも苦虫をかみつぶしたような表情で今の状況を説明する忠直に、京香の隣に座つた源三は笑みすら浮かべて答えた。

「それは無理というものです、兄上」

「何！？」

「今まで、この父上が、私たちの言ひことに耳を傾けてくれたことがありましたか？」

「……確かに、ないな」

わずかな沈黙ののち、忠直が納得したように返事をする。それと同時に、ついにこらえきれなくなつたのが、新吉が吹き出

した。

「こ、これ！ 新吉」

天膳の狼狽ぶりが、今度は京香の笑いのつぼを刺激する。

「京香、お前まで！ ……もう、知らんわ！！」

完全にへそを曲げてしまつた天膳には申し訳ないのだが、新吉同様、京香の笑いも止まらない。

しかし。

「ところで父上。火急の用ということ参ったのですが」

源三の言葉が、なごやかな雰囲気を一気に断ち切つた。

沂い顔をしてそっぽを向いていた天膳が腕組みをし、目を閉じた。笑い続けていた京香や新吉はもちろん、忠直も、天膳のほうへ緊張した面持ちを向ける。

「父上、もしや」

せつときとはうつて変わつた低い声で、忠直が問つ。すると。

「……さよう。『依頼』じゃ」

田を見開き、おどろかに天膳が告げた。

## 序章 前夜 - 依頼 - (前書き)

### 【用語説明】

- ・下知げじ……將軍が命令を出すこと
- ・花ぐるま……椿の花の一種、「江戸椿」の別名

## 序章 前夜・依頼 -

『依頼』 それは、時の將軍吉宗から、天膳に向けて発せられる「指令」のことを言つ。

「大岡様を通じ、上様より下知があつた。このたびの事件のことは皆も知つておろう」

一月ほど前から、幕府御用達の大店の主人が、次々と暗殺される事件が起きている。

米問屋の秋田屋、呉服商の能登屋、絹問屋の唐津屋。いずれも、吉宗が將軍職に就いてからその人柄、商売の様子などを見込まれて、御用商人になつたものばかりだ。

「最近わしは、油問屋山崎屋の主人に化けて『浮雲』に頻繁に通っていた。というのは、奴らの次の標的が山崎屋との知らせが、公儀御庭番衆よりあつたからだ」

京香はもちろん、あの場に居合わせた新吉も、忠直も驚いた様子で天膳を見る。

「それと同時に、今回の事件の黒幕は、上様の御政道に弓を引こうとするある旗本であるらしいとの情報をつかんだのだが、まだ、肝心の証拠が何一つない」

「そうなると、町方では手が出せない、ということですね?」

十手を預かる身の新吉の問いに、天膳がうなずいた。

「そこで、我々の出番というわけだ。『庶民のための御庭番』として、一刻も早くこれを解決し、市中に平和を取り戻せ、とのことだ」

『庶民のための、御庭番』

これは、天膳が指揮する隠密組織『花ぐるま』に指令を出すとき、吉宗が必ず口にする言葉だ。

御庭番と言つても、吉宗に直接仕え、諸藩の内情や世情の探索を

する公儀の者は一線を画し、どちらかというと私兵組織の意味合いが強い。主に町奉行では手の出せない事件の探索に当たり、ことの次第によつては斬り捨て御免も許される。

ゆえに、その人選は幾重にも慎重に行われた。

十年前、早世した七代将軍家継に代わり征夷大將軍に任命された吉宗はまず、幕臣として登用した一百人の紀伊藩士の子供たちの中より候補者を募つた。

そのうち残つた十人を天膳に預け、武芸・忍術・芸事などをみつちり仕込んだもののうち、残つたのが、天膳の息子の源三。公儀御庭番林軍太夫の三男、新吉。

そして。

天膳の妹で、今は紀伊和歌山藩剣術指南役の佐々木小十郎の妻、りくの娘、京香。

この三人が、吉宗からの『依頼』を天膳より受けて、江戸庶民の平和を守るために隠密裏に活動を始めてから、もうすぐ一年になる。普段は各自仕事を持つており、江戸庶民と変わらぬ生活を送つているが、この『依頼』が来ると彼らの生活・行動は事件を解決することが最優先となる。

岡つ引の新吉や芸者の京香はともかく、一番やっかいなのは源三だ。

浅草で道場を開いているのみならず、最近では、近所の長屋のおかみさんに頼まれて、寺子屋の先生まで始めたのだから、子供たちを巻き込まないようにするのに、かなり神経を使つらしい。

しかし、事件は待つてはくれない。

天膳が目配せをすると、新吉の隣に座つてゐる、忠直がうなづいた。

立ち上がつた忠直が、隣の部屋から、底が浅い大きな木箱を手に戻つて来る。

その中には、各個人が使用する様々なる刀と、三人分の封書が整然と置かれていた。

新吉が、清水家の家紋である椿の花が描かれた小太刀と手裏剣を、源三が大小の刀を、京香が刃の仕込んである番傘をそれぞれ手に取つた。

そして、忠直から葵の紋が入つた文を受け取る。

これは、吉宗から京香たちに向けての斬り捨て御免の赦免状。この文があつて、初めて下手人を斬ることが許されるのだ。

「上様より告げられた期限は七日間だ。皆の者、頼んだぞ」

天膳の言葉を聞いた三人の視線が、一瞬ぶつかつた。

幼い頃より共に修行を重ね、助け合ってきた仲間の心は、京香も新吉も源三も、互いにわかっている。

視線をはずし、天膳に向き直った京香たちは、両手をついて深く頭を下げた。

## 第一章 一日目・異母兄妹

天膳から指令が下りて一夜明けた朝、麻の布地を薄紫に染めた小袖に袖を通した京香は、作りたての煮物を持って浅草へ向かっていた。

従兄弟の源三が元服し、天膳からの命令で剣術の道場を開いて約五年。

京香は、家事を全くしたことのない彼のために、朝食の支度と一日おきの洗濯、ならびに部屋の掃除は欠かしたことではない。雲ひとつない空を見上げた京香の吐く息はすでに白く、冬が近いことを思わせる澄んだ空気が肌に心地いい。

しばらく歩いたところにある、大川をまたぐ小さな橋を渡つたたもとに、岡つ引だけでは食べて行かれない新吉が経営している茶屋の建物が見える。

さつき作った煮物は、源三と一緒に食べるには少し多いし、新吉のところへおすそ分けでもしようか。

胸元の風呂敷包みを見ながら思つた京香は、小さな建物の粗末な作りの戸を引いた。戸締りをしていないところを見ると、まだ仕入れには出かけていないのだろうか？

「新さん、おはよう」

戸の向こうにかかるつている紺色の暖簾をぐぐり、中に入る。しかし、新吉の姿は見えない。

「新さん、いないの？」

入り口の近くの机の上に包みを置き、声をかけた京香の背後に、知らぬ気配が近づいた。しかもそれは、自分に対するかすかな殺気を含んでいる。

今、京香が持つてているのは護身用の短刀のみ。

それを抜いたときの距離を計算し、胸元に手を入れるよりも早く、その気配が近づく。

一瞬のうちに、相手の刃物が京香の首筋を捉える。  
「おとなしくしないと、怪我だけじゃすまないよ」  
自分よりも少し高い位置で聞こえる、低い声。

( 男、か )

武芸百般を修めている京香といえども、男と女の力の違いにはかなわない。

相手の隙をつき、一回の男から逃れなければ。

京香は、わきあがる恐怖心を飲み込んで、小さく息を吸った。  
そしてかすかに手を動かし拳を握ると、それを力の限り後ろへ叩きつけた。

にぶい手ごたえとともに、いすの転がる音などがして、男の体が離れる。

京香は胸元に手を入れ短刀を取り出すと、逆手に持つて田の前に構えた。

「さあ、出ておいで」

机の向こうに隠れ、息を潜めている男に声をかける。しかし、相手はまったく動かない。

「何を盗りに来たのかは知らないけど、この店には金田のものなんてひとつもありやしないんだから」

「それはこっちの台詞よ！」

反論した言葉を聞いて、京香は思わず目を見開いた。

声はさつきと変わらないのだが、物言いが男のものとは明らかに違っている。

「こんな朝早くから、いつたい何のつもり！？」

立ち上がった声の主を見た京香は、驚きのあまり声を失った。

長く、豊かな髪を後ろで馬の尻尾のように一つに結び、灰色のはかまの上に同じ色の羽織をはおっているのは『少女』なのだ。

「あんた……、誰なの？」

よつやく言葉を出した京香だが、今度は少女が、小さく肩をすくめてから口をそらし、黙り込む。

「ちょっと、何とか言いなさいよ」

京香の言葉が終わると同時に、茶屋の扉が開いた。思わず振り返ると、そこには驚きの表情を固めたまま立ちつくす、新吉の姿があった。

「姐さん、……おみつ」

「兄さん」

おみつの口から出た思いがけない言葉に、京香の頭は混乱していた。

「ちょっと、新さん」

「おみつ！ お前あれほど部屋から出るなって言つただろ！」

京香にかまうことなく、新吉がおみつに詰め寄つてくる。

「だ、だつてこの人が突然」

「この人は、ここになじみの京香姐さんだ。朝早くに来るところからつて言つたじゃないか」

「聞いてないよ。そんなこと」

「やめなさい！」

取つ組み合ひの喧嘩になりそつた勢いの一人に割つて入つて、京香は叫んだ。

「とにかく、説明してくれる？ 新さん」

入り口のほうに顔を向けて、新吉をうながす。

「……あいよ。おこ、おみつ。今度は部屋でおとなしくしていろ。わかつたな」

観念したような表情で新吉はつなづくと、京香より先に、裏口から外へ出た。

冷たい風が、京香の頬をそつとなでていく。

「実は……、おみつは俺の妹なんだ」

「妹？ でも新さん、あなた、林殿の末っ子のはずじゃ」「ああそつそ。……親父のなかじやな」

昇りたての太陽に背を向けた新吉は自虐的に言ひとり、腕組みをしたまま小さく鼻で笑つた。

「え？」

「おみつは妾の子でね。俺たち三人と完全に血がつながっているわけじゃない」

新吉の言葉に、京香は呆然と彼を見た。

「おみつはずっと、虜げられて生きて來たんだ。血のつながりが半分しかない。それだけで上の一人にいじめられた。かばっても俺の力じやたかが知れてる。なのに親父はかばつてもくれなかつた」

「……そんな」

「そればかりか、吉宗様が將軍になることが決まつて江戸へ出でくるとき、ずっとおみつをかばつてきた俺は公儀御庭番衆からはずされて、おみつは紀州へ置いていかれた。……捨てられたんだよ」京香には信じがたいことだった。

小さなころ、誰にも負けたくない一心でひそかに特訓をする自分に、軍太夫は温かい視線を注いでくれていたのに。

「常に穏やかな表情で優しい。そんなのは表の顔だ。裏じや、自分に役立てないものは容赦なく切り捨てる。それがあいつのやり方さ」京香の動搖を見て取つたのか、新吉は怒つたように吐き捨てる。「俺は、おみつを捨てたあいつを許さない。絶対に」

「新さん……」

長く一緒にいたはずなのに知らなかつた、新吉の過去。彼が持つ妹への深い愛情と、父親への強い憎しみ。

それをまざまざと見せつけられた京香はこれ以上、言葉を告ぐことができなかつた。

## 第一章 一田田・葛藤・(前書き)

### 【用語説明】

- ・**一尺**……今の単位で換算すると、およそ30・3cm。京番の身長は五尺でおよそ152cm、源三は五尺六寸でおよそ170cm。
- ・**部屋住**……旗本の次男、三男が相続権もなく屋敷にいること。
- ・**戌の刻**……現在で言う午後八時のこと。

「……おカわり」

田の前にいきなり茶碗を差し出された京香は、びっくりして田を見開いた。

「どうしたんだ？ ほうっとして」

京香のその様がおかしかったのか、目の前の源三が含み笑いをして訊ねてきた。

「あ、いえ。別に」

茶碗を受け取つて、「飯をよそいながら答えるが、新吉が最後に見せたあの顔が、京香の脳裏から離れないかない。

「新吉のところで、何かあったのか？」

「なぜ私が、新さんのところへ行つたと存知なんですか？」

今日はまだ、新吉のところへ寄つてきたとは言つていないので。「その身長の割にせわしなく歩くお前が、いつになく遅かつたからな」

源三は背が高く、五尺六寸あるのに對し、京香の身長は五尺ちょっとしかない。

自分の背が小さことiga悩みの京香は、少しでも強く見せるための努力を怠ることはない。

源三の言つ「せわしない歩き方」もそれの一環なのだが。

「まあ。そんなこと言う人にはもう、」飯作つてあげませんよ」

それをちやかされたことに少しむつとした京香は、そつぽを向いて意地悪く言つた。

「お、おこおこ」

本当に慌てた様子で、源三が言つた。いかんせん、京香の教えでよつやく「飯をたく」と覚えた彼にとって、京香が「飯を作らなければ死ぬ」というのと同じことらしい。

「冗談に決まつてゐるじゃありませんか」

少し肩をすくめて京香が言つて、源三は心底安堵した様子で胸をなでおろした。

そんな源三を見て、ふと思つ。

旗本の次男、三男に生まれたものは長男と違つて家督の相続権がない、冷遇されるものが多いと聞く。

清水家の家督を当たり前のようになつて相続した忠直と違い、天膳の命令で修行を積み、野に下つたことを源三はびつ思つてゐるのだらうか。

「先生……こや、源三様」

元服する前の呼び名を口にした京香に、源三は怪訝そうな表情を浮かべた。

「源三様は、どう思つていらっしゃるんです？ 忠直様とは違つて野に下り、どのよつた生活をしてこる」と

一瞬だけ、源三の目が険しくなつた。しかし、すぐさま笑みを浮かべて言つ。

「部屋住でくすぶつてこむよつも、今のはうが俺の性はあつてるよ」

「……本当に？」

「どうして、そんなことを聞くんだ？」

「いえ。何となく気になつたものだから」

京香は源三を見ずに、言葉をにじます。

「京香は、今の生活に不満でもあるのか？」

新吉と同じように、京香も幼い頃に両親と別れた。

当時八歳。まだまだ父や母に甘えたい盛りに連れてこられ、すぐに厳しい修行に身を投じなければならなかつたことを恨みに思つたこともあつたが、今は何の不満も持つてはいない。

京香は、小さく首を振つた。

紀州へいても、成長すればいづれは知らぬところへ嫁に行かねばならなかつたはずだ。

だったら、信頼できる仲間とともに、江戸の庶民のために戦つこ

の暮らしのほうが、京香の性にもあつてゐる。

「そうか」

源三が嬉しそうな笑みを浮かべてうなずいた。

でも、新吉はどう思つてゐるのだろう。

おみつをかばつたがゆえに、公儀御庭番衆から外れたのだとしたら、それこそ本末転倒な話ではないのだろうか？

あるいは、軍太夫が新吉を外し、おみつを紀州へ置いてきたのに何か別の理由があるのだろうか？

笑みを浮かべて源三を見つめながらも、京香の思いは、新吉兄妹に向いたままだった。

「そういえば京香。お前、最近江戸へ出てきた山城屋を知つているか？」

「山城屋さんと言えば、この前亡くなつた米問屋の秋田屋さんに代わる次期御用商人と噂の……」

「ああ。上様が直々にお声をかけ、紀州から出てきたと言われる由緒ある米問屋だ。連中が次に狙うとするなら、その山城屋だろうな」

お茶とともにご飯を口にかきこみながら、源三が言つ。

また、自分の出番のようだ。今度の相手は多分、田の前にいる源三だらう。

「いつになさいます？」

「今夜、戌の刻に『浮雲』に来るよつ、父上に伝えてある

「……まだですか？」

京香はあきれた物言いで、源三を見た。

「仕方がないだらう。本人が一番やる氣なのだから。今度は兄上にも許可はとつてあるよ」

どうせじり押ししたのだらう。忠直の、苦虫をかみ潰したような顔が目に浮かぶ。

「じゃあ、帰りに新さんに伝えておきますから」

あからさまにため息をついて、京香は残つたご飯にお茶をかけて

ほおばり始めた。

## 第一章 一日目・人探し・其の一・（前書き）

### 【用語説明】

- ・**一刻**  
いつとき  
……今の時間で約一時間。半刻は一時間。四半刻は三十分。

## 第一章　一日目・人探し・其の一

朝早く店を訪ねてきた目の大きい女性、京香が去つて、一刻のこと。

おみつは、足を忍ばせて店の中央にある階段を下りた。

人探しのために紀州から江戸へ出てきて、早三日。

兄の茶店を見つけ、十年ぶりの再会を果たしたのはいいものの、あれから新吉は、自分をこの店に閉じ込めてしまった。さつきだつてそうだ。自分を部屋に閉じ込めて、京香と何かこそこそ話をしていた。

何か知られたくないことでもあるのだろうか？

一応思いをめぐらせてはみるけれど、おみつには何の心当たりもない。

第一、今こんなところに押し込められているわけにはいかないのだ。

店の奥座敷で眠っている新吉に目をやり、動きがないことを確かめると扉をそつと開けて、外へ出た。

紀州から出てきたときの格好ではさすがにまずいので、新吉の着物の中で、一番地味で、小さなものを選び、見よう見まねで着付けをした。髪の毛も、四苦八苦した末に適当に結い上げた。

きれいな着物を身に着けていた京香とは程遠い格好ではあるが、少なくとも、ここにいる人たちと遜色ない姿になつてはいるはずだ。

「わあ……」

両側へ並ぶ大きな建物、その前にはいろいろな絵を書いた看板や、小難しい字を書いたのれんが風にはためいている。そして、間をひしめきあうように歩く人の群れ。

紀州の山奥で、毎日泥だらけになつて飛び回っていたおみつには、初めて見る光景ばかりだ。

こんな多くの人の中から、自分を置いて紀州を出て行った祖父、

菊池小太郎を捜すことができるのだろうか。

おみつの心に一瞬、不安がよぎる。しかし。

(まあ、とりあえず歩いていけば、じいちゃんに会えるだろう)

すぐに思い直したおみつはとりあえず、橋のほうへ向かっていく。

そんな自分に注がれる、妙な視線。それは主に、女性からのもの

だった。

やつぱり、おかしいのかな？

すれ違ひざまに声を立てて笑った二人連れをぼんやりと見つめていたおみつの肩に、何かがぶつかった。

「痛いな、何するんだよ」

「あ？ 何だと。ぼおっと突っ立つてたお前が悪いんじゃねえのか」見ると、頬に傷のある、恰幅のいいつり目の中年と、その手下のような男一人が、こっちに向かって歩いてくる。

今まで均一に歩いていた人の波が、おみつらをよけるようにそいつを引いた。

何だか、気にくわない。

江戸へ出てきてからの兄への不満やら、今朝の出来事に対する怒りやらがうつ積していたおみつは、思わず叫んだ。

「大の男が、ひとりじや歩けないのかい！ 情けないね」

「んだとお！ たかがぼうず一人だ。やつちまえ！！」

ぼうず、か。

おみつは心中であざ笑いながら、向かってきた一人目の子分の足をひっかけて転ばせ、腰を踏みつけた。

「子供だと思つてなめてると怪我するよ。性根すえてかかってきな！」

足元の男を踏み台にして飛び上がり、橋の欄干を軽く蹴ったのと逆の足は、そのまま一人目の子分の肩先を捉えた。

大きな音とともに、最初にのした子分の上に、別の男が倒れこむ。

それを横目で確認したおみつは、橋のたもとの階段の向こうへ着地した。

そのとき、遠巻きに見ていた人垣からじよめきが起じつた。

「貴様あ！」

親分が脇差を抜いておみつに斬りかかった。

早い切つ先をかろうじてよける。

しかし、慣れないものを着ていたせいか、すそを踏んで転んでしまう。

そのとき、右の足に激痛が走った。

それをこらえて立ち上がるうつと顔をあげたおみつの眼前ぞりぞりに、刃が突きつけられた。

「なめたまねしやがつて。この俺様をだれだと思つてんだ。え？」

「さして勝負できないような男の名前なんて、知らないね」

上目づかいに親分をにらみつけて口を開いたおみつの冷えた頬に、生温かい液体が滴り落ちた。

あちこちから悲鳴があがつた。しかし、今のおみつは不思議と恐怖は感じなかつた。

顔色を変えずに睨んでいるおみつに業を煮やしたのか、鬼のよくな顔をして、男が脇差をふりあげる。

おみつは身じろぎもせず、その刀の先端を見つめ、息を止めた。

そのとき。

「そこまでだな。権六親分」

さつきより大きな悲鳴を割いて、穏やかな男性の声が聞こえてきた。

## 第一章　一日目・人探し・其の一・

おみつは思わず、声のしたほうを振り返った。

すると橋の上から、白の着流しをきれいに着こなした侍らしき青年が、上品なたずまい下りてきた。

「……てめえは」

青年の姿を認めた男の声が、一段と低くなる。どうやらこの一人、顔見知りのようだ。

「こんな子供相手に、随分と大人げないことをなさいますな。親分」

「こいつは、俺たちをさんざんこけにしやがったんだ。それなりに痛い目見てもらわねえとな」

「親分たちじや、その子にはいくら束になつてかかつてもかないはしないですよ」

おみつは驚いて青年を見上げた。

自分の力を……見抜いている。

「言わせておけば……。おい、ここの男からやつちまえ！」

おみつの横をすり抜けた親分が、青年が通り過ぎた橋の上から子分らが一斉に飛びかかった次の瞬間。

男たちの結つている髪が、順番にほどけて落ちた。

青年のほうを見ると、彼は悠然と刀をしまつている。

「ここの野郎！　覚えておけよ！」

慌ただしく頭をさすり、男たちは恥ずかしそうに走り去つていいく。すると、周りの人間から歓声とともに拍手が沸き起つた。

「大丈夫か？」

青年がおみつに向かつて手を差し伸べてきた。

やわらかな顔立ちだが、油断はできない。

手をとらずにじっと見つめていると、目の前の青年は困つたような表情を浮かべた。

「おいおい。そんなに警戒しなくてもよい。さ」

一瞬戸惑つたが、おみつは素直に彼の手を取り、立ち上がりつとした。

「……いたつ」

よみけたおみつの体を青年が支えた。兄、新吉よりもずっとたくましい、大きな腕。

「どうやらくじいているみたいだな。よし、俺の家がすぐそこだから手当をしてやる」

「いや、いいよ」

「よくはない。それではまともに歩けないだろ？」  
しゃがんだ青年が、血の背中を田で指してうながす。

おずおずと青年の背中に身を預けたおみつの胸が、なぜか熱くなる。

青年のぬくもりは、小さい頃、一人の兄に隠れて自分を肩車して歩いてくれた父、軍太夫と同じものだった。

青年は慣れた手つきでおみつの足に薬のついた布をあて、細く裂いた白布を巻いた。

「さ、これでよし」

「ありがとう、『わい』ました」

田の前の青年に対する警戒を解いたわけではないが、おみつは素直に頭を下げた。

「女だてらに身は軽いし、腕つぶしは強いよつだが、あまり無理しちゃいかんな。あいつらは、この辺じゃ札付きの悪い連中なのだから

「うら

「どうして……」

「多少、武術の心得がある。それにさつきおぶつたときにだいたい

察しあつてゐたよ」

思わず口にしたおみつの意図を汲み取り、的確に返していく。

やはり……只者ではない。」の男。

警戒心をあらわにしたおみつに、青年は戸棚から大きなまんじゅうを持ってきた。

「さ、食べなさい。動いたあとじゃお腹も空いているだろ?」

「子供だと思って、馬鹿にしないで」

思わずむつとして口を返すが、体は正直だ。整った身なりからは想像もつかないほど狭い家中に響くよつた音で、お腹が鳴る。

青年が含み笑いをして、沸いた鉄瓶よりお湯を移し、茶を入れ始めた。

恥ずかしさに顔を真っ赤にしたおみつは、青年を横目で見ながら遠慮がちにまんじゅうを手にしてほおばつた。

皮はふっくらとしているのに、中のあんこはしつとじていて、甘い。

「……おこしいー!」

「そうか」

「ひとつと微笑んだ青年が差し出した茶を一口飲み、おみつは考える。

この人、悪い人じやないかも。江戸にずっとといふみたいだし、もしかしたら、じいちゃんの行き先を知つてゐるかもしがれない。

「あの、お侍さんは江戸にずっと住んでるの?」

「いや、十年前に紀州から出てきたんだ。家族全員でな」

「紀州? それじや、菊池小太郎つておじいちゃん知つてる?」

「菊池小太郎?」

問い合わせてきた青年に向かつて、おみつはうなづいた。

## 第一章 一日目・人探し・其の一・（後書き）

突然失礼します。作者の笠原綾乃です。

作者紹介ページにも書かせていただいたのですが、このたび、諸事情により作品の更新・

発表を今月いっぱいお休みさせていただくことにいたしました。

再開時期は9月初めになる予定ですが、その時にはまたぜひ「覇廻  
頂ければと思っております。

楽しみにしてくださっている方には申し訳ありませんが、どうぞよ  
ろしくお願ひいたします。

2006.8.1

7 PM22:43

笠原綾乃

## 第一章　一田田・疑念・（前書き）

お久しぶりです。作者の笠原です。

このたび身辺が落ち着きましたので、投稿を再開することになりました。  
した。

大変お待たせしてしまい申し訳ありませんでした。今後もごひいき  
いただ

けると嬉しいです。どうぞよろしくお願ひいたします。

## 第一章　一日目・疑念 -

「菊池小太郎?」

問い合わせ返した源三に、少女は勢いよくうなづいた。

菊池小太郎、といえば確かに、紀州では一、二を争つほどの忍び。將軍吉宗が江戸に来るときも、公儀筆頭御庭番を確實視されていたが、孫を育てるためという理由で突然隠居したと聞いている。

「君は、菊池殿の孫娘なのか?」

「うん。名前はおみつ。大きな声では言えないけど、公儀筆頭御庭番、林軍太夫の娘なんだ」

「軍太夫殿の?」

そう問い合わせながらも、源三の頭には決然としないものが残った。というのも、軍太夫の子は男子三人だけだと、父天膳が軍太夫本人から聞いているはずだ。

第一、十年前からともに修行をし、行動している新吉も『妹がいる』とは一言も言っていない。

かといって、この少女、おみつが嘘をついているとも思えない。

「お侍さん、じいちゃんと父さんのこと、知ってるんだね」  
身を乗り出して訊いてくるおみつに気圧されながらも、源三はうなずいた。

「ああ。俺は、元・紀伊和歌山藩江戸屋敷城代家老、清水天膳の次男で、源三という」

「清水……様」

「今はすぐ近くの建物で剣術の指南と、近所の子供たちに読み書きを教えている。先生と呼んでくれて構わんよ」

「じゃあ先生、じいちゃんの行き先を知ってる?」

期待に目を輝かせて訊ねるおみつには悪いが、源三は首を横に振つた。

「……そうだよね。そんな簡単に見つかるはずはないよね」

落胆を隠さずに、おみつはうつむいた。

「おみつ。菊池殿は、本当にこの江戸に来たのか？」

「うん。間違いないよ。じいちゃんが紀州を出る少し前から、変な男がよく家に来てたんだけど、そいつが頻繁に『江戸』って言つてたもの」

「変な男？」

「そう。深い編笠をかぶつた、ここに大きなあざのある男」自分の頬を指し示すおみつを見た源三の脳裏に、昨夜の出来事がひらめいた。

確かに、天膳が京香や新吉とともに辻斬り探しに乗り出したとき、彼らの前に現れた男の頬には確かに、大きな火傷のような跡があつたはず。

まさか、その辻斬りと小太郎の間に、何らかの関係があるというのだろうか？

だとしたら今晩、第一のおとり計画を実行するとき、小太郎も現場に駆けつけてくるやもしない。

「先生？　どうしたの？」

自分に対する警戒心を解いたのか、おみつが、源三の顔の前に手をかざして訊ねてくる。

「いや別に。ところでおみつ、家はどうだ？　送つて行つてやる」突然、おみつが黙りこくつた。何やら、家に帰りたくない雰囲気のようだが。

「どうした？」

「先生、お願ひ！　私をこの家に置いてくれないかな？」

「何！？」

突然の申し出に田を見開いて言葉を返すが、おみつの表情は真剣そのものだ。

「実は私……。黙つて家を出てきたの。兄さんにばれたら、今度こそ紀州に帰されちゃう」

おみつの話によると、三日前に一番下の兄を頼つて江戸へ出てき

たものの、再会した兄は、彼女を早速家に閉じ込めて、話も聞いてくれないというのだ。

(新吉のやつ……。いったい何のつもりでこんなことを)

「なぜ閉じこめられるのか、心当たりはないのか?」

「私、小さい頃に上の兄さんにいじめられてたから、そのせいじゃないかとは思うんだけど……」

不満そうな表情で、おみつは言葉を切った。

「でも、今の君はある頃の君ではない、それは俺が保証するよ」「本當!？」

顔を輝かせたおみつに、源三は確信を持つてうなずいた。きっちり修行を積めば、花ぐるまの一員としてやっていけるだけの素質は持っている。

いくら幼い頃に兄にいじめられていたとしても、それくらいのことを見抜けぬ軍太夫ではないはずだ。どうも、この親子に関しては腑に落ちないことが多い。

「……いいだろ?。ただし、一つばかり条件がある」

源三の言葉を聞いたおみつの顔に、緊張の色が浮かんだ。

「条件、つて?」

「まずは、俺がないときに寺子屋の生徒の面倒を見ること。読み書きは教えなくてもかまわんから、遊び相手になつてやってくれ。そしてもうひとつは」

「先生、いらっしゃいます?」

もうひとつ条件を言いかけたとき、京香の声が障子越しに源三を呼んだ。

顔がわざとこわばつたおみつは田配せをして、源三は玄関先へと立つ。

「どうした、京香。忘れ物か?」

「いえ、新さんに頼まれて人を捜しているんです。おみつて名の少女、知りませんか?」

新吉の手配せの早さに少々辟易としながらも、源三は、この場を

どう切り抜けるかを考え始めた。

## 第一章　一　田田・秘密・（前書き）

### 【用語説明】

- ・島田（髪）……東海道島田宿の遊女の髪型をもとにした形で、さまざまな種類がある。

「新さんが、大慌てで捜しているんですよ。何が何でも見つけて来て」

京香の声には、困惑の色が少しだけにじんでいる。

「京香はその少女の顔を知っているのか?」

「知っているも何も……」

何でも、新吉の店に行つた京香にいきなり刃を突きつけってきたのがおみつだと言うのだ。

「どうしてかは知れなけれど、新さん、おみつさんを外に出したくないみたいなんですよ」

さつきまでのおみつと同じようなことを、田の前の京香も話している。

……やはり、おかしい。

京香に事情を話すのはたやすいことだが、新吉が手を回している。仲間意識の強い彼女に秘密を強いるのは酷か。

「どのような格好をしているのだ?　その少女」

とりあえず知らないふりをして当たり障りのないことを訊ねる。

「灰色の忍者装束です。私より背が少し高くて、髪は後ろで一本に束ねてます」

「わかった。注意して搜してみよ!」

適当に調子を合わせて答えると、京香は安心したような表情を浮かべてうなずいた。

「それじゃ、よろしくお願ひします」

頭を下げて帰つて行く京香の背中に、心中で謝りながらも、おみつのことが知れなかつたことに、源三は心底安堵した。

「……もひ、大丈夫?」

扉の向こうから、不安そうな顔をしたおみつが顔を出した。

「ああ。しかし、京香に襲いかかつたのは感心しないな。あの人は、

俺の従姉妹どものだから「じめんなさい」

「じめんなさい」

鼻つ柱は強そうだが、紀州でおおらかに育てられたおかげか、根は素直な少女のようだ。

「……よし、寺子屋に行こうか。子供たちが待ってるからな」

そうおみつを促したもの、源三は今一度彼女を見渡した。

この格好のままでは、また、男に間違われてしまい、寺子たちの混乱を招きかねない。

「先生？」

どうにか立ち上がったおみつがまた、源三の顔をのぞきこんでくる。

「寺子屋に行く前に、少し寄るといふことがある。つきあつてくれないか？」

「女将、いるか？」

源三が、大通りを捲しているであらう京香や新吉に見つかぬよう気を配り、裏道を通つて着いた先は、浅草寺の裏手にある小さな置屋、花かごだつた。

「あら、源三様。お久しうひづります。……そちらのお嬢さんは？」

「少しだけありでな。俺が預かることになつたんだ。悪いが、着物を見つくれってくれないか？」

「かしこまりました。智香。このお嬢さんに着物をお願いね。それと着付けも」

「はい」

春香の声に顔を出したまだあだけない顔立ちの少女が、おみつを

奥へと連れて行く。

廊下の脇にある部屋に入り、腰を落ち着けた源三は早速切り出した。

「春香、申し訳ないがこのことは、京香には内緒にしてもらえぬだらうつか？」

「もちろんですとも。田那様によろしく仰つて下さこましね」

「近いうちに顔を出すよつ伝えておくよ」

さすがに抜け目がないな。そう思つた源三は苦笑いをしながらうなづいた。

白い肌に切れ長の目が印象的な春香は、源三らが紀州にいたときよりの、天膳の馴染みの芸者だった女性だ。

早くに妻を亡くし傷ついた父、天膳の心を知らぬ間に解きほぐしかと言つてでしゃばらぬその姿に、源三も、兄の忠直も、気づいたときにはすっかり心を許してしまつていた。

十年前、天膳が花ぐるま結成の準備のために江戸へ出て来た際に供をし、京香をはじめとした少女たちを厳しくも温かく指導し、芸者として育て上げたのもこの春香だ。

「あのお嬢さん、新さんの妹さんでしょう？　田元にかすかな面影が」

源三にお茶を差し出しながら春香は言つ。男装をしているおみつを一瞬で少女と見破り、自分ですり気づかなかつた、兄との共通点を見出す。

「さすがだな」

その眼力の確かさに、源三も舌を巻くよりほかはない。

「さつき、随分慌てた様子の新さんが見えましてね。お父上に見つかる前に妹を紀州へ帰さなければ、みたいなことをつぶやいておられましたよ。もちろん独り言ですけれど」

「林殿に？」

伏し目がちに春香はうなづく。

「新さんはお父上のことがお嫌いなんですね」

そう言われてみれば、新吉からあまり軍太夫の話を聞いたことがなかつた。

自分と同じように集つたほかの子から話をされれば、「三三郎」とだけで、自分から肉親の話をしたことではない。

かと言つて、妹のおみつは軍太夫のことを嫌いなそぶりは見せていない。小さい頃別れたきりだから「父」と言われても実感がないだけのかもしぬないが。

「先生」

おみつの声が、源三の思考をゆるやかに断ち切つた。

声のした方を見ると、そこには薄い桃色の小袖に身を通し、髪の毛を島田に結い上げたおみつが少し照れたように肩をすくめて立つていた。

「あら、かわいらしいこと」

立ち上がつた春香が、少し乱れている髪<sup>まげ</sup>を直してやる。

「ほお」

「馬子にも衣装つて言いたいんでしょう? わかつてますよ」

源三が感嘆の声をあげたのと同時に、薄く紅をさした唇を少しそぼませたおみつが拗ねたような口調で言つた。すると、春香と、支度をしてくれた智香から笑い声が漏れる。

「そつは思つてないよ。さ、行こう。子供たちが首を長くして待つてるだろうからな」

ちらつと思つたことをおみつに看破され、少し後味の悪い思いをひきずりながら、源三は立ち上がつた。

## 第一章 一 日 目 決意

源三が、春香の所へおみつを連れて行つた半刻前のこと。

「……どうも、ありがとうございました」

おみつの兄、新吉が花かじを出て、大きなため息をついた。

（つたく、じこに行きやがったんだ。おみつの奴）

人の気も知らないで、口を開けば『外へ出る』の繰り返し。何をしに江戸に来たかは知らないが、早く見つけて紀州へ帰さなければ。

「あら、新吉親分」

「どうしたの？ そんなに慌てちゃつて」

いつも町回りをしているときに軽い気持ちで声をかける茶屋の女性たちが寄つてくるが、今は彼女たちの相手をしている余裕はない。焦りを隠さず歩き回っている新吉の前に、大きな籠を背負つている男が歩いてきた。

その男の姿を見た新吉の背に、冷たいものが流れ落ちる。多分、今の自分の顔は青ざめているだろう。

「……親父」

「おみつが、江戸に出てきてるようだな」

新吉にしか聞こえないような小さな声で、父、軍太夫が言つ。

「……！」

「隠しても無駄だ。さつき、浅草の橋のたもとでならず者とやりあつていてのを、弥助が見ている」

弥助とは、一番上の兄の名だ。

言わんこっちゃない。これから、おみつを外に出したくはなかったのに。

「三日以内に、おみつを紀州へ帰せ。そもそもば……わかつておなうな」

非情の宣告に、新吉の心が凍りつく。

「あ、新さん」

後ろから聞き覚えのある声がする。それと同時に軍太夫が何事もなかつたかのよつておじをして去つていった。

「今の方は？」

自分の前に回つてんだ声の主 京香が訊ねてくる。

「いや、別に」

「そういう表情じゃないようだけじ？」

冷静に答えたつもりでも、幼い頃から一緒にいる京香に、心の中の動搖までは隠せない。

「おみつ、いたか？」

「いいえ。とりあえず、新さんの妹つてことは伏せて先生にも捜してくれるようにお願ひしてきましたけれど」

話をそらした自分に何かを言いたげな表情を浮かべてはいるが、京香は小さく首を振る。

「それより新さん。今夜、また『おみつ』をやるのですけど。やめときます？」

今度は京香が訊ねてきた。自分が何も言いたくないのを察してか、話題を変えてくれている。

「そういうわけにはいかねえよ。これはあくまでも俺個人の問題だ。お役目には関係ないわ」

新吉は、心の中で京香に感謝をしながらわざと明るく答えた。幼い頃から公私混同はご法度と叩き込まれているから、おみつとのことは別にできる自信はある。

しかし、父の言葉は、知らず知らずのつむぎで新吉の心に刃となつて突き刺さつていた。

それが、彼の判断を微妙に狂わせてしまつことを、新吉はまだ知るよしもなかつた。

月すらも出ていない暗闇に、犬の遠吠えがひびく。

日ごとに冷たくなる秋風が、新吉の体の表面を吹き抜けていく。結局今日は、おみつを見つけられなかつた。軍太夫が最後に言った言葉が、新吉の耳に残つて離れない。  
『三日以内に紀州に帰せ。さもなくば』

……その先は。

新吉は大きくかぶりを振つた。

(そんなことはさせねえ。絶対に)

その時、新吉のはるか前方で灯りがともつた。

昨日同様、天膳が店から出てきたときのものだ。

さつき源三と打ち合わせた時、天膳が参加することをあまり快くは思つていないうつに、新吉は感じた。

当然だ。

奴は、共に修行を積んだ京香ですらかなわないであろう殺氣を放つていたのが、新吉のいた場所からもわかつたのだから。

今度しぐじれば、ここにいる誰かが確実に殺される。

こう思つるのは失礼なのは重々承知だが、天膳の存在が足手まといにならぬように祈るしかない。

天膳を乗せた駕籠の在処を示す灯りが、ゆっくりと遠ざかつて行く。

新吉は深い呼吸を一度だけ行い、後を追い始めた。

## 第一章　一日目・冷汗・

駕籠の前で揺れる提灯の灯りが、武家屋敷街へ続く小道を曲がった。

昨夜とは違う経路。

いつ何があつてもいいよ、南町奉行所に向かっている。  
下手人がうまく網にかかつた際を考えて、役宅には同心・岡つ引きが待機している。

その灯りを追つている新吉の耳に規則正しく聞こえてきた犬の鳴き声が、ぴたりと止んだ。

それと同時に、辺りの木の葉が不自然にざわめき始める。  
(……！)

昨夜の辻斬りとは違う何者かが、両方向から新吉と併走している。

昨日の辻斬りの仲間だろうか？

だとしたら、ここで足止めをしておかなければ、奴が現れたときに乱戦になりかねない。

天膳の乗る駕籠のそばには芸者のいでたちをした京香が、そして番頭に扮した源三もいる。

(多少離れても……大丈夫か？)

新吉は、刃を仕込んだ十手に手をかけた。

立ち止まり、前を行く駕籠との距離を取る。

胸元の棒手裏剣に手をかけると、左右の塀の上を走る影へ投げつけた。

重いものを投げたような音と、手裏剣が瓦に当たったような乾いた音が同時に耳に入る。

とりあえず新吉の前に転がってきた一人目の忍びの胸に、刃を出した十手を突き立てる。

相手がこと切れたのを見届け、十手を引き抜いた。

もう一人の行方を捜そと立ち上がり駆け出すが、まるで気配を

感じられない。

(逃がしたか)

仕留めることができなかつた悔しさに舌打ちをした新吉の真正面に、忍び装束をした一人の男が立つていた。

(いつの間に……)

新吉の背中に、冷たいものが流れ落ちる。

「公儀筆頭御庭番、林軍太夫殿の三子、新吉殿ですね？」

長く生きてきた年輪を感じさせるが、抑揚のない、静かな声。「人の名前を訊ねるときは、まず自分から名乗るのが筋つてもんだ

る」

湧き上がる恐怖を無理やり飲み込み、新吉は吐き捨てた。

「一つだけ、忠告いたします。即刻、この事件から手をお引き下さい。そもそもば、あなたの妹が悲しむことになりますよ」「な……！」

おみつのことを暗に提示された新吉の頭に、血が上った。

「誰だ！　てめえは」

素性ばかりか、自分ら家族と京香しか知らないおみつの存在を知つていて。

熱くなっている心と裏腹に、背中からまた、どつと冷たい汗が噴き出した。

十手を再度握りしめた新吉の目の前に、突然煙幕が張られる。

「待ちやがれ！　……っ」

辺り一帯にむせ返るじや香の香りが、新吉の全身の力を急速に奪つていく。

暗闇に落ちていく意識の中で、一瞬、悲しげな表情を浮かべたおみつの姿が浮かんだ。

「……さん」「新吉」

聞き慣れた声が、すぐ近くで自分を呼んでいる。鼻をくすぐる、かぎ慣れた甘い香り。月明かりが、薄く開いた目に飛び込んでくる。

「しつかりおしょー 新さん」

「姐さん。……先生」

自分を心配そうにのぞく源三と京香が、安堵したようなため息をついた。

「いつたい、何があつたんだ?」

「昨日の辻斬りの仲間らしい忍びとやりあつてな。ちょっと……、油断しちまつた」

よほど深くじや香を吸つたのか、のどがやけつくつと痛み、声がかされる。

「仲間?」

「一体なぜ、新さんを?」

「わからねえ。そつちは?」

「連中、今日は現れなかつたんだ。昨日の今日じや、同じ作戦をしても駄目だな、やつぱり」

「そつか……」

一人につなづいて起き上がりつとするが、身体がしびれて力が入らない。

「おつと」

前のめりになつた新吉の身体を、源三がしつかり支えた。

「京香、すまないが持つてくれ」

かすむ田の端に、源三が京香に提灯を渡している姿が入つた。次の瞬間、新吉の身体が田に浮く。

「ちょ、先生。俺は……男におぶられる趣味は」

「こんな時に冗談言つな。力が入らないくせに。まったく……そろつ

て……

「……え？」

源二が何かを言つたようだが、その意図を読み取ることなく、今の新吉にはできなかつた。

京香が何やら、源三に對して怪訝な顔を見せてはいるけれど、その思考すらも、急速に襲ってきた眠気にせきられると、

（何て、言つたんだろ？……）

京香と源二のやつとつを遠くに聞きながら、新吉は思ひをめぐらせる。

そして、あの忍びはなぜ、おみつのことを知つていたのだ？

おみつが悲しむと言つた意図は？

しかし答えが出ないまま、新吉は、源二の背中に揺られるまま、深い眠りに落ちていつた。

## 第一章 一日目・それぞれの朝・其の一

遠くで鳴ぐにわとりの声で、京香は目を開けた。

「あら、こんなところで寝ちまつたんだわ」

傍らで眠り続ける新吉を起こさないよう、そつと立ち上がり、部屋を出る。

彼が眠っている隣の部屋を開けるけれど、おみつが帰ってきた形跡はない。

彼女はなぜ、突然兄の前から姿を消したのか？

そして、新吉はどうして、執拗なまでにおみつを閉じ込め、捜しているのだろうか？

「……そういえば」

昨日の朝、自分が源三の家から帰る際、町で新吉に話しかけていた人物がいた。

薬屋を装つてはいたけれど、あのたたずまいからして、忍び。それも、公儀御庭番と見て、まず間違いはないだろう。

あのときの新吉はまるで、何かにおびえたような青白い顔をしていた……。

そして、もうひとつ。

昨晩、新吉をおぶつたときに源三が言つたひとこと。

『きょううだいそろつて、強情なんだから』

きょううだい、と確かに源三は言つた。

新吉に一人の兄がいることは承知しているが、京香はおろか、源三もその姿を見たことはないはずだ。

新吉は眠つてしまい気づかないようだったが、どう考へても、あの後の源三の様子はおかしかった。

「……何か、ありそうね」

京香はつぶやく。「おまえぐに」でも源三の家に赴きたいところだが、眠っている新吉を、「おまほおつておくわけにもいかない。とりあえず朝ご飯を作るために、京香は足音を立てずにして下りて行った。

「兄さんが？」

驚いたようなおみつの表情を見て、源三ははづなずいた。

「たいしたことはないと思つが、いかんせん、眠り薬をかなり深く吸い込んでいるようでな。今、京香がついてくれてるよ」

「どうして……」

「ご飯を食べる手を止めたおみつが、一点をじっと見つめたままつぶやいた。

「岡っ引として下手人を捕らえようとしたやつになつたのだろう。命が助かつただけでも、よしとしなければな」

おみつが焼いてくれたいわしを頭からほおばり、「ご飯をかきこみながら、源三は答える。

これがまた、意外とおいしい。

紀州の山奥で天真爛漫に育つたおみつだけに、料理はできないはず、とたかをくくつっていたのだが、家事一般を大方こなすようでは、部屋はきれいになつていたし、洗濯物もきちんとたたんである。

「あたし……。兄さんのこと、何にも知らないんだね」

「十年ぶりに会つたばかりだ。知らなくて当然だろ？。……どうする？ 家に帰るか？」

「それは」

おみつが言葉をつまらせた。

「もし、おみつが素直に帰るのなら、俺が兄さんに口添えをしてや

つてもいいぞ。紀州に帰るのは、菊池殿を見つけたあとだつて構わないだらうからな」

「本当? 先生」

暗かつたおみつの表情が、一気に明るくなる。

「ああ。ちゃんと話し合つて誤解を解いたほつが、お前たち兄妹のためにも一番いいだらう」

「先生。ありがとう」

おみつの無邪気な笑顔に、源三の顔にも思わず笑みがこぼれた。

お粥の炊けたいいにおいが、新吉の鼻をくすぐつた。

そつと目を開けると、明かりが差す障子の向こうで、小さな女性の影が動くのが見えた。

「あら新さん、起きたの?」

小さな土鍋をお盆に乗せて、京香が顔をのぞかせる。

今日もいい天氣のようだ。直接入つてくる朝日が、日にまぶしい。

「悪いな。すっかり面倒かけちまつて」

傍らにたたんであつた薄い半纏を羽織り、新吉は起き上がる。まだ軽いめまいはあるものの、身体のだるさや頭痛はもう取れたようだ。

「何言つてんの。みずくさいわね

「姐さん、風邪引いたのか?」

少し鼻にかかる声になつていて

「ちょっとね。そこで寝てしまつたものだから。すぐ治るわよ

「すまない」

気にしてることないわよ」と笑つて、京香がお粥をよそつた茶碗を差し出した。

「食わせてはくれないの？」

「そんなこと言つ元氣があるんだつたら、自分で食べなさい」

「ひでえな」

「そう言いながら、一口、また一口とお粥を口にさす。塩加減がちょうどいい。」

「ねえ、新さん」

しばらく黙つていた京香が、ふいに名を呼んできた。

「ん？」

「昨日の薬屋、新さんの知り合いなんじょ？」

口に入れようとした最後の一 口が、れんげからりこぼれ落ちる。

「……何で、そう思つんだ？」

いつになく低い声が、自分の口から出た。京香を見る田が険しくなるのが、はつきりとわかる。

しかし京香はそれにひるむ様子もなく、ただ、まっすぐに新吉を見ていた。

## 第一章　――　それぞれの朝・其の一・（前書き）

### 【用語説明】

- ・縫物職……衣服に様々な色の糸を使って刺繡をほどこす者のこと。

## 第一章 一 日 それぞれの朝・其の一

どれほど時間が過ぎたのか。

新吉と京香はまだ、何も言わずに互いを見やつていた。

「何とか言つたらどうなんだよ」

いたたまれなくなり、先に目をそらしたのは、新吉だった。

「それはこっちの台詞。新さんこそ、私たちに何か隠してゐるんじゃないの？」

痛いところをつかれ、一瞬、京香の胸元に視線をやる。

「いくら辻斬りの仲間に襲われたからって、あんなにひど大の字になつて寝てる新さんを見たら、何かがあつたことくらい、察しがつくわよ」

……京香の言つとおりだ。

いつもの自分ならば、煙幕を張られる前にそれを察知し、何らかの防御はしたはず。

なのにそれをせず、やすやすと倒れてしまつたのは、あの男におみつのことを言われて頭に血が上つたからにほかならない。

「眠り薬を吸わされただけだつたからまだよかつたものの、あそこで命を落としたら、だれが一番悲しむと思つてゐのさ」

「……悪い」

「謝る相手が違うでしょ」「う

震える声でぶつきりぼつて言つと、京香は袖口で涙をぬぐい、改めてこっちを見た。

「答えてもらひわよ。あんたと、あの薬屋にどうこつた関わりがあるのかを」

京香の田が、再び新吉を見た。

もう、隠し通せない。新吉は、覚悟を決めて京香に向ひ直つた。

外へ出ると、晩秋の空に高く昇った太陽が、おみつを照らした。大きく吐き出した息はすでに白く、江戸の町に冬が近いことを教えてくれる。

「さ、行くぞ」

中から棒をつつかけ、家の戸締まりをした源三がおみつに声をかけてきた。

「うん」

歩き出した源三に小走りで追いつき、小さくため息をつく。「何か心配」とか?」

「うん……。兄さん、怒ってるだらうなって」

「そりゃ当然だ。黙つて家を出て、外泊したんだから。張り飛ばされるだけじゃすまないかもな」

「そんな~」

「大丈夫だ。俺はあいつの弱みを握っているからな。うまく言っておくよ」

心底困ったおみつの頭にそつと手を添えて、源三が小さく笑った。そこへ。

「あら、先生」

小ぎれいな格好をした女性が、大きな風呂敷包みを持って声をかけてくる。

年の頃は三十過ぎだらうか。少しづわがめだつが、目の大きい、きれいな人だ。

「お小夜さん。また仕事か」

「ええ。注文がひつきりなしなもので。……そちらは?」

「ちょっと事情があつて預かっている、おみつって子だ。こちらは縫物職のお小夜さん

「よろしくお願ひします」

おみつは小さく頭を下げた。しかし、お小夜はそれに答えずに、ただじりとおみつの顔を見つめている。

「お小夜さん？　どうした？」

「え？　……ああ、『めんなさい』。ちょっと知り合いでお嬢さんに似ていたものだから」

源三に向けて笑みを浮かべてはいるが、目が笑っていない。

「じゃ、急ぎますから。おみつさん、また」

「……はい」

軽く会釈をして去っていくお小夜の後ろ姿から、おみつはなぜか目が離せなかつた。

「……三日以内に紀州に帰さなければ、殺す？」

新吉から告げられた事実が、京香の胸を突き刺した。

「はつきり言つたわけじゃねえがな。多分、そういうことだらうよ」胸の前で手を組んで、新吉が大きく息を吐いた。

「どうして、林様がおみつさんを殺さなければならぬのよ。いくら妾の子だからって、林様にとつて、おみつさんは実の娘じゃない」身体の奥から、怒りがこみ上げてくる。

保身のためか何なのは知らないが、存在 자체をなかつたことにしたあげく、江戸へ出てきたからつて殺すだなんて、冗談じやない。

「ねえ。おみつさんの母親つて、どんな人なの？　身分は？」

母親の素性に疑問を持った京香の問いに、新吉は、皆田見当がつかないと言つた表情で小さく首を振る。

「あいつを親父から紹介されたときに、母親は死んだつて聞かされた。身分も知らねえ」

「そう。……でも、本当に亡くなつたかどうかは、まだわからぬ

のよ  
のよね

「何、考へてる?」

暗くよどんでいた新吉の声が、京香の言葉に反応して輝いた。

「早くおみつさんを捜し出して、母親のことを詳しく述べるよ。どうして、彼女の存在が林家から抹殺されなきやならなかつたのか。それを盾に林様に詰め寄れば、どうにかなるかも知れないわ」

「そんな簡単に言つなよ。相手は公儀筆頭御庭番だぜ。だいたい、俺たちにはやらなきやならないことがあるじゃねえか」

弱気な台詞を口走った新吉に、京香は思わずむつとした。

「あ、や。じゃあ、おみつさんがこのまま殺されてもいいって言つたのね?」

「そんなこと、だれも言つてないじゃねえか」

「決まりね。私、おみつさん捜しに行つて来るわ。先生が来たらお願ひね」

立ち上がり部屋を出たのと同時に、階下の扉が開く音が聞こえた。

「あら。先生」

「新吉は寝てるのか?」

店の内側にかけてあるのれんをぐぐつて、源三が訊ねてくる。

「いえ。起きてますけど……。何か?」

「新吉の捜し物を届けに来たんだがな。おい」

振り返り、身体をすりした源三の後ろには。

「……おみつさん」

昨日と全く違う装いをしたおみつが、うつむいたまま立っていた。

## 第一章 一 日 目 再会・兄と妹

「どうしたんだ？ 姐さん」

上から、新吉の声が降ってきた。

「新さん、ちよつと」

再度一階に上がり、新吉が着てている青い半纏の袖口を引いて下へ降りる。

「……おみつ」

一階に下り、おみつの姿を見た新吉の声が、また低くなった。  
かと思つと、京香の手を振り払い、まつすぐおみつの方へ歩いて行く。

「新さん！？」

京香や源三が止める間もなく、新吉の手がおみつの頬を強く打つた。

その反動で、おみつの身体が玄関脇に飛んでいく。

「新さん！ 何もいきなり殴ることはないじゃないの」

「姐さんは黙つてろ。おい、おみつ。一体、どれだけ人に心配かけりや気が済むんだ！」

「……」

「何とか言つたらどうなんだ？ え？」

「訳も聞かずにはいきなり殴られたんじや、言いたいことも言えないだろう。なあ、おみつ」

倒れたままのおみつに、源三が助け船を出す。

「新吉。お前が妹を心配する気持ちはわからんわけではないが、まづ、おみつが江戸に出てきた理由を聞いてやるのが先だつたんじやないのか」

「おみつさんが新さんの妹だつてこと、知つてらしたんですか？」

先生

立ち上がったおみつが着てゐる桃色の小袖についた土ぼこりを払

つてやりながら、京香は訊ねる。

「ああ。昨日の朝、本人から聞いた。林殿の娘だといふこともな」

「それじゃ」

「昨日、昼近くに訪ねて行つた際、すでにおみつと会つておいたといふことか。」

「すまない。内緒にしていて欲しそうだつたからな」

京香の視線に気づいたのか、源三が申し訳なさそうに小さく頭を下げる。

「……あきれた。で、おみつさん。どうしてあなた、江戸に出てきたの？」

おみつに背を向けたまま動かない新吉に代わつて、京香は問いかける。

「……人を、捜してゐるの」

「人を？」

「うん。私のおじいちゃん。名前は、菊池小太郎って言つたの」

「菊池小太郎？ それがじいちゃんの名前か」

黙つたままだつた新吉が、おみつのほうを振り返つた。まだ少し顔色が悪い。

「お母さんは亡くなつたつて聞いたけど、その時のこと、覚えてない？」

「こいつが俺達のところに來たのが一歳半で、やつと歩き始めたばかりだつたからな」

首を小さく振つたおみつのすぐあとに、新吉が答えた。

「ねえおみつさん。菊池殿はどんな人？ 紀州では、どんなお役目に就いていたの？」

「どうした？ 京香。やけにいろいろ訊いてくるじゃないか」

京香の様子に不審を持つたのか、源三が問うてくる。

京香は言葉に詰まつた。殺されてしまふかもしれない本人を目の前にして、本当の理由が言えるわけがないではないか。

「先生、ちょっとといいです？ 姐さん、おみつのこと頼むわ」

「新さん」

京香は驚いて新吉を見る。

京香を見返した彼の目には、ある種の決意があるのか、さつきとはうつて変わった力強い輝きがあった。

「いいだろ。俺も、おまえに訊きたいことがあるからな」

うなずいて、新吉は階段を上つていった。源三もそれに続く。一人の後ろ姿を、頬を真っ赤に腫らしたおみつが不安そうに見つめている。

源三の『訊きたい』と、京香にもだいたい察しはついている。

そして、その答えも。

その答えを源三が知ったとき、彼は、この兄妹をどうするつもりなのか。

京香も少し、不安だった。

「……そうか」

自分が思つていた以上の答えを突きつけられ、源三はそのまま押し黙つた。

「あいつのこと、黙つていてすみません。もし、清水様に報告する必要があるなら、して下さつても構いません。でも……」「

流れる沈黙。

新吉が言いたいことはなんとなくわかっている。

林家では禁忌とされているはずのおみつの存在。

もし、それが天膳や忠直よりも上、つまり將軍や幕閣に知れたら、御庭番筆頭としての軍太夫の地位が危なくなる。

新吉は、それを心配しているのだろう。

どうすればいい。

おみつの存在を知つてしまつた以上、自分の上司でもある父や兄に報告しなければならないのは、わかっている。

しかし……。

源三も知りたかった。軍太夫が江戸に出てきたおみつを殺す、と言つたその理由を。

彼女が江戸にいられる猶予はあと二日。

その間におみつを助けて小太郎を見つけ出すことができれば、彼を江戸へ連れ出し、京香たちに襲いかかつた、頬に火傷の跡がある浪人との関わりを聞きだせるかも知れない。

「親父達には言わん」

「先生……いいんですか？」

驚いた様子で顔を上げた新吉に、源三はうなずいた。

「ただし、これはおみつにもお前にも、辛い仕事になるかもしれません。それでもいいか？」

「おみつも……ですか？」

源三はうなずいた。兄である新吉には、小太郎と浪人のことを話しておいたほうがいいだろう。

「実はな」

そう、口を開いたそのとき。

階下で大きな物音がするのを、源三は聞いた。

## 第一章 一日目・緊張・（前書き）

### 【用語説明】

- ・示現流……慶長五年（一六〇〇年）頃、薩摩の東郷重位しげたかによって創始された流派。
- 攻撃を主体とし、一撃で相手を倒すのが特長。
- ・満……示現流の構えの一つ。右ひじを大きく張り、剣を握つた左の拳が右頬近くに来る構え。

## 第一章 一日目・緊張

階下で聞こえた物音に、源三はもぢろん新吉の表情にも緊張が走つた。

傍らに置いておいた長刀を取り、源三は立ち上がる。

「新吉、おまえは無理をするな」

そう言い残し、源三は階段を駆け降りる。

その先に見えたのは、おみつをかばい、粗末な着物を身にまとつた浪人らしき男の剣を短刀で受け止める京香の姿だった。

「京香！　おみつ！」

叫んだ源三は刀を抜き峰を返すと、その浪人の肩を打ち据えた。複数いる浪人と京香の間に割つて入り、再度刀を返す。

示現流の「満」の構えを取り、呼吸を整える。

間合いを詰め、上体を沈めてきた別の浪人の肩口に渾身の一撃を繰り出した。

「ぐえつ！」

血しづきとともに、男の身体がゆっくりと地に落ちていく。

「くそ！　ひけ！」

肩口を抑えた浪人を抱えた男の声で、残りの浪人が蜘蛛の子を散らすように店から出て行く。

京香が源三にうなずき、その者たちの後を追つた。

「おみつ、怪我はないか？」

おみつは無言のままうなずいた。視線は、息絶えて横たわる浪人の方へ向いている。

「先生」

新吉が降りてきた。おみつが無事な様子を見て、安堵の表情を浮かべる。

「この男、番屋へ届けなければならんな。新吉、動けるか？」

「それくらいのことならできますよ。おみつ、ここで静かにしてる

んだぞ」

再度うなずいたおみつに軽く手を上げて、半纏を羽織り直した新吉が店を出て行く。

見たこともない連中だった。

こいつらは、一体誰を狙つてここへ来たのか？

辻斬りを阻止せんと動く俺達か。それとも、小太郎を捜しに出てきたおみつか。

可能性は五分。しかし、源三には、奴らがおみつを狙つて現れたとしか思えなかつた。

だとしたら、その理由は？

「先生。どうしたの？」

源三の視線に気づいたのか、おみつが、不安そうな面持ちで訊ねてくる。

「いや。俺と京香が、そなたの腕を新吉に披露する邪魔をしたと思つてな」

「何言つてるんですか。もう」

源三の肩を軽く叩くおみつの顔に、かすかだが、笑みが浮かんだ。

方々に散つた浪人の一人を追いかけて、京香は大川橋を渡り、浅草へと入つた。

人がごつた返す雷門を抜けると、その先は東本願寺を中心に多数の寺社が立ち並んでいる。

男は辺りを伺いながらも、まっすぐに目的地へ向かつているようだ。

東本願寺の手前の路地を左に曲がる。男はそのまま、ある武家屋敷の中へ入つていった。

「堀田山城守様のお屋敷だわ」

確かに、京香の師匠、春香の馴染み客で、自身も一、三度お座敷に呼ばれたことがある。

それに忠直と同じ老中職で、次期筆頭老中と噂のある、切れ者で有名な男だ。

そんな堀田がなぜ、自分らを狙つた浪人と関わりがあるのだろうか。

源三に報告しようと踵を返し、京香は歩き始めた。すると、背の低い、灰色の着物を着た老人が、何だか頼りない足取りでこちらに歩いてくるのが見える。

「大丈夫ですか？」

目の前でよろけた老人を、抱き起こす。

そんな京香に、齡六十過ぎの男が突然、耳打ちをしてきた。

「これ以上、深入りするのは辞めなされ。じゃないと、そなたの命も危ないです」

京香は思わず、老人を見た。静かな殺氣をたたえたその目が、京香の心をざわめかせる。

「……あんた、何者だい？」

「余計な詮索はせぬことです」

老人が言い終わらぬうちに京香は胸元から短剣を取り出し、刃を向けた。

「お嬢さん、あんたも腕は立つようだが、まだまだわしにはかないますまい。おとなしく刀をしまったほうが賢明ですぞ」

「……悔しいが、この男の言うとおりだ。」

これ以上戦う意志を見せれば、即座に命を落とすのは目に見えている。

ひざを立てたまま動けない京香を、老人は横目で見た。

そして後ろで手を組み、さつきとは違う悠然とした足取りで歩き出すと、そのまま路地を曲がつて行く。

しわだらけの小さな顔に、細く優しげな目。なのに、その男がか

もし出す空気は、他人の詮索を全く寄せつけないほど強固で、鋭い。あの老人、一体何者なのだろうか？なぜ、私がこの事件に関わっていることを知っている？

京香の心に、底知れぬ恐怖がわき上がる。老人の曲がって行つた方向を見たまま、しばらくの間その場から離れることができなかつた。

## 第一章 一月三・ことじ回十・其の一

「堀田山城守様の？」

源三の問いに、京香はうなずいた。今日もお座敷がかかっているのか、黒地に蝶の刺繡をあしらつたいつもの着物に身を包んでいる。

「ええ。迷いもせずに入つて行きましたよ」

京香が、新吉の入れたお茶を飲み干した。どことなく表情にかけりがあるように見えるのは、源三の氣のせいだろうか。

「それと、変な老人に会いましてね」

「老人？」

新吉の目が京香に向く。

「この事件から手を引かないとい、命を落としますよ、ですって」京香が、言葉尻にとげを含ませる。どうやら、相当頭に来ているらしい。

「どんな奴だ？ その老人」

「背は私ぐらいで、優しそうな細い目をしているんだけど、何だか薄気味悪い感じだったわね」

「……そいつだ」

新吉が、遠い目をしてつぶやく。

「じゃあ、私が会ったあの老人は、新さんを襲つた奴と同一人物」

「間違いない。俺を脅すだけじゃなくて、姉さんまで……許せねえな」

「

田の前の新吉はそう言つと、嫌悪感を露わにして杯をあおつた。

「私も一杯頂こうかしら。先生、注いで下さる？」

隣にいる京香も杯を差し出す。

「おい、京香」

「こんな気分じゃ、お座敷、務まりませんからね」

「今夜のお座敷、誰かに代わつてもうつわけには行かないのか？」

「姐さん」

「そうしたいところなんんですけど、お客様がねえ……」  
京香が源三を横目で見た。

「春香と一緒にか」

昨日、源三を通して春香に釘を刺されたのを受けて、早速天膳が手配したのものらしい。

「場所はまた『浮雲』かい」

「ええ」

「……『愁傷様』」

意味を察したのか、新吉が笑いをこらえ、京香に向かつて合掌する。

「先生。早く」

京香が少し口をすぼませて、再度杯を差し出した。

今新吉が飲んでいるのは、酒に強くない彼自身が水で二倍に薄めたもので、飲み慣れている京香なら、決して酔うことはない。

しかし普段の彼女なら、どんなに自分らが進めても、お座敷に入る前は決して酒を口にしないのに。

「まったく、しょうがないな」

差し出された杯に酒を注ぎにして源三は気づいた。  
ほんのわずかに、だが、京香の手が震えている。

「どうも」

少し頭を下げた京香は、それを一気に飲み干した。

「さ、そろそろ行こうかしら。じゃ、新さん。お大事にね」

ほんの少しだけ笑みを浮かべ、京香は提灯を片手に店を出て行く。

「……相当荒れてるな。姐さん」

新吉は、京香の態度を額面どおりに受け取ったようだが、あの怒りはきっと、その老人に対峙できなかつた、自分自身に対するもの。そして。

「あれ？ 先生。どちらへ」

立ち上がった源三を、新吉が見上げた。

「忘れ物を届けに行って来る。一人で大丈夫か？」

机の脇にあつた自身の傘を掲げる。灯りを最小限にしてあるため、新吉は気づいていないようだ。

「なあに、いやとなつたら上で寝てるおみつを叩き起こして盾にしますよ」

一階を指差して、新吉が笑つた。まだ戌の刻（午後八時）を少し過ぎた頃だが、いろいろあつて疲れたのか、おみつはすでに夢の中だ。

「じゃ、すぐに戻るからよろしく頼む」

そう言い残すと、源三は右手に傘を抱え、提灯に火を灯して表に出た。

辺りに吹く木枯しが、源三の身体をなめていく。  
月もない暗がりの中で、京香は今何を思うのか。  
決して弱音を吐くことのない従姉妹を追い、源三は足を速めた。

暗闇に、犬の鳴き声が響いた。

京香は思わず立ち止まり、辺りを確認する。

昼間は数多くの人が往来し、賑わう両国の通りも、今はほとんど  
の店が木戸を閉め、静まり返っている。京香以外の人間が歩いてい  
る気配は、今のところ感じない。

まだ、おびえているのか。

昼間会った老人が最後に見せた、あの雰囲気に。

(違う。私はおびえてなんかいない)

小さく首を振るが、提灯を持つ手がかすかに震えているのを、抑  
えることができない。

目を閉じ、あの老人の顔を思い浮かべた京香の背に、冷たいしづ  
くが流れ落ちる。

あの時感じた恐怖は、普段、自らに危機が迫ったときに感じる、  
冷や水をかけられるような直載的なものではなく、気づけば心に染  
みてくる、静かで、不気味なもの。

自分の力をひけらかすわけではない。かと言つて、京香に対する  
殺氣を隠すことなく、まるで赤子を諭すように忠告してきたあの老  
人は、一体何者なのか？

『座敷にあがる前には、酒を口にしない』　自ら課した禁を破つ  
ても恐怖心を消せない、未熟な自分に腹が立つて仕方がない。  
「ばかばかしい」

いつの間にか立ち止まり、自分自身を抱きしめていた京香は自嘲  
気味につぶやくと、歩き始めた。

『浮雲』まではまだかなり距離がある。急がなくては。  
足を速めた京香の背後に、足音が迫ってきた。

辻斬りの顔を知っている自分は、いつ何時、襲われるかわからな  
い。

京香はすぐさま、胸元に手を入れた。

いつ襲撃されても対応できるように、歩く速度をゆるめ、息を吸う。

間合いを詰めてきた足音に耳を澄まし、短刀に手をかけたそのと  
も。

「京香」

後ろから聞こえた声が、京香の心身の緊張を解いていく。  
立ち止まつた京香に向かつて、提灯の灯りが近づいてきた。

「先生。どうしたんですか？」

声が震えないようにお腹に入れ、並んだ源三に問いかける。  
「浮雲までは遠いからな。送つていこう」

「ありがとうございます。でも、新さんは大丈夫なんですか？」  
「新吉の身体はもう問題ない。それより、お前のほうが心配でな  
「……なにがです？」

心の動揺を押し隠して、再度問う。

「座敷前に酒を口にするなんて、京香らしくない。昼間の老人と何  
があつたのではないかと思つてな」

「別に。新さんの店で言つた以上のことはありませんよ」

京香は源三を見ずに、再度足を速めた。これ以上、老人に関する  
話はしたくない。

「杯を持つ手が震えていても、か？」

源三が少し強い口調で、京香の背中に問いかけた。

(……やつぱり)

源三はすでに、見抜いていたのだ。京香の中に巢食つている、あ  
の老人に対する恐怖心を。

足が止まつた京香は、大きく肩を揺らして息を吐き出した。

「……嫌になっちゃう」

「京香？」

「先生は、何もかもお見通しなんだもの」  
泣き出しそうな空を見上げ、つぶやく。

「当たり前だ。どれだけの時を共に過ごしていると思つてゐる  
思わず振り返つた京香を、源三の真剣な眼差しが捉えた。

『「これから源三と共に過ぐ」してきたのか?』

そう問われても、京香ははつきりとした答えを出すことはできなか  
い。

『氣づいたときにはもう、源三は当たり前のようになってしまった。』

「京香」

ゆづくと近づいた源三が、名を呼んだ。

「男も女も無いこのお役所を果たすために、お前がどれだけ努力し  
ているのかは、俺が一番良く知つてゐる。しかし、何かあつたとき  
は頼つてくれてもいいではないか」

京香の肩に置かれた源三の手のぬくもりと優しい言葉が、心中  
に沁みてくる。

いつからだろ?」

自分の本音 特に弱音 を、出せなくなってしまったのは。

紀州にいた幼い頃は、痛い、悲しいといつては涙をこぼし、悔し  
いといえば源三が困惑するくらい怒り、楽しければ、時間が忘れる  
くらい笑っていたのに。

京香はふと、そのきっかけを作つたある出来事を思い出して  
いた。

## 第一章　一　日　　・追憶・其の一・

いつから京香は弱音を吐けなくなつたのか。  
それは、自分の弱さが原因で、一人の少女を死に追いやつたこと  
に起因する。

そう、あれは……京香が十一歳の誕生日を迎えたばかりの春のこ  
とだった。

わけもわからぬまま両親と引き裂かれ、厳しい修行に身を投じる  
日々を送つて早三年。

なぜ、自分は江戸に、しかも辺りに何も無い向島へ連れて来られ  
なければならないのか。

どうして両親はそれを許し、便り一つよこさないのか。

その疑問を、修業に没頭し、常に源三の後を追いかけていくこと  
で解消してきたつもりだけど、京香の心にたまつたうつ積は、もう、  
限界に近かつた。

現に、江戸へ連れて来られた十人の内、この三年間で脱走した仲  
間が二人いた。

けれど、その消息は知れない。

ここへ戻つてくることはおろか、紀州に帰ることができたのかも  
わからないのだ。

住んでいる森林地帯からの外出は禁止され、まるで檻の中に囚わ  
れた動物のように身を潜めていなければならないこの生活は、京香  
をはじめとした遊びたい盛りの子供達にとって、残酷以外の何者で  
もない。

『もうやだよ。おうちに帰りたいよ』

疲れ切った身体をひきずるようにして領地にある小屋へ帰つたとき、また一人泣き出した。

目が大きく、田に焼けた皮膚がいつも水ぶくれにならぐりに色の白い少女、葵。

江戸に連れて来られた頃から、三つ年上の京香を「お姉ちゃん」と慕い、あとをいつもくつついて来る、妹のような存在の子だ。

『おいで、葵』

手招きすると、一目散に駆け寄ってきて、京香の胸で泣きじゅくる。

『うるさいな。わざしいのはみんな一緒なんだよ。なのにいつも泣きやがって』

前髪をちょこんと結んだ同い年の康太が、葵に向かつて叫ぶ。たしか彼は、紀伊和歌山藩大名留守居役の三男だ。

『しかたがないじゃないの。この子はまだ八歳なんだから』  
『いつも言われてるじゃないか。お前達は、仲間であつて仲間じゃないって。京香は優しすぎるんだよ』

仲間であつて、仲間じゃない。

これも、京香には納得のいかないことだった。

厳しい時間のさなか、落ちこぼれそうになる子を助けると、容赦なく飛んでくる拳。

京香はもちろん、常に先頭を行く源三も、続く実力を持つ公儀筆頭御庭番の三男、新吉も同じ憂き目に何度もあつた。

『そう言いなさんな。何かあつたとき互いに助けられるのは、俺達しかいないだ』

古ぼけた壁によりかかって田を閉じていた新吉が、皮肉を込めて言った。

『何だよ。俺より年下のくせに、偉そうに』

康太は立ち上ると、まっすぐ新吉のところへ歩いていく。

『やるのか』

顔色一つ変えず、新吉も立ち上がる。

『やめなさいよ。二人とも』

抱いていた葵を座らせた京香が止める間もなく、康太が新吉の頬を殴りつけた。

新吉はすかさず反撃に出る。

曰じろ溜まつていた鬱憤が、このように出るのはしばしあることで誰も驚かないが、なまじ武術などを身につけて来ているので、あまり長引くと大怪我をしかねない。

力が自分と拮抗している新吉はともかく、康太ならまだ止められる。

そう思つた京香が康太の背後にまわったそのとき。

『いい加減にしないか。二人とも』

新吉の背後から彼を羽交い絞めにしたのは、源三だった。

『こいつが先に仕掛けたんだ。売られたけんかは買わなきゃ気がすまねえ』

『どっちが先に仕掛けたとかは関係ない。四つに組んでやりあつたら、誰が大怪我をするか、わからぬお主ではあるまい?』

新吉に向かけた源三の言葉の意図を、京香はすぐに読みとつた。

康太も腕を上げては來ているが、まだ新吉にはかなわない。

本気を出したらどちらが怪我をするかは、明白だった。

それを悟つたのか、康太は一人に背を向けると、そのまま走り去る。

『康太!』

源三が後を追つた。唇の端から流れ落ちる血を乱暴にぬぐうと、新吉は仮頂面をしてさつきの位置に音を立てて座り込み、目を閉じた。

この新吉も、わからぬ少年だ。普段は何を考えているか全く読めないのに、葵のような小さい女の子が泣かされたりすると、途端に相手に牙を向く。

気まずい雰囲気がただよう室内に、葵の泣き声がまた、ひときわ

大きくひびく。

ここにいるのは子供ばかり。ささいな小競り合いは日常茶飯事だ。  
しかし今日の出来事が、京香の心に多大な影響を及ぼすきっかけ  
になろうとは、京香自身、まだ気づいてはいなかつた。

## 第一章 一 日 · 追憶 · 其の一

犬の遠吠えが、暗闇に溶けていく。

まどろみの中、隣で気配が動いたのに気づいた京香は、そつと田を開けた。

『どうしたの？ 葵』

『おうちに帰る。帰りたい』

顔は見えない。しかし、震える声で、葵が泣いていることに気づく。

袖口にしがみつき、しゃくりあげた葵をそつと抱きしめて、京香は思つ。

そもそも、自分達がこうして集められたのはなぜなのか、と。父も、母も何も教えてくれないまま、江戸に連れて来られた。何も聞かされないまま厳しい毎日で身を投じ、自分はもちろん、皆のうつ積は頂点に達しつつある。

このままでは……。こいつか、この中の誰かが、仲間である誰かを手にかけてしまう。

京香は知りたかった。

ここに閉じこめられていて、本当の理由を。

『お姉ちゃん？』

『行こう、葵。とりあえず……ここから逃げよ!』

葵が大きくなっていたのが、京香の手を握る力でわかつた。

つづつと生い茂る葉の音が、耳に障る。

京香は小さな葵の手をしっかりと握りしめ、月明かりを頼りに進む。

これまでずっと一緒にいた源三に別れを言えなかつたのは残念だが、彼に知られたら止められると思ったから、会わずに来た。

『お姉ちゃん、痛い』

京香は立ち止まり、葵の足を見た。小さな枝や小石が刺さり、白い足に筋を作つてゐる。

『ごめんね。気づかなくて』

京香は葵を背負つて木の少ないところに移動し、平らな岩場に座らせた。

葵の足に刺さつたものを抜く京香の心には、すでに焦りの一文字が横たわつてゐる。

月が沈んでいく方角を頬りに進もうと考えたのだが、思った以上に茂つた森を歩くうちに、方角がわからなくなつたのだ。  
自分ひとりなら、どんなことをしてもこの森を抜けることが出来るのに。

ひとりなら、と。

湧き上がつた感情を打ち消すように、京香は首を小さく振つた。  
もともとは、葵のために危ない橋を渡り始めたのだ。いまさら、  
小さなこの子を置いていくわけにはいかない。

『お姉ちゃん、眠たい』

『もう少しで、この森を抜けられるわ。町に出たらきっと、親切な  
人が助けてくれる。それまで頑張りましょ。ね』  
自分の心を奮い立たせるために、大きな目をしょぼしょぼさせ始めた葵の肩を軽くゆする。

小さくなづいた葵の手を引き、立ち上がろうとしたそのとき。  
辺りの葉が、不自然な音を立て始めた。

生臭い息を吐く音がせわしなく耳に入る。

月に反射した双眸が、距離を置いて京香たちを囲んでいるのがわかる。

おそらく、野生化した犬が狼。しかも、春を迎えたばかりのこの時期はえさもなく、気が立っているはずだ。

葵の足の傷からただよう血のにおいを嗅ぎつけて来たに違いない。京香は息をのんだ。ざつと見ただけで三匹から四匹はいる。

ひとつ間を間違えば、一人とも餌食になるのは火を見るより明らかだ。

また、京香の心に魔物がわざわざく。

「ひとりならば逃げられる。葵を置いていけ」

と。

しかし。

『お姉ちゃん』

自分を信じ、必死にすがりついてくる、小さな手。

(この子は……私が守らなきゃならない)

『葵。お姉ちゃんから離れてはダメよ』

音を立てないようにしゃがみ、足元の石で胸元に忍ばせていた煙玉すべてに火をつけると、地面に強く叩きつけた。

あたり一面に、煙が舞い上がる。

獣たちがひるんだ隙をつき、葵の手を強く握つて走り出す。

追いかけてこないうちに、葵と一人で少しでも遠くへ逃げなければ。

京香はただ、前だけを見て森を駆け抜けた。

(遠くへ。あいつらが追いかけてこられないくらい、もっと遠くへ) その思いが再び焦りに変わったとき、思いも寄らないことが一人に襲いかかった。

## 第一章 一一三四・追憶・其の三・

遠くへ逃げたい。

葵の手を引き、走る京香の頭には、その考えしかなかつた。

『あつ！』

握っていた葵の手が突然、離れた。

『葵？』

振り返ると、小さな身体がうつぶせになつて倒れている。引き上げて起しそうとするが、なぜか起きない。

それどころか、葵は火がついたように泣きじやくる。

葵の足元に向かい、手を添える。突然の冷えた感触に、思わず京香は手を引いた。

これは。

葵の足をがつちり掴んで離さないのは、たくさんの刃がついた、鉄製の大きなはさみだった。

京香ははさみを両手で開き、葵の足を引きずり出そうとするが、一瞬でも力を抜くと、刃が再び彼女の肌に食い込んでしまつ。

『いたい。お姉ちゃん』

葵の泣き声はだんだん大きくなるばかりで、京香は少しずつ苛立ちを覚えていた。

なぜ、こんな目に遭わなければならぬ？

親元に帰りたいだけなのに、なぜ、神様は私達の邪魔をするのだ？

そんな京香に、心の中で、魔物が断続的にささやきかける。

「逃げる」と。

ここで葵にかまけていては、知りたかったことを知らずに命を落

とすや、ど。

京香はその思いを断ち切らつと、首を何度も横に振った。

「」で逃げたら、葵の命は露と消える。

『葵、もうすぐだからね。頑張るのよ』

自分に言い聞かせるように、葵に話しかける。

しかし。

『葵？』

泣き声は、いつの間にか聞こえなくなつていた。

『葵！ 眠つちゃ駄目！ 葵！！』

京香は葵の足元から移動すると、冷えた頬を必死に叩く。

『お姉ちゃん……、ねむいよ』

『葵、しつかりするのよ。今、助けてあげるから…』

思わず叫んだ。しかし、こんなとき、どうしたらいいのだ。

助けを呼べない。かと言つて、この刃をばずす方法もわからない。

頬を叩く手は震え、双眸からは涙がこぼれ落ちる。

『お姉…ちゃん、さむい…』

京香に向かつて差し出す小さな手を握りしめ、葵を抱きしめる。

『葵、お願ひだから眠らないで。眠つたら死んでしまうのよー。』

京香は葵の耳元でささやいた。

最初こそはうなずいていた葵だが、その動きが少しづつ小さくなつていく。

『葵、眠つちゃ駄目！』

あらん限りの力を込めて叫ぶが、葵からはもう、何の反応も返つては来ない。

その瞬間、京香の首に回されていた手が外れ、腕に葵の全体重がのしかかつた。

『…………葵？』

力の抜けた葵の身体を離し、頬に手をやる。

まだ、ほんの少しだけ温かい。なのに。

『葵、起きて。葵ー』

京香の声はもう、葵には届かない。

どうして？

葵はただ、足にけがをしただけ。なのになぜ、この世からいなくならなければならない？

両親に会いたい一心で、暗い夜道を、京香の手を頼りに歩いていた。

ただ、それだけなのに。

頬に落ちる涙をぬぐうことも忘れ、葵の亡骸を抱きしめる京香の身体を、風が吹き抜けた。

それに乗つて、さつき追い払ったはずの奴らの臭いが京香の鼻をかすめる。

こんな暗いところに葵を置いてはいけない。

しかし、このままここにいたら、今度は自分が餌食になる。  
涙を拭いた京香は、意を決して立ち上がった。

伝えなくてはならない。

まだ八歳の葵が、見知らぬところでどんなに頑張っていたのかを。  
そして、最期にどんなに両親に会いたがっていたのかを。  
自分が紀州に帰り、伝えなくてはいけない。

『葵、ごめんね』

紀州へ帰る。葵の死と生涯を伝え、自分の疑問を解き明かす。  
横たわる葵に背を向け、京香は走り出した。  
近づいてくる獣たちから、まず身を隠さなくては。  
そう思つた矢先、京香の足元が突然その姿を消した。  
一瞬だけ、宙に浮いた感覚が身体を捉える。そして。  
京香の身体は、そのまま闇の中へと転がり落ちていった。

## 第一章 一日目・追憶・其の四・

暗闇にいた京香の意識を、降り注ぐ陽の光が引き戻した。ゆつくりと目を開け、辺りを見回す。

木を寄せ集めて作つたような粗末な壁、何本かの木で格子状に作つた小さな窓。

そして、雨が降つたら間違いなく漏れてくるであろう、穴だらけの天井。

『気がついたようだね』

低く、少し枯れた男性の声が、少し遠くに聞こえた。

『……ここ、は』

京香は寝たまま、声のした方向へ問うた。

『さあ。あの世でないことだけは確かじやな』

少し揶揄を含んだ物言いだが、不思議と腹は立たなかつた。

『ほれ、飲みなさい』

顔を上げた京香の目の前に現れたのは、白い髪を無造作に伸ばし、皺だらけの顔に柔軟な笑みを浮かべた老人だつた。

ゆつくりと起き上がり、差し出された茶碗を受け取ると、欠けた箇所に口をつけないようにしながら、白湯を少しづつ飲み干す。

『よく、生きておつたな』

驚いた京香は、視線を老人のほうへ移した。

しかし薬を調合しているのか、老人は『じりじり』と音を立てて動かす手元から目を離さない。

『お前さんの前に逃げ出した幼子達は、野犬に食われるか崖下に落ちるかして、全員あの世へ行つておるというのに』

京香は思わず身構えた。

『……あなたは一体、何を知つてるの?』

『発する声が、いつもより格段に低い。』

『昨夜あつたことは、忘れなさい。それがお前さんのためじや』

忘れる? 薬のことを。

まだ小さな自分にすがりつき、親に会うこと夢見て逝つてしまつた幼子のことを。

『それは……できません』

未だこちらを見ぬ老人を見つめて京香は言い切る。

『何故じや』

老人の声は、静かなままだ。

『自分の腕の中で消えた命を、あなたは忘れることがでりますか?』

『……』

『理由も聞かされずに連れてこられて、地獄のような日々を過いして、両親に会えずに、命を落としたあの子のことを、私は忘れることがなんてできません』

口に出した言葉が震える。鼻の奥が熱くなり、頬をいくすじも涙がこぼれ落ちる。

『忘れられないのは、一瞬だけ。あんたもじきに、その子のことを忘れる日が』

『忘れない! 絶対に』

激情を吐き出すように、京香は叫んだ。

『紀州に帰つて、あの子の両親に伝えるの。生きていた証を、伝えなきやならないの!』

『それは許されん』

『どうして! ?』

ようやく京香を見た老人の目が、怪しく光った。

背筋に、冷たいものが駆け抜ける。

『こゝを一步でも出ようとしたら、自分の存在など露のように消されてしまいそうな、静かな殺気。

『命が惜しくば、迎えが来るまでおとなしくしてることじや』

老人が再び田をそむけたのと同時に、草をかきわけるよつた音が京香の耳に届いた。

一瞬の沈黙。そして。

土と木のするる大きな音とともに、扉が開いた。

『京香!』

『……源三様』

おでこに無数の汗の玉を浮かべた源三は、京香の姿を確認すると心底安堵した様子で中へ入つてきた。

『あなたが、京香を救つてくれたのですか』

京香の隣で向き直つた源三の顔を見る老人の表情は、最初に見た柔軟な表情に戻つてゐる。

『本当に、ありがとうございました。……あの、もう一人、幼い子がいたと思うのですが』

葵の安否を問うた源三の言葉が、心に突き刺さる。

『あの』

『もう一人の幼子は、このお嬢さんのそばで息絶えておつた』

老人の思ひがけない言葉に、京香は思わず息をのんだ。

『遺体はいたみが激しかつたのでな。勝手なことをして申し訳なかつたが、この家の裏にある丘に埋葬せてもらつたよ。真新しい石碑を建ててな』

どうして、そんな嘘を。

京香の視線に気づいた老人が目配せをしてきた。

口の端にのぼらせかけた言葉を、ぐつと飲み込む。

『……そうでしたか。本当に、何から何までありがとうございました』

手をつき、深くお辞儀をした源三を見ていられなくて、京香は目を伏せた。

『京香は連れて帰れますか？ 皆が、心配しておりますので』

『ああ。帰つたらこの薬を飲ませるとよい。傷につける膏薬と一緒に』

にな』

袋を受け取つた源三に支えられ、京香は立ち上がる。

全身傷だらけの身体より、葵を救えなかつた、そして、紀州に帰れない悔しさとやるせなさで、京香の心は激しく痛んでいた。

## 第一章 一田三・真の強さ・

『いいだな』

歩きがぎこちない京香を支えながら山道を歩く源三が、真新しい墓石の前で立ち止まつた。

申し訳ない気持ちでいっぱいの京香は、田を向けることができない。

自分が、葵を止めにこさえすれば。いや、葵を止められる強さを持つていたならば。

独りぼっちで土に還りすとも済んだらいい。

『……京香』

いつしか、はらはらと涙をこぼしている京香に気づいたのか、源三が、京香の手を強く握りしめる。

『葵が死んだのは京香のせいじゃない。だから、自分を責めるな』源三の言葉に、ようやく救われる思いがした。けれど、葵を死なせてしまつた自分の責は、どうあがいても消えるはずはない。

強くなりたい　今、京香の胸の中に初めて芽ばえた小さな炎。ここで眠る葵のために今、京香に出来ることは、自分自身を高め、ここへ連れてこられた理由を自らの手で知ることだ。

そのためには、どんなことをからむ、逃げていってはいけない。

そう決意した京香は涙を拭いて顔を上げると、新しい墓石をまつすぐ見据えた。

こつしか田を閉じ、封じ込めていた記憶に入り込んでいた京香の

類に、雨粒が落ちる。

空を見上げた京香の視界に、源三が広げた傘の端が入ってきた。振り返ると、源三が何もかもをわかつていると言わんばかりの表情で見つめていた。

あの日以来、京香に何かがあると一番に異変に気づき、必ず助けてくれるのは源三だった。

今日も、自分が奥底にしまったんだはずの感情を察知し、そばにいてくれる。

守られている。いつも。

ありがたいと思つ反面、自分の弱さを見せつけられているような気がして、やりきれない。

「……情けない」

「京香？」

「先生にはいつも助けられてばかりで……情けないんですよ。自分が

『強くなりたい』

京香はあれから、葵を喪つたことを胸に秘め、ただその一心で厳しい訓練に耐えてきた。

それが実り、自分らが集められた目的 庶民のための御庭番として、上様のために働くことを知つたとき、もう一度と、葵のような犠牲者を出すまいと誓つた。

しかし、その誓いが守られているとは言いがたい。

『もつと、自分が強ければ』 その思いが、常に心の中にある。

「俺は、京香を弱いと思ったことは一度もない」

「気休めはよしてくださいな」

源三が心の底から言つてくれたことくらい、わかつている。

しかし、今の京香にはそれを素直に受け止めることができない。あの老人の底知れない強さに立ち向かえなかつたことが原因で、また、新たな犠牲者を出してしまつかもしれない。

そんな思いが今、京香の胸に染み渡つてゐる。

「本当の強さとは、何だ？」

「……え？」

口調はいつもと変わらない。けれど。

「お前の思う真の強さとは、自分より強い相手に闇雲に立ち向かつて行くことなのか？」

源三の視線が、ここにしなしか鋭く見える。

「真の、強さ……」

うなずいた源三の手が、京香の肩に優しく添えられる。

「相手の力量を察知し、自らを引く。それも『強さ』だ。決して逃げなんかではない」

まるで小さな子供を諭すような源三の言葉が、今度はゆっくりと心に満ちていく。

もし、あの老人に立ち向かつて命を落としていたなら、自分は、そのことを草葉の陰で後悔することになつたかもしれないのだ。

「そう……ですね」

不思議なほど素直に、京香はうなずいていた。

「第一、京香が田の前からいなくなつてしまつては、俺が困る」「え？」

真剣な源三の眼差しが、京香を見下ろした。

なぜか、いつもは聞こえない心臓の音が、京香の耳に届く。しかし。

「『飯を作ってくれる人がいないと、俺は死んでしまうからな』長年一緒にいる自分には、わかりきつていた言葉のはずなのに、なぜ、胸が高鳴つてしまつたのだろう。

「……まあ。そんなこと言う人には」

「『飯を作つてあげませんよ、だらう?』」

言い知れぬ感情を隠すように発したいつもの台詞を先回りされてしまい、京香は思わず、声を立てて笑った。

「そ、行こう。父上が首を長くして待っているんだ」

京香は、少しだけ肩をすくめてうなずいた。

源三と同じ傘の下で歩く、月の見えない夜。

京香は、自分が求めていた『強さ』の意味が少しだけ理解できたような気がして、また一歩、踏み出せるような気がしていた。

しかし。

心を踏みにじるような事件がすぐそこまで来ていることを、今の京香は知る由もなかった。

## 第三章 二日目・秘めたる力・（前書き）

### 【用語解説】

- ・四半刻……今の時間に換算すると約30分。
- ・下つ引き……岡つ引きの子分のこと。

## 第三章 二日目・秘めたる力 -

昨夜の雨とは打って変わった、雲一つない青空。  
新吉の店からは歩いて四半刻ほどかかる源三の道場には、昇りたての朝日が、格子戸から降り注いでいる。

その中央で、紺の稽古着に身を包んだ京香が、肩で息をしていた。その表情は、古いつきあいの新吉ですらあまり見たことのない、緊迫したものだ。

一方で、彼女と対峙している妹のおみつは、多少息をはずませているものの、額に汗がにじんでいる程度で、どこかしら余裕を感じさせる。

(……こいつ)

新吉は、京香を凌ぐおみつの身の軽さに目を瞠<sup>みは</sup>った。

幼い頃は、一人の兄に『ぐず』『のうま』とののしられ、泣いてばかりいたおみつが、今、自分と同じくらいの実力を持つ京香と対等、いや、それ以上に渡りあっているのだから。

京香が息を大きく吐き出した。白い肌には玉のよつた汗がいくつも浮かんでいる。

正眼に構え、腰を落とした京香が目を閉じた。

おみつに翻弄され続け、動搖しているであろう心を閉じ、「無」になろうといふのか。

京香のそのままを見たおみつが、真っ正面から踏み込んだ。

「ばか！……」

新吉が一の句を告げる前に、おみつの剣が空を切った。  
前のめりになり、膝をついたおみつが振り向いた瞬間。

京香が振り抜いた木刀が、おみつの眼前すれすれで止まつた。

「それまで！」

白の着物に紺の袴をはいた源三の声が、場の緊張を解いた。する

と。

「悔しい～！～」

座り込んだままのおみつが、口をとがらせた。

「お姐さん。もう一本！」

立ち上がたおみつは京香に向けて、人差し指をつきつける。

「待て、おみつ。今度は俺が相手をしてやる！」

まだ息が上がっている京香の様子を察したのか、源三が竹刀を持つおみつの前に立つた。

「先生、負けないからね」

竹刀の先を軽く合わせて、おみつが源三に敢然と立ち向かっていく。だが、源三相手では、おみつも苦戦しているようだ。

源三は、まるで子供をあしらうように、おみつが逃げる先を見切  
り、軽く竹刀をあてがつしていく。

「強いじやないの。おみつさん」

いつしか隣に腰を下ろしていた京香が、源三らに視線を向けたま  
まつぶやいた。

「完全に油断していたわ。もし、あの子がまっすぐに向かってこな  
ければ、負けていたかもしない」

京香の口から、小さく息が漏れたとき、ふと、新吉の脳裏に疑問  
がよぎる。

『なぜ、おみつは普通の少女として育てられなかつたのか』と。

閉じ込めることがかりを考えていたため気にも留めていなかつた  
のだが、たすき掛けをした白い着物の袖からのぞく腕は、厳しい修  
業に耐えた京香と同じような形をしており、おみつも、何らかの訓  
練を受けていたことは明らかだ。

「どうして、先生がおみつさんと手合わせをしきつて言ったのか、  
わかった気がするわ

「え？」

「新さんも手合させしてみたら？ そつすればわかるかもしれないわよ」

言つた意味がわからず問うた新吉に、含み笑いをしながら京香が返した。

その瞬間、源三のくり出した一手が、おみつの肩を強襲した。おみつが倒れ込む大きな音が、道場内に響く。

「おみつ！」

心配した新吉が膝を立てる。しかし。

「痛いよ先生。手加減してくれたつていいじゃないの」

肩を押されて、おみつが立ち上がる。しかし、息は全くと言つていいほど乱れない。肺の機能が相当鍛えられている証拠だ。「そなたに手加減などしたら、こちらが寝首をかかれるからな」「何で一人ともそんなに強いの？ 紀州じゃ私が一番だったのに」

「馬鹿。上には上がいるんだよ」

京香の脇から竹刀を取った新吉は、一人に歩み寄った。

「今度は俺が相手になろう」

新吉が竹刀を構える。すると、目の前に来たおみつが目を輝かせた。

「兄さんには負けないからね」

静かに対峙する。

構えはそれなりになつているものの、見た限り、竹刀の裁きかたはまだまだなつちゃいない。

ならばなぜ、京香があそこまで追い込まれ、源三が本氣を出したのか。

(紀州で培つた実力、とくと拝見せてもらおつ)

竹刀を軽く合わせる音。すずめの鳴き声。

それらが、おみつの胸元を見据える新吉の耳に入つてくる。互いの剣先が力強くぶつかる。

先に踏み込んだのは、おみつだった。

真正面から来た彼女の切つ先を受け流し、右から竹刀を左に叩き込む。

しかし、おみつは身を翻して新吉の剣をすつとかわした。

(……ここつ)

想像以上の速さだ。

「やるじゃねえか。おみつ

「……兄さんこそ」

三人も相手にしているせいか、おみつの息が徐々にあがってくる。新吉は構えなおすと、素早くおみつとの間合いを詰める。一瞬、おみつの反応が遅れた。

(ここが、勝負! )

新吉が「満」の構えから斬り込もうとした、その時。

「兄い！ 兄いはいませんか！？」

騒がしい足音が、緊張を解いた。間に割つて入った源三が、新吉

の太刀を軽く受け流す。

「末吉さん、どうしたの？」

とんだ血相で飛び込んできた下つ引きの末吉に、京香が優しく声をかける。

「た、大変です。そここの河原に、死体が」

## 第三章 二日目・疑問と安堵・（前書き）

### 【用語説明】

- ・小銀杏……与力・同心の鬚の結い方。額の広い月代さかやきと、小さく短い鬚が特徴で「八丁堀風」とも呼ばれた。

「死人？」

末吉のあわてたさまで、新吉はもじりん、源三も京香も緊張した様子で彼の言葉を待つ。

「へい。姐さんくらいの背格好で、黒い着物を着てました。年の頃は六十前後じゃねえですかね」

京香が一瞬、こちらを見た。おそらく、考へていることは新吉と同じであろう。

「よし、案内しや」

竹刀を源三に預け、腰の十手に手をかけた新吉は、再度京香と顔を見合せうなずいた。そこへ。

「待つて兄さん。私も連れて行って！」

おみつが前に立ちはだかる。事情を知らない末吉は、おみつを見て、目を白黒させている。

「お前はここにいろ」

「迷惑はかけないから、お願ひ！　那人……じいちゃんかもしない」

「おじいさん？」

おみつに間う京香の顔に、戸惑いの色が浮かんでいる。自分だって同じだ。自分らを脅しにかかったあの老人と、おみつの祖父が同一人物かもしけないとは。

「兄い。この子は？」

「田舎から出てきた、新さんの妹なの。ね、新さん。おみつさんにも来てもらいましょうよ。いいでしょ？　先生」

京香の提案に、黙つたままの源三がうなづく。

「しかし先生」

「大丈夫だ。その代わり、おみつ、絶対に一人から離れてはいかん

ぞ」

「先生」

抗議しようとした新吉を、源三が田で制してきた。  
承服しがたいが、源三が承知した以上、ここで言い争つてもらう  
があかない。

「……わかつた。姐さん、こいつ頼むわ」

「ありがとう、兄さん」

「末吉」

礼を言つおみつを見ずに、末吉を追つて新吉は駆けだした。

「ほらほらどいた！ 御用の筋だ」

末吉の後ろから現れた新吉を見ると、人垣ヒガニがさあつと引く。  
「姐さん、おみつとそこで待つてくれ」

二人を押しとどめ、慎重に死体のあるほうへ近づく。  
少々水に濡れている身体のすぐ横に、空の酒瓶が転がっている。  
新吉は、その口にある水滴を指ですくい、そつとなめた。  
すると、かすかに鼻につく味がする。眠り薬の類たぐいにしては、風味  
が強い。

(……毒薬？)

自ら毒を飲んで死ぬ気なら、こんな往来で実行はすまい。  
と、言つことは

(殺し、か)

そう結論づけた新吉は、死体の顔をじっくりと見た。

さまは変わつてゐるが、小さな目、皺だらけの頬。それらは先日、新吉を脅したあの老人に違ひない。京香も、見ればわかるはずだ。

問題は。

「おみつ」

ざわめいている人垣の前にいる妹の名を呼ぶ。ゆつくりと、ふたつの足音が近づいてきた。

立ち上がり、京香に目をやる。死体のあるほうへ目をやつた京香が、間違ひない、といつた風に小さくうなずいた。その後。

「……じいちゃんだ」

京香の横で、おみつが力なくつぶやいた。

「間違い、ないか？」

驚きを押し殺し、おみつに訊ねる。するとおみつは、自分に似た小さな目から涙をはらはらとこぼし、しつかりとうなずく。

「どうして？ どうして、こんなところで……。じいちゃん！」

呼びかけると、おみつはひざを落とし、返事のない小太郎にすがつて泣き始めた。

その痛々しさに、新吉は思わず目をそむける。

「そんな簡単に、殺されるものかしらね。あの人ガ  
隣にいる京香が、小さな声で新吉に問うてくる。  
確かにそうだ。

自分をいとも簡単に翻弄し、京香を脅してきた人間が、こんなあつさり殺されるものなのかな？

それよりも、おみつの祖父がなぜ、自分らに『この探索から身を引け』と言つてきたのだろうか？

答えを求め、再度、京香を盗み見る。

しかし彼女はしゃがみこみ、泣きじやぐるおみつの肩に手を置いているため、その表情を伺い知ることができない。

再度、人垣が割れた。

新吉が目をやると、髪を小銀杏に結い、端正な顔立ちに緊張の色をうかべた男が十手を持って現れた。

「 笹川さま」

「 身元はわかつたのだな」

「 ええ。恐らく、酒を飲みすぎて川に落ちたものと」

新吉の上役の同心、ささがわしょうのしん 笹川将之進ささがわじゅうのしんの問いかに、新吉はうなずき、小声でささやいた。

「 そりか……。可哀相に」

京香の隣で泣き続けるおみつを、将之進は哀れみを持った目で見つめる。

親代わりを失つた妹の悲しむさまを見るのはつらいが、これでおみつを『期日内』に紀州に帰すことができる。

一つの相反する感情に気づき、心の中で苦笑いしながら、新吉は小さくため息をついた。

## 第二章 二日目・すれ違ひ心・（前書き）

### 【用語説明】

- ・夕七つ……今の時刻に換算すると、午後三時から午後五時の一時間。
- ・暮六つ……今の時刻に換算すると、午後五時から七時までの二時間。

## 第三章 二日目・すれ違ひ心

線香の煙とともにわき立つ香りが、暗い室内から廊下にただよっていた。

小太郎は、源三の道場の裏口に面した一室で、覚めることのない眠りについている。

奉行所からは、小太郎は酒の飲みすぎで川に転落した、との判断が下された。

しかし京香は、そうは思っていない。それは新吉も同じであろう。なぜ、おみつを置いて江戸に出て来たかはわからぬが、もし、重要な任務を帯びていたのなら、前後不覚になるまで酒を飲む、といふことはありえないはずなのだが。

鴉の鳴き声が、灰色の小袖に身を包んだ京香の耳に届いた。

外に目をやると、もうそろそろ、ぬけるように青かつた空が、黒に塗り替えられるこれを告げる夕陽が、建物の向こう側で最後の輝きを放つていてるのがわかる。

京香は、火付石と油を持つて、おみつらがいる部屋へ入っていく。数回音を鳴らし、中央にある行灯に灯りをともすと、じっと身じろぎせずに座っているおみつの背中が、夕闇のなかに浮かび上がった。

「おみつさん、『じ飯』よ」

今朝、稽古をしたときと同じ服装のままのおみつは、何も言わずに首を振る。

「少しほ食べなくちや。明日はおじいさんの野辺の送りだし、あなたまで倒れたら、おじいさん、きっと悲しむわ。ね」

京香を見上げたおみつの目は赤く染まり、たくさん涙を流した後が、頬にくつきりと残っている。

新しいいろうそくと線香を立てて小太郎に手を合わせた京香は、無理に笑顔を作つておみつを見た。

じつでもしなければ、自分が、彼女の悲しみに引きずられてしまったからだ。

声を出さずに再度うながすと、おみつは小さくうなずいて立ち上がる。

自分より少し背の大きいおみつが、何故か小さく見えた。

「あら、先生は？」

京香は、源三に用意した夕食に全く手がつけられないのを見て、新吉に訊ねた。

「早馬が呼びに来て、清水様の屋敷に行つたよ」

ああ、そうか。京香は思つ。

事件が起きると、その日の探索結果の報告を夕七つから暮六つまでに行うことになっているのだが、今日は、早朝から小太郎とおみつの二人にかかりきりで、事件の探索どころではなかつたのだ。

源三は、今日のことをどのように天膳や忠直に報告するのだろうか？

新吉もそれが気がかりのようで、夕飯に全く手をつけていない。そして、おみつも。

箸すら持たず、ただじつと一点を見つめている。まるで、何かを決心するかのような強い目で。

「や、食べましょっ！ セつかく作ったのに、やめてしまつじゃないの」

京香は、沈みがちな空氣を盛り立てようとわざと明るく振舞う。しかし、二人は自らの世界に閉じこもつたまま、扉を開かない。京香はあきらめて、自分のお膳に手をつけ始めた。

道場のあたりには、子供らが遊ぶ音すら聞こえない。さつきから京香の耳に入つてくるのは、悠然と鳴き続ける、鶴の声だけだ。

「おみつ。明日、じいさんの野辺の送りが終わつたら……、紀州へ

## 帰れ

沈黙を引き裂いた鴉の鳴き声のすぐあとで、新吉が告げた。

「いハ言ひぢや何だが、じいさんは死んだ。お前がもつ、江戸にいる理由はないだらう」

「新さん、じんなとぞ口宣わなくたって」

「……な」

おみつの小さな声が、京香の言葉をやんわりと遮りきった。

「え？」

「紀州へは……帰らない。まだ、やらなきゃいけないことが残つてる」

「何だと？」

新吉が鋭い目つきでおみつを見た。おみつも負けずに、強い決意を込めて兄を見返す。

「じいちゃんの仇を討つ。そうじやなきや、紀州には帰れない」「仇？ 何ぬかしてるんだ。おまえのじいさんは酒の呑み過ぎで」「違う！ 殺されたんだよ！」

机を強く叩き、おみつが新吉の言葉を遮りきった。漬物をのせた小皿がはね上がり、床の上に落ちていく。

「じいちゃんは、お酒なんか飲めなかつた。一口飲んだだけでも、顔を真つ赤にするくらい弱かつたの。そんなじいちゃんが、お酒を飲み過ぎて死ぬなんて、絶対ありえないよ」

「だからって、殺されたっていう証がどこにある？」

一段と低い声で、新吉がおみつに問つた。

「それは……これから搜すよ。犯人だつて、私の手で」「いい加減にしろ！」

堪忍袋の緒が切れたのか、おみつよりも強い力で机を叩き、新吉が立ち上がつた。

「お前がここにいる」と、どれだけの人間に迷惑がかかるのか考えたことがあるのか？ お前はな

「新さん！」

「」のままだと、おみつに知られたくない」とまで言に出しかねない。そう感じた京香は、新吉を強く制した。

我に返ったのか、新吉が苦々しい顔でおみつから田をそらす。

「……迷惑なの？」私

呆然とつぶやくおみつの顔から、感情が消えた。

「おみつさん。新さんはそんな意味で言つたんじや」

「私はここに……、江戸にいちゃいけないの？　じいちゃんの仇も取つちやいけないの！？」

京香に構わず新吉に近づき、肩を横から揺さぶつておみつが問う。「そうだ。だから帰れって言つてるんだ。そんなこともわからないのか！」

おみつの顔が、ゆがんだ。しかし彼女は歯を食いしばり、必死に涙をこらえている。

「……わかった。もういい！」

それだけ言つと、おみつは乱暴に戸を開けて部屋から出て行く。

「おみつさん！」

「姐さん、ほっとけ！」

頭に血がのぼった京香は、手元にあつたお茶を、新吉の顔に勢いよくかけた。

水しぶきが辺りに飛び散り、木の机に大小さまざまなしみを作つていく。

「少し頭を冷やしなさいよ。あの子を放つておけないのは、あんたが一番よく知つてるじゃないか」

水がしたたるもの構わず立ちぬく新吉を、唇をかみ締めて一警いちべつする。

そして、おみつを追いかけるべく、闇夜に向かつて京香は走り出した。

辺りはもう、すっかり暗くなっていた。

黒い空間をほのかに照らす月明かりが、周りの建物の輪郭を、くつきりと浮かび上がらせる。

京香は、道場から飛び出していったおみつを捜すが、近くの武家屋敷街にも、源三が住む長屋にも、姿は見当たらない。

闇の帳を告げた鴉の鳴き声は、いつしか犬の遠吠えに変わり、京香の不安を煽つていく。

時が経てば経つほど、おみつを捜している京香の脳裏には、昔失った少女の泣き顔が浮かんでくる。

(……葵)

まだ小さかつた自分が守れなかつた、幼い少女。

この仕事に就いてから、思い出したことは一度もなかつたのに。

昨日、小太郎より感じた底知れぬ恐怖が、過去の自分を呼び戻したものか。

もし、命を狙われているおみつを見つけられなければ、自分は、同じ過ちを繰り返すことにして。

大店が立ち並ぶ庄屋街を流れる川岸に立ち尽くし、小さく身震いした京香の耳に、小さな水音が聞こえてきた。

顔を上げると、前方にある川面かわもが不規則に揺れている。

川をまたいでいる大きな橋の真ん中に、見覚えのある影が月に照らされて映つていた。

深くため息をついた京香は早足で橋に近づき、少女の名を呼ぶ。

「おみつさん」

「お姉さん」

「心配したのよ。ずっと、ここにいたの？」

少し気まずそうに、おみつはうなずいた。

「さ、帰りましょう。新さんも心配してるわよ」

「でも……、私がいたら、迷惑なんでしょう?」

「何言つてんの。新さんの妹なら、私や先生にとつても妹同然よ。新さんがどう考えようと、迷惑だなんて思つてない」

一瞬、探るような目つきで見てきたおみつだが、京香が笑みを浮かべてうなずくと、少しだけ表情がゆるんだ。そして。

「おととい、ここで、先生に初めて会つたんです」

頬を優しくなでていく風に揺られる水面を見下ろし、おみつが口を開いた。

「私、ならず者に囮まれてて。先生は、あつという間にそいつらから私を助けてくれた。そして、『もう、小さな頃の君じやない。俺が保証する』って言つてくれたんです」

言葉の意味をはかりかねている京香に、おみつは真剣な眼差しで問い合わせてきた。

「お姐さんは、私がじいちゃんの仇を取ることには反対ですか？ 私じや、じいちゃんの仇を取つてあげることはできないんですか？」

京香は、言葉に詰まる。

実力だけなら申し分ない。事実、源三や新吉以外の人間で、自分をあそこまで追い詰めたのは、おみつが初めてだ。だが……時間がなさ過ぎかる。

父である軍太夫に命を狙われている彼女の時間は、残り少ない。その間に小太郎の殺された原因を探り、仇を捜し出すのは不可能に近いのではないか。

「お姐さん？」

おみつがまた、不安そうな眼差しを京香に向けてきた。

その瞬間、京香の周りの空氣に、静かな殺気が忍び寄る。

「お姐さん」

言い募ってきたおみつを制し、京香は胸元の短刀に手を伸ばす。

「おみつさん、私から離れては駄目よ」

言い終わる間もなく、京香とおみつの間の手すりに、棒状の手裏剣が突き刺さった。

同時に背中の刀に手をかけた数人の忍び装束のものが、二人に向かって駆けて来た。

京香は、手すりにあつた手裏剣を引き抜くと、刀を抜いてすぐそばまで来た男の肩口に、渾身の力を込めてそれを突き立てた。

大きな叫び声とともに男の手から離れた刀を奪い、自らの短剣をおみつに差し出す。

「お姐さん」

「躊躇したら駄目。いいわね」

引き締まつた顔でおみつがうなずく。

と、同時に幾人かの男達が二人に襲いかかってきた。

振り下ろされた刀を受け流し、よろけた相手の脇腹めがけて刃を振り抜く。

おみつを見ると、彼女は身の軽さを最大限に活かし、流れるように男達の急所を斬りつけている。

今朝、長刀を持っていたときよりも動きは早く、まるで、短刀がおみつの手のように自在に動いている。

これならば、心配はいるまい。

小さく息を吐き、京香は精眼の構えで、自分を囲う二人の男に目を光らせた。

京香を囲う男達が、じりじりと間合いを詰めてくる。

一斉に襲いかかって来るか、それとも別々か。

京香は構えたまま、身じろぎもせずに奴らの動向をうかがう。するとしげれを切らしたのか、向かって右側にいた小柄な男が、踏み込んできた。

連携が乱れた空氣を感じ取つた京香は、かかつてきた男に一太刀くれるとすぐに刃を切り返し、真正面の男の頭に向かって振り下ろした。

叫び声をあげることもなく、男がくず折れる。

それを横目で確認すると、京香は左の男に気を配りながら、おみつのそばへと駆け寄つた。

体勢を崩したおみつに振り下ろされた刃をはねのけ、彼女をかばつて立つ。

見渡すと、京香に差し向けられた人数よりも、おみつに対峙する数のほうが、圧倒的に多い。

しかも、男らの太刀筋はすべて、京香には見覚えのあるもの、もしくは手合わせした経験のあるものばかりだ。と、いうことは。

(公儀御庭番の手のもの、か)

新吉に聞いていた日数よりも早く、彼らは動いている。　おみつの存在を消すために。

京香は唇をかみ締めた。新吉の父、軍太夫に対する怒りが、心の中に渦巻く。

後ろで立ち上がつたおみつの息は、すでに上がつている。やはり実戦経験のない彼女には、荷が重かったか。

多勢に無勢。

新吉や源三がいれば、こんな奴らはあいつと退けられるの！」

一瞬湧き上がった感情が、京香の記憶を再びよみがえらせた。

『自分ひとりなら』

あの夜、何度思ったか知れない。葵さえいなければ、自分が思うように動けるのに、と。

そして、今も。

おみつさえいなければ、源三や新吉がそばにいてくれたなら、こいつらの始末などわけないのに。

京香は心の中で、半ば自嘲的に笑った。

葵を喪ったあの夜と、何も、変わっていないではないか。

どんなに腕を上げても、どれほどの事件と向き合っても、闇夜で震え、泣いていたあの時の自分から逃げていては、強くなどなれるはずがない。

逃げてちゃいけない。今、おみつを守れるのは自分しかいないのだから。

そう思つた京香は呼吸を整え、刀を構えなおした。

大柄な一人の男が、再度間に割つて入ろうとしたのを受け止めようとするが、力の差か、持つていた刀がはじき飛ばされた。

その隙を狙い、先ほど左手にいた男の小太刀が、京香の腕を切り裂く。

京香は顔をゆがめ、傷口に手を添えた。脈を打つような痛みとともに、温かい液体が指の間を流れ落ちるのがわかる。

「お姐さん！」

体勢が崩れた京香を、おみつが支える。

どうすればいい？

見たところ、残りは四、五人。手負いの自分と不慣れなおみつでは、この先は読めている。

『相手の力量を察知し、自らを引く。それも「強さ」だ。決して逃げなんかではない』

昨日、源三から贈られた言葉が、京香の脳裏に浮かんだ。視線を移したその先に、舟に照らされ、ゆらゆらと輝く水面がある。

この時期、川に飛び込むはある意味自殺行為だが、このまま男達の手にかかる死ぬよりは、生き延びる可能性があるのでないだろうか？

京香は再度、おみつに手をやった。

意図を読んだのか、おみつは真剣な眼差しで、京香にうなずいてみせる。

どちらともなく、手を握り合つ。そして。

はじり寄つてくる男達に背を向け、京香とおみつは橋の欄干に飛び上がり、その身を宙に躍らせた。

## 第三章 二日目—眞実—

「それでは、お氣をつけて」  
声をかけてきた中間に無言で頭を下げ、源三は清水家の門の脇から外へと出た。

昇つたばかりの月明かりの中、自分の足音しか聞こえない武家屋敷街で、今しがた兄の忠直から聞いた、思いがけない事実を反芻していた。

『菊池殿が、風魔の子孫だつた?』

『左様』

田の前の忠直が、渋い表情でうなずいた。

おみつのことを伏せて、小太郎が遺体となつて発見されたことを報告するのに骨を折つたが、とりあえず、新吉の昔の記憶を頼りに身元を判別したと信じてくれているようだ。

しかし、小太郎がの風魔の子孫だつた、とは意外な事実だつた。

戦国時代に北条氏に仕えていた彼らは、神君家康公により江戸幕府が出来た頃、武家、商家を問わず押し入り、悪徳の限りを尽くした挙句、幕府によつて滅ぼされたと聞いている。

『小太郎殿は確か、孫を育てるために公儀筆頭御庭番の要請を辞し、隠居したと聞き及んでおりましたが』

源三の問いに答えず、忠直は口を真一文字に結んだ。田を開じ、じつと何かを考え込んでいる。

『兄上』

『……それは建前だ』

源三の促しに觀念したのか、田を開き、忠直が口を開いた。

『孫を育てる、というのが隠居の名目だが、小太郎殿は、全国各地に散らばっている風魔の末裔達の頭領に育てた子を据え、幕府打倒

を口論んでいたとの情報もある』

『な……』

源三は慌てて言葉を飲み込んだ。おみつが我々と同じくらいの実力をを持つまでになつた陰に、そんな陰謀が隠されていたというのか。

『今回の事件も、その布石と上様は見ておられる。だからこそ、我々に「依頼」が出されたのだ。父上も、それを確信しておられる』

『その根拠は?』

『先日、父上が京香らと犯人捜しをしたときのことを見いておるつ厳しい表情を崩さずに続ける忠直に、源三はうなずく。

『父上の駕籠を襲つた男がたびたび、紀州の菊池殿のもとへ行つていたことがわかつたのだ。身元はまだ知れぬが、おつてわかるであります』

そこまで忠直は知つていたのか。しかし。

『兄上はそれを、誰より聞いたのですか?』

『それは……言えぬ』

『兄上』

言いかけた源三も口をつぐんだ。おみつの存在を兄に知られたら、公儀御庭番衆を揺るがす事態にもなりかねないと判断したのだ。

『何か、言いたいことでもあるのか』

『いえ』

忠直は源三を探るようになつめていたが、やがて。

『この先は風魔一族と堀田様の関係を探り、大店を襲つた理由と、その確たる証拠を掴むことに、全力を擧げてくれ』

忠直の言葉に、源三は無言で頭を下げる。

おみつは、軍太夫と風魔の末裔の血を引いた娘だった。

そして風魔は、おみつを頭領に抱き、幕府打倒を口論んでいる。だからこそ軍太夫はおみつを紀州に置き、新吉らを連れて江戸へ来たのだろう。

おみつに話を聞いて以来解せなかつた疑問が解けていくのを感じる反面、源三は、何も知らずに激流に飲み込まれた彼女を、そして必死に妹を守ろうとした新吉を哀れに思つた。

そんな一人に対しても自分は、そして京香は何をすればいい？  
おみつをこのまま江戸にとどめておくと、生命が危険にさらされるのは目に見えている。

しかし……。

武家屋敷街から庄屋街に入る路地の真ん中で立ち止まり、逡巡する源三の耳に、突如大きな音が飛び込んできた。

まるで、川に人が飛びこんだような重い水音に、源三は思わず駆け出した。すると、黒の忍び装束を身にまとつた男達が、こちらへ向かつて走つてくるのが見える。

「待て！ その方ら、この先で何をした」

源三の言葉に、前を走る一人が刀を抜いた。腰に差していた長刀を抜き、応戦する彼の脇を、残りの忍び達が駆けていく。

一人を斬り、刀を返して残つた男の肩を打ち据えた。

「おい！」

倒れた男を起こして訊ねようとしたが、いきなり舌を噛み切り、息絶えた。

舌打ちをして、川の方へと駆けだした源三の前方で、ずぶ濡れになつた何者かが、岸にはい上がつてくるのが、月の下に見えた。

## 第三章 三日目・懇願・

「おい！ 大丈夫か！？」

源三は、岸からはい上がろうとする人物に手を差しのべた。川の流れに逆らいながら手を取つたのを確認して、一気に引き上げる。

結っていたであろう長い髪がばらけて顔を覆つているため、誰かはわからぬが、女か、もしくは元服する前の少年か。

「しつかりいたせ。いつたい、何があつた？」

「先……生？」

咳き込みながらも自分の通り名を呼んだ人物の髪をかきあげ、顔をのぞきこむ。

「……おみつ」

「先生。お姐さんは？」

「お姐さん？ ……京香のことか？」

再度咳き込み、おみつがうなずく。

「何があつたんだ。京香がどうしたというんだ？」

「……忍びに襲われた私をかばつて、お姐さん、怪我をしたの。このまま……、このままじゃ、二人とも殺されるからつて、一緒に、川に飛び込んだんだけど……」

何度も咳き込みながら説明するおみつの目からは、涙が溢れてくる。

「お願い先生。お姐さんを助けて。じゃないと、私……」

「おい！ おみつ！」

薄れゆくおみつの意識を取り戻そと彼女の頬を叩くが、よく陽に焼けた肌よりも、流れ落ちてきた涙のほうが温かい。

一刻も早く、京香を救いに行きたい。しかし。

源三は立ち上がり、足下にあつた葉を川に浮かべた。すると、いつもより流れが速いことを示すかのように、勢いよく葉が遠ざかる。

どこまで流されたかわからぬ京香を捜すには、新吉の協力が不可欠だ。そう判断した源三は、冷え切つたおみつの身体を抱き上げた。

どれだけの時間が流れたのか。

完全に意識を失つたおみつを抱えた源三は、道場の明かりを見て思わず安堵のため息をついた。

「新吉！ いるか？」

「先生、一体どうした……」

扉を開けた新吉が、源三の腕に抱えられたまま、力が抜けているおみつを見て言葉を失つた。

「忍びに襲われたおみつと一緒に川に飛び込んだ京香が、行方知れずになつている」

「……何だつて？」

「俺は京香を捜しに行く。途中で康太に声をかけておくから、おみつを頼む」

「先生！」

「詳しい説明は、おみつが意識を取り戻してからだ」

新吉の言葉を振り切り、源三は再び闇の中へ飛び出す。

修行中の頃の仲間で、今は医師として、小石川養生所に勤めてい る康太の家に寄つた源三は、足にからみつく裾を持ち、さつきおみつと出会つた場所よりも下流の方向に向かつて走り出す。

(頼む！ 無事でいてくれ！)

気づいた時にはそばにいた従姉妹を想い、源三は心の中で叫ぶ。もし、京香が目の前からいなくなつてしまつたら それを考えただけでも、恐ろしい。

修行中、京香が葵とともに姿を消した夜も、空に月が浮かび、冷

えた空気が辺りを覆っていた。

だが、京香を失う恐怖はあの頃よりも強く、源三の心を支配する。

「京香… どこにいる」

流れる水に沿って足を動かしながら、源三は何度も声をかける。しかし、京香の声はどこからも返ってこない。それどころか、姿すら水面に浮かんでこないのだ。

どこかで誰かに救助されたか、それとも、川底で……。

いや、そんなはずはない。腕に怪我をしたからといって、命を落としてしまうようなやわな女ではないはずだ。

心を支配しようとする『恐怖』という闇を振り払い、どうでも流れを追い続ける。

しかし。

朝陽が闇を照らし始める頃、ようやく最下流に到達した源三の田の前に京香が現れることはなかった。

## 第四章 四日目・碎かれた希望 -

太陽が顔を出した空の向こうで、雀が鳴き始めた。  
源三が愛用している厚手の半纏<sup>はんてん</sup>を羽織り、うつらうつらしていた  
新吉は、その声で目を覚ます。

「新吉。ちょっとといいか」

緑の着物に白い前掛けをつけ、髪を立髪<sup>たてがみ</sup>に結つた康太が、白い着物に着替えさせたおみつの胸に手を当て、状態を確認する。

「さすが新吉の妹だな。もう、命の心配はないだろ?」

まだ目を覚まさぬおみつの脈を取った康太の言葉に、新吉は心の底から安堵した。

「すまないな。康太。今日も診療があるんだろ?」

「気にするな。俺の代わりはいくらでもいるさ。それに清水様から、何かあつた時にはお前らの手当<sup>せ</sup>てを優先してくれ、つてお達しも出てる」

花ぐるまの一員となるべく修業を積んでいた子供の中で、新吉らと最後まで競つていった康太だが、その最中に身につけた薬草の知識などを天膳に高く買われて長崎に留学。最近、医師となつてこの江戸に戻ってきた。

昨晩、源三に乞われてここへ来てから、詳しいことは何も訊かずには、ずっとおみつを診ていてくれたのだ。それが、新吉にはどれほど心強かつたか。

だが、おみつと共に川に飛び込んだ京香と、彼女を捜しに出た源三はまだ、帰つて来ない。

源三は、京香を捜し出せたのだろうか。そして何より、彼女は生きているのか。

考えるだけで、胸がかきむじられるよつ、元氣<sup>げんき</sup>痛む。

『少し頭を冷やしなさいよ。あの子を放つておけないのは、あんた

が一番よく知つてゐるじゃないか』

最後に聞いた京香の言葉を思い起こし、新吉は唇を噛み締めた。

『祖父の仇を討ちたい』自分に、おみつの切なる願いを汲み取つてやるだけの余裕がありさえすれば、おみつを、そして京香を命の危険にさらすことなどなかつたのに。

「一人がこうなつたのは、お前のせいじゃねえよ

新吉の気持ちを見透かしたように、康太が笑う。

「京香が、そろそろ死んでたまるかよ。お前だつてよく知つてゐるじゃないか」

「……え？」

「もう忘れたのか。葵の件」

新吉の脳裏に、ふと、七年前に命を落とした少女、葵の顔がよみがえつた。

幼かつた頃のおみつのよう、毎日、遅くまで残されてはべそをかいていた。

そんな葵を放つておけなくて、新吉はよく、彼女を馬鹿にした康太や他の仲間達と喧嘩かなしたものだつた。

「あの晩、一緒に脱走したのに京香だけ帰つてきやがつてよ。……あれからあいつは変わつたんだ」

そう……だつた。

あれ以来、京香は葵のことを心の中に封印して厳しい修業を積んだ。源三にはどうしても敵わなかつたが、新吉や康太を凌ぐほどの実力を身につけて、花ぐるまの一員になつたのだ。

「京香は、おみつちゃんを守りたかったんだろうな。葵の代わりつてわけじやないだらうけどよ」

康太の視線の先には、頬にかすかな赤みがさしたおみつが、未だ眠り続けている。

「大丈夫さ。今に、先生が京香を連れて帰つてくるよ。そのときはまた、俺の出番つてわけだ」

拳を握つて一の腕を叩き、どこまでも明るく話す康太に、新吉の心がふつと緩んだその時、道場の入り口の扉が開く音がした。

康太と顔を見合わせ、新吉は玄関先へ歩いていく。

「先生。どうしたんだ？ その格好」

新吉の背後にいる康太が驚くのも無理はない。

いつもは髪をきつちり結い、小されいな着物を身にまとっている源三が、それとは真逆の格好をしているのだから。

「川下まで、ずっと流れを追つて行つたのだ。だが……」

しほりだすような、源三の声。その先の言葉はもづ、聞かなくてもわかつていた。

新吉は思わず天を仰ぎ、目を閉じた。

『源三ならば、きっと京香を連れ帰つてくれるはず』

康太が、そして新吉が抱いていた一縷の望みが絶たれた。その事実に黙り込む三人を、玄関口から入り込む陽光が照らしている。

「……よし、やつぱりここのは、俺の出番だな」

「康太？」

重苦しい空氣を一掃するかのように、康太が両手で頬を叩いた。  
「昨日の京香の格好、教えてくれよ。もしかしたら、町医者の中に川でおぼれた京香を診たやつがいるかもしれない」

「だけど」

「こんなときに、安穏と仕事なんかしてられるかよ。俺にも協力させてくれ」

「康太……」

胸がいつぱいになつた新吉は、何も言えずに頭を垂れた。康太の友情が、ありがたい。

「よし……、俺も行く。康太、何軒か案内してくれ」「何言つてるんだよ。休まなきや駄目じゃないか」  
医師の立場からか、康太が反対の意見を述べる。

「大丈夫だ」

「何が大丈夫なもんか。そんな蒼い顔して」

見ると、顔色はもちろんのこと、目も充血していて、焦点があまり定まっていないように見える。

「康太の言つとおりだ。先生。少しでもいいから

「休んでなんかいられるか！」

新吉の言葉をさえぎつた源三のあまりに大きな声に、外でさえずつていた雀たちが一斉に飛び立つ音が聞こえた。新吉も驚き、言葉

を返せない。

「こんなときだから」と、休むんだよ

隣に立つ康太の真剣な眼差しが、源三を捉える。

「京香がいない。それに加えてあんたまで倒れたら新吉は一人だ。こいつだけに、重責を負わせるつもりなのか？」先生

康太の指摘が心に突き刺さったのか、源三が新吉らから視線をそらす。

「姐さんの手がかりは、俺と康太で必ず探し出す。だから先生、せめて半日だけでもいいから、ここで休んでいてくれ。そして、おみつと小太郎さんを頼む」

こちらを見ぬ源三に、新吉は頭を下げる。康太の言うとおり、今、ここで源三まで倒れてしまったら、事件を解決することも、父からおみつを守ることもできなくなってしまうのだ。

「……京香は昨日、灰色の小袖を着ていた。そして、ビックだかはわからぬが怪我をしているらしい」

しばしの沈黙の後、源三がつぶやいた。康太と顔を見合させ、道場を出ようとする新吉を、源三が呼び止める。

「すまない。京香を……頼む」

「なあ、新吉。京香と先生ってどういう関係なんだ？」

昇り行く太陽とともに、個々の営みを始めた江戸の町を早足で歩きながら、康太が新吉に訊ねてきた。

「どういう……つて。いとこ同士だろ。知らなかつたのか？」

「いや、知らなかつたわけじゃないんだけどよ」

確かに、さつきの源三の取り乱し方は尋常ではなかつた。長年一緒にいるが、冷静で、どんな状況になつても変わらない彼の怒鳴り声を聞いたのは、今日が初めてといつてもいいくらいだ。

「道ならぬ恋、つてやつかねえ」

「何馬鹿なこと言つてるんだ。どうから当たる？」

脱線しそうな康太を引き戻すため、新吉は本題に入つた。

「そうだ。まずは一丁先にある良庵先生のところへ行つてみるか。

あそこはけつこう評判がいいからな」

康太にうなずいて、新吉が方向を変えようとしたその時、深い編笠をかぶつた浪人風の男が、一丁先の道を横切つていくのが見えた。

「おい、新吉。どうしたんだよ」

「悪い、今回の事件に関わつてるかもしれない奴がここに通つたんだ。医者のはう、まかせていいか？」

「わかった。気をつけろよ」

互いの健闘を祈り、康太と拳を突き合させた新吉は、彼と逆の方向へゆっくりと歩き出す。

少しでも勘づかれるようなことがあれば、事件の手がかりを失つてしまつ。

相手との距離を縮めないように気を配り、新吉は慎重に足を運んだ。

いくつかの角を曲がり、大通りへと出る。

使いに出ている商人風の男に、飴売りの娘。きらびやかに着飾つた大店の娘らしき少女らが行き交う道の真ん中にある店の前で、男の足が止まつた。

辺りを軽く見回し、奉公人らしき男に案内された浪人が、店の中へと入つていく。

看板を確認した新吉は、思わず目を疑つた。

黒塗りのそれに記されていたのは、吉宗の肝いりで御用達になつたとの噂が高い、山城屋の名前だつた。

(なぜ、山城屋にあの男が?)

新吉は、浪人が入つていったのを確認して、外に出てきた別の奉公人の少年に近づいた。

「なあ、あの浪人さん、ここは何なんだ?」

新吉の手に握られた十手を見た少年は驚いた様子でこちらを見たが、声を潜めて答えてくれた。

「旦那様がお雇いになつた用心棒です。名前は確か……平沼様と言います」

「いつからここに出入りしてるんだい」

「確かに、五日ほど前からです」

礼を言つて少年に駄賃を持たせると、新吉は店の裏手に回つた。幸い、小路に人影はない。見上げた先の小窓が開いているのを確認して、何ヶ所かに足をかけて飛び上がつた。

音を立てないように中へ潜り、ゆっくり建物の中心へ向かう。

「……か」

板越しに声が聞こえる。話しているのは、一人だけのようだ。

「はい。明晩決行せよ、と仰せでござります」

「場所は?」

「ここ、山城屋との仰せだ」

どちらが話したのかはわからぬが、悠然としたその態度に、話を聞いたであろう人物の動きが止まつたのが、天井裏の新吉にも伝わつてくる。

「冗談はよして下さい。ここを襲えば、どうなるかは」

「だからだ。肝いりで江戸に入った御用商人のお前までも襲われれば、奉行所はおろか、老中の権威は失墜し、政<sup>まつりじと</sup>が立ち行かなくなるのは必定。そこで、堀田様の出番というわけだ」

御用商人襲撃の裏で糸を引いていたのは、やはり堀田山城守だったのか。しかし、將軍吉宗が自ら推挙した山城屋まで絡んでいるとは。

「俺達は幼い頃から『風魔を滅ぼした幕府を許すまじ』と言ひ聞かされて育つてきた。俺とお前は地方から幕府を倒す足がかりを作るために同輩の者らと紀州へ渡り、基盤を作ろうと根来忍者の中へ入つていつた。だが……」

山城屋と平沼は、幕府に滅ぼされた風魔一族の生き残り　思ひがけない事実に、新吉は息をのみ、次の言葉を待つ。

「ええ。一つだけありましたね。計算外なことが」

(計算外?)

声を落とした山城屋の言葉を聞き取ろうとした耳をそばだてた新吉は、背後に気配を感じた。ねずみの類ではない何かが、動いている。

胸元に忍ばせた短剣に手を添えたその時、その方向の柱に、何かが突き刺さる音がした。

「くせものだ!」

その声に、新吉は柱に身を隠した。真下の部屋もにわかにざわめき出す。

小窓から差し込む光に照らされる一つの影が、刃の交わる音とともに、狭い空間でうごめいている。

(……あの男)

新吉は、すばしつこい、小柄な男から目が離せなかつた。

あのたたずまい、どこかで見たことがあるような気がするのだが。外へと飛び出した小柄な男を追つて、すらりとした体格の忍びも姿を消した。

「追え！ 逃がすな！」

平沼の声に、複数の足音が遠ざかる。

「何者ですか？」

「……小者だらう。あるいは、俺らをかきまわつている公儀の手のもの……」

平沼が、意味ありげな響きを持たせて言葉を区切つた。

「どうしました？ 平沼様」

「いや。明晚、おもしろい余興を見せてやう。幕閣を搖るが、大きなものとな」

そう言つて高笑いした平沼の足音が、部屋を出て行くのがわかつた。

(幕閣を搖るがす余興だと?)

真意を探るべく、新吉は再び屋根裏から抜け出して店の表へ回つた。

のれんをぐぐり、辺りを見回した平沼の後をつけ、新吉はまた大通りの人波にまぎれていく。

庄屋街を抜けた平沼は大川橋を渡り、地蔵が置いてある小路を抜け、笹やぶの中へと入つていく。

ふいに、速度を速めた平沼に追いつこうと駆け出した新吉の前に、灰色の装束を着た複数の忍びが立ちはだかった。

舌打ちをした新吉は短剣を取り出し、かかつってきた男の脇をめがけて振りぬいた。

叫び声をあげ、ぐず折れる男に目もくれず、目の前の男に向かつて走る。

一瞬、ちゅうちょした大柄な男の腹に刃を突き立てた。続けて、左から向かつてきた男の太刀を交わして拳をくれ、男が持っていた長刀を奪い、そのまま肩口から動脈を切り裂いた。

溜めていた力を息とともに吐き出し、新吉は笹やぶのほうへ目を

走らせた。しかし、平沼の姿はもう、ビリにも見えなくなっていた。

## 第四章 四日目・来訪者 其の一・(前書き)

### 【用語解説】

- ・巳の刻…今の時間に換算すると午前10時から午後12時までの2時間の間を指す。
- ・朝5つ…辰の刻とも言い、今の時間に換算すると、午前8時。

## 第四章 四日目・来訪者 其の一

自分の頭が垂れる衝撃で、源三は目を覚ました。

壁にもたれかかり、長刀を支えに寝ていたせいか、首と肩がやや張っているようだ。軽く腕を回して立ち上がった源三は、窓の外にある火の見やぐらへ目を向けた。

すでに、昇りきった太陽がやぐらの屋根のあたりから地上を照らしており、巳の刻であることを江戸の町に知らせている。

新吉と康太が戻ってきた形跡は、未だない。

源三は眠っているおみつを起こさないように廊下へ出ると、小太郎の遺体を安置している隣室へ足を運んだ。

ろうそくは消され、線香はとうに尽きている。源三はそれらに火をつけると、小太郎に向かつて手を合わせた。

京香が行方知れずになつたことを、おみつのせいにはしたくない。無論、京香もそれを望んではいないだろう。きっと、おみつを助け、自分自身が生きる道として、冷たい川へと飛び込んだのだから。

しかし。

(小太郎が、そしておみつが江戸に出て来さえしなければ)

気づくと、心の奥から湧き上がるどす黒い感情が、源三を支配しているのがわかる。

『お前はこれから、幼子達をまとめなければならん。常に冷静・公平であれ。そして物事の裏を読むのじゃ』

修行に入る前、父、天膳から告げられた言葉が、今さらながら源三に重くのしかかる。

考えねばならない」とは山ほどあるのに、頭が働いてくれない。

浮かんでは消える京香の面影が源三の心を締めつける。

(早く、戻つて來い。京香)

どんなに深手を負つてもいい。お役目にはけない身体になつたとしても、生きて戻つてさえくれば。

唇を噛み締めた源三の耳に、扉の開く音が飛び込んできた。  
ひそくだけをすばやく消し、源三は玄関へと飛び出した。する

と。

「あ、先生！」

伸びた髪をまとめ、赤い着物を身にまつた少女、千代と、頬を赤く染め、くすんだ緑の着物を来ている少年、太郎がひょっこり顔をのぞかせた。

「どうした、お前達」

無理やり笑みを作り、彼らと同じ田線まで膝を折つてから、源三は訊ねた。

「先生、もう時間過ぎてるんだよ」

「先生、今日はお休みなの？」

……そうだ。今日は、寺子屋の日だった。

お役目など、源三の都合で急遽休みにする時は、その日の朝五つまでに各自の家に走るのだが、京香のこともあって、今朝はすっかり忘れていた。

「すまない。今日は急に病氣の人を看なくてはいけなくなつてな。  
申し訳ないが休みにしてくれないか？ 親御さんには、あとできちんと詫びに参る。な」

「この前來てくれたお姉ちゃんは？ 今日はいないの？」

太郎が目を輝かせて訊いてきた。寺子屋一のやんちゃ坊主である彼は、自分とずっと遊んでくれたおみつを、どうやら氣に入つたらしい。

「お姉ちゃんは今、御用があつて江戸にいないんだ。もう少ししたら帰つてくるから、それまでおとなしくしていろんだぞ」

嘘をつくのは心苦しいが、本当のことを言つわけにもいかない。

「なんだ。つまんないの」

「やめなさいよ太郎。先生が困るじゃないの」

少しおませな口調で、千代が太郎をたしなめる。

「ちえつ。千代はいつも生意氣なんだから」

「生意氣はどつちよ。悔しかつたら、私より読み書きができるようにならなくちゃね」

「よせよせ。とにかく、今日はみんなで仲良く、氣をつけて帰るんだぞ。わかつたな」

「はへい」「先生、わよひなら」

口々に言つて出て行く一人の後ろ姿を見て、源三は思わず微笑んだ。

何だかんだ言つても、太郎と千代は寺子屋で一番の仲良しだ。

紀州にいた時は、源三も京香と一緒に野を駆け回り、同じ先生について勉強したものだ。しかしこのときはまだ、自分らがこのような過酷な役目につくことなど、考へてもいなかつたのだが。

まだ小さな子供達に心癒されても、結局また、同じ場所へと戻つてくる源三の心。それらを振り払つように、小ちく頭を振る。そこへ。

「御免」

源三の田の前に、また、思わぬ来訪者が現れた。

「兄上。……それに」

忠直の後ろに控えていた人物は、公儀筆頭御庭番の林軍太夫であつた。

## 第四章 四日目・来訪者 其の一

「突然申し訳ない」

新吉によく似た面差しの軍太夫が、小さく頭を下げる。

「こちらに、小太郎殿のご遺体と、おみつがいることを知つて参つた」

源三は、自らの表情がこわばつていくのを肌で感じた。

「はい。二人ともここにあります。ですが、何用で？」

軍太夫はおみつの命を狙つてゐる。しかし、自分がそれを知つていることを、悟られるわけにはいかない。そう思つた源三は、慎重に言葉を選んだ。

「いや、その……。一人が江戸へ出てきていることを小耳に挟んだので、会いたいと思うて」

「小太郎殿はともかく、おみつは今伏せつておりますゆえ、話ができますかどうか」

源三は、小太郎をまっすぐに見た。ほんの一瞬だけ、心の動搖がかいま見えたのは氣のせいだらうか。

「昨晩、何者かに襲われまして、川へ飛び込んだ際に水を多く飲んだようです。命に別状はありませんゆえ、ご安心を」

目の前の軍太夫は表情を変えず、源三の言葉にうなずいた。

おみつ抹殺の指令を出したのは……軍太夫か。

兄に目配せし、源三は一人を小太郎の眠る部屋へと案内した。

「京香と新吉はどうした?」

軍太夫が小太郎に手を合わせてゐる後ろで、忠直が耳打ちをしてくる。

「……京香は、おみつ的一件で行方知れずになつております。新吉は康太とともに手がかりをつかむべく、探索を続けております」

努めて冷静に、事実だけを伝える。

「何?」

普段は感情を表に出さない忠直だが、さすがに、共に育った京香の安否不明を聞き、動搖を隠し切れぬようだ。

「かたじけのうごやつた。おみつは何処に？」

兄弟の様子を意に介さず、向き直った軍太夫が頭を下げた。

「隣の部屋にあります。田を覚ましたか確認しますので、少々、お待ちいただきたい」

礼をして立ち上がると、源三は一人を残し、部屋を出た。

隣のふすまを開き寝床へ近づくが、おみつはまだ田を覚ましてはない。

規則正しい寝息をたてている彼女の頬に、いく筋もの涙が流れている。

祖父を亡くした涙か。それとも、行方知れずになつた京香を思い、流した涙か。

新たにこぼれた涙をそつとぬぐい、源三は、軍太夫をここへ通すか思案する。

軍太夫がもし、存在を消すために現れたのだとしたならば……。

京香の無事が確認されるまで、先ほど覚えた感情を拭い去れるとは思えないが、新吉のために、そして何より、彼女を救おうとしたであろう京香のためにも、おみつを渡すわけにはいかない。

遠い未来の風魔の頭領としておみつを育てた小太郎は、もうない。軍太夫の娘としては叶わなくとも、新吉の妹として、この江戸で暮らすことへのさまたげはもうないはずだ。

源三は意を決して立ち上がつた。おみつをもう一度見下ろし、隣の部屋へと戻る。

「どうであった？」

「まだ、眠り続けております。田覚めるまでにはまだしばらく時間が必要かと」

軍太夫の隣に座る忠直に、源三は言った。

「林殿。おみつを如何なされるおつもりか？」

軍太夫に向き直った源三は、思い切って訊ねた。『無』だった彼

の表情が、みるみる強張るのがわかる。

「おみつの出自は、新吉と、そこにいる兄、忠直に聞いてだいたい知つてあります。なぜ、彼女の存在を消す必要があるのか、お聞かせ願いたい」

「源三」

忠直が口を挟む。しかし源三はあえて兄を無視し、軍太夫を見据える。

「数日彼女と共に過ごしてまいりましたが、小太郎殿はまだしも、おみつに幕府打倒の意思があるとはとうてい思えませぬ。むしろ、小太郎殿が江戸へ出てきた理由すら知らない様子。そんな彼女を討つ必要はあるのでしょうか」

言葉を紡ぎながら、源三は、今さらながらおみつの気持ちを理解する。

彼女はただ、紀州での楽しい日々を取り戻したかったのだ。小太郎と一人、紀州の山奥でおおらかに暮らしていたあの頃に、戻りたかつただけなのだ、と。

源三は、京香を思つあまり、いつしかおみつの存在を閉じていた自分の心を恥じた。今一度、軍太夫に心から向き直る。

「林殿」

「源三殿。私は……」

「……親父」

源三をさえきり、軍太夫が顔をあげたその時、玄関が勢いよく開いた。

近づく一人分の足音。ふすまの開ぐ音に、後ろを振り返る。

源三の視線の先で、驚いた表情の新吉が、茫然と立ち尽くしていた。

「……何しに来た」

後ろで、新吉の声がする。思いもかけない、そして一番会いたくない来訪者だったのか、普段より格段に声が低い。

「おみつを殺しに来たのか」

「お、おい。新吉」

「答えるよー。」

狼狽した様子の康太が口を挟んだが、新吉の言葉は止まつそうがない。

「新吉。よせ」

「先生は黙つてくれ。これは、俺と親父の問題だ」

大きな足音を立て、新吉は小太郎の傍らに座る軍太夫の前へ立つ。

「てめえ可愛さに、血を分けた娘を小太郎さんの前で殺すつてのか！」

「やめろー。隣でおみつが寝てるんだ。田を覚ましたりどうするつもりだ」

軍太夫に詰め寄る新吉を、源三が座つたまま制す。

田を見開いた新吉が、こちらを振り返つた。

「お前が一番知られたくない」とである？「少し落ち着け」

昂ぶる感情を押し殺すよつて、新吉が拳を握り締める。大きく息を吐き、源三のななめ前に腰を下ろした。新吉の目の前の軍太夫はきつく目を閉じ、何かを考え込んでいる。

張つたばかりの『』の弦のような沈黙が、部屋を包み込む。

「……俺は、ここにいらっしゃまずこようだな」

その空氣に耐えかねたのか、康太が口を開く。

「おみつちやんの部屋にいるよ。田覚ましたら知らせに来るから」

「よし、私も失礼しよう」

「兄上」

「ひつらも、（おんみつり）隠密裏に京香を捜す。最悪の場合には……わかつておろううな？」

忠直の言葉が、源三の心を刺した。心の動搖を悟られぬよつて、田を伏せる。

源三ら隠密が探索中に命を落とした際は、誰に縁もゆかりもない

ものとして、密かに葬り去られる宿命を持つ。万が一京香が生きて戻らぬときは、自分と新吉ですら彼女がどこへ眠るかを、生涯知らずにいなければならぬのだ。

「では。御免」

忠直に次いで康太も頭を下げ、部屋を出て行つた。先ほどとは違う静かな足音が、ここまで聞こえてくる。

「新吉」

一人が出て行つたのを確認し、軍太夫が口を開いた。新吉の肩が小さく震える。

「お前にも話せねばならぬときが来たようだな」

「……何をだ」

「おみつの母親のことだ」

「おみつの、母親?」

新吉が軍太夫に向き直つた。

「そうだ。おみつの母親はまだ生きている

「何だつて? 生きてる?」

新吉の顔がこわばつたまま動かなくなつた。源三も、初めて知る

事実に驚きを隠せない。

「そうだ。私が母親からおみつを引き離し、手元に置いたのは……」

軍太夫が言葉を切った。口元をゆがめて再び口を閉じ、次の言葉を思案しているようだ。

源三から真実を語るのは簡単だ。しかし、これは彼ら親子の問題で、自分が口を出すことではない。

軍太夫が、大きく息を吐き出した。そして、新吉の口をまっすぐにつめる。

「おみつの母親が、風魔の末裔だとわかつたからだ。ここに眠る彼女の父、小太郎殿も同様」

「……風魔の、末裔」

事実を知った新吉が、所在なさげにつぶやいた。宙を泳ぐ彼の目が、心の動搖の大きさをつかがわせる。

「当時私は、探索中に殺された新吉らの母を想い、哀しみのどん底にいた」

淡々と事実を告げようとする軍太夫の表情が、心なしかゆがんでいる。源三は、京香を喪うかもしない今の自分の状況と、軍太夫の過去が重なる錯覚をなぜか覚えた。

「そんなとき、私は一人の女に会った。国を追われて移住せざる

を得なくなつたが、父が病でこれ以上動けないという。だから私は、その親子に小さな住居を『え、住ませた。……それが、あやまちの始まりだつたのだ』

軍太夫は、自らの過去を掘り起こすかのよつて、二度目みたびを閉じる。ななめ前で黙つたままの新吉を思いながらも、源三は、軍太夫の次の句を待つことしかできなかつた。

一人分の足が床を鳴らす衝撃で、おみつは目を覚ました。障子にほどよく遮られた太陽の光がまぶしい。

再び目を閉じ、まどろみの世界に入ろうとしたが、脳裏に浮かんだ京香の顔が、おみつの意識を引き戻す。

首だけを動かし、辺りを見る。しかし、一組の布団はこの部屋にはない。

枕元のお盆に乗っている湯飲みも、一人分だけが伏せて置かれている。

(……見つからなかつた)

ここにいるのが自分だけだった、と理解した途端に目の奥が熱くなり、涙が浮かぶ。

京香は、生きているのだろうか？ その思いだけが、今のおみつの心を埋め尽くす。

自身の力が足りなかつたばかりに傷を負わせ、京香が死ぬようなことがあれば、今まで面倒を見てくれた源三や、新吉に会わせる顔がない。

さつきの足音は恐らしく、再び京香を捜して出たであらう源三と新吉のもの。

自分も、行かなければ。

おみつはゆっくり身体を起こした。ずっと寝ていたせいか、節々が痛い。張っている肩を回して首を動かすと、目の前が揺れた。きつく目を閉じ、強引に揺れを止めて立ち上がる。

音を立てないように衣裳箱を開けて、自分に合ひそうな黒の野袴を見つけると、動きを制限する

白の小袖を脱ぎ捨て、それに着替えた。

箪笥たんすの引き出しをひと通り開けて、護身用の刀などがないかを捜す。だが、この部屋にはそれらしいものが一つもない。

丸腰で外に出るにじて、おみつは一瞬、不安を覚える。しかし、昨日の連中も人通りの多いこの時間なら、不用意に襲つてくることはないだろう。

そう思い直したおみつは覚悟を決めて、入り口へと向かった。ところが、聞き慣れない足音がこちらへ迫ってきている。

おみつはとっさにふすまが開く方向の反対側へ身体を密着させた。拳を握り締め、大きく息を吸う。

開ぐと同時に、おみつは拳を振り上げた。しかし、入ってきた人物の手がそれをつかむ。

「……つと。何するんだよ」

聞き覚えのない小さな声が耳元を通り抜けると同時に、おみつの口元に手が添えられた。

田は大きいが鼻が少し低いその男性が、小太郎のいる部屋をちらつと見て、ため息をつく。

「驚かせるなよ。いつ、田を覚ましたんだい？」

「つい、せつしきだけど……あなたは？」

口元の手を強引にひきはがし、小さな声で、田の前の男性に問う。

「俺は、小石川養生所の医師をやつてる、康太つていうんだ。新吉や源三さん、そして京香の幼なじみだよ」

緊張していたおみつの身体から、力が抜けていく。

「昨日、先生から連絡受けて飛んできたんだけど……。それだけ動けるなら、もう大丈夫だね」

「私のことなんかどうでもいいよ。それより、先生と兄さんは？お姐さんを、京香さんを捜した行つたんでしょ？」

「あ……つと、それが……」

表情をゆがめた康太が再度、隣の部屋のほうを見た。

「隣にいるの？」

「ああ。でも、君を向ひつの部屋に行かせるわけにはいかない」

「どうして？」

後頭部を握っている康太の目が、泳ぐ。

「まさか、お姐さんが？」

「いや、京香のひとじやないんだ。……実は、新吉の親父さんって人が来てて」

「父さんか？」

驚いたおみつに向かつて、申し訳なさそうに康太がうなずいた。

「なんでおわせてくれないの？ 私、父さんに訊きたいことがあるのに」

「頼むから、何も言わずにここにいて。せめて、親父さんが帰るまでは」

おみつを押しとじめて、康太が頭を下げてくる。

「理由も言つてくれないで、ただここにきて言われたって納得できないよ」

また、涙がこぼれそつになる。声が震えないようつてお腹に力を入れて、おみつは続けた。

「私、何も知らないんだもん。父さんどじいちゃんに置いていかれた理由も、兄さんが何度も『紀州に帰れ』って言つ訳も」

言葉を纺げば纺ぐほど、じらえきれない滴が、頬にこぼれて落ちる。

「……私、何も知らずに帰れない。帰るなら、その理由をちゃんと知りたいの」

「おみつちゃん……」

乱暴に涙をぬぐつて康太を見据える。目を伏せた彼は、何かをじつと考え込んでいる。

やはり、駄目なのだろうか？ 小太郎の仇も討てず、京香の無事を確認することすらできずに、紀州に帰らなければならないのだろうか？

……いや、そんなことはしない。もし、康太が止めにかかってるのなら、もう一度、力づくでも

も。そう思ったおみつの肩に、康太の手が優しく置かれる。

「君には、かなりつらい話になるかもしね。……それでもいいかい？」

「康太さん……」

「俺に、君を止める権限はないもんな。でも

「大丈夫。何があつてもちゃんと聞くよ。約束する」

本当は恐ろしい。けれど、今ここで父に会つておかなければ、後悔しそうな気がしてならない。

「わかった」

うなずいた康太が、出口に近づきふすまを開ける。そのあとについて、おみつは部屋を出た。

## 第四章 四日田・出生の秘密 其の三・

廊下には小太郎の、そして軍太夫らがいる部屋から、線香の匂いがただよっている。

おみつの前にいる康太が小さくため息をつき、ふすまを勢いよく開けた。

「どうした？ 康太」

心なしか疲れた様子の源三の声が、部屋の中から聞こえてくる。

「おみつちゃん、気がついたぜ」

康太が身体をずらした。すると、小太郎を背にした軍太夫の姿が、おみつの目に飛び込んでくる。

「おみつ……」

行商人の姿をした父が、驚きの眼差しこじらつを見た。

「どうしたんだ。その格好」

着替えたおみつを見て、源三が問うてくる。

「お姐さんを、探しに行こうと思つて。お姐さんは？」

「朝、新吉と康太が探しに出てくれたのだがな、まだ……」

硬い表情のままで、源三が答える。おみつは目を伏せた。もし、このまま京香が帰らなければ、自分は源三にどう詫びればいいのだろう。

「何の用だ？ おみつ」

新吉があさつての方向に目を向けたままで訊ねてくる。

「父さんがいる、って康太さんに聞いたから」

「康太」

責めるような口調で、新吉が隣にいる康太を見上げた。けれど、おみつのほうを見ようとしない。

「何も知らないままでは、もう嫌なんだってよ。な

微笑む康太につなずいて、おみつは改めて父を見た。軍太夫は腕組みをしたまま、口を開こうとはしない。

「私、父さんやじいちゃんに置いていかれた理由も、江戸へ出できたら私を、兄さんが必死に帰そうとしていた訳もわからない」

ひとつひとつ挙げていくたびに、こらえきれない想いが涙に変わつて、おみつの頬を滑り落ちていく。

「昨日、兄さんにも言われた。私はここにいちや迷惑なんだって」

田を閉じたままの軍太夫の表情が、かすかにゆがむ。

「父さんもそう思つたの？だから、私を紀州に置いていったの？」

「その通りだ。おみつ」

おみつを見上げ、軍太夫がよどみなく言い切つた。

まるで敵を見るような冷たい眼差しに、おみつの視界が大きく揺れる。

「……っと」

よろけたおみつを、康太の身体が支えてくれた。しかし今の自分に、彼に対して礼を言つ余裕など、あるはずもない。康太に寄りかかったまま、呆然と立ち尽くすおみつに追い打ちをかけるように、軍太夫が再度口を開く。

「私は昔……。お前の母親を風魔の末裔と知らずに愛した。お前も知つておらうが、風魔は、幕府と敵対し、転覆させようと虎視眈々と狙つている一族。その子孫と睦みあい、出来た子供を今生かしておくわけにはいかんのだ。それが、我らの役目」

「……そんな」

自分は、望まれて産まれて來た子ではなかつた。それどころか、命を狙われていたなんて。

「昨日の連中も、父さんが？」

「左様。風魔の陰謀をいち早く碎くために差し向けた連中だつたが、まさか同業者に阻止されるとは、思いも寄らなかつたがな」

『同業者』 その言葉に、おみつは源三と新吉を交互に見つめた。

「そこにいる二人も、そして行方知れずになつてゐる京香殿も、上様のために、我々とは違う組織で働くものたちだ。下手をすれば、上様に対する反逆と取られてもやむをえんのだぞ」

「ちょっと待つた

康太の声が、おみつの背中越しにひびいてくる。

「確かに、この二人は上様直属の組織に属してゐる人間だ。だが、この子は本当に幕府の威信を揺るがそうとしている危険な人物なのか？」

「康太」

「先生。これは、俺」ときが口を出す問題じゃないかもしれない。だがな、聞けば聞くほど腹が立つてしまふがねえんだ」

おみつの肩を抱く手に力を込めて、康太が軍太夫に詰め寄る。

「軍太夫さん、おみつちゃんが江戸に出てきたのは、幕府を脅かす

ためでも何でもない。いきなり  
出て行つたじいさんと、故郷に帰るためだ。だいたい、この子を殺  
すことなんていつでも出来たは  
ずだ。母さんの腹の中にはいる時でも、子供の頃でもやんわりと思えば  
いつだつてよかつたんじやないのか」

軍太夫が、こちらから視線をそらし、目を伏せた。

「愛してたんだろう？　おみつちゃんも、母親も。愛してるから、  
今まで殺せなかつた。そつだらつ？」

思わず見上げた康太の横顔に勇氣づけられて、おみつは再度、軍  
太夫を見つめた。

## 第四章 四田三・出生の秘密 其の四・

康太の言葉が心に突き刺さったのか、軍太夫はうつむいたまま動かない。

声をかけたいのに、おみつは、ただじっと見つめる」としかできなかつた。

ひとことでいい。軍太夫の口から、自分を愛しいと思つた瞬間があつたと言われば、望まれて産まれなかつた魂が、ほんの少しでも救われるような気がする。

しかし軍太夫は口を堅く閉ざし、時間だけが過ぎていく。

「林殿」

おみつのじれつたさが頂点に達しよつとした瞬間、今まで黙つていた源三が、静かに口を開いた。

「先ほど、あなたはおみつの母親を愛したことを『あやまち』と言つた。しかし、本心は違つてはいですか?」

源三の『あやまち』という言葉が、おみつの心の傷を小さくえぐつた。だが、それに反応したのが、軍太夫の顔が、かすかに源三の方を向いた。

「我ら隠密は、己を犠牲にして上様に忠義を尽くすのが暗黙の掟。ですが、やはりその前に人間で

す。人間である以上、自分が愛し、慈しんだものをそつ簡単に切り捨てるとは思えません」

いつもと変わらぬ姿勢で語る源三の口調が、いつになく熱を帯びている。

「その証拠に、私が『おみつが伏せっこる』と告げたら、あなたは一瞬だけ顔色を変えました。  
話してくださいませぬか？ 本当の思いを。そして、おみつを母親から引き離した理由を」

軍太夫に向こうに直った源三の言葉が、おみつの胸を再度突いた。

「引き離した？ ……母さんは、死んだんじゃなかつたの？」

消え入りそうな声で問つたおみつに、軍太夫はうなずいた。とつさに康太の手を振り払つて中に入り、父の前に座る。

「ひじいよ父さん。私を置いてけぼりにする前に、母さんを追い出してたなんて！ いくら、風魔の血を引いてるからって、そんなの……」

軍太夫の膝を何度も叩いたおみつの手から、また涙が流れ落ちる。

そななおみつの拳を、軍太夫が握りしめた。驚き、見上げたおみつを一瞬だけ優しく見つめ、再度視線をそらす。

「……お一方の、言つとおりです。私は、母子を心の底から愛して

いた。しかし、私の弱さが、

おみつの母親を紀州から追いやり遠因になつたのです

「父ちゃん……」

『心の底から愛している』 父から出た思いがけない言葉に、おみつの視界が再度ぼやける。

「彼女が風魔の末裔であることを知つたのは、おみつが産まれてすぐのころでした。当時、若輩者でありながら、紀州和歌山藩五代田道主であらせられた吉宗様のお側近くに仕えていた私のことを疎んじていた男が、いつ語りかけてきたのです」

『軍太夫殿、新しい妻を娶つたらしいな。もつぱらの評判だぞ』

その日の任務を終え、一旦宿所へ戻ろうとした軍太夫を、大月兵部<sup>ぶ</sup>が呼び止めた。

『妻？』 『冗談を。旅の途中で行き倒れた者たちを助け、住まわせているだけのこと。他意は』 『やうん』

『そつか？ ずいぶんと美しい娘と共に、子供をあやしている姿を見たものは数知れぬ。なあ』

ぎょろりとした目で無理やり笑顔を作り、周圍にいた仲間らに声

をかける。

『あれは、知り合いの子をあやしていただけのこと。では、御免』  
下卑た笑いを顔に張りつかせた男達の間を割り、出て行こうとした軍太夫の背中に、兵部が言葉を投げつける。

『徳川家の敵である風魔の娘とねんどになつておると、吉宗公の不興を買つて。お気をつけなされ』

(風魔の……娘?)

思いがけない兵部の言葉に、軍太夫の思考が止まった。

『やはり、ご存知なかつたと見える。そなたがこの地に住まわせているあの父子は風魔の末裔。  
今から五日前、里のはずれで風魔の下忍である『草』と呼ばれるものとつなぎを取つてゐるのを、山口殿が見ておられる』

大きな田に、鼻筋の通つた端正な顔に笑みを浮かべ、山口友三がうなずいた。この者も、兵部と親しい忍びだ。

『早いところあの父子を追い出すか生き者にすることですな。林殿。さもなくば、あなたの亡き奥方が遺した三人の愛息にも、何らかの危害が及びましようぞ』

友三の言葉が、辺りに再び嘲笑を呼び込む。

しかし、その嘲笑う声を引き裂くように人垣を割り、軍太夫は駆け出した。

城を抜け出し、林道を駆け抜ける軍太夫の耳に、獣の咆哮が飛び込んでくる。

娘は……本当に風魔なのか？　妻を失った自分の寂しさを埋めてくれたばかりか、亡き妻との間にはなかつた「眞の安らぎ」を与えてくれた彼女が、旧敵の末裔とは、信じがたい。

しかし、「忠義第一」を叩き込まれた軍太夫の心は、月のない夜よりも深く、濃い闇に包まれてしまっていた。

## 第四章 四日市・出生の秘密 其の五・

吉宗が居を構えている城から半刻あまりのところ、父子が住んでいる家がある。

いつもは、月を愛でながらのんびり歩くのだが、今日は四半刻もかからぬ間に、目的地へと到着した。

『あら、軍太夫様。今日はいらっしゃらないと仰っていたのに』

声を弾ませて出迎えた娘の腕には、まだ目も開けない愛娘、おみつが気持ちよさそうに眠っている。

『……話があるのだ。おみつを、小太郎殿に預けて来てはくれぬか』  
平静を装つたつもりでも、声にとげを含んでいるを感じ取つたのか、娘の顔がこわばつた。

それに呼応するよつて、むずがるおみつの口から、小さな声が出た。

娘が本当に風魔の末裔なら、おみつも、風魔の血をひいた子供ということになる。

藩主吉宗に絶対の忠誠を誓つて居る自分が、風魔との間に子をなしたことは、紀州和歌山藩のみならず、徳川家への反逆にあたることは明らかだ。

娘が、おみつを預けに家へ入った。中から漏れるほのかな灯りと

ともに、軍太夫の心が揺れる。

『どう、されたのですか？』

か細い声が、娘の動搖を如実に表している。おそらく、自身の不安を感じ取つてしまつているのだろう。

口にすれば、娘の心を傷つけるのはもとより、返答によつては、この手で娘を斬らなければならなくなる。……無論、小太郎やおみつも。

しかし。

『軍太夫さま？』

『……そなた、風魔の血を引いているのか？』

軍太夫の中で育つていた愛よりも長きにわたる、徳川家への忠誠心がそのまま声になつた。

娘の顔は見えない。しかし、軍太夫の口から出た「風魔」という言葉に驚き、戸惑つているわまがこちらにも伝わつてくる。

嘘でもいい。違う、と言つて欲しい。

軍太夫は心から願う。しかし、娘は何も答えない。

『なぜ、何も言わぬ』

沈黙に耐えかね、軍太夫は再度口を開く。

『……何と答えれば、納得してくださいますか？』

今度は、一いちらが言葉に詰まる番だった。

納得する答えなど、とうに決まっている。しかし、その言葉を引き出したところで、胸の奥にくすぶつてしまつた火種が、そのまま消えてなくなるわけではないことも、軍太夫は知つていた。

『私は……嘘は、つけません。あなた様の仰るとおりです』

震える声で、それでもしつかりと、娘は言葉を紡ぐ。

軍太夫は天を仰ぎ、きつくれ口を閉じた。

『俺は、そなたを斬りたくない。……わかるな？』

『はい。近日中に父とおみつを連れ、この里を出て行きます。でも、これだけは信じてください。』

私が、あなたを愛していることを』

そつと近づいてきた娘の声が、軍太夫の耳朶を通り抜ける。

『……やよひなら』

触れたかどうかわからぬ口づけを残し、娘は家へと入っていく。

「つものように抱きしめたくて伸ばした手を、軍太夫は引いた。  
もつ、彼女と交わることを許さ  
れないのが、心の奥底でわかつていたから」。

おみつの田からこぼれる零が、軍太夫の手に、何度も落ちた。

聞きたいことは山ほどある。でも、涙が邪魔をして言葉にならない。

「それで、おみつの母上殿はいかがされたのですか」

「翌朝、もう一度だけ顔を見たくて、あの家へ行きました。すると  
そこには……」

いきなり、おみつの手が強く握られた。唇を真一文字に結び、何  
かを堪えるように目を閉じた軍  
太夫が、しぼり出すように続けた。

「私に『娘は風魔の末裔だ』と注進した大月兵部以下数人の忍びが、  
無残にも斬り殺されており、  
家の玄関で、背中に深手を負っていた小太郎殿が、泣きじやぐるお  
みつを抱きかかえたまま倒れて  
おりました。しかし、おみつの母は、身につけていた着物が散乱し  
ていただけで、どこにも……」

父の様子から察するに、恐らく、大月という男が小太郎と母に襲

いかかったのだろう。

ただ、風魔の末裔といつだけで、ここまでひどい目にあわなければならぬのは、なぜなのか。

言いよのない怒りがこみ上げてきたおみつは、きつく歯をかみしめた。

## 第四章 四日田・怒りの渦

線香の煙がただよつ室内を、重苦しく雰囲気が包む。

父も兄も、源三や康太でもう口を開かない。

父や祖父に置いていかれた悲しみ、母が生きていた驚き。そして、風魔の血を引いているがゆえに、自分を含めた家族が、不遇のときを過ぐした怒り……。

様々な感情が渦巻く中、今一番知りたいことを、やつとの思いでおみつが口にする。

「……母さんは、どうしているの？」

「江戸にいる」とまでは突き止めたのだが、そこから先の行方がわからぬ。しかし、同胞が殺されていった状況から、風魔と行動を共にしていると見るのが妥当だ」

「もし、母さんを見つけたらいつあるの？ まさか、殺はしないよね？」

おみつはすがるよつて、軍太夫を見上げた。ほんのかすかに、父の表情がゆがむ。

「……上様への反逆の志が見えるよしなりば、やむを得んだら」

「どうして？ 母さんを、愛してゐるじやないのー？」

「私たちは、上様に仕えるために生きている忍び。愛や恋、家族のために、すべてを投げ打つ訳には」

「忍びである前に、人間だよ！ いくら上様を守るためだからって、そんなの……」

父の手を離し、おみつは叫んだ。また、言葉にならない思いが涙となり、頬を濡らしていく。

「母に、会いたいか」

軍太夫の低い声に、おみつは戸惑う。

物心ついてからずつと『死んだ』と聞かされていた母。今さら何を話せばいいか、どう接したらいいかが、わからない。

でも……、会えるなら一目だけでもいいから、会いたい。

母に、小太郎のおかげで大きくなつたことを、伝えたい。

躊躇しながらもおみつは、軍太夫の顔を見て頷いた。

「……ならば私は、ここでおまえを斬らねばならん」

「林さん！」

軍太夫の言葉にいち早く反応したのは、入り口近くにいた康太だった。

その声でよつやへ、おみつも言われた意味を理解する。

「いや。本当はもつと早く……おまえの母が風魔である」とを知った段階で、決着をつけておかねばならなかつたのかもしれん」

軍太夫が、胸元から短剣を取り出す。

その手に光る刃を見つめたおみつの心を、やるせない気持ちが埋め尽くす。

自分はただ、これからも祖父とともに穏やかに暮らして行きたくて、江戸へやつて来ただけだ。

だいたい、おみつ自身に、徳川家に対する遺恨などは全くない。なのに、身体に流れる血の半分が風魔だと言うだけで、実の父に命を狙われ、幾度もなく危険にさらされた。

そして、そんな自分を助けるために川へ飛び込んだ京香は今、命の安否すらつかめなくなっている。

自分は、いらない人間なのか？ 生きていては、迷惑をかけるだけなのだろうか？

『何言つてんの。新さんの妹なら、私や先生にとつても妹同然よ。迷惑だなんて思つてない』

父の配下に命を狙われる直前に言つてくれた彼女の言葉が、自分の存在を否定しかけたおみつの

脳裏によみがえった。

その瞬間、心の中で何かがはじけた。ある決意を胸に、おみつは立ち上がる。

「父さん。私、ここで討たれるわけにはいかないよ」

「何？」

軍太夫の険しい表情が、おみつを捉える。

「私、この江戸でやうなきやうないことがあるの。それが終わるまでは、死ねない」

「今、表に出れども、私の配下がお前を「生き者にせんと動き出すぞ」。身を翻して部屋を出ようとしたおみつの背中に、軍太夫が投げかける。

容赦ない父の言葉に、一瞬立ち止まる。しかし、心に溜まった怒りと悔しさは冷えなかつた。

「やれるものなら、やってみたらいい?」

今までの鬱憤を晴らすようにここ返すと、おみつはそのまま部屋を飛び出した。

## 第四章 四日目・追手・

勢いよく道場を飛び出したおみつの周りに、殺気が忍び寄る。

父、軍太夫が手配した忍びが、自分と併走しているのがわかつた  
おみつは、人気の多いところへ  
行こうと、身を翻して逆方向へ駆けだした。

身の軽さは自認しているが、護身用の小刀すら持たない今のおみ  
つでは、囮まれただけで勝負が  
ついてしまつ。

自分の記憶が正しければ、少し先にある角を左に曲がると、庄屋  
が立ち並ぶ大通りに出る。

あと、少し。

あそこを曲がれば身の安全はとりあえず保証されるはず。

いつ飛んでくるかわからない手裏剣に神経をどがらせつつ、進路  
を左に取ろうとしたおみつは、

突然襲ってきた衝撃にはじかれ、尻もちをついてしまう。

「大丈夫ですか？ 父上」

少し慌てたような男性の低い声で、おみつは、人にぶつかってし  
まつたのだと悟る。

「「」「めんなさい！ 大丈夫ですか？」

慌てて起きあがり、恰幅のいい相手に手を差し出す。

「いやいや、平気じやよ。お嬢さんこそ大丈夫かな？」

髪をきれいに結い上げた、頬のふっくらした老人に笑顔で問われ、おみつはうなずく。

しかし、おみつの手をとつて立ち上がったその老人は、顔をゆがめて腰を押さえつづく。おみつはうなずく。

「父上。だから申したではありますまぬか。まだ治りきっていないゆえ、無理はしないよ」と

精悍な顔つきの侍が、おみつの反対側から支え、ようやく老人は立ち上がった。

「何を言ひ。忠直。こいつて歩かんと、足腰が弱ると医者が言つておつたぞ。なあ、お嬢さん」

こきなり話を振られたおみつは、大きく目を見開いた。

「その娘に同意を求めて逃げようとしても黙ります。急いでおるのだろう？ 行きなさい。次からは氣をつけるのだぞ」

「ありがとうございます。」めんなさい、おじこちゃん」

忠直、と呼ばれた侍に促され、再び走り始めたおみつの背中に、元の老人の笑い声が聞こえた。

その声が、在りし日の小太郎の笑顔に重なる。

もしかしたら、野辺の送りをしないまま、小太郎の所へ逝かなくてはならないかもしれない……。

突如湧き起る感傷を振り払つよひ、「おみつは小さく首を振つて、さらに一つ角を曲がる。

どうにか、人が多く行き交う通りへ出た。しかし、せつときは別の人間の影が、少し距離を置きながらも、おみつの後ろについたのがわかつた。

振り切れる、と思ったのは甘い考えだつたか。

おみつは小さく舌打ちをした。一旦立ち止まり、大きく息を吸う。勢いよく足下を蹴り前へ進むと、建物の間に身を滑らせた。

しかし。

「おとなしくしてもらいましょうか。おみつ殿」

眼前に刃が突きつけられた。どうやら、別の忍びに先回りをされていたらしい。

「さすが軍太夫様の娘……と言いたいところですが、あなたにはこのまま、消えてもらわねばなりません」

薬売りを装つた男が、おみつの後ろに目配せをした。

背後から間合いを詰めてくる男をかわすことができれば、まだ、  
勝算はある。

おみつは少しづつ息を吐き出し、一歩だけ大きく下がる。その瞬  
間、男らの呼吸が乱れた。

おみつは後ろを見ずに、ひじを鋭く突き出した。刃がかかったよ  
うな痛みと共に、男のうめき声  
が耳に入る。

「！」

早い切つ先をよけた反動を利用して、田の前の男のみぞおちに拳  
を入れた。

手から離れた短刀を拾い上げ、おみつはそのまま駆け出した。

「待て！……」

もんどうつうつているであらう駄らに田もくれずに通りを突っ切り、  
すぐ近くの角にあつた建物の  
扉を勢いよく開けて、中へと入る。

「だれ？」

衣擦れの音とともに、女性の鋭い声がおみつを迎えた。

「『』、『』めんなさい。少しでいいから匿つて欲しいんです」

「……おみつ、さん？」

自分の名前をこきなり呼ばれ、思わず顔を上げる。

すると、見覚えのある女性が驚いたような表情を浮かべ、一いつひらをじっと見入っていた。

## 第四章 四日目・手がかり・

「確かに、あなたは……」

田の前にいるのは、江戸へ来てすぐの頃、源三の家に泊まつた翌朝に出会つた女性、お小夜だつた。

「一体、どうなさつたんです？」

「ちよつと……」

心配そつた表情のお小夜が問つてくるが、はつきりとは答えられない。

扉の向こうで、複数の足音が近づく。顔色が変わつたのを察知したのか、お小夜がおみつの手を引っ張り、ついたての向こうへ血ひを囲つてくれる。

お小夜の手がおみつの肩を抱き、一人の身体がこれ以上ないほどに密着する。

おみつの鼻をくすぐる、甘い香り。今まで感じたことのない安心感に、なぜかおみつは、

(お母さん、つていう人のことを言ひのかな)

と、お小夜の胸に頭を預ける形でぽんやつと思つ。

「どうやら、行つてしまつたみたいね

お小夜の身体が、おみつから離れた。

「すみません。」迷惑をおかけして

頭を下げたおみつ、「

「いいのよ。気になさらないで。でも、先生を心配せらるいことをしては駄目よ」

微笑を浮かべながら、お小夜は身支度を始めた。

「どうかに、行かれるんですか？」

「ええ。仕事がまだ残っているものだから。……あら」

おみつのじのあたりを見つめ、お小夜が袖をめくへる。

「怪我をしているじゃないの」

さつき、忍びとせりあつた時につけた、ほんのかすり傷。

「大丈夫ですよ。」れぐら。紀州にいたときはよしおちゅうだつたから

「……紀州？」

お小夜の手が止まり、おみつを凝視する。

「ええ。……何か？」

「いえ。別に」

おみつから視線をそらし立ち上がると、お小夜は戸棚から膏薬らしきものを持ってきて、傷口にやさしく塗ってくれる。

「さ、これでいいわ

「あっがとうござります。あの」

さつきのお小夜の反応が気になつたおみつの問い合わせをきざぐるやつこ、彼女は背を向ける。

「しまじかへりまじか」といわ

「え？」

「まだ、あなたを追つている人たちがこの辺にいるかもしないで  
しうつ？ 出る時に戸締まりだけお願いしますね」

「お小夜さんは……紀州にいたことがあるんですか？」

出で行こうとするお小夜を呼び止めるよつて、おみつせんをかけた。

「いえ」

短く叫ぶと、お小夜はおみつで戻もぐれず、外へと出て行つてしまつた。

まつた。

一人取り残されたおみつは、小さくため息をついてその場へ腰を下ろす。

紀州、といひ言葉が出ただけで、態度が変わったお小夜のことが、気にかかる。

これはおみつの想像でしかないが、恐らく彼女は紀州にいだらう。そして、何かつらい思いをして、江戸へ出てきたのもしれない。

江戸へ出てきてからつらい思いをしてくる自分とは正反対だなおみつは自嘲的に笑った。

父からすべてを聞いた。いずれ、死なねばならない運命だらう。だつたらその前に、祖父の仇を討ちたい。いや、せめて、自分を助けてくれた京香を、自分の手で捜し出したい。

それだけを思い、後先考えずに道場を飛び出したものの、広い江戸で、自分はどう動いたらいいのか、今は眞田見当がつかない。

父の追手が確実に自分を追い詰めている。無鉄砲に動いても、自らの命を縮めるだけ。

どうすればよいものか。

思いを巡らせるが、何一つ解決策は浮かばない。それどころか、次第に眠気が襲つてくる。

少しだけ、眠りうつ。お小夜も、ここにいていいと言つてくれたし。

源三の部屋とほぼ間取りは同じだが、男所帯と違つて掃除が行き届いているせいか、ちり一つ落ちていない。壁には豪華な刺繡をほどこした着物がたくさんかかっており、彼女の仕事が繁盛していることを物語つている。

「きれい……」

おみつは思わず、目の前にある黒い着物を手にとった。そのはずみで、横にかけてあつた桃色の振袖が、おみつの足元に落ちる。

「いけない」

慌てて着物を拾い、元通りにかけ直した。そして裾を直そうとかがんだおみつの目に、この場に似つかわしくない、地味な色の着物が乱雑に置いてあるのが見える。

たたみ直そと手に取つたおみつの視線が、ある一点で止まった。

自分から向かつて右側の袖口が大きく切り裂かれていて、人の血らしきものがべつとりとついている。

(「の着物は……」)

おみつを助けるために川へ飛び込んだ京香が着ていた小袖に、間違いない。

思わず、目の前の押入れのふすまを開いた。

しかし、人が寝ているような気配は感じられない。

(どうして、これがここに?　お姉さんをどこへやったの?..)

お小夜に事情を訊こうと思つたおみつは立ち上がり、家の外へと飛び出す。

しかし、彼女の姿はもづ、どこにも見えなくなっていた。

## 第四章 四日田・面影・

太陽が、初冬の江戸の町を西側から照らし始める時間。

突然出て行つたおみつを追い、康太と町へ出てきた源三だつたが、彼女の行方は知れない。

『江戸へ出てきて間もない彼女が、そつ遠くへ行けるわけもない』

そう源三は思つていたが、紀州の山奥を駆け回つていたおみつのことだ。どこへ飛んでもおかしくはないことに今さら気づき、小さくため息をつく。

それ以上に源三の心を支配するのは、おみつと共に川へ飛び込んだのに、安否不明な京香のこと。

人が多く行き交う大通りで、若い女性が笑いながら源三とすれ違うたびに、この中のどこかに京香がないか、と、目で追う自分がいる。

今、先に搜しださなければならぬのはおみつだ。もし、彼女が命を落としてしまつていたら、京香が無事に戻つてきたとき、どう言ひ訳をしたらいい？

「先生」

立ち止まり、思いをめぐらせていた源三の前方から、康太が駆けてきた。

「いたか？」

源三の問いに渋い表情を浮かべて、康太が首を横に振る。  
「軍太夫殿の配下から身を守るために、大通りだと思つたのだが  
な……」

独り言のようにつぶやいた源三に、康太も力なくうなづく。

「よし。路地裏を回つてみよう。もしかしたら、どこの家に匿わ  
れているかもしれん」

すぐそこの角を曲がり、店の裏に出た。小路を川に向かって歩く  
と、源三の住む庵屋の近くに出る。

「先生。あれ」

源三の少し前を行く康太が、左前方の角の方を指差した。見  
ると、おみつと同じような格好  
をした少女が、はるか前へ行こうとしているのが見える。

「おみつー。」

間違つていてもかまわない。そう思つた源三は叫んだ。

振り返つた少女が源三と康太の姿を認め、血相を変えて近づいて  
きた。やはりおみつだ。

「心配したぞ。どにいたのだ？」

「私のことなんかどうでもいいよ。それより……」

おみつが源三の腕を強く引っ張る。あの角の家は確か、縫物職のお小夜が、作業場として借りているはずだ。

「どうした？」

「お小夜さんの家に、お姐さんの着物があつたの」

おみつの口から出た京香の名前が、源三の胸の奥を打つ。  
しかし京香は、仕事で使つときの振袖の刺繡を、お小夜に頼んで  
いるはず。

平静を装い、それをおみつに伝えると、

「違うのー。あの晩に着ていた、灰色の小袖が……」

「何だつて？ では、京香はそこにいるのか？」

源三を見上げるおみつの顔が、泣き出しそうにゆがむ。たまらず  
源三は駆けだした。

「先生！」

おみつと康太の声が追いかけてくるが、かまつてはいられない。

開け放たれた扉を越え、お小夜の作業場に入る。部屋の中央には、  
おみつが置き去りにしたであ

ろう、京香の小袖が乱雑に置かれている。しかし、京香本人がここにいる気配はない。

なぜ、着物だけがここにあるのだ？　お小夜が川に流された彼女を見つけたのなら、本人がいるのが当然なのに。

手がかりになりそうでならない、灰色の着物。それを持ち上げた源三の手に、力がこもる。

「……ごめんなさい、先生」

後ろで、おみつの声がした。泣くのをじりえているのか、声が震えている。

「おみつちゃん。自分を責めちゃいけない。京香だってそれは望んじやいないはずだ。な？」

自責の念に押しつぶされそうになつてゐるであらうおみつを、康太が励ましている。

「先生。とりあえず戻らないか。清水様が待つてるだらうし」

康太の声で、源三は今、自分が為さねばならないことを思い出す。今すぐにでも京香を捜しに行きたい衝動を押し殺すように着物を丁寧にたたんで立ち上がった。

「……よし。おみつ。とりあえず道場へ戻ろう」

源三から田をへりし、おみつは強く首を振る。

「おみつちゃん」

「父さんも、いるんでしょ？ 私まだ、死ぬわけには」

「私の父が、おみつに会いたいと言つて訪ねてきているのだ。軍太夫殿も、父の前でそなたに手を出すことは絶対にない。だから、一緒に戻つてはくれぬか」

おみつの言葉をへえぎつ、源三は彼女の肩に手を置く。

「本當に？」

不安げな表情で、おみつが源三を見上げた。

突然訪ねてきた父の思惑が何であるかは気にかかるが、紀州にいたこの上司がいる前で、忠誠心を大切にする軍太夫が、娘に手は出せるはずがない。

そう確信した源三は、おみつの田をみてしつかりとうなづいた。

## 第四章 四日目・救いの手・

木枯らしが、道場に帰り着いた源二らの身体をなめるよつに吹き抜けていく。玄関には、さつきよりも低くなつた太陽の光が差し込んでいる。

「さ、おみつ」

草履を脱いだものの、足の止まつたおみつを促し、源二は康太とともに小太郎の眠る部屋のふすまの脇を叩く。

「父上。おみつを連れて参りました」

ふすまを開け、窓を背に座つてゐる天膳に声をかける。その姿を見たおみつが突然、

「おじいちゃん」

と父に声をかけた。

「おお、あの時のお嬢さんではないか。そなたが、おみつか

「おじいちゃんが、先生の?」

源二と天膳を交互に見つめるおみつに、軍太夫が厳しい声で口をはさむ。

「これ、おみつ。口を慎め。この方は」

「よいよい、軍太夫。わしはすでに隠居の身。それにおみつことつてみれば、もう『爺』だからな」

高らかに笑いながら、天膳が軍太夫を諭す。

一体、天膳は何のためにおみつに会いに来たのか？ 源三は、父に対する警戒心があることを肌で感じた。

「私に、何の御用ですか？」

「そなたと少し話がしたいのじゃ」

天膳が、改まった口調で訊ねるおみつに答え、田で合図する。

向かい合わせで座つた二人の間に、源三は腰を下ろした。康太はおみつの後ろに座る。

「そなたの出自は、軍太夫からだいたい聞いてある

表情を引き締めた天膳が、口火を切る。すると

「……おじいちゃんも、私を殺しに来たんですか？」

顔をこわばらせたおみつが、静かに問い合わせ返した。

「なぜ、そう思う？」

「父さんが、私を殺そうと動いていたから」

一瞬だけ軍太夫を見つめ、おみつはすぐに天膳に視線を戻す。

「そなたは軍太夫に、まだやらなきやいけないことがある、と言つて出て行つたそうだな。それは一体何じゃ？」

「……そこで眠つてゐる、じいちゃんの仇を取りたいんです」

「ほつ」

天膳の相槌を受けて、おみつは死んだ祖父と紀州へ帰りたかつた思いを語りだす。

それは、源三が今朝考えていたのと、ほぼ同じ願いだった。

身体の中に流れる風魔の血なんか関係ない。自分はただ、小太郎とともに今までどおり暮らしていれば、それでよかつたのだ、と。

「もし、小太郎殿を殺害した人物が公儀の者であつたとしても、その思いは変わらぬか？」

おみつの言葉が切れたのを見計らい、天膳が彼女に問うた。

顔には笑みを浮かべているが、目の奥には何を考えているかわからぬ輝きを秘めている。

一瞬、天膳についた忠直と目が合つた。たぶん、兄も同じ感想を持っているのだろう。

しかし、おみつはそれに構わずに言い切った。

「変わりません。たとえ、じいちゃんを殺したのが父さんだつたとしても、仇を取ります」

忠直の側に控えていた軍太夫が再び短刀に手をかけ、膝を立てた。しかし天膳がそれを制した。

「それは、お上への反逆罪じゃ。そなたが公儀のものに手をかけたとなれば、軍太夫のみならず、わしのもとで隠密として庶民のために働いている源三や、新吉をも裏切る行為になりかねん。それでも、仇を取るというのか？」

天膳を見つめるおみつの目は、動搖の色が浮かんだ。

「それは、お姐さんを、京香さんを裏切ることにもなるんですか？」

身を乗り出すように訊ねるおみつに、天膳ははつきりとうなづく。今まで目をそらさずに父を見ていた彼女が、初めて目を伏せた。

そんなおみつを見つめる天膳の表情は柔らかいまま、変わらない。しかし、それと対照的に、軍

太夫のやや後ろに座っている新吉の顔は、源三自身が見たことのないほど、こわばっている。

「それは……できません」

しばしの沈黙のあと、おみつが再度天膳を見て言い切った。うな

ずいた天膳の顔に、笑みが浮かぶ。

「軍太夫。この娘、わしが預からう。すぐに手の者を城へ帰すのじ  
や」

「父上！」「清水様！」

天膳の宣言に、側に控えていた忠直と、軍太夫の声が重なる。突然のことに源三も思わず、新吉や康太と顔を見合せた。

## 第四章 四日目・捷 -

「私が、おじいちゃんのところに？」

戸惑うおみつに、天膳が笑顔でうなずく。

源三は、信じられない思いで天膳を見ていた。父がおみつを保護してくれるのは願つてもないことだが、火種を抱え込むことになりはしないだらうか？

源三の、そして軍太夫の気持ちを察したのか、天膳がゆっくりと立ち上がる。おみつが、後に習つた二人を不安げな表情で見上げてくる。

「おみつ。心配せずともよい。おとなしく」で待つててるのだ。忠直、頼むぞ」

父の言葉に、忠直が浅く頭を下げる。その様子を見たおみつも、天膳に向かつて小さくうなずいた。

「清水様。いつたい、どうこうつもりで」やりますか」

廊下を渡り、道場へ移るとすぐ軍太夫が天膳に詰め寄つた。丁寧な口調ながら、言葉尻にはとげが混じつている。

「風魔の血を引くおみつをお手元に置けば、清水様のみならず、上様の御身にも危険が及ぶのは必定」

言葉を紡ぐたびに、形相が変わっていく軍太夫を見つめる父の目は、さつき、おみつを見ていた時と全く変わらない。

「どうか、この件だけは私にお任せ願えないでしょうか？ 伏して、お願い申し上げます」

「……それはならん」

「清水様！」

なおも言い募る軍太夫を、天膳は手で制した。

「あの娘は、良くも悪くもまつすぐな気性の持ち主じや。抑えつけようとするは反発し、我が道を行こうとする。そうではないか？」

軍太夫が言葉に詰まつたままが、隣にいる源三にも見てとれた。父の言う通り、源三が江戸へ来たばかりのおみつと出会つたのも、新吉が抑えていたからだし、天膳と会つたのも、軍太夫が彼女を殺そうとしていたからにほかならない。

「そんなおみつが我々に反発し、生き別れた母がいるかも知れない風魔側へ行つてみよ。あの娘はたちまち、最大の敵になる」

軍太夫と自分の目を交互に見つめる天膳の表情が険しくなった。

父の叫び通りだ。

軽い手合わせの場で、とはいって、自分や新吉と同等の実力を持つ京香をあそこまで追いつめた彼女を、風魔側へやるわけにはいかない。

「しかし」

「心配はこりぬ。抑えつけない限り、今のおみつは決して我らを裏切るようなことはせん」

「なぜ、やう言ひ切れるのです？」

軍太夫は、厳しい表情でなおも詰め寄った。

「おみつはわしの姪を……、京香を裏切る」ことはできないことこの上ないだ

とだ

「父上……」

父の意図を察した源三が、とつて口んだ。

「源三。あの娘は今、京香に負ふ感を感じていはず。でなければ、あそこまでの勢いを自ら殺すよつな真似はすまい。違つか？」

「父上の仰る通りです。しかし、京香の存在をひつかせる」といど、おみつをここに止めておひひとせ、こせやか

「源三。 我らの仕事は、そういうものではなかつたのか？」

いつになく低い声で、天膳が言つ。 田の奥の妖しい光が、源三の心を射抜いた。

田をそむけ、握り拳を作つた源三に、天膳が追い打ちをかける。

「例え親兄弟であろうと、愛する妻であつともその屍を越えてゆかねばならん。 それは、お前自身がわかつていなければならぬ」とのはず

わかつてゐる。 江戸の庶民のためならば、わが身を、そして仲間の命ですら捨て置かねばならぬ時があることを。

しかし……。

京香を喪うかもしぬ恐怖と鬪つてゐる今の源三には、父が、彼女を利用しようとしていることに、我慢がならない。

いくら撻とはいへ、おみつを助けたいと願つた京香の思いを踏みにじるような真似だけはしたくない。

大きな田を細めて笑う京香の顔が、源三の脳裏に浮かんでは消える。

天膳がおみつにかけよつとしている呪縛を解くには、一刻も早く、京香を生きた状態で見つけ出さなければならない。 そう思つた源三が顔をあげた時、忠直のもの

らしき、荒々しい足音が近づく。

「御免」

扉を開けた忠直の手には、お小夜の家で見つかった京香の小袖が握られている。

「父上。これから、縫物職人のお小夜なる者の家へ参ります」

「その着物は?」

「おみつがお小夜さんの家で見つけました。京香の着物でございます」

源三の進言に、天膳の顔色が変わる。そして今ひとり。

「忠直殿。私もお供させてはもうえませぬか」

源三の隣に座していた軍太夫が、青ざめた表情で申し出ってきた。

「一体、どうしたところのじや？」

突然の申し出に、天膳が問う。忠直も、驚いた様子で軍太夫を見た。

源三を含む三人の視線に、躊躇ちゅうちよしていた軍太夫だったが、重い口を開く。

「お小夜といふ名は、おみつの母と同じなのです」

「ま」とか？

普段、滅多なことでは動じない天膳の声が、心なしか上ずつたものになる。

源三も思わず、軍太夫を凝視した。

「お小夜といふ名はどこにでもある名前ですが、もし、その者がおみつの母親であるならば、京香殿は……」

軍太夫が口をつぐむ。その先は、言葉を発しなくて容易に想像がついた。

お小夜が、軍太夫の愛した女性ならば、京香は今、風魔の手に落ちている。もしくは、すでに亡きものに。

その考えを封じるように、源三は、田を開いた。

京香ほどの女性が、簡単に命を失はずがない。いや、そうあつてはならないのだ。

源三は、自らの弱い心にそつ言い聞かせるのが精一杯で、言葉を出せない。

重苦しい雰囲気が、気温が下がつてきた広い道場を包む。

「よし。忠直、おみつはわしにまかせて、源三と軍太夫を連れてお小夜とやらの家へ向かえ」

天膳の言葉が、この空氣を切り裂いた。同時に、源三も口を開ける。

京香はきつと生きている。今はそれを信じ、一歩ずつ真相に近づくしかない。

「かしこまりました

硬い表情のまま田配せしてきた忠直を見返し、源三は、軍太夫とともに立ち上がった。

「どに行くの？」

裏玄関へ向かって歩く源三らに、こわばった表情のおみつが訊ねてきた。

「確認したいことがあって、お小夜さんの家に行くのだ。おみつは

「……で待っているのだぞ」

おみつの肩に手を置いて、源三が語りかける。

「私は、連れていくてくれないの？」

おみつの手が、まっすぐに源三を見つめてくる。

「今は、そなたを連れて行くわけにはいかないのだ。わかってくれ

「じゃあどうして父さんがあつこいつの？　お姉さんのこととは関係ないじゃない」

軍太夫に田をやり、おみつがなおも問うてくる。源三はもううら、誰もが言葉を失う。

「……まさか、母さんに関係があるの？」

三人の間にたゆたひ空氣の意味を察知したのか、おみつの手が、袖口をつかんだ。

「ねえ、先生。やうなんじょい？」

今にも泣き出しそうなおみつの震える声が、源三の胸を刺す。

「まだ決まったわけではないが、縫物職人のお小夜という女性が、そなたの母である可能性が出てきたのだ」

何も言えない源三の代わりに、忠直がおみつに告げる。

「……お小夜さんが、私の？」

「それを確かめられるのは、軍太夫殿ただ一人。もし、お小夜殿がそなたの母ならば、京香をどこへ連れて行つたのかも問い合わせ正さねばならない。私も父も、そして源三も、そんな姿をお主には見せたくないのだ。わかるな？」

表情を崩さず、淡々と忠直が続けた。顔をゆがめたおみつが、源三の袖を握りしめたままうつむく。

「おみつ。母や京香のことはこの三人に任せて、我らは小太郎殿の野辺の送りの支度をせぬか？

そなたの気持ちも痛いほどわかるが、小太郎殿のご遺体を、いつまでもこのままにしておくわけにいかんだろう？」

「どうしても、連れて行つてはくれないの？」

下を向いたまま、おみつが、涙声で誰とはなしに訊ねてくる。

「小太郎殿亡き今、風魔の次の狙いはおそらくそなたに移るだらう。そなたを救おうとした京香の気持ちに報いるためにも、風魔側へ行かせるわけにはいかないのだ。ここはこの爺に免じて、呑んではくれんか？」

京香の名を出した父の言葉が、源三の胸に突き刺さる。こんなことに、自分の存在を利用して

いふと知つたなら、京香は一体どう思つだらうか。

「おじいちゃん……するこよ」

それだけ言ひと、おみつは源三の袖口から手を離した。

おみつは、わかつてゐる。京香の名を出せば、自分が動けなくなるのを父に看破されてしまうことを。

「もし、お小夜さんが母さんだったら、どうするの？」

涙に濡れたおみつの目が、今度は軍太夫を見据えた。

「京香殿の居所を知るやもしれん重要人物だ。……今は、殺しはせん」

厳しい視線をおみつに向けて、軍太夫が言い切つた。

おみつが一瞬だけ、安堵の表情を見せた。しかしすぐに顔を曇らせ、独り言のようにつぶやく。

「もし、お小夜さんが母さんだったら、お姐さんは……」

「おみつ。京香は死にはせん。わしの姪は、そんなやわな女ではないぞ」

「おじいちゃん……」

天膳の方を向いたおみつの頬を、一筋の涙がこぼれ落ちる。

「や、急げ。日が暮れぬうちに手がかりをつかんでくれるのじや」

おみつと天膳を交互に見つめ合はずくと、源二は、忠直りと夕暮れの空の下へと飛び出した。

## 第四章 四日町・再会・父と母・（前書き）

### 【用語解説】

- ・表長屋……表通りで町人たちが店を借りて暮らしている長屋のこと。店は八百屋、魚屋など、庶民の生活に密着しているものが多い。
- ・裏長屋……表通りからひつこんだ長屋のことで、一般住居を指す。

## 第四章 四田三・再会・父と母・

鴉の鳴き声が、赤く染まつた夕空に響き渡る。

軍太夫や忠直とともに長屋へ着いた源三の前に、大きな人垣が出来ていた。

「あ、先生！ ちよつどよかつたよ」

源三の向かいに住む左官職人、為吉の女房おつるが、大きな身体を揺らして駆けてくる。

「一体どうしたのだ」

おつるに手をひかれた源三が表長屋へ近づくと、いきなり、甘い香りが鼻をついた。

「何だ？ この臭いは」

「わからないけど、突然辺りに漂いだして……。一体、どここの家でこんなもの焚いてるんだよ」

おつるも、そして忠直もせき込みながらやく言葉を出してい る。

一瞬、甘く感じた空気中の臭気は、徐々に刺激を伴つて源三の鼻腔を強く刺激し始める。

「もしや、これは……大麻」

「大麻？」

口元を押された軍太夫が、源三の問いにうなずく。言われてみれば確かに、源三にも覚えのある臭いだ。

大麻は、標的の人物に暗示をかける際に用いる、麻薬の一種。修行時、そのように教えられた記憶がある。

「すまぬが、お小夜さんの家に案内していただきたい」

〔軍太夫が一、三度せき込んだのち、源三を見た。〕

忠直の方へ目をやるが、彼は、長屋の人達への対応でおおわらわだ。やむを得ず、源三は軍太夫を連れて、人垣とは逆の方へ歩き出す。

喧騒が遠ざかり、裏長屋のお小夜の家へ近づくにつれ、源三の鼻を襲う刺激臭が強くなるのがわかる。

まさか、お小夜が家で大麻を焚いたのか？ だとすれば、何のために。

もし、彼女がおみつの母で、川へ飛び込んだ京香を助けたならば、その目的は……。考えただけで恐ろしい。

「どうされました？ お顔の色がすぐれませんが」

「いえ、別に……。」ちらりです。お小夜さん、いるか？」

玄関先に軍太夫を案内し、襖の木枠を軽く叩く。しかし、中からの返事はない。

仕事か？　いや、そんなはずはない。

「お小夜さん」

再び問うても、反応がない。腹に据えかねた源三は、思い切って目の前の襖を開いた。

すると、外の空氣に染まるのを待ちかねていたような強い臭氣と煙が、源三らを襲う。

「……源三殿。この空気が漏れでは……」

顔を覆い、せき込みながら言つた軍太夫にうなずく。素早く土間へ足を踏み入れ、扉を閉めた。

「やはり、ここが大元か」

ぐぐもつた声で、軍太夫がつぶやいた。

いてもたつてもいられない源三は、白くたちこめた煙の向こうに口を凝らす。

女性の一人住まいだけあって、部屋はきれいに掃除されているのがわかる。ところが、中央に敷

いてあるせんべい布団が、不自然な形でめくれていた。

「源三殿！」

軍太夫が制するのにも構わず、源三は部屋の中央へ歩を進めた。

冷えた布団の中央が、ほのかに温かい。確かに、この上で誰かが寝ていた。

大麻が焚きしめられたこの部屋で、お小夜が寝ていたとは考えにくい。

と、いつことば……。

思いを巡らせた源三の後方から、小さな物音が聞こえる。

「……お小夜」

軍太夫の声に振り向くと、開いた扉の向こうに、目を見開いたお小夜が立っていた。

近くにいた軍太夫が、身をひるがえして逃げようとする彼女の手を引き、襖を勢いよく閉める。

「一体……何の用です」

低い声で、お小夜が問うてくる。動搖が隠しきれないのか、顔は青ざめ、身にまとう茶色の着物の袖口が小刻みに震えている。

一方の軍太夫も、普段の冷静なたたずまいはなく、顔をこわばらせたまま、お小夜を凝視している。

「お小夜さん」

緊迫した空氣に、源三が割って入る。お小夜の血走った目が、源三に向けられた。それは、いつも穏やかな笑みを絶やさなかつた彼女のものではなかつた。

「ここで、何をしていたのだ？　お小夜さん」

はやる気持ちを抑え、源三は慎重に訊ねた。

「別に何も……。先生こそ、人の家に勝手に上がりこんで、何をするおつもりですか？」

「ここで、一人の女人に暗示をかけたのではあるまいな」

源三が一番訊きたかった、しかし、訊くのが恐ろしかつた内容を、感情のない声で、軍太夫が問う。

「何を仰っているかが、わかりませんが」

「とぼけるな！」

軍太夫の怒号が、部屋に響いた。しかし、お小夜は顔色を変えることなく彼を見据え、逆にこう問い合わせてきた。

「……だとしたら、どうするおつもりで？」

## 第四章 四日目・取引・

軍太夫の手を振りほどき、冷ややかな声でお小夜は訊ねてきた。

「京香を……どうやってたのだ」

頭に血が上るのを感じながらも、源三はぐっとこらえて問い返す。  
しかし、お小夜は答えない。せつまく走っていた田には妖しい輝  
きが宿り、唇の端は、源三いらを  
あざ笑うかのように上がっている。

「お小夜さん！」

「私たちの企みを阻まんとするあなた方に、そつ簡単に、教えると  
お思いですか？」

お小夜の言葉で、源三は京香が風魔の手中に落ちてることを確  
信する。

「では、今回のことは……」

「ええ。私たち先祖を虜め、蹂躪してきた徳川幕府への恨みを、風  
魔というだけで、人を使って私  
たちを消そうとしたあなたへの恨みを晴らすためには、どんなこと  
でもします」

「待て！ それは違う

「何が違うんです？　あなたに別れを告げられた翌朝に、紀州藩お抱えの忍び衆が私たちを襲つてきたんですよ。あなたの指図でなければ、だれがそんなことをしたと言つんです！？」

互いを見る目が、激しくぶつかる。

「父を殺され、泣きじゃくるおみつの目の前で、あなた以外の男に手ごめにされようとした私を助けてくれたのは、仲間たちだった……。子供がいては邪魔だと言われ、死んだ父の腕に抱かれたままの娘と別れなくてはならなかつた私の気持ちが、あなたに理解できますか？」

お小夜は源三に目もくれず、軍太夫を見据えて言い切る。

『敵陣』となつた紀州の山奥に、愛娘を置いて行かなくてはならなかつた母の悲しみが、風魔に捕われた京香を思い、苦しむ自分の心に重なるような気がして、源三はお小夜から目をそらす。

「その娘を……おみつを悲しませてでも、本懐を遂げると云つのか」

「……おみつを？」

「やうだ。おみつは今、我らが手中にある。そして、そなたがどこぞへ隠している京香殿の安否を案じ、心を痛めているのだぞ」

お小夜を諭す軍太夫の顔は、変わらない。しかし、お小夜の表情

は一変した。

今までの、憤怒に満ちた表情は影をひそめ、こみ上げる感情を抑えきれない様子で、じつと一点を見つめている。

「おみつに……あの子に、会わせてください」

突然の申し出に、軍太夫の表情が再度こわばった。無論、源三も。

「会つて、どうするところのだ」

「それは……」

一段と低くなつた軍太夫の声。言葉に詰まつたお小夜が、すがるように彼を見上げている。

「よからぬ」

「軍太夫殿！ 何を」

「ただし、条件がある」

「……条件？」

真意がわからず声をあげた源三を制した軍太夫は、お小夜のこわばつた表情を冷めた表情で見つめ、続ける。

「そなたが捕らえた京香殿の身柄を、速やかにこちへ渡すこと。

そして、奉行所へ自首せよ。されば、お上にも慈悲はある」

お小夜の顔が、たちまち青ざめた。

「私に、仲間を売れと仰るのですか！？」

「できぬと言つなら、そなたの願いを受けることはできません」

「あなたって人は……」「のためなら、娘をも利用するのですね」

お小夜の表情に、再度怒りの色がこじみ出る。

「改めて言つ。おみつをこれ以上悲しませたくないのなら、我らの申し出を受けた方が賢明。明日の朝まで時をやる。よし、考えるのだな」

最後通告を出した軍太夫を見上げたお小夜は拳を握りしめ、何も言わずに外へと出していく。

「お小夜さん！……軍太夫殿、一体何を考えておられるのです？」

「心配はいりません。あなたには耳の痛いことかも知れませぬが、風魔が、暗示をかけたであるう

京香殿の命を奪つことは、まずないでしょう。お小夜も、おみつに会いたければこの話を呑まざるを得なくなる。その時が、勝負です。風魔の動向が気がかりではあります、今しばらく、辛抱してくだされ」

軍太夫が、表情を変えずに頭を下げる。

自分の父、天膳が京香の存在でおみつを説き伏せたように、軍太夫はおみつの存在を巧みに利用し、お小夜に搖さぶりをかけた。

これが、忍びのやり方なのか。いつやらなければ、目的を遂行することはできないのか？

京香の件に関する決断について、軍太夫に言いたいことは山ほどある。しかし今は、お小夜の決断にすべてを任せることはない。

源三は、京香をいまだ救えない自分の無力さを呪い、彼女が出て行つた方向を見つめ、唇を噛んだ。

## 第四章 四日目・浮遊・

お小夜が去り、この家に用事のなくなった源三と軍太夫は、忠直にこのことを告げるため、表長屋に向かっていた。

お小夜は、軍太夫の申し出を受け、京香を返してくれるのだろうか。

不安だけが、今の源三の心を支配する。

「勝手に事を運んでしまい、申し訳ありません」

前を見たまま、軍太夫が謝罪の言葉を口にする。

「いえ……。突然のこと驚きましたが、今は、この方法しかないように私も思います」

今、風魔の手に落ちていて京香との細い糸をたぐり寄せるには、お小夜の親心にすべてを託すしかない。

「源三！　どこへ行つていたのだ」

お小夜と源三の住まいから表長屋までは、そう距離がない。二人の重苦しい雰囲気は、近所の人たちの喧騒に、再びかき消される。

「実は……」

源三が耳元で今までのことを手短に報告すると、忠直の眼差しが一段と鋭くなつた。

「わかつた。お小夜の動向はこひらの手の者にも探らせてくれ。それよりも、長屋の住民に体調を崩しているものも出でる。源三、康太を呼んで来い。軍太夫殿は奉行所へ赴き、こことの次第を奉行にお伝え願いたい」

「かし」しまつました。小石川養生所への手配も済ませておきましたよう

「頼む」

軍太夫が会釈をして、素早く走り去る。源三も、感傷を振り切るよつこ身をひるがえした。

「源三」

「は」

もう一度振り返った源三に、忠直が厳しい表情を崩さずこまづ。

「お小夜のことは、じばりへおみつておくれのだ。よこな

もちろん心得ている。せめて、京香が生きてこひらへ戻つてくるまでは、母のことは言えない。

源三は頭を軽く下げて、忠直に背を向けて駆け出した。

「あー、先生」

聞き覚えのある声とともに、夕焼けを背に、康太が走ってくる。

「ちようどよかつた。お前に頼みたいことがあるのだが」

「それどうじやないんだよ先生。実は……」

源三の言葉をさえぎり、康太は声をひそめてある事実を告げてくれる。

「小太郎殿が、生きている？」

「ああ。林さんの話だと、小太郎さんの背中には大きな傷があるだろ？ もちろん、おみつちゃんもそれは知ってる。着物を着換えさせようとした新吉が、彼の身体を返したときに見たら」

体内を回らなくなつた血液が、背中に大きなあざを作っていたもの、そこにあるはずの傷跡が全くなかつたというのだ。

「おみつちゃんは訳がわからなくて混乱しているし、清水様も心なしか慌てる。もし、小太郎さんが風魔側についてたら……どうするよ？」

お小夜が、おみつの母だとわかつただけでも大打撃なのに、祖父までもが風魔についていたとすれば、彼女の心が風魔側へ一気に傾くのは目に見えている。

「新吉は？」

「それが、何考えてるんだかさつぱりわかりやしないんだよ。無言のままじつと考え込んでるかと思つと、突然外へ飛び出して行つちまつて」

「外へ？」

「ああ。心当たりがある、って言つてたけど」

後頭部を搔きながら、心底困り果てた顔で康太がつぶやく。

「わかつた。俺は道場へ戻るから、すぐそこの中長屋に行つてくれ。大麻が焚かれていて、具合が悪くなつたものも出でいるらしい。養生所からも応援が来る」

「おみつちゃんのこと頼むわ。先生」

康太の肩を叩き、歩を速めた源三は、ほどなく道場へ着いた。

引き戸を開く音を聞きつけたおみつが、動搖を隠しきれない様子で源三に歩み寄つてくる。

「先生！　じいちゃんが……」

「ああ、さつき康太に聞いた。新吉が心当たりを捜しに出でてるやうだな」

「うん。でも、心当たりつてどこなんだらう。兄さん、じいちゃん

に会つたことあるのかな

独り言のよつとぶやこて、おみつがすがるよつと源二の袖口をつかんだ。

しかし新吉は、小太郎の顔を知らないはず。彼の言ひ『心当たり』とは何なのか？

源二は、今後のことを想いをめぐらせようとするが、よい策が浮かばない。

おみつの母だつたお小夜のこと。生きていた小太郎のこと。そして、囚われの身である京香のこと。

絡み始めた事実を解きほぐせりとすればするほど泥沼にまわり、頭が真っ白になる。

これからどう振る舞えばいいのかわからない源二の心は、完全に宙に浮いていた。

## 第四章 四田里・五里霧中・（前書き）

突然失礼します。作者の笠原です。

本日、50話の後半部分を修正致しました。  
読者の方に混乱を招く事態になつたことを、心よりお詫びいたしま  
す。

今後は、このよつなことがないよつに氣をつけ執筆してまいりま  
すので、どうぞよろしくお願いします。

2007・04・24 笠原綾乃

道場を飛び出した新吉の田に、沈みかけた夕陽が飛び込んでくる。あまりの眩しさに目をそらした先の空は闇に溶け始め、もうすぐ江戸の町に夜の帳が下りてくることを告げてくる。

まるで、自身の今の心境を表すような色だな 新吉は自嘲的に笑つて、肩をすくめた。

幼い頃から『守らなくてはならない妹』だった、おみつ。その妹が、幕府のかつての敵だと聞かされていた、風魔の血を引く娘だった。

父はともかく、兄がなぜ、おみつにあれほど冷たく当たったのかわからずには反発していたが、今なら、その理由がわかる。恐らく、上の兄一人は早々に聞かされていたのだろう。

もし、自分が兄らと同じ時期にこれを聞かせていたらおそらく、同じ態度を取つていたに違いない。

なぜ、父は、自分だけにおみつの出自を明かさなかつたのか？ そんな疑問が、新吉の中に湧き上がる。

確かに、幼いころの自分は、兄一人がすぐにできる」とをいつまでもできなかつた。

林家の劣等生。そんな見方が、父、そして兄にもあつたことを薄々気づいていた。だから家族と別れさせられ、独り、厳しい修行に身を投じなければならなかつた。

そう考えて源三や京香、そして康太らに負けないよつて、何より、父や兄を見返してやるという気持ちがくじけそうな新吉の心を支え、耐え抜くことが出来たのだ。

その結果が『庶民のための御庭番』であるこの役目。上様を守る父や兄と違い、庶民を直接守るこの仕事は、やりがいと大きな充実感を『えてくれて』いる。

しかし、今回のことに関して言えば、充実感どころか、虚しさだけが自身の心を支配する。

今まで以上にはつきりとわかつた父子の溝、おみつが、風魔の末裔であったことすら知らずに川へ飛び込み、生死不明になってしまった仲間。

かけがえのない妹であつたはずのおみつの存在が、新吉の価値観を壊し始めている。

その証拠に、おみつの出自を知つてから、彼女の顔すらまともに見ることができずになった。

そんな新吉に追い打ちをかけたのは、おみつの祖父、小太郎が生きているという事実だ。いたたまれなくなつて『心当たりがある』と言つて外へ出てきたが、そん

なもの、どこにもない。

おみつ自身は、何も変わっていない。風魔の血を引いていると聞かされても、彼女を助けてくれた京香を思つて涙を流し、自らが助けたいと願つているだろつ。

そんなおみつを見守る源三も、康太も態度は何も変わらない。いや、それどころか、新吉の心とは裏腹に、『おみつを守る』という意思是強くなつてゐるよう見受けられた。

自分は、どうすればいい？　これから先、おみつを妹として慈しみ、守るにはどう気持ちを切り替えていけばいいのだ？

大店ばかりが並ぶ表通りを歩く新吉の身体を、木枯らしが強くなめていく。

両手を胸の前で組んで肩をすくめ、視線を上げた先に、今朝取り逃がした浪人、平沼が歩いて行くのが見えた。しかも、茶色の粗末な着物に袖を通した、見覚えのある女性を連れている。

あれは確か、源三の近くに住んでいる、縫物職人のお小夜だ。

なぜ、一人が連れ立つて歩いているのかはわからぬが、新吉は再度距離を取り、平沼のあとをつけていく。

表通りの一角にある両替商の加納屋を曲がり、やや広い路地を抜けたところの突き当たりにある

竹垣が囮つた家に、一人は入って行つた。

「……」「は」

今朝、康太が最初に回りうつと言つた良庵の診療所だ。

新吉は、音を立てずに玄関横の竹垣に近寄る。すると、しわがれた大きな声が耳に届いた。

「何？ あの量をもう使い切つたと言つのかー？」

「ええ。思いのほか、痛みが強く出たようでしたから、患者を楽にするために」

「高く、冷えた声。源三の家の前で会つ時とは全く違う聲音に、新吉の背筋が寒くなる。

「馬鹿を申せ。確かにあの薬は痛みを和らげ、一時的には体が回復する。しかし、その後には」

「わかつてますよ。先生。その症状を抑えるためにも、あの薬が必要なんですか？」

「對馬殿」  
とうま

お小夜の声が、平沼の下の名前じき名を呼ぶ。

「断る」

「断つてもいいのかい？ 先生。あんたがこちうらに提供した薬は、

元々御禁制の品だ。それがお上にばれちや、都合が悪くなりはしないか？ な、次期御殿医殿

平沼が、良庵の言葉を封じたらしく。衣ずれの音が気になつた新吉は、そつと竹垣の穴から中をうかがひ。すると、

「……今回限りじゃ。これ以上これを使わば、あの娘は死に至るぞ」

良庵が、平沼とお小夜の膝元へ白い包みを差し出したのを、夕焼けがはつきりと映し出した。

「あの娘が死のうが、俺らには関係ない。役に立たなければ、これを使つまでもなく殺すだけよ」

低い声で吐き捨てた平沼がお小夜とともに立ち上がり、近づいてくる。新吉は慌てて物陰に身を隠し、奴らが歩いて行くのを見送つて立ち上がった。

#### 第四章 四田田・五里霧中・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

## 第四章 四日目・心の闇・（前書き）

### 【用語説明】

- ・『煎』：示現流の構えの一つで、垂直に立てた刀身を、体の中央に近い位置に置く構えのこと。

## 第四章 四日田・心の闇 -

連れ立つて歩く平沼とお小夜は大川橋を渡り、地蔵のある小路を抜けて、新吉が今朝、彼を見失つた笹やぶへと入つていく。

今朝のように襲撃されてもいいように、新吉は胸元から短剣を取り出し、辺りに気を配りながら歩を進めていく。

笹やぶの奥にある絵馬堂は古くから使われていないのか、壁のあちこちに穴があき、これ以上強い風が吹けつものなら、屋根<sup>ほ</sup>と飛んでいきそうな様相を呈している。

周りを見回し、うなずきあつた平沼とお小夜が、建物の中へ姿を消した。

その後を追う新吉の周りで、鴉が異様な鳴き声をあげた。

落ち葉を踏みしめる音が、少しづつ血身のいるまづへ近づく。

足音が止まつた。

新吉は即座に田の前の大きな笹の木に身を隠す。

すると、新吉のいた場所へ手裏剣が一本、乾いた音をたてて突き刺さつた。

新吉はすぐ隣の木の蔭へ移動し、その間を縫つよつに歩を進めながら刃を抜く。

すると右前方から、全身を黒の忍者装束に身を包み、目から下を覆面で覆つた忍びが、新吉に襲いかかってくる。

逆手に持つた短刀で相手の刀をなぎ払う。

辺りを見回すと、ほかに誰もいる気配はない。

随分となめられたもんだな。新吉は小さく鼻で笑い、目の前の忍びに向かって短刀を振りおろす。

しかし、その太刀筋は簡単に払われ、そのまま長刀が振りおろされる。

「ちっ！」

隙だらけだつた体の前面を守るためにかざした手から、血がひとすじ流れ落ちた。

こいつ、ただ者じゃねえ 弾む息を整え、逆手に持っていた短剣を持ち直す。

暗がりでよくはわからないが、新吉の目の前に、見覚えのある形が影をなしている。

その構えを見据えた新吉は、自分の鼓動が不自然に速くなるのを感じた。

見覚えのある、なんでものではない。これは、示現流の『煎』の構えだ。

「」の構えをよどみなくする人間は、限られている。

動搖とともに息をぐつと飲み込み、新吉は先に仕掛けた。

しかし、あっけなく斜めに上げた切つ先は払われる。

払った隙をつき、握りしめた拳を突き立てるが、すんでの所でかわされる。

（「」の動きは……）

新吉の動きを的確に読むどころか、並みの忍びならばよけることができない、裏の手までも察することができるのな……。

嫌な予感が、小石を投げた時の水面のよつて、新吉の胸に広がる。

正体を確かめるべく、新吉は相手の後ろに回り込み、腕をねじ上げ、覆面に手をかけた。

しかし、その手を邪魔するかのように、何かが飛んでくる。

新吉はとつさに忍びを突き飛ばし、自分は笹の陰に身を潜めた。

途端に、小さな爆発音が鳴り、辺りが白い煙に包まれる。

「待て……っ！」

遠ざかる一つの足音を追おうとしたが、煙を吸い込んで咳き込むばかりで、足が前に進まない。

煙幕が空気に溶けて無くなる頃、新吉の田の前には、笹の葉が風になびく姿があるだけだった。

## 第四章 四田田・心の闇・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

## 第四章 四日目・衝突・

さつきまであかね色だった空が闇に覆われていく街の中を、新吉は脇目もふらずに駆け抜ける。

笹やぶの中で対峙したあの忍び……。

あの身のこなしから言って、正体は、新吉が一番良く知っている人物だ。十中八九、間違いはないだろう。

なぜだ？

どうして、敵として姿を見せた？

答えの出ない問いを、新吉は心の中で何度も繰り返す。

そしてその問いかけは次第に、言いようのない怒りへと変わつていぐ。

こんなことになつてしまつたのは、誰のせいだ？

誰がいたせいで、仲間を一人失うことになつてしまつたのだ？  
 と。

今朝までは、絶対に守らなければならぬ相手だったのに、今となつては、一度と許すことのできない相手へと変貌しつつある。

一度ついてしまつた憎悪の導火線は、もう、新吉の理性で消すこ

とはできなかつた。

勢いよく襖を開けた新吉を、源三が見上げてきた。

「おみつは？」

「おみつは、父上とともに例の遺体を番屋に預けに行つてゐるが……どうかしたのか？」

疲れた様子の源三が、訝しげな表情で訊ねてきた。その手には、おみつがお小夜の家で見つけたという京香の小袖が握られている。まるで、京香自身を抱きしめているよつて、強く。

「お小夜さんは……」

やりきれない思いをべつとこひえて、新吉はつぶやく。

「…………ああ。それに、京香は今、風魔の手に落ちている」

意味を察したらしい源三の言葉が、新吉の心にすすぶつていた疑問を確信に変えた。

「どうしたところのだ？」

怒りのまま、畳に拳を叩きつけた新吉に、源三が問つてくる。

「俺はさつき、この事件に関わっている浪人を追つた際、一人の忍びに襲われた」

「何？」

「その忍びは……並の奴ならかわせない、俺の裏の手まで読み取つて反撃してきた」

言葉を切つて、源三を見据える。不規則に揺れるうつむく越しに新吉を見る彼の表情が、今までにはいほどこわばつた。

「先生以外に、そんなことができるのは一人しかいねえ。そうだろ？」

源三に再度問う声が、震えた。

小袖を握る源三の手が激しく震えるのを、新吉は田の端で捉えた。

幼いころから、ずっと、苦楽を共にしてきた新吉、源三。そして

……京香。

そんな三人の絆を壊したのは、守らなければならなかつた妹、おみつだ。

許せない　　その思いのままに、新吉は立ち上がる。

「どこへ行く？ 新吉」

「決まつてんだろ。姐さんが……俺たちがこいつなつちまつたのは、誰のせいだと思つてるんだ！？」

「待て！ おみつを責めて何になる？ 今、一番傷ついてるのはおみつなんだぞ！」

源三の鋭い声が、新吉を制する。それが、新吉の中にくすぐる憎悪の導火線に火をつけた。

「よくそんなことが言えるな。あなたは、一番近くにいた姉さんを奪つたおみつが、憎いと思つたことはないのかよ！」

新吉を見上げる源三の田の色が変わるのが、薄闇の中でもほつきりとわかつた。

「とにかく、あんたがどう思おつと、俺はあいつが許せねえ。あいつちりかたをつけさせてもらひ」

「新吉ー！」

出て行こうとした新吉の手が強くひかれ、頬に熱い痛みが襲つてきた。その衝撃で、新吉の身体が逆方向へふつ飛ばされる。

「それをおみつに言つてどうなる！？ お前はそれですむかも知れんが、自分の母親が、助けてくれたを京香を暗示にかけたと知つた、おみつの気持ちはどうなるのだ？」

襟元をつかむ源三の手を振りほどき、新吉も彼に拳を見舞う。

「甘いんだよーーー」のままだと、こつか俺たちのどちらかが姐さ

んを斬らなきやならなくなるかも  
しれないんだぞ！ それでもいいのか？ ……あんたに、姐さんが  
斬れるのか！？」

新吉は感情のまま叫んだ。すると、頬を赤く腫らした源三の目が  
大きく見開かれ、新吉へのいま  
しめが解かれた。

その直後、廊下で小さな物音がする。

「誰だ！？」

すぐ近くにいた新吉が、半分ほど閉じていた襖を開け放つ。

するとそこには、源三以上に顔をこわばらせたおみつが、身体を  
震わせて新吉を見つめていた。

## 第四章 四日目・衝突・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

## 第四章 四日三・決別

「……おみつ。そなた、父と屋敷に帰るのではなかつたのか」

新吉の背後から、源三の声がした。

「今更だと、本当なの？」

しかしおみつはそれに答へず、怯えた目で新吉を見上げる。  
「お姐さんのが風魔に……母さんに暗示をかけられてるつて、本当なのー?」

「ああ」

すがりつてくるおみつの手を振りほどいた自分の声が、こつこなく  
冷えてこると実感する。

「あたしの、せー……」

「わかつてんじやねえか」

「新吉ー。」

源三の鋭い声が飛んでくる。しかし、一度解き放つてしまつたど  
す黒い感情。そして、言葉は止まらない。

「おまえが、江戸に来なけりゃ」「んな」とこまばらなかつたんだ

[田を泳いでいたおみつの田が、再度新吉を見た。

「いや……姐ちゃん川へ飛び込んだとき、お前がいなくなつてればよかつたんだよー。」

「新吉、やめひー。京香が行方不明になつたのはおみつのせごじゃない」

新吉の肩を乱暴につかんだ源三の言葉が、それを立つた心をちらに刺激する。

「ここのふるのせよせよ、先生。あんただつてわいつたひとせあるんだねひー。」

振り向かれて元の口元にいた言葉が終わると同時に、また、頬に強い痛みが走つた。

同時に、壁に強く叩きつけられる。

「兄ちゃん」

「さわんなー。」

壁に叩きつけられた新吉を起し、おみつはお前の妹だねー。」

「いい加減にしろー。おみつはお前の妹だねー。」

「やめてー。こんなのもひー……もう嫌だよー。」

おみつが、再度新吉に殴りかかる。がんだ源三にしがみつ

いて泣き出した。

泣きそうな顔をしているくせに、しゃべつあざるおみつの頭に手を添える源三の姿が、新吉の心の闇をさらげ増幅させる。

なぜ、優しくなれる？ 京香より、風魔の血をひくおみつのまつが大事だというのか？

「……勝手になれあつてりやいいだろ。俺はもう、やいつの面倒を見るのはまつぱら」めんだ！

「新吉ー。」

源三の声が、そして、おみつの泣きじやぐる声が追いかけてくるが、かまわざ新吉は駆け出した。

「……ひと。びひしたんだよ？ めーー。」

玄関先で衝突しそうになつた康太にも答えず、新吉は道場を飛び出す。

外はすでに暗く、今夜は月も出でていなし。通りの店の玄関先はすでに木戸を閉めており、その隙間からもれるかすかな明かりだけが、新吉の足元をかるひじて照らしている。

京香はもう、帰つて来ない。

その事実が、新吉の心を締めつける。

新吉が修行中の頃、京香が薬とともになくなつた晩も、一度と帰つて来ないだろうと覚悟を決めていたが、今回はあの時と説が違つ。

風魔に操られている京香の息の根を、自分らで止めなければならぬかも知れないのだ。

なのに源三は、おみつにかまけてあてにならない。なぜ、あそこまであいつを庇えるのか？

『あの子を放つておけないのは、あんたが一番よく知ってるじゃないか』

京香が去り際に新吉へ投げかけた最後の言葉が、突然、胸に迫つてきた。

放つておけない妹のはずだった。おみつが泣くのを見て、いられなくて、幼いころから

『おみつは俺が守るんだ』

と、強く自分に言い聞かせてきた。

だけど今はもう……妹としては見られない。

たとえ京香が、無事に新吉らのもとへ帰ってきたとしても、おみつの身体に流れている『風魔』

の血は消えないのだから。

新吉の中で、何かが音をたてて崩れていくのがはつきりとわかつた。

それは……新吉自身も気づいていない『公儀筆頭御庭番の息子』の血がもたらした、妹への決別であった。

## 第四章 四田日 - 決別 - (後書き)

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

## 第四章 四日目・混迷・

犬の遠吠えが、江戸の町に何度も響く。

今的新吉の心に巣くべ、深い闇のよつな空を見上げ、新吉は通りに立ひゆく。

おみつへの怒りにまかせて飛び出しへは来たものの、これから先、どうしたらいいのか見当もつかない。

『あんたに、姐さんが斬れるのか！？』

煮え切らない源三への腹立ちのまま口にしてしまった言葉を反芻する新吉の背筋に、冷たい滴が流れ落ちた。

もし、新吉自身がそう問われたなら。

今一度、京香が自分の前に敵として立ちはだかつたなら……。

自分の、もしくは源三の刃が、京香の身体を引き裂く 考えた

だけでも、身震いがする。

小さい頃からずっと共にいた、かけがえのない仲間。そんな彼女を斬るなんてことが、新吉に出来るわけがない。源三ならなおさらそうである。

どうすればいい？

どうすれば、風魔の手に落ちている京香を、前と同じ状態で

らに取り戻せるのか。

足下だけを見つめて考えを巡らせるが、有効な手段は全く思いつかない。

それどころか、どう考えても一人で彼女を救い出せる方法がないことに気づかされるのだ。

『よいか。そなたは、三人揃つてやつと一人前じや。庶民を守り、江戸の治安を安定させるためには、何があつても協力し、ことに当たるのが肝要』

花ぐるまの結成時に、天膳から言われた言葉が、新吉の胸に重くのしかかる。

あの頃は……こんな日が来るなんて思いもしなかった。

いつ死ぬかわからないお役目だと理解はしていても、三人ですつと、江戸の治安を守つていけると信じていたのに。

源三と自分の心には大きな隔たりができ、京香が戻つてくる可能性は、限りなく低い。

これから先、自分はどうすればいいのだろうか？

とりとめのないことをつらつらと考えながら、わずかな明かりを頼りに、新吉は通りをあてもなく歩き出す。

そこへ。

「親分、こんな遅くまで御用の筋ですか？」

馴染みのない、しわがれた声が新吉を呼び止める。

「お前さんは？」

「夜鳴き蕎麦を引いてます、為吉つともんです。一杯どうぞ？」

新吉はとつあえず蕎麦と熱燗を注文し、腰を下ろす。

「冴えない表情ですね。何かあつたんですか？」

「ああ。まあな。それより、この辺じゃあまり見かけねえが、商売は長いのか？」

慣れた手つきでそばの水分を切る為吉に問いかける。ほつかむりを被つているせいで顔を見る」とはできないが、しわだらけの手が、働きどおりであろう彼の人生を物語つている。

「ええ。最近では山城屋さんの辺りでよく引いてますよ」

「山城屋？」

為吉の口から漏れた『山城屋』の名前に、新吉は食いついた。

風魔とつながりがある山城屋の情報から、京香を救う手がかりをつかめるかもしれない。

「あの辺の密層はどんな感じだい？」

為吉が注いでくれた熱燗に口をつけながら、新吉は問う。

「そうですねえ。どうこうわけか、『浪人さんが多いですよ』

浪人、か。恐らく、平沼もここに食べに来ているに違いない。

「どんな話をしているか、聞いたことはないか？」

「いえ。……でも親分、なぜそのようなことを？」

為吉の指摘に、いや、と小さく首を振り飲み干すと、お代を置いて立ち上がる。

しかしその瞬間、新吉の目の前が大きく揺れた。慌てて木の板に手を置くが、力が入らない。

「だからあの時、この事件から手を引け、と言つたでしょ」

突然、耳元でささやきかけてくる、聞き覚えのある声。

「……てめえは」

つい先日新吉を、そして京香を脅してきた忍び　　おみつの祖父、  
小太郎に違いない。

「申し訳ありませんが、しばらく眠つていて頂きますよ。今あなたに動かれては、こちらが動けなくなりますのでね」

「冗談ではない。今、京香を救えるのは自分しかいないのだ。

だが、時が経つにつれて新吉の身体からは力が抜けていき、頭の中にも白いもやがかかる。

胸の中にやつた手が短刀をつかむ前に、新吉の意識は闇に吸い込まれてしまった。

## 第四章 四田田・混迷・（後書き）

次回（5／30更新予定）より、ようやく五章へ移ります。  
今後ともよろしくお願ひいたします。

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。  
(月1回)

## 第五章 五日目・鈴の音・

辺りに、深くて広い闇が広がっている。

冷たい空気が刃物のよひに、全身の皮膚を刺している。

ビニへ向かって、私は歩いてくるのだらう。

泣きじゃくる、小わな少女。

『……おねえちゃん、たすけて』

振り向いた童女の顔を見て驚愕する。

『……葵』

名前をつぶやくと、脳裏に焼きついている童女の残像が消えた。

そして。

ちりん、ちりん。

頭の中に、涼やかな鈴の音が鳴り響く。

『あ、着いたわよ

一定の間隔で鳴る鈴の音の間を縫いつゝ、やわらかな声が、耳の奥を優しく刺激する。

『あなたの、そして、私の人生を狂わせた連中に復讐する時がやつてきたのよ』

……ああ、そうか。

幼い時分に両親と引き裂かれ、辛い日々を送らねばならなくなつたのも、まだ小さかつた葵を喪わなければならなかつたのも、すべてあいつらのせいなんだ。

『そう……。失われた時間を取り戻し、新しい、幸せな時を刻むために、あなたは闘つ。私と共にね』

「くん、と頷いた自分の手が、温かいものに包まれた。導かれるまま立ち上がると、視界が大きく揺れる。

支えてくれた声の主に寄りかかると、甘い香りが、鼻を通つて身体のすみずみにひろがつていいく。

『……これからしばらくは、私のことは忘れない』

支え、抱き止めてくれてこられるはずの、声の主の言葉に、思わず身をこわばらせる。

『大丈夫です。私を思い出してくださいときは、またこの鈴を鳴らします。その時こそ……』

ちりん、ちりん。……ちりりん。

頭の中に響いていた鈴の音が聞こえなくなった時、すべての思考が閉ざされて、身体の力がゆつ

くりと抜けて行つた  
。.

## 第五章 五日目・鈴の音・(後書き)

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

次の更新は、6/1の予定です。

## 第五章 五日目・夜明け前・其の一

新吉が道場を出て行つてから、どねぐらいが過ぎたのか。

時刻はすでに子の刻を回り、『依頼』を受けてちょうど五日目。京香が源三の前から姿を消して一寸を過ぎてゐる。

『あんたに、姐さんが斬れるのか！？』

去り際に新吉が残した言葉が、源三の耳を何度も通り抜けていく。江戸の庶民を守るために働く自分らには『死』はいつ襲いかかってきてもおかしくない、突発的なものだということは、源三は勿論、新吉や京香にもわかっている。しかし、『仲間を斬る』といつ選択肢が目の前に横たわつてこようとは、思ひもよらなかつた。

もし、今日の朝、京香が源三と軍太夫に襲いかかつたら……、彼女を「斬らねば」ならないのは明白だ。しかし。

自分に、それができるのか　？

「やつと、おみつちやん眠つたぜ。先生」

小さく揺れる灯籠の炎を見つめる源三の意識が、康太の声で現実

に戻された。

「すまないな、康太。すっかり迷惑をかけてしまった」

「別に、気にしちゃいないさ。それより、一体何があつたんだ？」

灯籠をはさんで腰を下ろした康太が、源三をまつすぐ見据えて訊ねてくる。

「新吉がえらい剣幕で出て行つたと思ったら、おみつちゃんが泣きじゃくつてゐるし。あんたまでいきなり部屋に閉じこもつちまつて」

「…………」

「せつとき寝つくまで、彼女ずっと『自分のせいだ』って泣き続けて……。見てられなかつた」

かすかに震える声で、康太がつぶやく。

「俺なんかじや役に立たないかもしれないけど、話してくれないか？ 昔のよしみでわ」

昔馴染みで、源三らの仕事を理解している康太とはいえ、彼は外部の人間だ。役目に関することを漏らしてはならない掟がある。

しかし彼の厚意が、今ある現実を一人で受け止めるには限界が訪れている源三の心にゆっくりと染み込む。

源三は、誰にも話さぬことを条件に、お小夜がおみつの母であつたこと、京香が風魔に捕らわれ暗示をかけられてることを新吉がおみつのせいだと思い込んでいること、そして、軍太夫がお小

夜に提案した明朝の取引のことを手短に説明した。

「新吉の奴……何考へてんだ。今朝まではあんなに心配してたのに、おみつちゃんが風魔の血を引いているってわかつた途端、京香がいなくなつたのは彼女のせいだなんてよ」

「よせ、康太」

言葉じりがきつくなつていく康太を、源三がいさめる。

「だけど先生。今、一番苦しんでこるのはおみつちゃんなんだぜ」

康太の言ひことはわかっている。しかし。

「まさか、あんたもそんなこと考へてるんじゃないだろ? な

昨夕の新吉の問へと同じ言葉に、源三は答へられずに口をそりす。

「先生!」

康太の声が大きくなるのを田で制した源三に、鋭い眼差しが注がれる。

おみつの事情を知つてなお、彼女を守りたいと願つているである

う康太の純粋な気持ちが、今の自分にはないことを黙つていても見抜かれてしまいそうで、絞り出すように本音を口にする。

「……思わなかつた、と言えば嘘になる。だが、それでおみつを憎んでしまつたら、彼女の純粋な願いを守らうと命を賭けた京香の思いをも否定してしまつよつた気がして、できなかつた」

言葉を切つた源三は、目の奥にたまる熱いものをしまい込むよつに、きつくれを閉じた。

遠くから聞こえる犬の遠吠えが、京香が葵とともに行方不明になつた夜、最後まであきらめずに捗し続けた幼い三人 源三、新吉、康太 の姿を脳裏に浮かび上がらせゐる。

あの時も、あきらめそつになつた源三や新吉を励ましてくれたのは、ここにいる康太だった。

「先生は……京香のことが好きなんだな」

突然の康太の言葉に、源三は思わず目を見開く。

「当たり前だらひ。俺と京香は従兄妹同士なのだから」

「そういう意味じゃないんだけど、な」

意味ありげな康太の表情が、提灯の中で揺れる炎にうかぶ。

「どういふ意味だ？」

「さあ、それは自分で考えるんだな。それより、これからどうするんだ？ お小夜さん、京香を連れて来るかな」

康太の口から出たお小夜の名が、源三を引き戻す。

「現段階では五分五分……いや、お小夜さんに母としての良心があるなら、連れて来ると信じたいがな」

「でも、新吉が言つてたことが本当なら……。京香は今、風魔の手先として動いてるんだろう？」

下手すりや、裏切り者としてお小夜さんと一緒に殺される。もしくは、相手の言つままで、京香が彼女を殺してしまう可能性だってあるんじやないか？」

康太の率直な言葉が、源三の胸を打つ。

忍びの世界は、主人への忠義が第一。

京香の本来の主は源三の父、天膳だが、今の彼女の主人は、今回の事件に関わる風魔の忍びなのだ。

源三の胸に、苦い思いが交錯し始めたその時、玄関先で、人が倒れ込んでくるような大きな物音が聞こえた。

## 第五章 五日目・夜明け前・其の一・(後書き)

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。  
(月1回)

次の更新は、6／04、もしくは6／05の予定です。

## 第五章 五日目・夜明け前・其の一・(前書き)

### 【用語説明】

・和木瓜わもっか…花梨かりんの果実を原料とした生薬で、のどの炎症に効くとされている。

## 第五章 五日目・夜明け前・其の一

大きな音が、よつやく夢の世界へ行きかけたおみつの意識を、現<sup>うつ</sup>へと引き戻した。

隣の襖が開き、一人分の足音が部屋の前を通り過ぎていく。

「……京香ー。」

起きあがり、部屋から出たばかりのおみつの耳に、源三の悲痛な声が入った。

思わず駆けだし、源三にかかえられている女性の姿を後ろから凝視する。

康太が照らすほのかな灯りに照らされているだけなので、顔色を伺い知ることはできないが、おでこの真ん中から分けられた、富士の山に似た額の形も、すっと通つた鼻筋も、京香のものに違いない。

「……お姐さんー。」

京香を呼ぶおみつの鼻の奥が、熱くなる。

「京香、しつかりしる。田を開けるんだ」

源三の呼びかけに、京香の田<sup>ひづ</sup>すらと開いた。

「京香、わかるか?」

康太が源三の横から手をかざし、京香の畳の前で一、二回振る。

「…………」

声にならないが、京香の口は源三を呼ぶよつこ小さく開く。

「お姐さん」

おみつが涙をこらえて京香を呼ぶと、彼女の視線がこらすむつくりと注がれた。そして、かすかに微笑む。

「『』めんね。お姐さん……」

京香のそばに行き、冷えきった手を握ったおみつの頬を、こらえきれない涙が濡らしていく。

「先生。こじりや、京香の身体が冷えちまつ。おみつちゃんが寝てた部屋に」

康太の言葉につなぎいた源三が、京香を改めて抱き上げた。

後を追い、今まで自分が使っていた布団をめくる。まだ、ほのかにあたたかい。

それがなぜか、おみつを安心させた。

「京香、一体何があつたのだ？」

布団の中央に横たえられた京香に、源三が訊ねる。おみつも横で、彼女の返答を待つ。

源三を見ていた京香の目が、一瞬、空を泳いだ。顔は次第に苦渋の表情に変わり、彼女は小さく首を振る。

「何も……覚えていないんです」

小さくせき込みながら、かすれた声で京香が答えた。

おみつは、源三と顔を見合させ、再度京香を見る。しかし、京香はまた首を振るだけで、何も答えられないようだ。

「そうか……。とにかく、無事に戻つてきてくれて何よりだ」

源三が、京香の手を強く握りしめた。

「京香。これ飲めるか？」

席をはずしていた康太が、湯呑みを持つて戻つてきた。源三に再び起こされた京香の視線が移る。

「……康太」

「つたくよ、また心配させるんじゃねえよ」

乱暴な口調とは裏腹に、湯呑みを差し出す手は優しい。

(幼なじみ……か)

身体はそばにいるのに、心はなぜか遠い。おみつは思わず三人から視線をそらしきつむいた。

「『めんね』

「謝る相手が違うだろ、馬鹿。一番心配していたのは、この子だよ。康太の手が、突然おみつの肩に置かれた。驚いて顔を上げたおみつに、康太はそっと手配せをする。

「……『めんなさいね。あなたにまで心配と迷惑をかけてしまって』

源三に支えられている京香の手が、そっとおみつの手を握る。

胸が熱くなり、再び涙がじりじり落ちる。言葉にならないで、首を振ることしかできない。

迷惑をかけたのは、私なのに。「私」といつ存在なのに。

「泣かないで。ほら」

冷えた手が、頬にそっと触れる。しかしその手はすぐに離れ、京香は激しくせきこんだ。

「大丈夫か？」

源三がそつと、京香の背中をさすった。落ち着くと、康太がすぐに診察を始める。

「別の薬が必要だな。先生、俺取つてくれるよ」

「待つてくれ。どの薬が必要か教えてくれれば、俺が行く。林殿にこのことも報告せねばならないし」

「さうか。……じゃあ、花梨かりんを原料にした和木瓜わもっかといつ生薬が診療所にあるはずだから、それをもらつて来てくれないか」

「わかつた。京香、少しだけ待つていろ。おみつ、京香を頼む」  
乾いたせきが止まらぬなか、京香が源三に向かってうなずいた。  
しかし。

「先生ー。」

おみつは思わず、源三を呼んだ。

「どうした？ おみつ」

「……うつさ。何でもない。気をつけたね」

かすかに笑みを浮かべておみつに頷き、源三が部屋から出ていく。

「おみつちゃん。先生なら大丈夫だよ」

力強い康太の言葉に首を縦に振つて答えるが、おみつの心は晴れない。

なぜかはわからないが、今、源三を行かせはならないよつな氣がしてならないのだ。

(早く帰つて来て。先生)

おみつは、源三が出て行つた方向を見つめ、祈ることしかできなかつた。

## 第五章 五日目・夜明け前・其の一・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。  
(月1回)

次の更新は、6／07を予定しています。

## 第五章 五日目・夜明け前・其の三・

源三が出て行つて、四半刻<sup>しばんとき</sup>が過ぎた。

あと、どのくらい経つたら源三は戻つてくるのだろう？

じりじりと時が過ぎるのを待つおみつの不安をよそに、康太が持つて来ていた煎じ薬が効いたのか、京香は規則正しい寝息を立てて眠つている。

「おみつちゃん、少し寝たらどうだ？」京香は俺が看てるから

後片付けを終えて戻ってきた康太に、おみつは首を横に振つた。には、そんな確たる気持ちがある。

康太もおみつの意志を尊重してくれたのか、黙つて横に腰を下ろした。

「……新吉のやつ、どこに行つちまつたのかな」

一番身近にいたはずの兄の名が、今のおみつの心をさくっと刺した。

自分が風魔の血を引いているばかりに、兄を苦しめ、怒らせていることが、今のおみつにはたまらなく、つらい。

「京香が戻つて来たんだ。新吉の気持ちだつて少しは落ち着くや」

「やうかな？ 私は、そう思えない」

京香のことはきつと、せつかけに過ぎない。今の新吉自身が、自分の血を呑み嫌っているであることは、こゝらおみつでも容易に察しがついた。

上の二人の兄は全て知つていたからこそ、あそこまで自分をいじめていたのだろう。

ただ一人、それを知らされていなかつた新吉の胸の内を思つと、おみつの心は強く痛んだ。

「風魔の血を引いて、ようどこまといと、おみつやんはおみつちゃんだる。俺は気にしてなんかいなこや。先生だつて、京香だつてきつと、同じじひとを言つと感づよ」

康太が優しい眼差しで、おみつの肩に手を置いた。

熱のこもつた口調に、おみつの心のつかえが取れていき、それが滴となつて、またおみつの頬を濡らしていく。

「また泣く。俺と会つてから、泣きつぱなしじゃないか」

康太の手が、おみつの頭を少し乱暴に叩く。それがまた嬉しくて、おみつは顔を両手で覆う。

どうして、康太はこんな自分に優しいのだろう？

いや、彼だけはない。今はいない源三も、田の前で眠っている京香もそりだ。

家族でさえ忌み嫌う存在の自分を命がけで守りたとじてくれているのは、何故なのか。

「血なんか関係ないんだよ」

「…………え？」

「風魔の血を引いてたって、じいさん思いで、真っ直ぐな君だから、助けてあげたくなるんだよ」

おそれての方を向いて、ぶつきひとつに康太がつぶやく。

「じいさんを、捜すんだろう？」

康太の問いかが、江戸へ来てからの激流に飲み込まれていたおみつの願いに火をつける。

「…………うん。じいちゃんと一緒に、紀州に帰る」

「なら、こつまでも泣いてちゃ駄目だ。少しでも早く、じいさんを見つけださなきゃな」

「ちらを見た康太の笑顔に、おみつの頬もつられて緩む。しかし、和やかな空気を裂くように、京香が激しく咳き込み出した。

「京香、ビリしたー?」

京香の身体を起こした康太に促され、反対側から彼女の背中をする。

のどの奥からはからつ風のよつた音が鳴り、息をするのも苦しそうだ。

京香の様子を診ていた康太が、小さく舌打ちをした。

「ビリしたの?」

「いや……。おみつちゃん、京香頼めるか? 残った薬をもう一度煎じてくれる」

「お姐さん、よくないの?」

表情をこわばらせたままの康太に、感いたがりも、おみつは訊ねる。

「ちょっとな。万が一吐き出した物がのどにつまらないようになってくれれば、とりあえずは大丈夫だから」

「わかった」

康太と分け合っていた京香の全体重が、おみつにかかる。

「お姐さん。もう少しの辛抱だから、頑張ってね」

温もりがなかなか戻らない手。赤みが消えない頬。生きよつと、必死に空気を吸おうとする姿が痛々しい。

見ていられなくてうつむいたおみつの耳に、京香の咳とは違ったかすかな音が忍び込んで来た。

(……これは？)

京香の背中をさする手を止めずに、おみつは耳にすべてを集中させる。

規則正しい、鈴の音。音が大きくなるにつれ、耳元で聞こえる京香の息が穏やかになつていく。

「お姐さん、大丈夫なの？……っ！」

顔を上げたおみつの首に、突然、京香の細い指がからみついてきた。

## 第五章 五日目・夜明け前・其の三・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。  
(月1回)

次の更新は、6/10を予定しています。

## 第五章 五日目・夜明け前・其の四・

「……お姉さん。『ひづ』……」

京香の指先が、おみつの首に食い込み始める。

同時に、さつきから聞こえる鈴の音はまた一段と大きくなり、おみつの耳を通り抜けしていく。

あまりの息苦しさで、閉じようとした皿をどうとか開く。

すぐそこにある京香の皿は、おみつのを向いているのに、焦点が合っていない。一昨日、襲われた自分とともに川へ飛び込んだ時の輝きが、今の彼女からは感じられないのだ。

( 暗示? )

薄れていく意識の中で、おみつは昨夕の源二の言葉を思い出した。

『京香が風魔に暗示をかけられている』

だとしたら、一刻も早くこの鈴の音を断たなければ。

おみつは、何か物音を立てようと畳に手を這わせた。何でもいい。

大きな音さえ出せる物ならば、何でも……。

朦朧もうろうとし始めた意識を辛うじて保っていたおみつの手に、何か冷

えた物が触れた。

力を振り絞つてそれをつかみ、京香のいる方とは逆の方向へ手を振ったその直後、おみつの首から力が抜けた。

大量の空気が身体の中へ突然入ってきて、おみつは激しく咳き込んだ。

「どうしたんだ！」

少したって、康太の声が聞こえる。

「おみつちゃん、いつたい何があつたんだ？」

康太が、咳が止まらないおみつの背中をさすってくれる。

「お姐さん……は？」

荒い息を繰り返し、よつやく落ち着いたおみつが顔を上げると、京香は布団の向こう側で倒れている。

「京香ー。」

肩で息をするおみつから離れ、康太が京香に近づいた時、あの鈴の音がまた、頭の中に鳴り始めた。

「だめ！ 康太さん」

おみつが叫ぶと同時に、康太の大きな身体が一瞬で壁に叩きつけ

られた。

「何すんだ！」

左肩を抑え、痛みに顔をゆがめた康太が、京香を見上げた。

「……お前」

何を考えているのかすらわからない、無の表情で立ち尽くす京香のさまに、康太が言葉を失う。

康太に駆け寄つたおみつを一警いちばくし、京香が身をひるがえす。

「待て！」

おみつに構わず立ち上がり、京香を捉えようとした康太の手を、白い着物の袂たもとがすり抜けた。

「お姐さん！」

おみつも立ち上がるが、突然のことでの身体がびっくりしたのか、目の前が大きく揺らぐ。

「おみつちゃん！」

よろけたおみつを、康太が支えてくれた。

「君はここにいる。京香は俺が連れ戻す」

「私が行く。行かなきゃ駄目なの」

康太の手を振りきつて、おみつは京香の開け放した窓から表へ出した。

「おい！」

康太の声が追いかけてくるが、氣にしてなどいられない。

冷え切つた初冬の空気が、呼吸の整わないおみつの胸いつぱいに広がる。咳き込みそうになるのをこらえながら、遠ざかる京香を追いかけるおみつの耳に、先程とは較べよつのないくらいの大きな鈴の音が響いている。

おそらく京香は、自身を洗脳している人物のもとへ向かっているのだろう。

しかし、ここで京香を逃してしまつたら、彼女が戻ってきたことを誰よりも喜んでいるであろう源三に申し訳がたたない。

康太や源三の、そして、今回のことでおみつ自身を憎んでいるであろう新吉のためにも、京香を取り戻す。

そのためなら、彼女を洗脳している人間と渡り合つて死んでも本望だ。

そんな死に方なら、まだ生きているかもしない祖父も、自分を責めたりはしないだろう。

あと、少し。

身軽さを自負してきたおみつの足が、少しずつ京香に近づく。

幾度かふらつきながらも先を走る京香の背中を追つて、すぐ近くに見えてきた角を曲がる。

すると、目の前から風が一いち方に吹き抜け、川の桟橋さんばしに人影が見えた。

( あいつか )

京香が立ち止まつたのをうな、自らも同じで足を止めた。すると。

「よく来たわね。おみつ」

聞き覚えのある声が、自分の名を親しげに呼ぶ。

湧き上がる警戒心をあらわにして前を見据えたおみつの頭上に月が現れ、声の主の正体を照らした。

京香をかばうようにして立ち、おみつに微笑みを向けていたのは……。

源三の兄、忠直に『母かも知れない』と言っていた女性、縫物職人のお小夜だった。

## 第五章 五日目・夜明け前・其の四・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。  
(月1回)

次の更新は、筆者多忙のため6／17以降を予定しています。ご了承くださいませ。

## 第五章 五日田・再会・母と娘

「……お小夜、さん」

田の前のお小夜を呼ぶおみつの声が、震えた。

「ようやく、会えたわね」

話しかけてくるお小夜の声も、おそらくおみつとは別の意味で、震えている。

「お姐さん……京香さんは暗示をかけたのは、あなたなの？」

おみつの投げかけた言葉に一瞬顔をこわばらせたお小夜だが、少しのちにさつきつと頷いた。

「どうして、そんなことを！？　お姐さんは関係ないじゃない！？」

声音が荒くなるのが、おみつ自身にもはつせりわかった。

「関係ない、とは言い切れないわ。この人は、あなたがお世話になつてゐる源三様や、新吉さん同

様公儀の人間なの。私たちの、敵なのよ」

『私たち』　まっすぐおみつを見据えて告げた言葉が、おみつの心を急速に冷やしていく。

「公儀の人間とか、そんなことはどうでもいい。お姐さんを……返してよ！」

「あなたの口から、そんな言葉が出るなんて思わなかつたわ」

あまりにも穏やかなお小夜の口調に、おみつは思わず彼女を凝視した。

「だつてそうでしょ? あなたは、父や兄たちに疎まれて育つてきたのに」

お小夜の言葉が、心を貫く。

思わずつづむいたおみつの脳裏に浮かぶのは、新吉の上一人の兄に執拗にいじめられた、幼少の頃の光景……。

『やめてよ、おにいちゃん』

木の上に逃げても、すぐに追いつかれ、泣きながら必死に頼むおみつに、容赦なく突きつけられる木刀。

『うるさい。俺たちはお前の兄ちゃんなんかじゃないやい』

再度突き出された木刀を避けたおみつは、折れた枝とともに地面に叩きつけられる。

全身に広がる痛みをこらえ、起き上がるとする彼女の頭上からは、

『まだあいつ生きてる』

『早いいなくなればいいのにな。あいつの母親みたいにさ』

『何してるんだよ！ 兄上一』

一人のあざ笑う声をかき消す怒号が、おみつのすぐ上で聞こえる。

自分を唯一助けてくれる、すぐ上の兄、新吉。

『またお前か。おい、二人ともやつまおうぜ』

一人分の足音がしたかと思うと、新吉の重みとともに、衝撃がおみつの身体へと伝わった。

どうして、上の兄一人は自分をいじめるのだらう？

新吉だけはいつも助けに来てくれるのに、父はなぜ、助けにきてくれないんだろう？

お母さんがいないから？ いや、自分だけ……お母さんが違うから？

いろいろな思いが胸にこみあげると同時に、涙があふれてくるのがわかる。

『いい！ 何をしている』

『やべつー..』

『今度は容赦しないからな。覚えとけよ、おみつー。』

聞き覚えのない低い声がすると同時に、上の兄一人の暴力が急に止んだ。

『大丈夫か？ 一人とも。全く、何ていつ連中だ』

新吉の着物についた泥を落としてやつながら、見ず知らずのおじさんがあづぶやく。

『へつらひやうだよ。こんなに、痛くもかゆくもねえや』

『お、ほりづ。いいぞ。小れこすを守つてやんないとな』

新吉の頭を優しく叩くおじさんの笑顔を見るおみつの田から、涙がいく筋も流れおちていく。

『馬鹿だなあ。泣くなよ、おみつ』

泥のついた新吉の手が、乱暴に頬をぬぐつ。

『兄上なんかに負けるなよ。俺が絶対、おみつを守つてやるからさ』

……守つてやる。

何度も告げてくれた兄はもう、おみつのもとくは違らない。

道場を出していく間際の新吉に突きつけられた冷たいまなざしが、

おみつの心を締めつけた。

「戻つてこりつしゃー。おみつ」

思いがけない言葉が投げかけられた。思わず、おみつは顔をあげる。

「私と一緒にいれば、もう、虚びられることも、疎まれることもなさいのよ」

「やうだ。私はずっと想っていたんだ。母さんいれば、兄にこじめられることもなかつたのに」と。

しかし今、死んでいる、と聞かれていた母はいつひいて、おみつの田の前にいる。

私が、母と一緒に風魔側へ行けば……。もう、こんなに哀しい田に遭わなくともすむ。

「やうよ。あなたが戻つて来るのなら、京香さんを、源二様のもとへ戻してあげてもいいわ」

おみつの考えを見透かしたかのような穏やかな表情で、お小夜が囁く。

母と一緒にければ……お姐さんを、先生のもとへ戻してあげられる。

やうすれば、兄だつて先生への怒りを解くはずだもの

私さえ、いなければ。

兄と先生とお姐さん。また、三人が元に戻れるんだ……。

母であるお小夜の言葉が、おみつの哀しみや苦しみを、ゆっくりと溶かしていくのがわかる。

おみつの心は今、風魔側へと大きく動き始めた。

## 第五章 五日目・再会・母と娘・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

次の更新は、6/25を予定しています。よろしくださいませ。

## 第五章 五日目・油断と後悔 -

実家の清水邸へ戻り、事の次第を軍太夫に伝えるよう兄に依頼した源三は、小石川養生所で康太の指定する薬をもらい、道場へと急いでいた。

一度と戻つてこないのではないかと思つていた京香が、戻ってきた。

昨夕の新吉の言葉がひつかかり、最初は半信半疑だったが、田の輝きも、おみつに対する心配りも、すべていなくなる前の彼女と何ら変わりはなかつた。

そのことが、源三を心の底から安堵させた。一度と京香を離さないとい、強く思つ。

恐らく、新吉が対峙した忍びの手合いが、京香のものにそつくりだつただけなのだろう。

そんなことよりも、早くこの薬を持ち帰り、京香を樂にしてやらねば。そう思い、薬の入った紙袋を強く握りしめて速足で歩く源三の足を、突然、聞き覚えのある声が止めた。

「源三殿」

「林殿。なぜ、ここに？」

驚きを隠せない源三の提灯に照られた軍太夫の表情は、ビードル

なく陰りがあるように見える。

「私宛に、妙な投げ文がまいましたので、」確認したく参上しました

「投げ文、ですか？」

「はい。それには、京香殿が源三殿のお宅へ戻つてこられたと記されてあります。それで一度、お目通り願えればと」

京香が戻ってきて、まだ一刻も経つてはいない。

なのになぜ、いつも早く軍太夫の耳に届いたのか。

「京香は、身体が弱つておりますので休ませてやりたいのですが… 今夜でなければならぬので  
しょうか？」

「はい。是非」

「理由を、お聞かせ願えますか？」

警戒心をそのまま声に乗せた源三から、軍太夫は目をそらす。

「先生…」

康太の叫び声が、一人の間の均衡を荒々しくやぶつた。

「康太。どうした？」

「京香が……。京香が、おみつちゃんを襲つた拳銃に姿を消しちまつたんだよー！」

「何だと？」

息をはずませながら康太が告げる事実が、源三の血の氣を一気に奪つたのがわかる。

なぜ、京香がおみつを襲う必要があるのだ？

「やはづやうか……」

「やはづ、つて、どいつ意味なんですか？ 林さん

康太が、怪訝な表情で軍太夫に問う。

「恐らく、今回京香殿が戻ってきたのは、おみつの母が仕組んだ罷。このままだとおみつの身も、危険にさらわれる」とになります。康太殿、おみつは？」

「それが……。京香は自分が連れ戻すって言つて飛び出しまつて

『先生ー。』

不安そうな様子で自分を呼んだあの時、おみつはもしかしたら、いつもなることを察知していたの

かもしけない。彼女の言葉に耳を傾け、康太を行かせていれば、こんなことには 。

「左様か。源三殿、すぐにおみつと京香殿を捜し出さねば、取り返しのつかないことになりかねません」

波のように押し寄せ始めた自責の念に囚われていた源三の心を、軍太夫の言葉が引き戻す。

そうだ。今は、過ぎたことを悔やんではいる時ではない。

京香を、そしておみつをもう一度、いじらへ取り戻さねばならぬい。

「お小夜……いや、おみつが立ち寄りそうな場所に、心当たりはありませんか？」

軍太夫が訊ねてくるが、それはこちらが聞きたいくらいだ。

操られていく京香はもとより、おみつの行動範囲すらわからないこの状況で、三人をどう捜せばよいのか、皆目見当がつかない。

「とりあえず、先生の長屋に行ってみないか？ 確か、お小夜さん近くに住んでるんだろ？」

康太の言葉にうなずいて、軍太夫とともに近くにあつた橋を渡ろうと走り出す。

その時、強い風が三人の周りを吹き抜けた。

「お待ちくださいー。」

突然、軍太夫が足を止めた。目を閉じ、じつと何かに耳を凝らしている。

「鈴の音……」

そうつぶやいた軍太夫がいきなり方向をかえ、川沿いに走り出す。

「林さん！」 「林殿！」

康太と同時に、源三が叫んだ。

## 第五章 五日目・油断と後悔 - (後書き)

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

こんばんは。作者です。更新が口付変更線を越える少し前になつてしましました。  
遅くなつてしまい申し訳ありません。

次の更新は、6／30、もしくは7／01を予定しています。

## 第五章 五日目・畏怖・

「林さん！」

突如走り出した軍太夫の背中に、康太が叫ぶ。

あの先に、京香がいる！

「康太！」

確信した源三は、康太の名を呼び、軍太夫を追つて駆け出した。

昼間の賑わいが嘘のような静けさが漂う街に、三人の足音だけが響く。

先を行く軍太夫、そして源三と康太の歩みに逆らつかのように吹き荒れる冷たい風も、今の自分を止めることなどできない。

今度こそ、京香の笑顔を取り戻す　今、源三にあるのはその思いだけだった。

「おみつ！　お小夜！」

大通りに並ぶ庄屋街を過ぎて、源三の視界が開けた途端、軍太夫の声が辺りに響いた。

立ち止まり、康太と顔を見合わせて声のした方に顔を向ける。

源三らのはるか前方に、月明かりに照らされた四つの人影があるのが見える。

「京香ー」 「おみつちゃんー」

源三は康太と同時に叫び、足早に人影に近づいた。

「……先生、康太さん」

一人を呼ぶ声こそかすれているが、返事を聞く限り、暗示にはかかっていないようだ。

「京香、聞こえるか？ 京香ー」

源三は思い切って、京香を呼んだ。

しかし、つやのある声が耳に心地いい

『先生』

といつ返事は返つてこない。

それどころか、感情を持たない虚ろな目<sup>うつ</sup>が、源三の心をきつく締めつけた。

予期せぬ冷たい汗が、背中を濡らしていく。

「一体、何のつもりだ？」

「軍太夫が険しい声で、お小夜に問うた。

「どうじゅつもつで、京香殿を使っておみつを呼び寄せたのだ！？」

「あなたと取引するつもつは、たりわらいないからです」

怒りを内に秘めた冷ややかな声が、その場の空気を一層冷たくさせた。

「その行為が、どれほどおみつを苦しませているのか、お前にはまだわからないのか！」

「あなたに、私やおみつの苦しみがどれほどわかるって言つんです！？」

解き放たれたお小夜の怒りに、軍太夫の言葉が止まる。

「ただ、風魔の血を引くというだけで迫害され、身も心も引き裂かれそうな思いをしてきた私の、そして、あなたの配下に命を狙われて江戸の町を駆け抜けていたおみつの気持ちを、あなたは考えたことがありますか？」

「なぜ、それを……」

力なく問い合わせる軍太夫の声には、明らかに動搖の色が混じっている。

「あなたは、自分の立身出世のために私を捨てて、娘の命を奪つこうといふわない人間。仲間を売るくらいなら、多少の犠牲はやむを得ないわ」

「お小夜さん。」

「やめてー もうやめてよー。」

犠牲、といつお小夜の言葉に血が上った源三を、おみつの叫びがわえぎつた。

「もうこことよ！ 私がお小夜さんと……母さんと一緒に行けば、もう誰も苦しまずにする。だから、争いのはやめてよー。」

「何言ひてんだおみつちゃん！ あんた、風魔になるために江戸に出てきたのか？」

涙をためたおみつの田が、源三の隣にいる康太に釘づけになつた。  
「違うだろ。江戸に出てきたのは、じゅりちゃんと一緒に生活を取り戻すためだろ？」

「康太さん、でも……」

「あんたが今、お小夜さんと一緒に歩いてみる。それで帰ってきた京香が正気に戻ったとき、喜ぶと思つてゐるのか？」

おみつの田から、涙がこぼれ落ちるのを源三は見る。

「いいかおみつちゃん。騙されちゃ駄目だ。あんたが一緒に歩いて喜ぶ人なんて誰もいやしない。お小夜さんだってじきに、後悔するに決まつてね。」

「後悔？ 私が？」

康太の言葉をあざ笑いつゝ、お小夜が問いかけてくる。

「ああ、やうやく」

確信に満ちた田で、康太はお小夜を見返した。

「娘と暮らせるようになれば状況が変わるとでも思つてるんだろうが、そつは問屋が卸さねえ。今度はあんたと一緒に、風魔の血を引く彼女が公儀に追われる身になるんだ。あんたにそれが耐えられるか？」

お小夜の顔が、こわばつた。

彼の姿に、源三は圧倒される。

自分に対しても物言わぬ京香を田にして動けない源三とは対照的に、康太は怯むことなくお小夜を追い詰めていく。

「悪いことは言わない。京香を返して、あんたもお上に皿を申し出るんだ。そうすりや、おみつちゃんの安全も保障される」

お小夜の微妙な心の揺れが、表情に表れたその時。

爆音とともに、白い煙幕が辺りを覆つた。

複数の足音が、源三から遠ざかるのが聞こえる。

「お小夜！」 「京香！」

軍太夫と源三の声が、重なる。

源三は、京香のぬくもりを求めて足音に追いすがるが、鼻につくかすかな香りが、その足を妨げる。

鼻の奥に焼きつく香氣じつきを追い出すよつにせき込みながら、源三はどうにか煙の中を駆け抜けた。しかし。

追い求めた京香の姿はもう、どこにも見当たらなかつた。

## 第五章 五日目・恐怖・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

大変更新が遅くなり、申し訳ありませんでした。  
次回の更新は、9月末を予定しています。  
やや不定期更新になりますが、ご了承ください。

## 第五章 五日目・焦りと隙・

「幽ちゃん！ お姉ちゃん！」

いち早く煙幕から抜け出した源二の背後から、おみつの悲痛な声が聞こえる。

源二の前方で足を止めたおみつの身体が、膝から崩れ落ちる。

「おみつちゃん！」

後を追ってきた康太が、座り込んだおみつの肩に手をかけた。

「……どうして？」

涙に濡れた声で、おみつは誰にとなく問いかける。

「どうして、私を行かせてくれなかつたの？ どうして？」

「おみつちゃん。あんた、自分の言つてゐる事がわかつてるのか？」

「わかつてゐよー。」

一人の大きな声に、源二の視線がよつやく隣に移る。

月明かりに照らされているおみつの顔から、とめどなく涙がこぼれ落ちている。

「私が行けば……お姉さんは戻ってきたんだよ」

源三の視線に気づいたのか、おみつが、こちらを見上げて言い切った。

彼女の言葉が、大きな刃となつて源三の心に突き刺さる。

「父さんだつて、お庭番としての地位を守る」ことができたのに……」

「……おみつ」

軍太夫のうつろな声が、犬の遠吠えにかき消された。

「どうして……」

おみつの声が、かされる。

「おみつちゃん！」

康太が、力の抜けたおみつの身体を支え、脂汗がにじみ始めた額に手をやつた。

「す」「い熱だ」

意識を失つたおみつの身体を抱き上げて、康太は足早に歩き出す。

「何ぼうつと突つ立つてるんだよ。一人ともー」

康太の怒鳴り声に、軍太夫と顔を見合させた源三は、言葉を発することなく後をついて行った。

……また、守れなかつた。

傾いた月明かりが降り注ぐ道場の中央に座し、目を開じたまま呪うのは、自分の非力。

葵と一人で脱走した夜も、おみつを助けて、川へ飛び込んだ夜も、そして……今夜も。

守るつと手を差し伸べれば遠ざかる、かけがえのない従姉妹。

源三は、傍らに置いた木刀を手に取り、片膝を立てて空を斬った。

血ひの迷いを振り切るつと、幾度も素振りを繰り返す。

しかし、太刀筋が空を斬れば斬るほど、源三の心のもやもやは大きくなり、苛々が募る。

どうすれば、いい。

どう動けば、京香を助け、事件を解決することができるのか　?

立ちぬくし、肩で息をしながら茫然と床板を見つめる源三の背後には、誰かが近づく。

「康太」

「相手になつてやろうか。先生」

「……おみつは」

「林さんがついてるよ。何かするんじゃないかと思つてしばらく見てたけど、おみつちゃんの手を握つたままじつとしてたから、ほつとこうと思つて」

「今、おみつは父上預かりの身だからな。忠義第一の軍太夫殿に、手出しへきないさ」

「そつか」

一番下から木刀を持つてきた康太が正眼に構えたのを見て、源三も腰を落とす。

幾度か交わされる剣先の乾いた音が大きくなつたと同時に、康太が上段から踏み込んできた。

中段から切つ先を流すが、康太の手はゆるまない。

修業時代よりも早い剣さばきに、さしもの源三も防戦一方だ。

上段からの太刀筋を、源三はかるりじて受け止める。

修行を途中で終えた康太が、自分を追い詰めていることを悟つた源三の心の中に、なぜか冷たいものが駆けめぐる。

「俺が強いんじゃないさ」

心を見透かしたかのよつた言葉を発し、康太が離れた。

同時に、源三の目のすぐ先で、康太の持つ木刀がぴたりと止まる。

「先生が、隙だらけなんだよ」

にやつと笑つた康太を正視できず、源三は目を伏せる。

「今のあんたじや、悪いが京香を救うことはできない」

遠慮のない康太の言葉が、源三の心の傷をえぐる。

「あんたがどう思つてるかは知らねえが、京香を救うためにはやつぱり、新吉が必要なんだ」

悔しいが……康太の言つ通りだ。

「つづるな目で、微笑みかけてすらくれない京香を見ただけで足がすくみ、心が動かなかつた自分で、京香を救うことなどできるはずもない。

「確かにあいつは今、おみつちゃんに對して心を開かしてゐる。だけど、京香を救いたい気持ちは、同じだろ?」

「康太」

「おみつちゃんのことは俺に任せて、あんたはまず、新吉との溝を埋めるんだ。話はそれからだよ」

康太の目が、力強く源三を励ましてくれる。

おみつのことまでおき、今、京香を救うには、新吉の力がどうしても必要だ。

新吉が帰つてきたら、今の現状をありのままに話し、協力を仰ごう。

長い間連れ添つてきた自分らだ。新吉だって、わかつてくれるはず。

冷えた空氣に身をさらし、源三は、道場で新吉が帰つて来るのを待つ。

しかし、夜が明けても、彼の姿がここに戻ることはなかつた。

## 第五章 五日目・焦りと隙・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

更新が予告より遅くなり申し訳ありません。

次回の更新は、10月7日までの間に行います。

## 第五章 五日目・苦渋・

田にもやが、田の前に広がつてこる。

その向いから聞こえてくるのは、子供の泣き声。

新吉は、顔のあの方へゆっくりと歩き出す。

『何やつしるんだよ』

『お前なんか、いなくなつたりや えぱいいんだ』

泣き声とともに聞こえる、聞き覚えのある言葉に、思わず駆け出した。

少女をはじめている一人の少年の後ろには、忍び装束を身にまとった一人の男が立っている。

男の顔に田をやつた新吉の心が、一瞬で凍りつく。

腕組みをし、冷ややかに見つめているのさ……。

(俺?)

動けない新吉をよそに、忍び装束に身を包んだその男が、悠然と三人に近づいた。

それに気づいた少女が顔をあげる。

『……兄さん』

少女から聞こえてくるはずのないおみつの声が、男を呼ぶ。

男の手が、背中に差した刀に伸びる。

(やめりー)

その意味を察した新吉は叫ぶが、声にならない。

男の刀が、少女に向かつて振り下ろされる。

(やめてくれ！　そいつは、俺が守らなければならない、ただ一人  
の )

「おみつー。」

自分の叫び声で、新吉は目を覚ました。

半鐘の鐘と同じ速さで、胸の鼓動が全身をかけめぐり、また、目の前が暗くなる。

今のは……夢？

それとも、新吉が作り出した幻か？

身体の震えを止めるべく、新吉は目を閉じたまま、何度も息を吐き出した。

する。

「気がつかれたようですね」

意識を失う直前に、自分の耳元でささやかれたのと同じ声が聞こえた。

「……てめえは」

声の主を確認して起き上がるつとするが、身体に力が入らない。

「薬が抜けるまでは、まだしばらくの時間が必要です。新吉殿」

昨夕の夜泣き蕎麦屋の主人為吉」と、おみつの祖父小太郎が、茶碗を乗せた盆を持って入ってきた。

「俺を捕らえて……どうするつもりだ」

顔色一つ変えない小太郎を睨みつけ、かすれた声で新吉は問う。

「<sup>あひよ</sup>昨夜も申し上げたはずです。今、あなた様に動かれると厄介だと」

「なぜだ」

「まずは、召し上がりませんか？ 腹が減つては何とやらですぞ」

新吉の問いかには答へず、小太郎は盆を一いつひらへ差し出す。

「いらっしゃよ。妙なものを入れられてたら敵わんからな」

「あなた様がお隠れになつては……おみつが悲しみます」

小太郎の言葉が、新吉の心を突き刺す。

別れ際に見た、泣きだしそうなおみつの顔が脳裏に甦る。

「私に引き取られてから、あの子はずつとあなた様のことを話しておられました。上の兄者にいじめられていた自分を、唯一」

「やめてくれ！」

昨日の激情にかられ、小太郎の言葉をやでやかのように新吉は叫んだ。

「どうしてあんたちは親父の前に姿を現したんだ！ あんたらさえいなけりや、おみつが産まれることも、仲間が風魔に操られる」ともなかつたんだ！」

昨日、おみつに言ったのと同じことを小太郎にぶつけるが、何も言葉は返つてこない。

ただ、辺りを飛び回つてこりであるつずづめの鳴き声が、朝が来たことを告げているだけ。

その涼やかな声音は、時折自分のためにも朝食を持つてくれた京香を思い起させる。

記憶の中の声に耳をすませた新吉の田の奥が、熱くなつた。

京香は、妹を守りたい一心で余裕を失くした自分の代わりに、おみつを守つて風魔に堕ちたのだ。

「……何で、風魔なんだよ」

自分が守り抜く。そう決意した妹に、なぜ、風魔の血が流れているのだ。

「……私らにとつても、おみつが産まれたことは、予想だにしない」とでした

おみつは、小太郎やお小夜にとつても望まぬ子供だったのか。

驚きのあまり、新吉は寝た姿勢のまま小太郎を凝視する。

その視線に気づいたのか、小太郎は一瞬だけこちらに田を向けた。

「私たちは、風魔を滅ぼした幕府……いや、徳川家に復讐するためには、様々な地へ散らばり、その場所に根を張つて生きてきました。数少ない女子は、権力者を籠絡させるため、他の男に心を開かぬよう教育を徹底して参りました。しかし、お小夜は……」

名前を出したことで娘を思い出したのか、小太郎は、少し顔をしかめて言葉を切ると、唇を強く噛みしめてうつむいた。

## 第五章 五日目・苦渋・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

次回65話の更新は、10月7日(もしくは8日)の予定です。

## 第五章 五日目・過去・其の一 予感 -

何を思い出しているのか、言葉を切った小太郎はうつむいたまま、何も言わない。

まるで、今の自分らを体現しているようなその姿を見ていられなくて、新吉は陽の入る方向に目をやつた。

風に乗る木のざわめく音が、新吉の耳を通り抜ける。

いつも聞いている町の嘗み 人のざわめきや、店を開く木戸の音が辺りにないことから、この建物が人気のない場所に建てられていることがわかる。

「私たちが紀州へ入ったのは、上様……当時紀州藩主であった吉宗様を籠絡し、紀州を内側から支配することでした。そのために仲間内から白羽の矢が立つたのが、私の娘、お小夜でした」

独り言のようご、しかし、はつきりとした口調で新吉に告げる声に、よどみはない。

「お小夜ももちろんそれを承諾し、我らは紀州へと入りました。ところが突然、私が体調を崩したことが、お小夜と軍太夫殿を引き合わせるきっかけになってしまったのです」

『……もう、大丈夫でしょう。しばらく安静にして、養生することです』

胸の痛みから頭を下げるられない小太郎に代わり、薄い水色の着物に袖を通している娘のお小夜が、年配の医師に頭を下げた。

『とりあえず安心ですな。娘さん』

行商人の格好をしている若い男、軍太夫が、お小夜の肩をねぎらうように叩く。

『……はい。一時はどうなるかと。ありがとうございました』

お小夜は安心したのか、目尻にたまつた涙をぬぐい、軍太夫に頭を下げた。

『では、私はこれにて。また明日参りますのでな』

『先生、ありがとうございました』

少し陰のある表情を崩さずに、軍太夫が医師に頭を下げた。

それに続いて、お小夜も頭を下げる。

『あの、本当に……ありがとうございました』

医師を見送った軍太夫に、お小夜はお辞儀を繰り返す。

『何も気にすることはありません。困った時はお互い様。それでは、私はこれで』

『あのー』

声音を変えずに立ち上がった軍太夫を引きとめようとするかのように、お小夜が少しきつ羽詰つた様子で呼び止める。

その瞬間、軍太夫の胸を嫌な予感が走った。

『御迷惑でなければ……またいらして下さい。この辺には知り合いもありませぬし、何かと……』

少し頬を赤らめて、うつむき加減に申し出る娘の様子を見下ろす軍太夫の顔に、笑みが浮かんだ。

『そうですね。父上様の『』様子も気になりますし。顔を出すようにいたしましょう。では』

小太郎の視線に気づいたのか、表情を引き締めた軍太夫は足早に小屋を後にした。

その背中を見つめるお小夜の目に、いつもと違う憂いがあると感じた小太郎は、少し強く娘の名を呼んだ。

『……何です？ 父上』

『あの男、気をつけろよ』

『やだ、何を仰ります。あの方は父上のお命を助けて下さった方

ではありますか』

布巾をしぼるお小夜が、呆れたような笑みを浮かべる。

その横顔に、先ほど見受けられたような憂いはすでになく、早くに亡くした妻、お遙によく似た愛くるしい微笑みを浮かべて、小太郎を見つめてくる。

『何を勘ぐつておいでです、父上。私は、お役目を忘れてはおりませんよ』

いつもと変わらないお小夜の様子は、小太郎を安堵させたものの、その一方で、一抹の不安が胸をゆっくりと支配する。

(大丈夫。お小夜は、お遙に似て意志の強い娘だ。心配はない)

いやな予感を消すように、何度も小太郎は心の中で繰り返した。

しかし。

その三ヶ月後、小太郎の不安は現実のものとなる。

## 第五章 五日目・過去・其の一 予感・(後書き)

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

次回65話の更新は、10月14日（もしくは15日）の予定です。

## 第五章 五日目・過去・其の一 確信 -

小太郎とお小夜が山奥にある小屋へ落ち着いて、もひすぐ三月になる。

『小太郎さん、だいぶ元気になつたよつだね』

近くの百姓、おたねが、野菜をかごにたくさん入れて持つてきた。

『いつもすみません』

お小夜が、恰幅のいいおたねからか』を受け取つて頭を下げる、白菜やかぼちゃが、勢によく床にこぼれ落ちる。

『ああ、お小夜さん何やつてるんだい。相変わらずおひねりじゆ  
いだねえ』

『申し訳ない。おたねさん』

ここのへ腰を据えてからとこいつもの、すつかり落ち着きをなくしたお小夜に代わり、小太郎は頭を下げる。

『いいんだよ小太郎さん。周りのみんなも、あんたらが来てくれて喜んでるんだからさ』

おたねの言つ意味がわからずにて、小太郎は首をかしげる。

その直後、子供たちが勢いよく引き戸を開けて入ってきた。

『じいちゃん、あそぼー。』

『おじいちゃん、竹とんぼひくって~』

収穫期の今、まだ農作業を手伝うことは小さい子供たちが、小太郎のもとへ遊びに来ているのだ。

竹とんぼや駒などの遊び道具を作つてやつたり、小太郎が鬼に扮してかけっこをする事も多々ある。

病が癒えたばかりの小太郎の身体には正直辛いのだが、逆に子供たちと遊ぶことで、以前の体調に戻るのが早まっているのを感じていた。

『小太郎さんが子供らの相手をしてくれているおかげで、あたしらの作業も早く助かってるんだよ』

『じいちゃん、ずっとここにいるよね?』

おたねの言葉を受けて、息子の九太きゅうたが小太郎に問いかけてくる。

小太郎は、言葉に窮した。

身体が完全に癒えたらここを離れ、お小夜を城中へ送るべく、隠密理に活動を開始せねばならないのだから。

といふが。

『当たり前じやない。何言つてゐのよ』

お小夜が、思いもしないことを口にした。一瞬、娘に視線を移した小太郎だが、驚きを隠して九太に頷いた。

『本当だね？』

九太の目が輝いた。

それを見た小太郎の心に、針でつつかれたような痛みが走る。

(何なのだ？　この感情は)

最近、自分の心が見えなくなる時がある。

自分は今まで仲間とともに、「幕府をはじめとした徳川家への復讐」への一念で過ごし、娘を育ててきた。

だが、幕府の政策のせいで貧しくても、肩を寄せ合い、明るく生きているおたねたちを見ていると、自分らの生き方が間違っていたのか、という疑問にぶちあたることもある。

……何を、考へている？

小太郎は、湧き上がる考へを必死に否定した。

「よかつた。じいちゃん達がいなくなつたら、おいら寂しいもん

……寂しい？

小太郎は、笑顔で答える九太を凝視した。

自分らは、土地から土地へ、誰にも群れることなく流れ行き、息を潜めて生きてきた。

それが当然であつたし、寂しいなんて感情は、妻亡き後、いや、風魔が滅亡とされた時から、心の中からとうとう追い出しあつたのに。

『おじいちゃん、どうしたの？ 痛いの？』

お七が、心配そうな顔でのぞき込んでくる。

『いやいや。何でもないんだよ。さあ、今日は駒を作つて遊ぼうか』

無理やり笑みを作り、小太郎は駒作りに必要な道具を取り出した。すると。

『あれ！ 軍太さんじゃないかい？』

ただでさえ響くおたねの声が、一層大きくなつた。

行商人の姿をした軍太、こと軍太夫が一礼をする。

同時に、お小夜の頬がほんのりと染まつた。

『あんたも熱心だね。ここに行商に來たつて、買う銭なんか持つてる奴はいないのに』

『何言つてゐんだよ母ちゃん。軍太さんは、お小夜姉ちゃんに会いに來てるんじゃないのか』

『 ひり！ 何ませたこと言つてるんだよ。子供は黙つとれ』

おたねのひりくり返つた声に、子供達の笑い声が小屋中に響き渡る。

しかし、九太の言葉に反応し、頬をさらに赤くしたお小夜と、頬がかすかに緩んでいる軍太夫を見た小太郎は、自分の嫌な予感が当たつてしまつたことを確信した。

## 第五章 五日目・過去・其の一 確信・(後書き)

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

次回67話の更新は、10月22日の予定です。

## 第五章 五日目・過去・其の三 願い・

恐れていたことが現実になつた夜、小太郎はお小夜に告げた。

『明日、ここを出るぞ』

いつもより低い声を発した自分を、娘は驚いた表情のまま見つめ返す。

『その理由は……お前が一番良く知っているはずだ』

『ええ。でも、私はここを離れるわけにはいきません』

『何だと！？』

声を荒げて立ち上がった小太郎を見つめるお小夜の目は、今までにない輝きを放っている。

その目を、小太郎はたつた一度だけ見たことがある。

十五年前、まだ恋人だった亡き妻が、お小夜を身ごもつたことを自分に告げた時と同じ。

『お前、まさか……』

『はい。私は、軍太夫様の御子をこの身に宿しております』

よどみなく言い切つたお小夜から目をそらすと同時に、小太郎の身体から、力が抜けた。

『何でことをしてくれたんだ……。お前の責務は』

紀伊藩主吉宗を籠絡し、徳川家を滅亡させる足がかりを作ること。

それなのに、どこの馬の骨ともわからぬ男と志仲になり、子供を身にこもるとは。

『軍太夫殿はまだ、我らの正体を知らぬ。悪いことは言わん。子は……墮すのだ』

『いやです』

『お小夜!』

『私、この子を産みます。早くに奥方を亡くされた軍太夫様とともに、新しい家族を作つて行きたいのです』

『そんなこと……皆が許すと思つか

小太郎の言葉に、お小夜が息をのむのがわかつた。

『一時の感情に流されるな。お前は、軍太夫殿とわしを重ね合わせ、同情しているだけだ』

お小夜が目に涙を溜めて、小太郎を凝視する。

『子は、墮せ。何があつても産む』とは許さん

お小夜に背を向け、小太郎は言い切った。

同時に、扉を乱暴に開ける音と冷たい風が、小太郎の身体を通り抜ける。

『愚か者め……』

小さくつぶやいた小太郎は、傍らにあつた瓶から酒を注ぎ、一気に飲み干す。

自分が身体を壊してしまったばかりに、お小夜は他人の愛にふれ、子までなしてしまった。

復讐のためだけに散らばっている仲間からすれば、これは裏切り行為だ。

しかし。

軍太夫と見つめあつた時に見せた、娘の幸せそうな顔。

それが泣き顔に変わるのは見るのは、今の小太郎には耐えられそうもない。

なぜだ？ なぜ、迷う必要がある？

一族を再興することこそが、我らの幸せ。そのためには、赤子の命など消えて構わないはずなのに。

小太郎は再度、酒を茶碗に注いで飲み干した。

迷いを消すように、何杯も酒をあおる。

だが、量が増えれば増えるほど、小太郎の思考は、迷路に迷い込んでいった。

翌朝、お小夜とともに、商人姿の軍太夫が小太郎のもとを訪れた。

『旅の途中でこんなことになってしまい、大変申し訳なく思つております』

表情を強ばらせたまま、軍太夫は深く頭を下げる。

しかし、そのふるまいからは、初めて会つた時のような沈んだ感じは見受けられない。

『私は、お小夜さんと会つて生きる気力を取り戻したも同然です。彼女がいなければ……、妻を亡くした悲しみの淵から出ることはできなかつたと思います』

妻を亡くした悲しみは、小太郎にもよくわかる。

自分は、お小夜を育てていくことでこの悲しみから抜け出すことができたのだから。

『亡き妻との間にも子がおりますので公にすることはかないませんが、お小夜さんとお腹の子供は私が幸せにします。ここに、留まつては下さいませんか』

『父上……』

お小夜が一步、前へ進み出た。

『父上を裏切つてしまつたこと、申し訳なく思つています。でも私、この手でお腹の子を抱いてやりたいんです』

お小夜の言葉を聞いた小太郎の耳の奥で、ふと、亡き妻の声が響く。

「いつか、お小夜の子供を、この手で抱きたいわね」

それは、一族が滅んだ後に体の弱つた妻が、常時口に出していた  
「願い」だった。

もし今、彼女が生きていたなら……お小夜に何と答えるだらうか？

いや、答えはもうわかつていた。彼女なら、いつまでもつむぎ違ひない。

「お産みなさい。そして、愛する人と幸せになるのですよ」

ヒ。

脳裏に刻まれていて柔らかな声を思い出した途端、小太郎の両目から涙がこぼれ落ちた。

## 第五章 五日目・過去・其の三 願い・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

更新が遅くなり、申し訳ありませんでした。

次回68話の更新は、10月28日の予定です。

## 第五章 五日目・かりそめ・

『何だと…?』

その日の夕刻、身重のお小夜を軍太夫にまかせた小太郎は、紀州の山奥から五里ほど離れた川岸でひざまずいていた。

『お小夜の使命は藩主吉宗を籠絡し、徳川家を崩壊させる一端を担うこと。それは承知してあるはずだ』

低く、抑揚のない声が、小太郎の全身を容赦なく冷やしていく。

『すべては、私の不徳の致すところです。お小夜の罪は、私がすべて請け負いますゆえ、何とぞ、娘だけは……』

赦してもらえぬとわかつてはいるが、口にせずにはいられない。

目の前の影は、何も語らない。その沈黙が、矢のように小太郎の心に突き刺さる。

『いかがいたします？　お頭』

傍らにいた目付役、平沼の鋭い視線が小太郎を射抜いているのがわかる。

針のむじろに座らされているような感覚が、小太郎の全身を冷やしていく。

目の前の人物は、なおも語らない。

沈黙だけが、辺りを包む。

『お頭！』

たまりかねたのか、平沼が叫んだ。

『…………もうよい』

『は！？』

抑揚のない声のあとに聞こえた間の抜けた叫びに、小太郎は思わず顔を上げる。

『任務を忘れ、男にうつりを抜かした拳旬にやや子を宿すような女に用はないわ。お前とて同罪。一度と、我らの前に姿を見せるな』

語尾にどげを含みながらも、お小夜を、そして自分を赦す言葉を投げかけた目の前の人物に、小太郎はひれ伏した。

一陣の風が舞う。

同時に、その場にいるのは小太郎一人となつた。

これで、お小夜は幸せになれる。

小太郎は、心の底から安堵し、何度も「ありがとうございます」とつぶやいた。

これから、自分とお小夜の身の上に、予想だにしない事態が起こ

ると知らずに　。

口を結び、何も言わなくなつた小太郎を、新吉はじつと見つめていた。

その視線に気づいたのか、小太郎は

「私も結局、非情に徹することができなかつたのです」

自嘲気味につぶやいて、小さくため息をつく。

「あなたの父君……軍太夫殿と私は、敵同士でありながら『妻を亡くした』悲しみで深く結びついていたのです。それが……私自身の判断をも狂わせる結果となりました」

「親父の……正体のことか？」

「はい。私はあの日、軍太夫殿が我らの正体を知る日まで、あの方  
が徳川家側の人間であることを知りませんでした」

「……馬鹿な。そんなわけねえだろうー？」

小太郎ほどの忍びとあろう者が、娘を孕ませた人間の素性を知ら  
ぬはずがない。

新吉はさうに注意深く、小太郎の様子を探る。

「お小夜は、感づいていたようです。おみつを産んでから、あれの顔から、心の底からの笑いが消えたのにも、私は気づかぬふりをして、問いただせずにいました。早くに死んだ妻の分まで、お小夜を幸せにしてやりたい。ただ、それだけでした」

小太郎の言葉が、新吉の心の奥底を激しく揺さぶった。

まだ、おみつの正体を知らぬ数日前。

ただ、おみつを守りたい一心で、父や兄らから彼女を隠そつと躍起になっていた自分と、小太郎が重なったからだ。

「どいつもこいつも……馬鹿だよな」

新吉は、天井から射す光を見つめたまま、誰にともなしにつぶやいた。

自分も、小太郎も。そして……源三も。

一番大切なものを守りたい。なのに、手段を間違えて失おうとしている。

「新吉様。私と、手を組んでは下さいませぬか?」

少し間を置いてからの小太郎の発言に、新吉は思わず身体を起こした。

「手を組む、だと?」

「はい。昨夜はあなた様をここへ無理やりお連れして、一味の動向を窺つてまいりましたが、お小夜が思いもよらぬ行動を起こして……。」のままでは、京香殿にも危険が及ぶ可能性が

その行動が何なのかを訊いた新吉は、小太郎の答えに愕然とする。

もし、おみつがこのまま風魔に身をやだねれば、京香は間違いなく邪魔者として亡きものにされてしまう。

しかし……。新吉はまく四を開じる。

風魔であるおみつには、一度と関わらない。そつ宣言して源三の道場を飛び出した自分が。

今さら、おみつを守るために行動を起こせと言われても、無理な話だ。

「……俺に、何をしろってんだ」

「あなた様も『存じのはずです。今宵、風魔が山城屋を襲撃する』とを」

平沼の言葉が、脳裏にひらめく。

『幕閣を搖るがす余興』 奴は確かに、そう言った。

「」のまま山城屋が襲われては、幕府の……ひいては上様の行わんとする政は地に墜ちてしまします。そつならぬためにも、

「風魔一族であるお前さんが、どうしてそこまで幕府に加担する?」

熱がこもった口調に違和感を覚えた新吉は、小太郎に問う。

「すべては、京香殿とお小夜を取り戻した際にお話しいたします。  
ご協力いただけませぬか」

これ以上問うても、堂々巡りか。ならば。

「……いいだろ？。ただし、今回限りだ」

新吉の言葉に、小太郎が深くうなづいた。

## 第五章 五日目・かりそめ・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

更新が遅くなり、申し訳ありませんでした。

次回68話の更新は、11月12日(月)の予定です。

## 第五章 五日目・発見・

源三らが氣を失つたおみつを連れ帰つてから二刻ほど経ち、陽の光はすでに、火の見やぐらの頂上まで到達している。

「……新吉のやつ、一体どうまつつき歩いてんだよ」

遅い朝食を済ませ、町へ出ようと深い青の着流しを身にまとった源三に向かつて、薄い灰色の小袖に着替えた康太が不満を口にする。

「仕方があるまい。今の新吉には、心の整理が必要なのだろう」

昨日の、憎しみに満ちた新吉の顔を思い出し、源三は顔を閉じる。

あれほどまでに守りとしたおみつが、幕府の敵である風魔一族の末裔。

もし、自分が新吉の立場ならば、それを黙つて受け入れられるかは、定かではない。

「でもよ、どこのことのかもわからねえのこ、町に出るのは無謀だぜ。おとなしく待つてるほつが」

「いや、あいつは一度言い出したら聞かぬ男だ。何が何でも見つけ出し、話しをしない」とにはな

康太は依然納得のいかない表情をしているが、動きださなければ何も始まらない。そう決意し、ふすまを開ける。

すると皿の前に、桃色の生地に白い花びらをあしらった小袖を着たおみつが立っていた。

「おみつー、寝てなればだめではないか

初めて会った時とはくらべものにならぬほど頬はこけ、顔色もあまりよくない。

「やうだよ、おみつちゃん。あんた、まだ熱が下がっていないだろ？」「

源三の横からおみつの手を握った康太も、やや語氣を強める。

「私も、兄さんを捜す。先生だけにまかせてじつといられないよ」

ふすまの脇をつかんでいる手に触れる。すると、お湯を沸かしたあと鉄瓶のように熱い。

今すぐ倒れてもおかしくないのに、源三を見上げる皿の輝きは、いつも以上に強い。

「しかし

「寝てたら、母さんのこと考えちゃう。だから……」

「ひつむわ、消え入るような声でつぶやくおみつの言葉は、思わず康太と顔を見合せた。

やはり、おみつの心は風魔に大きく傾いているのだ。

母のもとへ逃げだしたいと思つ心と、自分が行けば京香を助けられるといつ現状と。

自分でもそれをわかつてゐるから、あえて行動を起しりすいことでそれから逃れようとしている。そう、源三は思つた。

「わかつた。康太、すまないがおみつのために薬を煎じてやつてくれ」

「先生」

「おみつのことせ、俺が責任を持つ。頼む」

「……つたぐ、兄妹そろつて頑固者なんだから」

口調は乱暴でも、軽く笑みを浮かべて去つて、康太の背中を見るおみつの田から、一筋の涙がこぼれ落ちた。

康太の煎じた薬を飲み、はんとき半刻ほど休んでいたおみつとともに街へ出たときには、陽も傾き始めていた。

おみつの足取りは軽やかで、源三は少しだけ安堵する。

「……兄さん、ビニにいるんだろ? うね」

前を見たまま、おみつが誰ともなしに元ぶやく。

「さあ。馴染みの女のどこのどこで歩いてくれたらいいんだがな」

「女？ 兄さん、いい人でもいるの？」

「惚れた好いたの関係ではない。いわゆる、春を売る女ってやつだ」

「春を……売る？」

源三の言葉に立ち止まって訊ねてくるおみつだが、言葉の意味をはかりかねているようだ。

「要するに『一夜限りの関係』とこいつ」とだ

「一夜…限り。え！」

おみつの頬にかすかな赤みがさし、鳩が豆鉄砲をくらつたような表情のまま固まる。

「やだ！ 兄さんったら。いやうしいんだからー。」

頬をますます赤く染め、ふつとふくらませておみつがまた歩き出す。そして。

「まさか、先生はそんな人いないでしょ？ うん？」

「こるわけないだろ？ そんな……」

言いかけた源三の脳裏に、なぜか京香の笑顔が浮かぶ。さらば。

『先生は、京香のことが好きなんだな』

といつ、康太の言葉も。

顔中がいきなり熱くなつた源三は、慌てて首を振つた。

なぜ、こんな時に京香の顔が浮かんでくるのだ？ 彼女と自分は、れつきとしたことに同士なのに。

「やつぱり先生もいるんでしょう？ そういう人」

「何を言つてるんだ。ほら、行くぞ」

おみつの追及をかわすため、源三は彼女の背後に回つて肩を押した。

「あー」

おみつが突然立ち止まる。

「どうした？ おみつ

顔をのぞきこむと、やつと緩みかけたおみつの顔は、厳しいものへと戻つていた。

「あいつ……。紀州で、じいちゃんに話しかけてた侍だ」

「何ー？」

源三も、おみつの視線の先を追う。

頬に大きなあざのある浪人風の男が、一瞬視線を泳がせたのち、ゆっくりと歩いて行く。

そして、後をつけている様子の小柄な男を見たおみつの身体が、小刻みに震え出す。

「……じーちゃん」

おみつの、すべてを絞り出すような声が、源三の耳をすり抜けた。

## 第五章 五日目・発見・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

次回70話の更新は、11月25日(日)の予定です。  
しばらく間が空きますが、ご了承ください。m(\_ \_ )m

一人の姿が、人波に消えようとしている。

「……じいちゃん」

源三は、駆け出そうとするおみつの肩をぐっと抑えた。

「先生」

見上げるおみつの顔に、源三に対する非難の色が混じる。

「少し距離を置いて後をつけるのだ。今、小太郎殿の前に姿を見せて、何も答えてはくれぬはず」

少し熱いおみつの手を握りしめ、源三が歩を進める。

今はちょうど毎時。寺子屋帰りの子供が駆け回り、食を求める職人が、小料理屋に吸い込まれている。

しかし、今の源三には、世間の動向よりも目の前を行く小太郎、そして今回の事件の鍵を握るであるう浪人の背中しか見えていない。

隣を歩くおみつも、同じ思いだらう。

「どに行くんだろ?」「

「わからぬ。だが……」

「」の道の先には、幕府御用達の看板を掲げる大店が立ち並ぶ。

幕府を敵とみなしている風魔の人間が歩くには、似つかわしくない場所であるのだが……。

浪人が、そして小太郎が大通りを曲がった。

おみつとともに、角の家の軒先から様子をうかがう。

決して人通りの多くない場所で、浪人は辺りをうかがい、小太郎は背に負った荷物を確認するふりをして立ち止まる。

源三の手を握るおみつの手に、力がこもる。

浪人が、ある建物に入つていった。小太郎も後を追い、中へ消える。

「じいちゃん」

つぶやいたおみつが、心配そうに源三を見上げる。

「おみつ、ここを動くなよ」

念を押し、源三は一人が消えた建物に近づく。

日に焼けた、古い看板が並ぶ老舗の通りで、ただ一つ新しい看板の下に立ち、源三は息をのむ。

「……山城屋、か」

確認するようにつづぶやき、建物の間に視線を走らせる。

辺りをうかがいながら、源三の前に姿を現したのは  
の小袖に袖を通し、風呂敷包みを持った、新吉だった。

「新吉ー。」

源三はとつさに叫んだ。

大店の若旦那のように髪をきれいに結い上げた新吉の目が、大き  
く見開かれる。

「こんな所で、何をしているのだ」

立ち止まつたままの新吉に歩み寄り、源三は問うた。

「先生!」そ……何してんだ」

源三から視線をそらした新吉の声は、強張つてゐる。

「俺とおみつは今、紀州で小太郎殿に声をかけていたという浪人を  
追つて来たのだ。その浪人は、一番最初に父上がおとりになつた際、  
お前や京香に襲いかかつた浪人と同一人物に相違あるまい?」

新吉は源三から目をそらしたまま、何も答えない。

「新吉」

源三はもう一度、名前を呼ぶ。

「京香が昨夜、戻つて來たぞ」

驚いた表情で、新吉が再度源三を見た。

「そなたの言つ通り、風魔の手先としてだがな」

動かしがたい事實を告げた源三が、視線をそらす。

「……それでもまだおみつと一緒にいるなんざ、あんたも相当なお人よしだな」

新吉の低い声が、源三の心を突き刺す。

「……確かに、やうだな」

源三は、胸に広がる苦い思いとともに息を吐きだし、再度新吉を見た。

「そなたが今、おみつに心を開やす氣持ちはよくわかる。それを止める、とは言えぬ。だが、京香を救いたい氣持ちは同じであらう？」

視線がぶつかる。それだけで、源三は新吉と共通の願いがあることを実感する。

「確かに、姐さんを助けたい気持ちはあんたと同じだ。だが……俺はまだ戻らねえ」

「新吉」

「一つだけ、教えてやるよ」

新吉は、再び視線をそらす。

「あの浪人……平沼といま對馬とうまは、山城屋と同じ穴の貉むじなだ。奴らは今日、幕閣を搖るがす『余興』を考えてるよつだぜ」

「余興？」

「ああ。それに平沼とお小夜さんが昨日、連れ立つて良庵先生の所へ薬を取りに行つていた。」禁制の品だつて言つから、阿片か何かだう。……俺が言えるのはここまでだ。じゃあな」

「ちらに構わず、新吉は早足で去つていぐ。再度呼び止めたかたが、近くにおみつを一人にしておくわけには行かない。

さつきの場所に戻ると、おみつは少しだるそうに壁にもたれかかっていた。頬には発熱特有の不自然な赤みが浮かんでいる。

「大丈夫か？」

おみつは無言むごんだった。その仕草はやはり、兄の新吉にそいつくりだ。

「あいつ……どこに入つて行つたの？」

さつきよつ、少し息が荒い。立つのがやつとのおみつを支えん。

「幕府御用達の山城屋さんじやという米問屋べいもんやだ。どうやら、あの浪人と山城屋は仲間らしいな」

「御用達なのに？」

「御用達になることは、幕府の厳しい調べが入るが、山城屋はそれをうまくかいくぐったのだろうな」

山城屋が御用達になつた経緯よりも、平沼といつ浪人とともに企てているらしく、『幕閣を揺るがす余興』といつ言葉がひつかかる。

『余興』とは名ばかりの風魔の作戦が遂行されれば、きっと、御政道に多大な影響が出るのは必定。

すぐに道場へ戻りたいのは山々だが、山城屋の動向も気になる。新吉の言つとおり、平沼とお小夜につながりがあれば、京香が姿を現す可能性も否定できない。

しかし、おみつの体力はすでに限界のよつで、少しづつ源二に身体を預けていく。

「先生？」

何も言わない自分を心配してか、おみつがうるんだ瞳で見上げてくる。額からは汗が大量に流れ落ちていた。

「これから離れるのは気が引けるが、今はおみつを休ませ、兄にこの次第を告げる」との方が先決。

「おみつ。これから実家に戻るつが、つきあってくれぬか

「実家つて、おじいちゃん……じゃなくて、先生のお父さんの所?」

「山城屋のことを、兄に報告しなければならないのだ。それに、そなたの身体も心配だ」

いつもなら「」で『大丈夫』と言つてくるおみつだが、何も言わない。

源三は体勢を変えておみつの身体を背負つた。初めて会つてからわずか三日なのに、ずいぶん軽くなつたことに驚く。

「」めんなさ……先生

かすれた声でつぶやいたおみつが、規則正しい寝息を立て始めた。

祖父の安否はどうにか知れたものの、母は風魔として自分の前に立ちはだかる。

紀州でのびやかに育つたおみつにとって、今の状況はあまりにもむごい。

小さな心と身体に背負つている重い荷物に思いをはせた源三の心に、やりきれない思いが広がつた。

## 第五章 五日目・重荷・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります。  
(月1回)

更新が遅くなり、申し訳ありませんでした。

年末繁忙期に入るため、次回71話の更新は、12月中旬を予定しています。

またしばらく間が空きますが、「了承ください」――

## 第五章 五日目・現実・

「……左様か」

四半刻後、おみつを連れて清水邸へ赴いた源三の報告に、灰色の着流しの上に、薄い茶色の羽織を着た天膳が、きつく目を閉じた。

西にほぼ傾いた夕陽が障子を赤く染め、からすが遠くで鳴っている。

水をふくんだけが跳ね上がり、こん、と乾いた音が数回聞こえたのち、天膳が目を開けた。

「お主は、どうするつもりじゃ？」

鋭い目が、源三の心を射抜く。

できることならば、京香を風魔から救い出して暗示を解きたい。

感情を抑え、なるべく平静を装つて、源三は本音を口にする。

しかし。

「……それは、不可能じゃ」

「父上！」

思いも寄らない天膳の言葉に、源三は思わず身を乗り出した。

「源三」

天膳が静かに口を開く。

「お前の気持ち、わからぬでもない。だがな、我ら幕府側の人間に憎しみを抱く風魔の暗示をかけられた京香が、次に誰を狙つてくるか……わからぬお前ではあるまい？」

たてた膝の先を強く握りしめ、源三は畳のふちに視線を落とす。

その先に、昨夜見た京香の顔が浮かぶ。源三は思わず目を閉じた。田を閉じれば、唇の端をくつと上げて笑う、彼女の微笑みを思い出しができるのに。

「わしとて、可愛い姪を死なせたくない。だが」

「……私情は、禁物」

やりきれない思いをぐつといいえ、源三が低くつぶやく。

「何らかの理由で暗示が解けるのならそれに越したことはないが、そうなる前に、誰かが命を落としかねん。そうなれば……」

天膳がまた、口を閉ざす。

自分が、それとも、京香か。

今度相まみえることになつた時、どちらかが死ぬことを覚悟しなければならない。

京香を死なせるくらいなら、自分が……。

皿を閉じたまま思いにふける源三の耳に、複数の足音が聞こえる。

「御免」

兄、忠直の声が、ふすまを開く音と同時に響いた。見ると、登城する際に身につける肩衣半袴かたぎぬはんぱかまではなく、濃い灰色の着流しに黒の袴をまとっている。

「どうりでお出かけですか？」

「半刻のち、幕府御用達となつた山城屋の宴に参るのだ」

山城屋。その言葉を聞いた源三はほとりに申し出る。

「兄上。その宴、私も同行してかまいませぬか？」

「先方は幾人来てもかまわぬと申しておつたが、どうかしたのか？」

源三の声音に何かを察したのか、忠直が室内へ入ってくる。

隣に座るのを待つて、天膳が今までのことをかいづまんと忠直に話した。

兄の横顔がみるみる強張つていぐのを皿の邊たりにし、源三の心もまた重くなる。

「幕閣を搖るがす『余興』か……」

つぶやく声は、山城屋に対する怒りに満ちてゐるよつと思えた。

「忠直。すぐに軍太夫と康太を呼べ」

「軍太夫殿と、康太を?」

「左様。万が一幕閣の身に何かがあれば、上様の御政道が揺らぐは必定。源三一人では心もとないゆえ、今回だけは特例じや。すべての責はわしが負う。急げ」

「はつ」

一礼すると忠直はすぐさま立ち上がり、部屋を出て行く。

続いて立ち上がった源三に、天膳が声をかける。

「今夜のことは、おみつに決して<sup>けむ</sup>気取られてはならぬ。……よいな」

おみつが今夜の山城屋の計略を知つたなら、行くと言つてきかなかいだろつ。

山城屋に入りしている浪人が首謀者の一人なら、お小夜と……京香も、その場に現れないとも限らない。

源三は、天膳の目を見てうなづくと、頭を軽く下げる部屋を辞した。

## 第五章 五日目・現実・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります  
(月1回)。

年末繁忙期が続くため、次回更新は年明けになる予定です。

なかなか更新ができなくて申し訳ありません。また来年もよろしく  
お願いします。

今年一年、どうもありがとうございました。よいお年を

先ほどまで空を染めていた陽はかけり、闇が辺りを覆い始めた。

ひんやりとした、を通り越した冷たい空気が、針のように新吉の肌を容赦なく包み込む。

昼間は商人を装つてこの辺りを周回し、今は、小太郎とともに山城屋の動向を見張っている新吉の身体は、すっかり冷え切ってしまつていて。

しかし、身体以上に新吉の心を冷やしているのは、当たつてほしくなかつた自らの勘であった。

『京香が昨夜、戻つて來たぞ。……そなたの言つ通り、風魔の手先としてだがな』

やるせない気持ちを乗せたであらう源三の声が、新吉の脳裏をかすめる。

やはり、自分が思つたとおりだった。

あの日、夕闇の中で対峙した正体不明の一人は、京香だったのだ。

救えるものなら、救いたい。

しかし、風魔によつて強い暗示がかけられてい以上、下手な情をかけては、一いちが命を落としてしまう。

新吉は、来たるべき時が近づいているのを感じていた。

たとえかけがえのない仲間であるひとも、御政道を守るものとして、決着をつけねばならない時が 。

「どうやら、動き出したよ」

深い思考の底であえいでいる新吉の耳に、小太郎の声が入る。

思わず顔を上げると、山城屋のれんをくぐった平沼の背中が遠ざかっていくのが見えた。

「どうする？」

「どうあえず、後を追つてみましょう。もしかすれば、お小夜や京香殿が平沼と合流するやもしれません」

小太郎の口から出た京香の名に、思わず胸元の短剣を握りしめて立ち上がった。

見失わないよつこ、かつ、適度な距離を保つて、その背中を追いかける。

山城屋などの大店が立ち並ぶ大通りを抜けた平沼は、小さな川を渡る。

そこの道をまっすぐ行けば、先日、京香と対峙したあの笹やぶへ入るはず。

やはり、あの絵馬堂が奴らの本拠地か。だとすれば、そこに京香の姿もあるはず。

新吉は静かに息を吸つた。もつ……、引き返すことはできない。

「お斬りになるのですか？ 京香殿を」

小太郎からの突然の質問。しかし、新吉は切り返す。

「俺は、あんたのようになるつもりはない。御政道の邪魔をするならば、たとえ妹だらうが、容赦なく斬る」

「……そんなに、おみつが疎ましいですか？」

「許すつもりはない。俺が、姐さんをこの手で斬ると決めた以上はな」

間髪入れずに、新吉は答える。

「この事件が片づいたら、あんたの命も無いものと思つてくれ

「私の命は、どうなつてもかまいません。しかし」

いつになく低い小太郎の声が、新吉の心を捉えた。

「一つだけ申し上げます。おみつは……私の孫は、何が一番大切なことを知っている子です。あの子は決して、あなた方を裏切るよつないとはしないでしょう」

「どうこいつ……意味だ？」

意味を図りかねた新吉は、小太郎に問う。しかし彼は何も答えない。

そのとき、大きな物音が後ろから聞こえた。

新吉はとっさに、胸元から短剣を取り出す。もちろん、自分より先に振り返った小太郎の手にもそれは握られている。しかし。

「……あれは」

小太郎の顔がこわばつた。

「おい！」

何も言わずに駆け出した小太郎を追つて、新吉も走り出す。

「お小夜、どうしたのだ？ お小夜！」

珍しく、小太郎が大きな声で抱きかかえた人物の名を呼んだ。

驚いた新吉は、小太郎の背中越しに女性の顔を凝視する。

薄闇の中なのではつきりと認識はできないが、その面差しはやはり、おみつによく似ていた。

「……父、上」

かすれた声で、お小夜が小太郎を呼んだ。

「一体、何があったのだ？」

「お願いです、父上……。京香さんを、助けてあげて下さる」

「どうしたのだ？　お小夜！」

「私は騙されていたんです。平沼に。自分らとどもに行動すれば、父上もおみつも、いつかここれから取り戻してやる。ところが……」

セイジが言つと、お小夜は激しくせきこんだ。

昇りはじめた月明かりが、口元を押された指の隙間から血が流れ出でいるのを照らしていた。

## 第五章 五日目・責任・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります  
(月1回)。

大変長らくお待たせして、すみませんでした。  
今後ともよろしくお願ひいたします m(ーー)m

## 第五章 五日目・お人好し・（前書き）

### 【用語解説】

- 中間ちゅうげん：武家に奉公している女中方の部屋付の男性を指す。雑用にあたつた。

## 第五章 五日目・お人好し・

「お小夜！」

お小夜の身体から力が抜け、小太郎の声がつわづつた。

この状況から見ると、お小夜の命は風前の灯と言つてもいいだろう。

しかし、こゝにいる間にも、平沼の背中は次第に遠ざかっていく。猶予はない。

「小太郎さん」

新吉は初めて、目の前で狼狽している老人の名を呼んだ。

「ぐずぐずしてたら、平沼を見失つちまう。俺は奴を追うから、あんたはお小夜さんを安全な所で休ませてやるんだ」

小太郎が、こちらを見上げる。しかし、その目は定まらず、表情には動搖の色がくつきりと浮かんでいる。

「安全な、所……」

小太郎の所在なさげなつぶやきに、新吉は小さく舌打ちをする。

いくら、老練な忍びとはいえ、紀州から江戸へ出てきて間もない小太郎に土地勘を求めるのは酷か。

一番安全なのは、小石川療養所。しかし、ここからだとどんなに急いでも、お小夜の命の保証ができない。

「ここから、一番近い場所は……。思いを巡らす新吉の脳裏に浮かんだのは、昨日、衝突したまま別れたきりの、源三の実家、清水邸。

新吉の胸に、苦い思いが広がる。恐らく、自分と源三がおみつの出自をめぐって対立したことは、天膳の耳にも入っているはずだ。

だが、今は一刻を争う。

お小夜もさることながら、今、平沼の行き先を見逃せば、京香の命すら、あの世へ発つてしまつ。

「小太郎さん」

新吉は再度、小太郎を呼んだ。

「お小夜さんは俺が必ず安全な場所へ連れていく。だから、あんたは平沼を追ってくれ」

「……しかし」

「しじのじの言つてる時間はねえんだ。このまま奴らをのさばらせれば、今度は誰に類が及ぶのか、あんたが一番よく知つてゐんじゃないのか？」

小太郎の目に、輝きが戻る。

一瞬、意識を失つたお小夜に視線を落とすと、娘の身体を新吉に

託していく。

「平沼と、風魔のたくらみは、私が必ず阻止いたします。お小夜を……頼みます」

溢れる思いを閉じ込めるように低くつぶやき、小太郎は平沼が去つて行った方向へと走り出す。

見送った新吉は、お小夜の身体を抱き上げ、清水邸へ向かつて歩きはじめる。

しかし、足が、重い。

(……何をしているんだ？　俺は)

許せないはずだ。おみつも。そして、自分の父を籠絡したお小夜も、彼女の父親である小太郎も。

なのになぜ、自分が追わねばならない平沼を小太郎に託し、自分は、お小夜の命を救うために、決別したはずの源三の実家に向かっているのか。

田を開じたままのお小夜に視線を落とし、新吉は、自分自身をあざ笑う。

結局……自分も源三と同じ『お人好し』といつことか。

自身を鼻で笑つてお小夜を背負い直し、新吉は歩みを速めた。

「新吉さん。どうしたんですか？」

清水邸の重い扉を開けた年若い中間ちゅうげんは、新吉のなりを見て驚きの声を上げる。

無理もない。普段滅多に着ることのない小されいな着物姿で、なつかつ傷だらけの人間を背負つてしているのだから。

「事情はあとで話す。悪いがこの人を寝かせて、康太につなぎをとつてくれないか？ 時間がねえんだ」

「わかりました。旦那さま！」

中間が、天膳を呼びに中へ戻る。気まずい思いはぬぐえないが、致し方ない。

ほどなく、複数の人間の足音が聞こえて来た。

「（）心配をおかけして、申し訳ありません」

お小夜をどうにか寝かせ、家に居合させていた療養所の人間に託した新吉は、別室で天膳に頭を下げた。

「大方のことは、源三から聞いてある。順を追つて知らねばならなかつたことを、一度に知り過ぎただけじゃ」

「清水様」

「いくら軍太夫との仲がしつくり行かずとも、幕府に仇なす風魔を憎むよつ言い含められて育つたのじや。無理もない。だが」

言葉を切り、天膳が厳しい表情で新吉に向き直る。

「「」のお役目とおみつとの「」とは別問題。公私混同は今後、何があつても許さぬぞ」

新吉は無言で、深く頭を下げる。

「お前が連れてきたあの女子……。おなおみつの母親じゃな

たすがは天膳。老いても、観察眼は衰えてはいない。

「はい。山城屋を見張っていたといふが、近くで倒れこんでいたのを見つけました」

「そなたはなぜ、山城屋に手をつけておつた」

「言葉に詰まる。おみつの祖父と行動を共にしていたことを告げていいものか。

「今は、緊急事態じや。一瞬の迷いが、最悪の結果を生み出す」とにもなりかねん。それはそなたも、よく知っているはずじや」

名前は出さずとも、天膳が、風魔に墮ちている京香のことを見つめてくるのはよくわかる。

新吉は意を決して、小太郎のことも含め、昨夜からのことを天膳に告げた。

「平沼對馬とうま……やはり、奴が急先鋒だつたか」

天膳が深いため息をつき、目を閉じる。

その直後、離れの方で大きな物音がするのを、新吉は聞いた。

## 第五章 五日目・お人好し・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります  
(月1回)。

## 第五章 五日目・対決・母と娘 -

深く、暗い闇に沈むおみつの意識に、突然、悲鳴が割り込んで来た。

驚いて目を開けると同時にふすまの開く音がひびき、幾人かが歩く震動が、おみつの身体に伝わる。

おみつはゆっくりと起きあがつた。眠る前にもうつて飲んだ煎じ薬が効いたのか、身体が軽い。

布団から出たとたん、冷たい空気がおみつを包む。自らの腕で身体を抱えながら、ふすまに近づいた。

耳をすまし、誰も通つていないことを確かめて廊下に出ると、角を曲がったすぐの部屋の聞き慣れたいくつもの声が耳に入る。

「お小夜殿、決して悪いよつにはせん。その人を放すのだ」

天膳の声がお小夜の名前を呼ぶ。部屋に向かうおみつの足が思わず止まった。

(……どうして、母さんがここにいるの)

おみつは身じろぎもせず、耳を澄ます。

「……そつか。あなたは、俺と小太郎さんを分断させるために居を打つたってわけか」

新吉の声が、小太郎の名を呼ぶ。新吉は、憎んでいはずの小太郎と、行動をともにしていたのか？

「私たち風魔が、あなた達の動きを知らないとでも？　たとえ誰であれうと、私たちの邪魔をするのなら消えてもらひつかないわ」

お小夜の言葉が、新吉と小太郎に思いを巡らすおみつの胸を激しく打つた。

「おままだと……祖父が殺されてしまひ。

「ねへしゃう……」

捨て台詞が聞こえるのと同時に、強烈な足音が近づいてくる。

「……おみつ」

新吉の顔が、こわばる。

「兄さんは、じこわやんといひを知り合つたの？」

「ちよづこ。ちよづこ」

おみつから顔をそらした新吉に、おみつは腕を強く引っ張られた。

「おみつ……」

天膳が驚きの表情で、じちらを見つめる。しかし新吉はそれにかまわず

「あんたらの邪魔をするのが、実の娘でもかー?」

新吉の言葉で、おみつを認めたお小夜の顔色が変わった。

捕らえていた腕の力が緩んだのか、白衣を着た少女がお小夜を突き飛ばして駆け込んできた。

「おしませやんやん」

新吉がおみつから手を放し、おしまと呼んだ少女を抱きしめる。

おみつははじかれたように前へ出た。

「母さん……」

つぶやいたおみつの身体が、急激に冷える。

「じいちゃんを、殺すつもりなの?」

お小夜が目を瞑らす。

「じいちゃんは、母さんのお父さんでしょうー? それなのに

「それが、忍びの捷なの」

あえぐよひに、お小夜が口にする。

「あなただつて父上……、いえ、小太郎殿からそう叩き込まれて育つてきたはずじゃなー」

冷氣にさらされているはずのおみつの身体を、熱い何かが駆け抜ける。

「忍びの掟がなによ！ 風魔がなによー 私は、そんなことを知るために江戸に来たんじゃない！！」

目の奥が熱くなり、冷えたしづくがまじりから落ちる。

「私はただ、いなくなつたじいちゃんと一緒に、紀州に……」

「おえつ帰<sup>か</sup>りたかつただけ。その言葉よりも先におみつの口から出たのは、  
嗚咽おえつだつた。

祖父を追つて出てきた江戸で、出生のすべてを知った。

自分に流れる風魔の血で、源三や新吉、そして自分を受け入れてくれた京香にまで多くの迷惑をかけている。

言葉にならない思いや悔恨が、涙となつておみつの頬を濡らした。

「お小夜殿。そなたも人の子であり、人の親ならわかるはずじゃ。どれだけ、小太郎殿やおみつが苦労してきたかを」

おみつの肩を、大きな手が優しく叩く。

「おじいちゃん……」

おみつはたまらず、天膳にすがりついた。小太郎と同じにおいが、一度と戻つて来ない穏やかたつだ日々を思い出させる。

「待てー。」

つかの間の安らぎが、新吉の言葉でかき消される。

振り向いたおみつの視線から、お小夜の背中が遠ざかっていく。

「待てー おみつ」

天膳の手を振りほどいたおみつの背中に、新吉が叫んでくる。

「行かせて兄さん。このままだと、じいちゃんが殺されちゃう!」

「てめえだけは行かせるわけにはいかない。それはわかってるだろ

う

新吉が再度、おみつの手を強く握った。

「風魔の血なんて、私にはどうでもいい。私は、じいちゃんを助けたいだけなのー!」

おみつは至近距離で、新吉を強くこらみつけた。

「新吉。そなたも一緒にお小夜殿の後を追うのじゃ

「清水様、何をー?」

思いがけない天膳の言葉に、新吉の手が緩んだ。

「よいか。お小夜殿の行く先には小太郎殿だけではなく、京香もい

るかもしだぬ。今が、京香をも救つ千載一遇の好機じや

京香の名を聞いた新吉の表情が変わつた。しばらくくつむいていたが、やがて。

「……仕方がねえ。俺の足を引っ張るなよ」

何かを飲み込むようにつぶやくと、胸元から短剣を取り出した。

「おみつ。これを持つていぐがよい」

天膳が、自らの手に握っていた短刀を持たせてくれる。

「おじいちゃん」

「必ず、そなたのままで帰つてくると約束してくれ。それが、わしら全員の望みじや」

天膳の田ぐばせで、新吉に救われたおしまが、着ていた白衣をおみつに着せてくれる。

自分は、自分のままで戻つてくる。京香や、小太郎とともに。

涙をぬぐつて天膳にうなづくと、おみつは、新吉の後を追つて駆け出した。

## 第五章 五日目・対決・母と娘・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります  
(月1回)。

## 第五章 五日目・疑惑・

駆け出した新吉を追つて外へ出たおみつの肺に、冷たい空気が一  
氣に入る。

咳き込みそうになるのをぐつといひや、おみつは兄に遅れまこと  
速度を上げた。

屋敷を出ですぐの角を曲がる。武家屋敷の白壁が並ぶ小路を抜け  
て橋を渡るとすぐ、大店が立つ大通りへと抜ける道に出た。

「どこの行くの?」

小さな咳をして呼吸を整え前方に問つも、新吉は答えてくれない。

やむを得ない、か。

おみつを今、一番疎んじているのは、兄の新吉なのだから。

湧き出る感傷を振り払い、おみつは再び前を向く。すると、見覚  
えのある光景が次々と目に飛び込んで来た。

大きな建物に沿つて曲がり、少し走ると、新吉は、木戸を激しく  
叩いた。

激しく息を吐きながら上を見ると、そこには『山城屋』と書かれ  
た看板が、月夜に照らされ光っている。

「はい」

おみつよりも幼い顔立ちの奉公人の少年が顔を見せる。

「旦那さんいるかい？」

新吉が訊ねると、大きな半纏はんてんを羽織った少年は思い出したよひに  
彼を見上げ、口くちもある。

「口止めでもされたるのか」

少年はつづむき、小さな声で、勘弁してください、とつぶやく。

「悪いが、こちどり時間がないんだ。今日ここに、幕府の要職の方々が招かれてる」とは知ってるんだ」

新吉の声が次第に低くなる。「つづむく少年の身体が、小刻みに震えだした。

「お願ひ。何か知ってるなら教えて」

新吉の後ろから進み出で、おみつは少年の前にひざまずく。

少年の怯えた目が、おみつを捉える。

「旦那さんの居場所がわからないと、何人も的人が死んでしまうかもしぬないの」

少年が驚いて、新吉のいる方を見上げる。しかしまた、自らの足元を見て唇をかみしめる。

「お兄ちゃんが言つたって、旦那さんは絶対言わない。だから……ね？」

おみつは笑みを作つて、少年をまつすぐ見つめる。

「……旦那様は、いません。お客様をお連れになつて、川向うの寮に行かれました」

「川向う……」

新吉が、何かを思ひ出したよつな口ぶりでひぶやく。

「あつがとう……」

おみつせ立ち上がり、今にも泣きそうな少年の頭を優しく抱きしめる。

「行へや、おみつ」

まだ、じらりを見ない新吉につなぎ、再びおみつは走り出す。

少しでも早く、山城屋の寮に着かなければ。

「おい」

新吉が前を見たまま話しかけてくる。

「今回のことが済んだら、お前……じつあるつもりだ

すべての決着がついたら……。そんなこと、考へてもいなかつた。

風魔の血をひく自分はこれから、恐らく、幕府の人間に追われる立場になるだろ？

もちろん、小太郎も……、いや、違う。

軍太夫の話だと、小太郎と自分の正体はとうに、幕府側へ知られていたはず。

父から話を聞いた時は、不遇をかこつたことに対する怒りで気がつかなかつた。

しかし何故、自分と小太郎は、現八代將軍の紀州藩主、吉宗のもとで生き永らえていたのだ？

吉宗の配下が家族を引き裂いたから？

自身が、軍太夫の娘だから？

そんなはずはない。幕府と敵対する風魔に生きていらわれては、困るのは吉宗のはず。

……何か、ある。

父が、幼い自分を置いて江戸へ出たのも、祖父が、成長した自分をいきなり置き去りにしたのも。

幕府側の忍びと、風魔の人間。両方の血を引くおみつに関わる何かが、複雑に絡み合つているはず。

「おこー！ 何がおつとじてんだー！」

「一つしか足が止まり、地面を見つめていたおみつこ、前方から新吉の怒鳴り声が飛んでくる。

やうだ。今は、自分の出血などを気にしている場合ではない。

父親を「おきものにせんとしている母、お小夜から祖父を守り、京香も救い出さなければ。

おみつは顔を上げ、新吉の背中を追つて走り始めた。

## 第五章 五日目・疑惑・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります  
(月1回)。

## 第五章 五日目・決心・

(……おかしい)

忠直が乗る、質素な駕籠に寄り添うように歩く源三の胸に、嫌な予感が湧き上がる。

一旦は山城屋に向かつた一行は、まだ年端も行かぬ奉公人の少年からの伝言で、川向こうにある主人の寮に赴くことになったからだ。しかし、呼ばれているとされた幕閣を乗せた駕籠を、源三は見ていない。

(やはり、罷か)

源三は、次第に生い茂る森を見回し、呼吸を整える。

風魔の狙いは幕閣に対する「余興」ではないのか？

それとも、新吉に感づかれたことを察し、作戦を変更したのだろうか？

忠直を乗せた駕籠を取り囲む一行には、いざというときのために南町奉行所の捕方のうち、手練てだれの者たちが配置されており、天膳から命を受けた康太と軍太夫が、密かに着いて来ている。

もし、人通りの少ない暗がりで大人数に襲われたら、いくら軍太夫がいても歯が立たない。

それに……。

風魔の集団に京香がいた場合、否が応でも「敵として」対峙せねばならない。

源三の心が、ざわめく。

修業時代……いや、それ以前からともに過ごしてきたかけがえのない従兄妹を、自分の手で斬らねばならないのか。

揺れる自分の心を示すかのように、一陣の風が、源三のまわりを吹き抜けた。

江戸の町を抜ける川を渡つて、四半刻ほど歩いたのち、山城屋の寮についた。

さつきよりもうつそつと生い茂る木々があたりを包み、まるで四方を壁に囲まれているような圧迫感が、源三に迫つてくる。

「よつこりや、おいでくださいました」

山城屋の主、伝兵衛が姿を見せた。

源三よりも五歳か六歳上でありながら商才を現し、紀州の小さな米問屋であった山城屋を、幕府御用達まで押し上げ、吉宗の信頼も厚い。

その主人が、風魔の忍びとして幕府転覆を狙つている。

半ば言じられない」とはあるが、ここに新吉のこの平治對馬ヒガタマが現れば、彼らのつながりもはつきりするはずだ。

「そちらの方は」

伝兵衛の穏やかな視線が、源三に注がれる。

「拙者の弟で源三と申す。今は野に下り寺子屋の師匠を務めております」

忠直の言葉に従い、源三は無言で頭を下げる。

「やつですか。や、皆様がお待ちかねでござります」

一瞬、忠直が源三を見た。兄の鋭い目に軽くつなずき、一番後ろを歩いて行く。

寮全体は質素なつくりだが、材木は高級なものを利用しているのか、歩を進める際に感じる耳障りな音が聞こえてこない。

源三はまづくつとあたりを見回した。

漆喰で塗られた壁にも、木目が並ぶ天井にも、これといった仕掛けは見当たらない。

「どうぞ、こちらでござります」

一番奥の部屋のふすまを、伝兵衛が開ける。

するとそこには、忠直の上司である老中首座、飯沼大善と若年寄、  
太田主税ちから、それに勘定奉行の吉田陽之新が顔をそろえていた。いず  
れも、吉宗の信頼厚き人物だ。

「これは清水殿」

「そなたも呼ばれておつたのか」

忠直の顔を見た彼らの顔が、一様にほころぶ。

「そちらは確か」

「は。拙者しょしゃの弟、源三げんさんでござります」

硬い声で返答する忠直に続いて礼をする源三の背中を、冷たい汗  
が流れおちた。

捕方とりかたをそろえていとは言え、相手は百戦錬磨の忍び。

自分と忠直、それに康太と軍太夫だけでは、勝負はついているも  
同然だ。

せめて、この三人だけでもここから無事に連れ出さねば。

意を決し、源三は立ち上がる。

「源三、いかがした?」

「供のものに言い残したことがござりますて。少々、お時間を」

ふすまの近くで再度座りなおし手をつくと、源三はその場を辞した。

「なんだって？ 上様ゆかりの人物ばかりが？」

建物より少し離れた場所で待機している康太と軍太夫に、源三は告げる。

「飯沼様はじめ、太田様、吉田様までが亡きものにされれば、ご政道が乱れるは必定。

何が何でも、あるお方がただけでも、無事にお帰しせねばならん」

「あまりにも、分が悪すぎますな」

源三の考えと同じ意見を口にした軍太夫に、康太もうなずいた。

「今からじや新吉を捜しに行つてる余裕はねえし……どうする？  
先生」

「とりあえず、捕方から一人ほど清水様のお屋敷へ戻つてもらい、  
ことの次第を告げるのが肝要かと」

「お願ひします」

源三に軽く頭を下げると、軍太夫は表門の方へ音を立てずに走り去る。

「先生、あんたも戻つた方がいい。もし今、思わぬ襲撃に遭つたら、

忠直様だけじゃ

康太の言葉につなぎ、源三は宴が催されている部屋に戻るために振り返る。

「先生…」

康太の張りつめた声が、源三を呼び止めた。

「どうした?」

「もし、先生の前に京香が現れたら……斬るのか?」

どんな状況の時にも、明るく自分らを励ましてくれた康太の目にも、動搖の色が浮かんでいる。

京香を、斬ることになつたなら……自分は勿論、新吉や康太も、そして命を助けられたおみつも、一生消えることのない傷と罪を背負つて生きていかなければならぬ。

それならば、いっそ。

「心配するな。京香は必ず、元に戻してみせる。たとえ……俺の命がどうなるつとな」

「……先生」

驚愕の表情に変わつた康太から目をそらし、宴の席に戻るために源三は走り出した。

## 第五章 五日目・決心・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります  
(月1回)。

更新が大変遅くなり、申し訳ありませんでした。  
ようやく物語も佳境に入ります。最後までお付き合いくださいます  
よろしくお願ひいたします。

## 第五章 五日目・知られぬ想い・其の一

平沼と小太郎、そしてお小夜は、山城屋の寮へと向かっている少年から話を聞いた瞬間、新吉はそつ確信した。

昨日、山城屋の屋根裏で聞いた『幕閣を搖るがす余興』。詳細はまだわからないが、とてもなく大きな何かが動いているような気がする。

街を抜ける橋を渡り、昨日、京香と対峙した笠やぶへと入った。生い茂る笠の葉の隙間から漏れるわずかな月明かりが、新吉とおみつを照らす。

急げ。お小夜はともかく、平沼を止めなければこの『余興』は遂行され、『政道が乱れるのは必至。

「待つて！ 兄さん」

後ろを走るおみつが叫んだ。

「俺たちには時間がねえんだ。そんなこと、お前だつてわかつてるだろ？ が」

足を止めたおみつの方へ向かつ。

「あつちで、何か音がする……」

おみつが指示した方向へ視線をやる。目を閉じ、耳に神経を集中させると確かに、刀を切り結ぶような音が、新吉にも届く。

もしやあの先に、平沼と小太郎がいる?

突然、周りに風が走る。顔を上げると、新吉が結論を出す前におみつが駆けだしていた。

「おい！ 待て！」

おみつの背中を追いながら、新吉は胸元から短剣を取り出した。

「じいちゃん！」

おみつが叫ぶと同時に、月明かりが、小柄な小太郎に斬りかからんとする大柄な平沼を、新吉の田の田に映し出す。

おみつは無謀にも、小太郎をかばって平沼の前に立つた。

「ほう。あんたが小太郎殿の孫が」

おみつを完全になめ切っているのか、刀を下ろす。

「あんた、何の目的でじいちゃんを江戸に連れてきたのよ」

おみつの声もいつになく低い。

「連れてきたわけではない」

「同じよー。あんたさえ紀州に来なければ、じいちゃんが江戸に出ることなんかなかつたんだからー！」

おみつの必死の抗議に、平沼は声をあげて笑う。

「やはり、まだまだ子供だな。何もわかつておらん。小太郎殿はな

「やめろー。」

「あんたをこっちへ引き渡すのを拒否する代わりに、風魔へ戻るのを承諾したのだぞ」

小太郎が制止するのに構わず叫びた事実に、新吉が思わず叫ぶ。

「どうこいつだー？ 平沼」

「言つた通りよ。自分と孫を助けてくれた吉宗に恩を感じ、奴の子飼いになつていた小太郎殿だがな、娘の小夜を忘れることがなかつた」

余裕しゃくしゃくに答える平沼の横で、おみつは一点を見つめたまま、身じろぎもしない。

「小夜の娘を一時期、お前の父親に預けたのも、風魔に戻るために準備をしていたからだ」

「……何だと？」

自身の声が低くなるのを、新吉は感じた。

「だが、それが叶う」とはなかった。当時、將軍就任が決まつた吉宗が江戸へ出る際、軍太夫が再び、おみつを小太郎の元へ置いて行つたからだ。結局、厄介ものだったということだ

平沼の笑い声が、癩にさわる。しかし、何も言い返すことができず、小太郎とおみつを、交互に見つめる」としかできない。

「所詮、風魔は世間の鼻つまみ者よ。お前は兄や公儀の犬に恩義を感じているようだがな、いずれ、命を狙われるのほ日に見えてるぞ」

一点を見つめたままのおみつの肩を、平沼が呴ぐ。すると

「もし私が風魔に戻つたら……涼香さんを、兄さんたちのもとに戻してくれる?」

「おみつー。」

荒い息の下から、小太郎が叫ぶ。

「じいちゃんは黙つてて! じつなの? 平沼さん」

顔だけを平沼に向けたおみつの表情を窺い知ることはできない。しかし、普段よりさらに低い彼女の声には、何か、とてつもない決意がみなぎつてこるよう、新吉には思えた。

「……いいだるー!」

笑いを含んだ平沼の顔が、月に再度照らされた。

「おみつー。何を言つてゐのかわかつてゐのか!」

どうにか立ち上がり、手を伸ばした小太郎を振り払つて、おみつが歩み寄る。

直後、ひやりとした感触が、新吉の手に触れた。

「おじこちやん」、返しておいて。戻れなくて」「めんなさい。でも、お姐さんは帰つてくるから、つけて伝えて」

「お前……本氣で」「こつが、姐さんを」

見上げてきたおみつの田を見た新吉は、言葉をのんだ。

田の前にいるおみつの表情に、小太郎の過去を知った悲壮感は全く無く、瞳は、江戸へ出てきたあの頃の輝きを取り戻している。

「わよなり」

「待てー。おみつー。」

踵きびすを返し、平沼の元へ向かうおみつの歩みに、よじみはない。

「小太郎殿。今度会ひつけは、孫に寝首を搔かれぬよ」とつける  
んだな」

平沼とともに去るおみつの背せ中を見た新吉の全身から、冷たい汗  
がどつと噴き出した。

## 第五章 五日目・知られざる想い・其の一・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります  
(月1回)。

更新が大変遅くなり申し訳ありませんでした。  
次回更新は5月25日(日)の予定です。

## 第五章 五日目・知られる想い・其の一

「おみつー。」

小太郎の呼びかけに答えることなく、おみつは平沼と共に姿を消した。

新吉の手に握られた、天膳の短剣がさらに冷えていく感覺に、震える。

同時に、足下で葉が動く音がした。

すべての力を失ったように、枯草の上に座り込む小太郎を見た新吉は、体中の血が逆流せんとしているかのような怒りを感じ、彼の来ている忍び装束の肩口をつかんだ。

「何ぼさつとしてんだ！　あいつが、どんな思いで平沼について行つたかわかつてんのか！？」

小太郎が、新吉を見つめる。しかしその目は、お小夜を保護した時以上に力を無くし、心の動搖をはつきりと示しだしている。

「てめえは『おみつは俺らを裏切ることはない』そう言った。だがな、お前もお小夜も、あいつを裏切つてここまで来たんだ。あいつが今、誰のために風魔に戻つたか考えてみやがれ！」

今、おみつがいちばん大切に思つてるのは小太郎でもお小夜でも、新吉でもない。

彼女を救い、風魔に墮ちている京香、ただ一人だ。

早く追いかけなければ、京香を助けるビジョウか、おみつ自身も命を落とすことになる。

あいつは自分ひとりで京香を助けるつもりだろうが、風魔は……平沼はそんなに甘くはない。必ず、おみつが風魔に飛び込んだ真の理由を察知しているはずだ。

空を見つめたまま、何の反応も示さない小太郎を見限った新吉は、天膳の短刀を握りしめて立ち上がり、一人の後を追った。

音を立てずに廊下を進む源三の目の前には、いくつもの部屋が左右両方に広がっている。

もしかしたらビジョウかのふすまの向こうに、京香がいるかもしれない。

源三は、誰もいないことを確認してひとつ、またひとつふすまを開け、人がいないかを田で追っていく。

しかし、今まで見てきたいずれの部屋も、もぬけの空だった。

どこにいる？ 京香。

源三は心の中で何度も問いかける。

風魔が襲いかかってくる前に見つけ出し、康太か軍太夫に引き渡すことができれば理想的なのだが、ここに、主の伝兵衛以下何人の奉公人と、招かれた自分ら以外の人間がいる形跡はない。

京香の搜索をあきらめ、宴の席に戻ろうとした源三の背後から、複数の足音が聞こえる。

源三はすぐ横にある部屋の襖に手をかけて中へ忍び込み、廊下の物音に耳を澄ませる。

「ちよっと、一体どこへ連れて行くのよ」

少し低い、聞き覚えのある声に源三は息をのむ。

「せつかちだな。さつきから、約束は守ると言つてゐるだろ?」

「あなたは信用できない。だいたい、お姐さん……京香さんを兄さんに戻すなら、連れてくるのが筋でしょう」

なぜ、おみつがここにいる? しかも、おみつと話す男は、京香の居場所を知っているのか?

「心配するな。幕府子飼いの人間が数人、ここに来ている。そやつらに返せば文句はないだろう。とにかく、ここに入つてゐ。今連れてくる」

突然、襖が開いた。慌てて身を潜めた源三の前に、おみつが転がり込んでくる。

「ちよっとー 何するのよー。」

おみつの抗議に答えるもせずに襖が閉じられ、足音が遠ざかっていく。

「おみつ」

「……誰？」

小声で呼んだ自分を警戒する声が耳に届く。源三はさつと襖を開け、廊下の灯あかりを部屋の中へ入れた。

「先生ー。」

大きな声を上げるおみつの口をふき、廊下を見渡す。

誰も通らないことを確認して部屋を出た源三は、壁にかかっている灯籠の一つからうしやくを持ち出し、部屋の中央にある提灯に火を移した。

「なぜここにいるのだ？ それに、そなたを連れてきたあの男はいつたい何者だ？」

突然、おみつの顔がくもる。唇をきつく噛みしめ、膝元に視線を落とす。

「……あの男は、平沼っていうの。私が風魔に戻れば、お姐さんを返すっていうから」

「何を考えているー？ 平沼と言つ男が、京香を生きて戻すと本気

で思ったのか？」

「思つてなんかないよ。だから……自分で取り戻しに来たの」

おみつの田が、源三を見上げる。

「私にはもう、信じられる人がいないの。じいちゃんも母さんも私を裏切った。風魔つてだけで、兄さんだつて……」

こりゃ切れない涙が、おみつの頬を濡らした。

「私は、存在してるだけでみんなに迷惑をかける人間。でも、私の正体を知らないとはい、お姐さんは『新さんの妹なら、私にとつても妹同然よ。迷惑だなんて思つてない』って、言ってくれた」

だからおみつは、体調が悪くても、何を知つて傷ついても、必死で京香を救い出そうとしていたのか。

命だけではなく、京香は、おみつの心を救い、支えになつていたのだ。

おみつに寄せた京香の思いを知つた源三は、胸が激しく締めつけられるのを感じていた。

## 第五章 五日目・知られざる想い・其の一・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります  
(月1回)。

少し早目の更新になりました。『了承ください』。

次回更新は5月25日(日)、もしくは26日(月)の予定です。

## 第五章 五日目・知られざる想い・其の三・

京香のひとことが、おみつを呟えていた　その事実が、源三の心を強く励ます。

必ず、彼女を生きてこちらに取り戻さねば。そして、おみつと笑顔で再会させなければならぬ。

「先生」

頬に落ちる涙を乱暴に拭つて、おみつがほほえむ。

「心配しないで。必ず、お姐さんは私が取り戻すからね」

すべてを吹つ切つたような口調が気にかかった源三は、思わず口にする。

「京香を取り戻し、帰るのなら、そなたも一緒であろう?」

おみつの視線が、かすかに泳ぐ。やはり彼女は、死を覚悟している。

「……私が生きてたって、喜ぶ人なんかいないよ。父さんだって、兄さんだって」

「馬鹿を言え。京香が戻った時そなたがいなければ、俺は彼女に何を言われるかわからぬ。康太にも……口をきいてもらえないなるだろ? 俺は一生、そなたを恨んで生きていかねばならぬが、それで もよこののか?」

彼女の気持ちを少しでもほぐれつゝ、源三は回つて、おみつを必要としていることを話す。

「……でも

「京香の言葉を真似て言わせもらえば、風魔であろうとなかろうと、今のおみつのままでいてくれれば、それでいい」

そう。それでいい!

京香が命がけで守りたとしたら、真っ直ぐで留むこねむつのままで  
いてくれたら。

京香がいなくなつて以来、胸の奥底でくすぶり続けていたわだかまりが、ようやく溶けていくのを源三は感じた。

「ありがとう……先生」

な」やかな空気が室内を包んだその時、いきなり近くへ足音が複数聞こえた。

「……來たな」

表情を引き締め、おみつもうなずく。

「お姉さんは、来てないね」

源三も同じことを思つていた。

男の足音が、一、三人分。

恐らく、おみつが「こへ来た目的を知つて、利用せんと打ち合わせでもしていったのださう。

「何か持つてゐるか？」

おみつは小さく首を振る。

源三は、胸元に忍ばせておいた短刀を、おみつに手渡した。

提灯の明かりを消して長身を抜き、刃を返す。峰打ちの態勢だ。

足音がとまる。

同時に、襖をはさんで一人は身構えた。

襖が動き、人影が中へ入る。

男の肩をめがけて振り下ろした刃は乾いた音を立てて命中し、人がくず折れた。

動搖したもう一人の男の足をおみつが引っ掛けた。

勢いよく倒れこんだ男の背中に乗つて上半身を無理やり起こして、

源三が訊ねる。

「平沼が連れてきた女性がいるはずだ。彼女はどこだ？」

髪の毛を無造作に結つた男は、答えない。

「言わないと、これがあなたの喉元に突き刺さることになるよ」

切つ先を男の喉にあてがい、おみつが低い声で続ける。

源三も、奴の首を締めあげた。

「ま、待て……話す。平沼様が連れて来た女は、宴の席へ……」

宴の席 奴は、京香を使って幕閣の要職にある飯沼りの命を狙つているのか？

後ろから首の付け根に当て身をくらわせ、源三は立ち上がる。

「先生。宴つて何？ 奴ら、何を企んでるの？」

おみつの不安そうな眼差しが、源三を見据える。

ついに、きたか。

風魔に操られている京香と、対峙する時が。

源三は手短に、今夜ここへ来た理由を告げる。

「兄さんも、山城屋で同じこと言つてた。まさか、あいつはそのためにお姐さんを？」

「田をやうぢやう」と、源三はうなづく。

おみつの表情が一気にこわばった。

じつと一見を見つめ、何かを断り切るよつこまつへ皿を開じると、  
しばりだすよつぶやく。

「…………許せない」

「行くぞ、おみつ。俺たちの手で必ず、この企みを阻止するのだ」

強くうなずいたおみつとともに、源三は、半開きだった襖を勢い  
よく開け放った。

## 第五章 五日目・知られざる想い・其の三・（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけすると励みになります  
(月1回)。

次回更新は5月28日～6月1日の間を予定しています。  
ご了承ください

## 第五章 五日目・悪夢・其の一

犬の鳴き声すら届かない静寂な空氣の中。

宴が開かれている部屋に向かい、源三とおみつが歩き出す。

必ず、風魔の陰謀を打ち砕き、京香を救い出す  
おみつも、気持ちは同じだらう。

「先生」

傍らのおみつが、袖口を軽く引いた。

足を止めて、角に身を潜める。

平沼を筆頭に、汚れた着物にほつれた袴をはいた何人かの浪人の後ろ姿が、ゆっくりと遠ざかる。

その中には、鮮やかな青の振り袖を身にまとう、小柄な女性の姿もあった。

「お姉さん……」

おみつがつぶやく。

このまま一人で乗り込むのも手だが、外で待機している康太や軍太夫の手助けも必要になるか。

「おみつ、申し訳ないがここから表へ出て、康太と軍太夫殿に知ら

せてくれぬか?」

「康太さんと、父さん?」

おみつの声が、少し低くなる。

「」のまま一人で行くより、少しでも手鍊てだれのものが多い方がいい。  
敵が何人現れるか皆田見当あたがつかぬしな」

「でも」

「大丈夫だ。軍太夫殿ぐんたゆうだつて、我々とともに闘たたかうそなたを見ればきっと、考えを改めてくれるはずだ」

不安そうにこちらを見ていたおみつだが、時間がないと悟ったのか、黙つてうなずき、障子の向むかへ消える。

源三は大きく息を吸い、宴の開かれている部屋の扉を開けた。

「遅かつたではないか」

厳しい表情を崩さぬまま、忠直が耳打ちをする。

「それが……」

辺りが盛り上がりしているのを確認し、おみつのこと、そして京香がこの宴に利用されようとしていることを告げる。

「源三殿、渋い顔をしてどうされた? も、」は一献いつけん

すでに頬を赤く染めた勘定奉行の吉田陽之新の勧めで、酒を口にする。

「わや、いじからは綺麗じいろも加わって頂きましょうか」

伝兵衛が軽く手を打つ。

すると、何人かの芸者衆が笑みをたたえて室内へ入つて来た。

「……源三」

低く呟き呼んできた忠直にならつて、視線を動かす。

笑みを浮かべてはいるものの、芸者衆の田はなひりで、肌の色も透き通つたように白い。

そして。

芸者衆の列の最後に、京香が入つて來た。

あまりにも変わった姿を見て、胸がかきむしられるように痛む。

いつも以上に白い肌。大きな目には以前のような力強さはなく、ただでさえ細かつた顔の輪郭は一回りも細くなり、頬はこけている。

しかし、すでに酔いが回つている彼らはそんな芸者衆の様子に気づくことなく、頬を緩め、思い思いの芸者をはぐらせ、声をあげて笑っている。

京香は、源三らの真正面に座している老中、飯沼大善の隣に座し

た。

一瞬、忠直と視線を合わせ、京香の様子を注視する。

飯沼に向って笑みを浮かべ、お酌をする姿は以前と変わらず、優雅だ。

「まあ、何をそんなに怖い顔をなさつておいでです？」

源三よりやや年上に見える、黒い振袖にふくよかな身体を包んだ芸者が、二人の間に座った。

「お姉さん、飯沼様の横に座つてこる芸者さん、なんていう名だ？」

忠直が少しきだけた口調で、彼女に訊ねる。

「ああ……あの人。ここ最近山城屋さんのお氣に入りになつた、京香さんとか言う人です。何でも、かなりの売れっ子さんだとかで」

「ひひひ、まわしてもうわけにはいかんか？」

忠直が口の端をややあげながら問う。

京香を近くに置いておく方が、何か起きたときに保護しやすいだ  
ら。

しかし、田の前の芸者の反応はかんばしくない。一瞬、伝兵衛の方を仰げよう見つめる。

「如何されましたか？」

視線に気づいた伝兵衛が、ゆっくりと歩み寄る。

忠直は少し酔ったふりをして、先ほどと同じ問いを伝兵衛に向けた。

「これはお田が高い。ですがよりきれい所を準備しておりますので、しばしあ待ちを」

伝兵衛が立ち上がり、部屋を出ようとしましたその時。

乱暴に襖が開き、浪人たちが部屋になだれこむよつに入ってきた。

室内に、芸者衆の悲鳴がひびく。

そして。

「この続きは、あの世に行つてから楽しんでもらおつか

長刀を肩にかけた平沼が、悠然と入ってくる。

源三は傍らに置いた刀に手をかけた。

「おつと。その刃を抜けば、あなたの一番大切な女が、『政道を乱すことになるぜ』

平沼が一步引く。

「飯沼様！」

隣にいる忠直が叫んだ。

その視線の先には 。

飯沼の喉元に刃を突き付けていた、京香の姿があった。

## 第五章 五日目・悪夢・其の一・（後書き）

更新が予定より大変遅くなり、申し訳ありませんでしたm(ーー)

## 第五章 五日目・悪夢・其の一・

源三と別れたおみつは、注意深く辺りを見回し、竹で作った垣根を越えた。

綺麗に整えられた庭には、幸いにも見張りの手はなく、あっさりと外へ出ることができた。

しかし、安心はできない。こいつしている間にも、源三が風魔に操られている京香と対峙しているのかも知れないのだから。

「そこへ何をしているー。」

康太と軍太夫の姿を捜すおみつの背後から、声がした。

おみつの身体がこわばり、源三からもらった短刀に思わず手が伸びる。

ゆっくり振り返ると、長い棒をもつた捕方らしき男が一人、おみつに向かって歩いてくるのが見えた。

康太と父に会うために、どう切り抜けばいい？　おみつは、近づく彼らを見ながら必死に考える。

「ソーリーは今、出入り禁止の場所だ。なのになぜ」

「私……ソーリーから逃げ出してきたんですね。えらいお侍さんと、外に出れば小石川養生所の先生と、上様おつきの人がいるからって言われて」

尋問せんとする捕方の言葉を遮りて、おみつは訴えた。

「えらいお人、といふと?」

「お名前は聞かなかつたけれど、とても背の高い人です。そのお二人のところに行けば、もう安心だよ、って」

訝しげに見る二人から目をそらし、両手を胸の前で組む。

「……そうか。よく逃げ出してこれたな。わ、じつちへ来なさい」

つづむいたまま、捕方の後をついて歩きだす。

「待たれよ」

背後からまた、声がする。

「林様」

捕方の言葉に、おみつの足が止まつた。正体がばれぬよう、深く頭を下げる。

「その娘は何者ですか?」

「清水様に助けられ、逃げ出したもの您的です。林様と康太殿のところに行けば安心だと教えられたとか

「承知しました。私が責任を持つて康太殿のところへ送り届けましょ

軍太夫の言葉に、二人が身をひるがえして先ほどの場所へ戻つていぐ。

「顔を上げろ、おみつ」

彼らの足音が聞こえなくなるのを確認して、軍太夫が声をかけてきた。

やはり、ばれていたのか　おみつは、唇をかんで軍太夫を見据えた。

しかし、兄、新吉と同様、父もおみつを見つめはくれない。

「なぜ、お前がここにいる？」

「早く康太さんの所に連れてって。このままだと、京香さんが風魔に利用される」

「何ー？」

おみつは、源三から聞いたことのすべてを軍太夫に打ち明ける。

そして。

「私はただ、お姉さんを先生や兄さんの所に帰してあげたい。だからここにいるの」

軍太夫が初めて、おみつを見た。

「いいのか？ 京香殿を取り戻すといつゝとは、小太郎殿やお小夜と決別することを意味しているのだぞ」

「構わないよ。私が風魔にいる意味なんてビームもない」

母のみならず、祖父も自分を裏切っていた。

改めて思う。

自らの野望を達成するためなら、家族ですら犠牲にしようとする忍びの世界など……大嫌いだ。

「せうか。なら私はもう何も言わん。京香殿を救い出し、この事件が解決したらビームでも行くといい」

忍びの掟に従い、娘であるおみつの命を狙っていた父に言われるまでもない。

京香を無事に源三らのもとに帰したら、皆の前から姿を消す。

すでに源三に見抜かれてはいるが、自らの決意をもう一度反芻し、うなづく。

親子の間の張りつめた空氣を断ち切るような足音が聞こえた。

「林さん！ …… おみっちゃんも。どうしたんだ？ 一体

おみつの姿を認めた康太が、驚きの表情を浮かべる。

「康太殿、いかがされた？」

「あつと……。中で動きがあつたみたいだ。女性の悲鳴が」

(……お姉さん!)

康太が言い終わらぬうちに、おみつは駆けだす。

「おみつちゃん!」

「急いで!」のままだと……お姉さんと先生が!」

康太らの返事を待たずに、おみつは竹垣を飛び越える。

同時に、呼子笛の音が辺りに鳴り響く。

「何者だ!」

その音に反応したのか、建物を取り囲む浪人衆が、おみつの姿を認めた。

短刀を構えるおみつの横に、康太と軍太夫も到着して身構える。

「おみつちゃん。絶対、みんなで京香を連れ帰るうな

風魔の企みを軍太夫から聞いたのか、康太がおみつに耳打ちする。  
京香がいなくなつてからずっと、家族にすら裏切られていた自分  
を支えてくれていたのは、康太だった。

風魔の末裔であると聞かされてからも変わることなく、勇気づけ

て励ましてくれていた。

そんな康太の言葉に応えたい。でも。

(ありがとう康太さん。私は……)

康太の言葉にうなずくことなく、おみつは浪人衆の中へと斬り込んでいった。

## 第五章 五日目・悪夢・其の三・

浪人が振り下ろしてきた刀をよけたおみつは、短刀を逆手で振り上げる。

悲鳴とともに、すぐに一人がくず折れた。

その手からこぼれ落ちた刀を拾い、再度身構える。

自分がひとりを斬る間に、康太と軍太夫は何人も浪人を斬つていいく。

しかし、三人に向かってくるその数は圧倒的に多く、なかなか建物までたどり着けない。

早く京香を救い出し、洗脳を解かなければ。

降りかかる火の粉を振り払うのが精一杯のおみつに、焦りが出てくる。

そんなおみつの神経を逆なでするように、一人の女が立ちはだかつた。

「……母さん」

おみつはぐつと唇を噛みしめ、母、お小夜を凝視する。

「おみつ。あなた、何をしているのかわかつてます?」

まるで小僧な子供をあやすよつて、お小夜が口を開く。

「わかつてゐる」

「あなたのいるべき場所は、風魔なのよ。私のそばなの。なのに  
「こるべき場所は、私が決める。目的のために家族を犠牲にする忍  
びの世界にいる気はないわ」

母の言葉をれえざり、おみつは言い切った。

お小夜の顔が、悲しげにゆがむ。

「そう……。ならば私は、あなたを斬らなければならぬわ

お小夜が胸元から短刀を取り出した。

同時に、おみつに斬りかかる。

持つている刀を水平にして、お小夜の刃を受け止める。

振り払つと、おみつは上段からお小夜に斬りかかった。

身をひるがえしたお小夜が、胸に手を入れた。

とつそこに身を伏せると、頭上で何かが刺さる音がした。

顔を上げた次の瞬間、お小夜の刀がおみつの頬をかすめて、背後の木に刺さる。

(しまつた!)

すぐそこには、お小夜の顔が見えた。

傍らに立てる刀を取りうとしたおみつの手を、容赦なく踏みつけた。

「……！」

「父上に相当鍛えられていうよ！」だけれど、まだまだね

つぶやくお小夜の顔は、むきあままでぱりぱりして変わって、冷淡で、感情のないものになつている。

これが、忍びの怖さか。

額から、冷たい汗が頬に落ちる。

「もう一度だけ訊くわ。」戻る気は

「戻る場所なんていらない！」

ひたひたと迫る恐怖感を振り払わんと、おみつは叫んだ。

「そう……」

おみつが手にしていた刀を、お小夜が無表情で拾おうとした。

そのお小夜の手をねじりあげて倒し、馬乗りになつて刀を握った。

「私を……刺せるの？」

おみつは田を見開き、お小夜を見つめた。

「刺せば、あなたも私と同じになるのよ」

天下をひっくり返す　　ただ、それだけのために、娘を、孫を裏  
切つて来た母や祖父と。

公儀御庭番という自らの立場のためだけに、おみつを殺そうと動  
いてきた父と、同じ。

鼓動が大きくなると同時に、みぞおちに痛みが走った。

力が抜け、前のめりになつたおみつの首に、お小夜の手が食い込  
む。

息ができない。

意識がもうひとつとする中、源二が、康太が、そして京香が、おみ  
つの脳裏に浮かぶ。

(……違う)

自分がお小夜と対峙しているのは。

自分を信じ、助けてくれた人に恩返しするため。

おみつは力を振り絞つて、自らの拳をお小夜の身体に叩きつけた。

お小夜の手が、首から外れる。

そのままわきに転がり込んだおみつは、刀を手に取り、決着をつけようと振り上げる。

しかし、背後からつかんできた手が、それを許さない。

「……父さん」

「！」から先は、私に任せてもらおう

軍太夫が、せき込み、ようやく立ち上がったお小夜と向き合ひ。

「もともとは、私が決着をつけねばならぬ相手だったのだ

「でもー。」

「お前の目的は、お小夜を斬ることではあるまい！』

おみつを見ずに、軍太夫が叫ぶ。

その視線の先には、空いた襖からの灯りが闇夜に浮かぶ「裏の部屋」がある。

「早く行け！」

お小夜の刃を受け止めた軍太夫が、再度叫ぶ。

父の言葉に背中を押されるよつとして、おみつは、京香と源三のいる部屋へ向つて走り出した。

## 第五章 五日目・悪夢・其の四・

京香の持つ短刀が、飯沼の首筋 急所に当たつている。

あの場所を斬られれば、出血が止まらなくなり、飯沼はすぐに命を落としてしまうだろ？

源三も、隣の忠直もなすすべがない。

「さんざん邪魔をしてくれたようだがな、これでもう終わりだ。まさか吉宗も、自らが組織した人間に腹心を殺されるとは、思いも寄るまい」

平沼の言葉が、源三の怒りに火をつけた。

「勝手なことを申すな！ 自らの所行を棚に上げて上様に逆恨みし、幕府転覆のために、いたいけな少女を利用しようと企むとは……許せん！」

「吠えるのもそれまでだ。やれ！」

平沼が叫ぶ。

同時に呼子笛の音が高らかに鳴り響き、外がにわかに騒ぎだす。

( のるかそるか！ )

平沼の注意がそれのを見た源三は、そばにあつた杯をとり、京香に向けて、強く投げた。

手首に当たった反動で、京香の手から短刀が落ちる。

「飯沼様！」

忠直が叫ぶ。

飯沼は京香を突き飛ばして刀を手に取り、立ち上がる。

「おのれ！」

飯沼に襲いかかる刃を、駆けつけた忠直が払いのける。

再度、一人の刃が、激しい音を立ててぶつかりあう。

そのまま部屋の隅へと移動した一人の陰から、一人の芸者が姿を現す。

「……京香」

源三は息をのむ。

こちらを見た京香の目は鋭く、今にも斬りかかってきそうな殺気をたたえている。

手を伸ばせば、取り戻せるのに。

夜明け前に感じた恐怖とはまた違ついやな予感に、源三の足は再びすくむ。

「私はずっと……」の時を待っていました

「何?」

田をそらし、かすれた声でつぶやく京香に、源三は問つ。

「私とあの人的人生を狂わせた幕府に復讐する……」の時を

再度じらじらを向くと同時に、京香はからざしを源三に振りかざした。

自身を守るために出した手の甲を、生温かい液体がすべり落ちる。

「京香……」

暗示が強い分、ためらいなく襲いかかってくる京香の動きは、いつもより数段早い。

次々と襲いかかってくるかんざしの先をよけるだけで精いっぱいで、彼女の動きを封じるすべは見当たらない。

鋭い痛みが、今度は頬に走った。

頬の血をぬぐい後ずさつする源三に、一步、また一步、京香が近づいてくる。

やはり、だめなのか?

京香への暗示を解き、生きて取り戻すこととは不可能なのか。

源二の胸に、絶望感がよぎった時の時。

「やめーー。お姐さんー。」

おみつが、皿身と京香の間に割りに入る。

「おみつー。」

「先生、おれいぬぢや黙田だよ」

まるで皿身の心を見透したかのようにおみつの皿葉が、源二の心を打つ。

「お姐さん」

おみつが、京香に向を直す。

「い」あんな。私のせこでお姐さんをいじなに遭わせつけつて

京香の動きが、止まつた。

今まで、怒りの色をたたえていた田で、おみつを凝視する。

「でも……お姐さんのこねぐき場所は、いじりじゃないんだよ」

みつくつと、おみつの背中が京香に近づく。

「先生と、兄さんと、康太さんが……」うふふ。おじこひやんや忠直様だって、みんな待つてる」

おみつが、京香の手からかんざしを取り上げた。そして。

「だから、帰るの？」

おみつの口に焼けた手が、京香の白い肌を包む。

「……紀州に？」

思いがけない京香の言葉に、源三は驚く。しかしおみつは動じる「」となぐうなずいた。

「そう。みんなで紀州に帰るの。ね」

やや背の高いおみつを、京香がまるで子供のような顔をして見上げた。

しかし。

「おみつー。京香ー。」

京香の背後に近づく浪人を見た源三は思わず叫んだ。

動きを止めたままの京香をかばったおみつの背を、浪人の刃が斬り裂く。

「おみつー。」

「おみつちゃんー。」

源三が叫んだ直後、部屋に入ってきた康太がその浪人の脇から逆

袈裟に斬り抜いた。

さらに襲いかからんとする浪人、忍びに相対する形で、康太が再び廊下へ出る。

痛みに顔をゆがめ、ぐず折れるおみつを受け止める形で、京香もその場に座り込む。

「おみつー しつかりいたせー！」

駆け寄った源三は、京香からおみつの身体を取り取り、肩口から背中にかけての傷に手を添える。

傷自体は浅いようだが、出血が多いのか、着ていた白衣がみるみる赤く染まっていく。

「先生……」めんね

源三の腕に支えられたおみつが、源三の手を取る。

「何を謝ることがある」

「私がいなければ、お姐さんは……こんなことにな

激しくせき込んだおみつは、力を振り絞って源三の腕を辞し、そのまま京香の方へ倒れ込む。

おみつの手が、京香の振袖の袖を強くつかんだ。

「……お姐さん、目を覚まして。先生と……一緒に……」

顔をあげて、力なくつぶやいたおみつはそのまま、京香の腕の中で意識を失った。

## 第五章 五日目・覚醒・

「おみつー。」

意識を失ったおみつの身体から、京香の胸に身を預ける形で力が抜けた。

源三はとつぜん、京香の膝先に置かれたおみつの手を取り、脈があるのを確認する。

「…………い？」

突然、所在なさげな京香の声が源三の耳をかすめた。

「…………あおこ？」

あおい？

意味がわからず、反芻した源三の脳裏に、幼子の泣き顔が浮かんだ。

京香を慕い、ともに脱走した夜に、何らかの理由で命を落とした少女。

彼女の心は今どきを……いや、どの時代を彷徨っている？

「違う京香！ その子は葵ではない。」

京香が顔を上げた。しかし源三を見つめる目はまるで、行き先を

失った小さな子供のようだ。

源二はとつれい、京香の頬を強く叩いた。

「戻つて来い！ 京香」

風魔でもなく、葵を喪つたあの夜でもなく、源二と、仲間たちの元へ。

頬を押さえ、しばし動かなかつた京香だが、再び、ゆっくりと顔を上げる。

「先……生」

京香が、久しづりに源二の通り名を呼んだ。

見上げてくる瞳にはいつもの穏やかな光が戻り、京香が闇から脱出したことを物語る。

「そうだ、俺がわかるか」

さうしながら、京香の肩に手をまわし、こみ上げる想いをじっと堪える。

「二の子は……」

京香が再度、視線を落とした。源二はそつと、彼女からおみつを引き離す。

「……おみつやん！」

京香が、源三の腕の中で手を閉じるおみつを見つめた。

「どうして……」

「お前が殺したも同然だ。なあ、京香さんよ」

京香の言葉をさくらんように、忌々しい声が源三の背後から聞こえた。

振り返るとそこには、腕や頬に傷を作った平沼が、肩で息をしながら立っている。

「私……が？」

平沼を見上げた京香が突然、顔をゆがめて頭を押された。

「京香！ 大丈夫か！？」

激しくせき込む京香の肌からは血の気が失せ、額には冷たい汗が浮かんでいる。

「そろそろ薬が切れたようだな。暗示が切れたお前さんにはもう用はねえし……あんたともども、あの世へ行つてもらおうか」

下卑た笑みを浮かべた平沼が、悠然と刀を振り上げる。

(「の二人だけは……俺が守るー」)

源三は京香の腕を引き、おみつともども守る形でその場に伏せる。

しかし、平沼が振り下ろすであろう刃は源三に届かず、重い荷物が倒れるような衝撃が、源三に伝わった。

体を起こし振り返る。

すると、逆袈裟に振りぬいた形で腕を上げた、一人の男の足元に、脇から首筋までを裂かれた平沼が、目を開けたままで絶命していた。

「遅くなつてすまなかつたな、先生」

平沼を斬つた男が、こちらを見下ろす。

「……新吉、そなた、どうして

問い合わせる源三には答えず、新吉は襲いかかってきた忍びの首筋に刃を滑らせた。

「ぼさつとしてんなよ。まだ終わつてねえだろ」

おみつを京香の隣に横たえた源三は、近くに落ちていた平沼の刀を取り、示現流の「満」の形をとる。

「引け！ 引け――！」

何者かが叫び、残つた浪人、忍びらが一斉に表へ飛び出す。

外には何十人の手鍊がいる。きっと、何人かでも捕らえてくれるだろ？。

隅に固まっていた芸者衆を、捕方が廊下へ連れだすと、辺りは静寂に包まれた。

「先生！」

部屋の外にいた康太が、血相を変えて源三の元へ駆け寄る。

「てめえ、今までどこに行つてた！」

傍らにいる新吉へ掴みかかるつとするが、結つた髪を乱した忠直に止められる。

「今はそれどいつもはあるまい。一刻も早く、京香とおみつの手当をせねば」

「ソレから近い診療所はどこだ？」 康太

「ソレだと……どんなに近くても良庵先生のところだぜ」

康太が、京香を抱き上げた源三の間に慌てた様子で答える。

「よし、案内してくれ」

うなずいた康太が、おみつを抱き上げようと膝を折る。しかし、横から入る形で、新吉がおみつの腕を自らの首に回し、そのまま背負つた。

「新吉」

驚いた顔の康太を見ずに、新吉が最初に廊下へと出る。

「源三、俺は幕閣の方々を送り届け、上様に報告せねばならん。二人を頼むぞ」

忠直も、新吉の後を追つようにしてこの場から立ち去る。

「康太、林殿はどうした?」

「わからねえ。おみつちゃんを追つて中へ入った時にはぐれちまつた」

軍太夫の安否も気にかかるが、今は、京香とおみつの命を優先しなければ。

「行くぞ、康太」

死体が転がり、あちこちに血しづきが飛び交う辺りを見回す康太を促し、源三も部屋を後にした。

## 第五章 五日目・永い夜・其の一

部屋をほのかに灯す炎が、風にあおられて揺れる。

犬の遠吠えすら聞こえない静寂の中で、源三と新吉は言葉を交わさず、部屋の中央で提灯をはさんで座つていた。

あれから四半刻もかからず診療所へついた一行に、良庵は嫌な顔一つせずに対応してくれている。

京香は、暗示をかけられた際に使われた薬を特定するために、良庵に預けられた。

おみつの傷口を縫うために、康太が手術を行つている。

「姐さんの暗示は……解けたのか？」

提灯の炎を見つめたままで、新吉が訊ねてきた。

「ああ。おみつが、命がけで解いてくれた」

思いもかけないことだったのか。妹の名を聞いた新吉の目が、源三を見た。そして。

「……あいつが今、心から信用してるのは、康太と姐さん、それに先生くらいのもんだろうな」

まるで自分の考えの中に沈むよつこ、視線を落とす。

『じいちゃんも母さんも私を裏切った』

伝兵衛の屋敷でおみつが口にした言葉が、脳裏に浮かぶ。

「おみつは、小太郎殿にも裏切られたようなことを話していたが、それは……」

新吉へ問い合わせた言葉を書き消すよつた足音が、こちらへ近づいてくる。

やや乱暴に襖を開ける音がした。

「……父上」

血相を変えた天膳が、忠直を伴つて入つてくる。

「二人の具合はどうじゃ？」

いつになく質素な、薄い茶色の着物に同色の羽織をまとつた天膳が、新吉の横へ座した。

源三が一人の今の状態を話すと、新吉が一本の短刀を横へ滑らせる。

「これは……」

「おみつからの預かりものです。自分は戻れないけど、姐さんは必ず戻るから、と」

天膳のしわだらけの手が、短刀をつかむ。

「あんな少女に……辛い思いをさせてしまったの」

天膳が、思いを封じ込めるように目を閉じる。何があつても動じない兄も、ただならぬ父の様子に目を伏せた。

獣の遠吠えが、遠くに聞こえた。

どれくらいの時がたつただろう。

また、足音が近づいてきた。入口に、皆の視線が集中する。

「康太……」

「大丈夫。傷口の縫合はうまくいったし、意識も戻ったよ」

血に染まつた白衣を脱ぎながら告げた康太の言葉に、張りつめていた空気が一気に和んだ。

表情を変えずに見つめていた新吉が突然立ち上がる。

「おい、お前に行くんだよ？」

廊下へ出ようとすると新吉の腕を、康太がつかむ。

「おみつに、会わせなきやいけない人がいるんでな」

今度は康太の目をしつかり見つめて、新吉が部屋を出た。

「誰だ？ 会わせなきゃいけない人ってのは」

背中を見送った康太をはじめ、天膳も忠直も首をかしげる。

「恐らく……小太郎殿であろう」

「小太郎さん？」

康太が驚いたように、源三を振り返る。

「小太郎殿は、何もわからず江戸へ出てきた孫娘に、その理由と経緯を話す義務がある」

おみつの『裏切った』という言葉が真実ならば、なおさらだ。

新吉は恐らく、小太郎が今、どこで何をしているのかの察しがついているのだろう。

納得したようなしないような表情で、康太がうなずいた。その時。

「いざれ……そなたにも話さねばならぬだろうな」

腕を組み、天膳が小さなため息をもらす。

「父上……」

忠直の表情が、険しいものへと変わった。

再び張りつめた空気を助長する足音が、またこちろく近づく。

「良庵先生」

康太に無言で座るように促し、その横に座った良庵が口を開く。

「京香殿に使用された薬は、大麻ではないかと思われます」

「大麻つていえば、あまり依存性はないんですね?」

薬草に詳しい康太が、良庵に訊ねる。

「はい。しかし短期間にかなりの量の大麻を吸わされているようで、徐々に症状が現われているようです」

阿片が切れた際の中毒症状は、修行中に見たことがある。

自身を保つていられなくなり、薬を欲しがるかと思えば、辺りにあるものを突然投げつけて暴れていたように記憶している。

その光景を思い浮かべた源三は、唇をかんだ。

京香はこれから、地獄の苦しみに耐えなければならないのか。

「苦しみに耐えかねて、自害する可能性もあります。恐らく今夜が山かと」

良庵の低い声とともに、重苦しい空気が、辺りを包む。

「良庵先生。一晩……私がそばについていてはいけないでしょうか？」

思い切って、源三は申し出た。

何の力にもなないとわかつてはいるが、京香を、たった独りで苦しみの中に置いておきたくはない。

「しかし」

「良庵先生。この人は、ずっと近くで京香を見守つて来た人間です。もしかしたら、彼女の抑止力になつてくれるかもしねれない。お願ひします」

難色を示す良庵の背中を押すように、康太が頭を下げる。

「良庵。わしからも頼む。今、京香を死なせるわけにはいかないのだ。彼女を救うために傷を負つた、一人の少女のためにも」

天膳に続き、忠直も無言で頭を下げる。

「……辛い一夜になりますぞ。それでも構いませぬか？」

良庵の真剣な眼差しが、源三を見つめる。

その疑問を払拭するように、源三は、良庵の目を見てしつかりとうなずいた。

## 第五章 五日目・永い夜・其の一

冷たい風を受けて走る新吉の耳に、犬の遠吠えが届く。

すべてが露呈し、呆然自失となつた小太郎は今、どこにいる？

立ち上がろうとしない小太郎を置いてきた場所に到着した新吉は、あたりを見回す。しかし、小太郎の姿はおろか、仲間を求めて鳴いているはずの野犬の姿すら見当たらない。

首に縄をつけてでも、山城屋の寮に連れていくべきだった 新吉は、小さく舌打ちをする。

平沼は仕留めたものの、恐らく、お小夜はまだ生きている。風魔から追われていた時はおみつの成長を支えに生きていたのだろうが、今は、寄りどころのない心を、風魔に……お小夜に奪われかねないのだ。

(〔冗談じゃない〕)

背中に傷を負つたおみつはもちろんのこと、新吉にも、小太郎に訊かなければならぬことが残つているのだ。

いのまま、自分らの敵に回られてたまるか。

……しかし。

小太郎を捜しまわる新吉の足が、止まる。

風魔一族はもともと、『政道の敵。

小さなころから父に、そして天膳にそう叩き込まれて育つた。

だからこそ新吉は、おみつが風魔の血を引いているとわかつたとき、彼女を心から追いだしたのだ。

なのに、おみつが風魔に行くと決めて田の前から去つて行つた時には小太郎の裏切りに逆上し、今もこつして、おみつのために小太郎を捜しまわる。

(俺は一体……何がしたいんだ)

矛盾だらけの自身の行動に苦笑いするしかない新吉の前方で、枯れ葉を踏みしめる音が不規則に聞こえる。

とつさに身構えた新吉の目の前で、何者かが倒れ込むのが見えた。

小太郎か そう思った新吉が駆け寄り、抱き起こす。

「おい！ 大丈夫か！？」

「……新吉、か」

「親父？」

声を聞いて新吉は驚く。源三や康太とともにいたはずの父、軍太夫がなぜ、ここにいる！？

「何があつたんだ、おい！？」

力なくもたれかかってくる軍太夫に、新吉は問うた。

「おみつは……どうした?」

「おみつ?」

思いがけない名前が父の口から出たことに驚く。

「ああ。山城屋の寮で別れたきりなんだが……」

「背中に深手は負ってるが、命に別状はない」

「背中に深手?」

心配そうに、軍太夫が問うて来る。

「ああ」

短く答えながらも、新吉は意外な思いで軍太夫を支えていた。

何度もおみつを殺そつとした軍太夫が、今、その身を案じていようとは……。

「私は……何も見えていなかつたのだな」

独り言のように、軍太夫が語りだす。

「今まで上様のため、御政道のためを思い、御庭番としての任務を遂行してきたつもりだったが……。大切なものを、見過して」していた

のだろうな

「親父にも、そんな感情があつたんだな。とつに捨てたと思つていたのに」

憎まれ口を叩く新吉に、軍太夫が鼻で笑つたのがわかつた。

「おみつが……思い出させてくれたのかもしれん」

「おみつが?」

吐く息とともに、軍太夫がうなづく。

「自身が風魔の血を引くことがわかつても、おみつはまず、世話になつた人たちへの義理を忘れなかつた」

そう切り出したのち、軍太夫は山城屋の寮で出会つた時のこと話をしだす。

そして母、お小夜を斬ろうとした時のことも。

「その姿を見たとき、私は、一番大切なものが何なのか……教えられた気がした」

軍太夫が言葉を切つたとき、新吉の脳裏に、京香をかばうようにして倒れていたおみつの姿が浮かんだ。

どのような状況で深手を負つたかは知らぬが、あの姿がきっと、おみつの出した答えなのだろい。

小太郎、お小夜。軍太夫に新吉。「おみつ」とこの接点で繋がつていながら、敵対する家族へ対しての。

「お前は……どうする?」

「は?」

突然の軍太夫の問いに、新吉が横顔を覗き込む。

「おみつのことだ。あいつ自身はこの事件が終わったら、我々の前から姿を消すつもりでいる。だが、風魔がおみつに狙いをつけている以上、どこへもやるわけにはいかん。だが……」

軍太夫はもちらんのこと、新吉自身も公儀のお役目を預かっている身だ。

幕府と敵対する風魔の血を引くものを置いている以上、どこから火の粉が降りかかるかわからない。

かと言つて、おみつが風魔に捕らわれ、今回の京香のよつなことがあつた場合には、今度こそ彼女を「生きものにしなければならない恐らく、父も同じことを考えているだろう。

「俺らはともかく、康太や先生、そして姉さんは……あいつを斬れねえよ」

いや、彼らだけではない。新吉自身も、おみつを斬れと言われてそりできるかは自信がない。

「…………だらうな」

軍太夫がつぶやく。

その後。

新吉の耳に、複数の足音が聞こえた。

軍太夫が、新吉の手を振り払い、力を振り絞って立ち上がる。

「……来たか」

「何がだ？」

「お小夜を仕留め損ねたのでな、風魔が追手を差し向けているのだ」

胸元から薬のようなものを取り出し、軍太夫が飲み下す。

「今の親父一人じゃ手に負えないだろ。助勢するぜ」

「足手まといにはなるなよ」

目があつた瞬間、微笑みを交わした二人の周りを、忍びたちが取り囲んだ。

## 第五章 五日目・永い夜・其の三・

柿渋色の装束に身を包んだ忍びたちが、じりじりと間合いを詰めてくる。

父、軍太夫の息がいつになく荒いのが、新吉の背に伝わる。いいところ、一、三人を相手にするのが限界だろう。

少なくとも五人、いや、それ以上は自分が相手にしなければならない。

新吉は深く息を吸つた。

吐き切ると同時に、向かつてきた一人の忍びの首筋を、短刀で裂く。

続けて、軍太夫へ向かう忍びを追い、首の付け根に刃を突き立てる。

声にならない叫びの後、男はその場でくず折れた。

その死骸を飛び越えた新吉の横から、小柄な忍びが斬りかかってくる。

切つ先が頬をかすめ、生暖かい滴がしたたり落ちるのを感じた。

その男を斬ったのは、軍太夫だ。

「ずいぶんと息が上がってるじゃねえか。無理すんなよ」

「お前に見くびられるほど、老けてはいない」

そういう問題ではないだろ?」。

心の中で毒ついて、新吉は再度短刀を構え直す。

しかし、奴らはこれ以上二人を襲うことなく、闇へと消えた。

大きく息を吐いた新吉の隣で、軍太夫が木にもたれかかる。

「……ったく、仕方がねえな」

刀を胸元に納めた新吉は、軍太夫の手を引き、自身の背中に預ける。

「おい、何を」

「そんなんじゃ歩くのもやつとだろうが。良庵先生の所で手当を受けんだよ」

見た目より重い軍太夫を背負った新吉も、足下がふらつく。

「……お前もたいした役に立たんな」

「つるせえ。怪我人は黙つてろ」

もう一度抱え直し、歩き始めた新吉に軍太夫は何も言わない。

背中から伝わる軍太夫のぬくもりが、新吉の心に染み入ってくる。

ぬくもりなど、とうに失くしたもの　自分には、父はないものだと思っていたのに。

なぜ、じとにも、胸が熱くなるのか。

その熱が、目頭へと移る。雲が頬に「ほれそつ」なるのを「うぐいながら、新吉は闇の中を歩いて行つた。

「……新吉ー？」

軍太夫を背負う新吉の姿が、目の前にいる康太には、とんでもない光景に映つたのだ。「うつ」目を丸くして駆けてくる。

「ちよいと深い傷が多いんでな、悪いが頼む」

意識を失つた父はこれまた、重い。康太とともに奥の部屋に移し、中央にある布団へと横たえる。

「一体、何があつたんだよ？」

「風魔の忍びに追われていた。その時深手を負つたんだ」「う

状態を確かめながら問つてくる康太に答え、立ちあがる。

「おい、新吉」

今度は答えず、入口に向かつて歩を進めた新吉の前に、薄い灰色の着物を身にまとった忠直が姿を現す。

「忠直様」

「父が、そなたに話したいことがあるらしい」

「私に……ですか」

驚く新吉に、忠直がうなずく。

「本来であればおみつにもいでもらいたい」ところなのだが、今、薬が効いて眠っている。軍太夫も……」

「はい。深い傷もありますし、早く手当をしないと」

鋭い視線を向けた忠直に、後ろにいる康太が答えた。

康太に任せておけば、軍太夫のことは安心だ。それよりも。

「しかし忠直様。私はこれからある人を捜しに行かなければ」

「小太郎のことならば、心配はいらん」

忠直の後ろから、天膳の声が聞こえる。

「父上」

「その小太郎のことで、話があるので。あやつがなぜ、今、江戸へ

出て来なければならなかつたのかを

小太郎が、江戸へ出てきた理由。

「それを、御存知なのですか？」

問つた声が、震える。天膳は新吉の目を見、はつきりと首を縦に振る。

「おみつちゃん」と林さんのことはまかせ、新吉

康太が後ろから、強く、新吉の肩を叩いた。

振り返ると、康太があきれたように小さく笑う。

「何で顔してんだよ。てめえがしつかりしなきや、だれがおみつち  
やん守るんだ」

「ひとこと余計なんだよ、おめえは」

こんな時でも変わらず憎まれ口を叩く康太に、なぜか笑みが漏れる。

そういうひとには小さじけないと変わらない。でも、それが新吉を安心させた。

「新吉」

忠直が、新吉を呼んだ。小さくうなずき、新吉は天膳らのあとをついていった。

## 第五章 五日目 永い夜・其の四（前書き）

こんにちは。作者の笠原です。

約1年4ヶ月、更新が滞つてしまい、大変申し訳ありませんでした。  
本日より、週1～2回で、更新を再開いたします！  
どうぞよろしくお願ひいたします m(— —)m

## 第五章 五日目 永い夜・其の四

闇の中で暴れている空氣に煽られ、襖が音を立てる。

提灯の中の炎が激しく揺れる中、目を閉じていた天膳が、ゆっくりと口を開いた。

「小太郎がおみつを置いて江戸に来たのは……上様の御命令じゃ」

「何ですって！？」

新吉は思わず声を荒げ、天膳を見つめる。

「平沼對馬ヒラマツタエマが紀州に度々現れていたのを、手のものを使い報告してきた小太郎に、上様が断を下された。おみつを風魔の手から救うために、小太郎と我々、花ぐるまにて先鋒を叩こうと」

目を閉じたまま、天膳が言葉を切る。忠直が、後に続いた。

「しかし、おみつが紀州の見張りの田をかいぐぐり、江戸へ出て来てしまったことで我らの計算が狂ってしまった」

淡々とした口調で話を進めるが、当時、天膳や忠直らが青ざめていたのは想像に難くない。

「上様は以前より、軍太夫に指令を出しておった。万が一、おみつが一人で紀州から出た場合は、その命を絶つよ」と

おみつの命を狙っていたのは、軍太夫自身の意志ではなく、吉宗

の命令　？

新吉は、重いもので頭を殴られたような衝撃が身体中に走るのを感じた。

父の話を聞き、吉宗が小太郎とおみつの存在を知っているであろうことの察しはついていたが、小太郎と吉宗の距離がここまで近かつたことに、新吉は驚きを禁じ得ない。

「お小夜とおみつらを引き裂いたのが、軍太夫の同朋であることは知つてあるな？」

父から聞いた話であると察した新吉はうなずく。

「責任を感じておられたのか、上様は、周りの者の反対を押し切り、小太郎とおみつに家を与えて何度も見舞いに訪れた。最初は頑なだつた小太郎も、いつしかおみつが上様に懐いているのを知り態度を軟化させ、紀州藩を陰で支えることを決意したのじゃ」

だから小太郎は、平沼を追い詰めんとそこまで動いていたのか。

今までの疑問が解けていくのを新吉は感じた。だが。

「しかし平沼は、小太郎殿が一度風魔に寝返らうとしていた、と申していましたが」

新吉の言葉に、天膳が小さく笑う。

「裏切らうとしていたのは事実じゃ。しかし、当時お小夜が平沼の子を身につけておったことを知り……」こちらへ戻つて来たのだ

「……では、おみつには」

その先を告げられぬ新吉に代わり、忠直が頷く。

「父の違つ弟、ないし妹がいる。だが、行方はあるか、生死すら知れぬ」

新吉は再度、きつくれを閉じた。

生まれた時から運命に翻弄され続けたおみつにとって、紀州で過ごした小太郎との日々が、唯一の安らぎのときだったのだ。

だが。

「一つ、腑に落ちぬことがござります」

田を開け、天膳の顔を見据えて、新吉は訊ねた。

「何じや」

「おみつを、私や姐さんと渡り合えるほど鍛えたのは、何故ですか？」

今度は、天膳が目を閉じた。

横目で天膳を見る忠直は、何も言わない。

今、新吉の耳に聞こえるのは、風に煽られ不規則に揺れる、襖の音だけ。

新吉は再度問いたい気持ちを抑え、天膳の言葉を待つ。

源三の道場でのことはおろか、自身の命を狙つた父の追手をかい  
くぐつたからこそ、おみつは今、じつして生きているのだ。

風魔と決別し、紀州藩に仕えていたも同然だつた小太郎が、おみ  
つを鍛えた背後にはきっと、吉宗の意向があつたはず。

突然吹いてきた強い風が、提灯の中の炎を大きく揺らした。

同時に、天膳が目を開ける。

「将来、今のそなたと同じ職につけるため、上様が軍太夫から引き  
離したのじや。花ぐるまの一員になるには、想像を絶する苦難を乗  
り越えなければならん。そこに、兄妹の情は必要ない。……そう言  
えば、わかるな？」

確かに……天膳の言つようじで、修行は壮絶を極めた。

他人をかまつていれば、自身がつぶれる　修行の厳しさに耐え  
られなかつた仲間たちはみな、脱走、もしくは身体を壊して命を落  
とした。

もし、おみつが自分とともにいたなら、恐らく自分が、おみつを  
かばつて命を落としていたに違いない。

何も言えずに頭を垂れる新吉の耳に、康太のものらしい足音が届  
く。

「失礼します」

「康太。軍太夫の具合はどうだ?」

忠直が、厳しい表情を崩さずに問う。

「命に別条はありません。ただ、肩から背中にかけての傷がかなり深く、今後、御庭番としての任務には……」

「戻れぬ、と申すか」

忠直の声が、低くなる。はい、とつぶやき、康太は手をついた。風が、ついに提灯の炎を吹き消す。闇の中で、全身が冷えていくのがわかる。

今まで軍太夫が自分らにしてきた仕打ちを考えると、父を許す気にはなれない。

だが、自身を抑え、家族を投げうつてまで忠節を尽くしてきた軍太夫を思うと……新吉の心は大きく揺れた。

数回、火打石が鳴った。ほの暗い灯りが、再び部屋を照らしだす。

「新吉。なぜそなたが軍太夫とともに江戸へ来れなかつたか……わかるか?」

突然、天膳が問いかけてくる。その意図をつかめない新吉は、ただ黙つて首を振るほかなかつた。

## 第五章 五日目・永い夜・其の五 -

「軍太夫は、そなたとおみつも連れて行こうとしておったのだ。二人は兄弟の中でも、忍びとしての素質は抜きんでていると言つてな」

天膳の言葉が、新吉の心を突く。

父は、おみつを……そして、彼女をかばい続けた自分を、疎んじていたわけではなかつたのか？

「だが、上様がそれを許さなかつた。心の優しいそなたには、公儀御庭番よりも大事な職務がある。そのために、新たな訓練に励まなくてはならない、と申されてな」

新吉の目の前が、かすむ。頬にこぼれ落ちそうな滴を見られたくない、顔を伏せる。

「そして、上様から花ぐるまの構想を聞いた軍太夫は、断腸の思いでそなたらを手放した。あとは、先に申した通りじゃ」

新吉は、無意識に床に手をついていた。そして、今更ながら思い知る。

自分は……何もわかつていなかつたのだ、と。

「新吉」

康太が、かすれた声で新吉を呼んだ。

「お前が……一人のそばにいてやれよ」

庚太の視線を感じながらも、新吉は首を横に振る。

自身の感情に振り回され、父の思いも、おみつの境遇も思いやれなかつた自分に、今さら何ができる?

「康太の申す通りだ。軍太夫はともかく、おみつのそばにはいてやらねばならぬ」

他人の事情にあまり口出しをしない忠直までもが、進言してくれる。

「軍太夫だけではない。小太郎やわしらも、おみつに多大な負担をかけた。その心を少しでも癒してやれるのは、今はそなたしかおらんのじや」

「……今のおみつの心を癒せるのは、私ではありますん」

そう。今のおみつを癒してやれるのは、自分ではない。

彼女の出自を知らなかつたとはいえ、『今、ここにいるおみつ』を受け入れてきた京香か、

出自を知つてなお、おみつを信じ、守つて來た源三だけ。

それを進言するが、天膳の表情が一瞬にして曇つた。その横で、忠直が深いため息をつく。

やういえば……やつきましたはずの源三の姿が見えない。

「先生は？」

「京香のそばにいる。あいつは……今夜が山なんだ」

康太の声が、一段と低くなつた。大麻を短期間に大量に吸わされ、強い禁断症状が表れる可能性が高いのだと言つ。

「お前だつてもう、おみつちゃんの出自に対するこだわりはないんだろ？ 山城屋の寮で、一番最初に彼女を背負つたのが何よりの証じやないか」

庚太の言葉が、新吉の胸を突く。強く拳を握りしめて、目を閉じる。

こだわりがないといえば、嘘になる。だが、あの時軍太夫が言つていたように、自分が世話になつた人への義理を忘れず、自分の命を投げうつた彼女の姿こそが、本当の『おみつ』。

自分が命を賭けて守ろうと決意した、たつた一人の妹なのだ。

かつての気持ちを思い起こし、新吉が口を開けたのと同時に、廊下で大きな音がした。

「……おみつちゃん！」

殺氣をたたえ、扉を開けた康太が叫ぶ。

「何やつてるんだ。寝てなきや駄目じゃないか！？」

「お姐さん……は？」

苦痛に顔をゆがめ、息を切らせながらおみつが問つ。

「今、良庵先生に診て頂いてる。先生も……源二さんも一緒にから  
心配は

「嘘ー。」

脂汗を浮かべながら、田だけを異常に輝かせて、おみつが康太の  
言葉を遮る。

「あの時のお姐さんは、暗示をかけられてた。じいちゃんに、暗示  
をかける時に南蛮渡来の薬を使つゝ……教えられたことがある。  
だったら、お姐さんは」

「馬鹿なこと言つてじやねえー。」

今度は新吉が、おみつの言葉を遮つた。

「姐さんは……お前を信じて風魔に落ちたんだぞー。」

「新吉ー。」

おみつを支える康太が、顔色を変えて叫んだ。天膳や忠直も氣色  
ばむ。

しかし、新吉はそれに構わず、おみつの肩を強く揺わふつた。

「姐さんは……京香は、『んなことでくたばる女じやねえー。今度  
はお前が、そう信じてやらなくてどうするんだー？』

「兄……さん」

新吉を見上げるおみつの目が、見開かれた。

新吉はもちろん、天膳も忠直も、康太も、京香が生きて戻る可能性が低いと感じている中、心に傷を負つおみつに、酷なことを要求しているとわかつていい。

だが、おみつには何も憂えず信じていて欲しいのだ。

おみつを信じ、最後まで守り抜いた京香が、必ず笑顔で戻つくると。

おみつの田から、涙がこぼれ落つる。

江戸へ出て来たときよつも小さくなつた妹の身体を、新吉は強く抱きしめた。

「……兄さん」

胸の中でつぶやいたおみつの肩が、幾度も上下する。

「大丈夫だ。何があつても、必ず先生が姐さんを助け出してくれる

「やうだおみつちゃん。新吉の言つとおりだ。必ず京香は帰つてくれる。先生と一緒に。それを信じよつ」

しゃくりあげながら何度もうなづくおみつの背中をさすりながら、

新吉は康太を見た。

うなずいた彼の目が、廊下へと移る。

（先生、頼む。姐さんを……京香を、助けてくれ。おみつのためにも）

康太の視線の先を見つめた新吉は、心の中でつぶやいた。

## 第五章 五日目・永い夜・其の六・（前書き）

今回「現在の社会通念上好ましくない表現」が含まれているかもしれません。

ご覧頂く際にはお気をつけ下さいますよつ、よろしくお願ひいたします。

## 第五章 五日目・永い夜・其の六・

田の前を歩く良庵が、つきあたりの部屋の前で足を止めた。

「何かありましたらお呼び下さるませ」

静かに告げる良庵に頭を下げ、源三が襖の引き手に手をかける。

「……あの」

振り返ると、やや青ざめた良庵が、源三を見上げてくる。

「はい。何か」

「いえ……。患者の様子にお気をつけなさい」

田をそらし、立ち去る良庵の背中を見て嫌な予感がした源三は、慌てて襖を開けた。

そして足早に、室内の中央に敷かれた布団に横たわる京香へ近づく。

「……先生」

少し荒い息の下から、自分を呼ぶ京香の顔色はさうじて白くなり、声もかすれている。

「すみません。」迷惑ばかりかけて

「何を言つ。生きて戻つて来てくれただけで、充分だ」

布団から出した京香の手を握りしめ、源二は小さく息を吐いた。

「おみつ……さんまっ。」

「心配はこりぬ。傷口の縫合は済んだし、意識もしっかりしている  
やつだ」

京香の顔に、安心したような笑みが浮かんだ。しかし、すぐに小  
さく咳を始める。

「苦しいか？」

京香は無言で、小さく首を振る。

「つもれつだ。」

どんなにつらても苦しくても、京香は決して弱音を吐かない。

それが、源二にはひどくかしい。

どんなにやになことでもいい。自身の持つ悩みや困惑などを、  
打ち明けてくれれば。。。

また、ひどい咳が京香の口から漏れた。

せめて薬湯だけでも飲ませよとい、京香の身体を支えて起こう。

「先生……お願いが、あります」

咳きこみながら、自身にすがりついた京香がつぶやく。

「何だ？」

「私が、私でなくなる前に……」の部屋を出てくださー」

「何をいつー そんなことができるか」

京香の頭をぐっと引きよせ、源三は声を荒げる。

ようやく、戻つて来たのに。

京香を失うかもしけない そんな思いをするのは、一 度と二 めんだけ。

しかし、そんな源三の思いとは裏腹に、京香の息づかいがますます荒くなる。

「…………」

「どうした？ 何が欲しい？」

息を吐き出すたびに、源三の袖口をつかむ手が強くなる。

「先生……私は、大丈夫……ですから」

大丈夫 そう言いながらも、白い額に無数の汗を浮かべる京香の顔はすでに血走っており、禁断症状が強く出始めていることを物語つてこる。

今、欲しいはずの物の名前を口にせよ、自身を保つと必死に闘つている。

そんな彼女に、自分は何ができる？

京香の横顔を見つめ、自問する源三の身体が、ふいに浮いた。すぐに戸中に痛みが走る。

ひとりわざと大きく息を吐いた京香が、突然、源三の身体を突き飛ばしたのだ。

「どうしたー？」

「出で行つて……言つていいんじゃありませんか！」

荒い息の中、京香の声が大きくなる。

「これ以上、私を惨めな気分にさせないで！」

脈絡もなく叫ぶ京香の顔には、怒りの色がはつきりと浮かぶ。

そのさまが源三の心に刃となつて突き刺さり、言葉を発する。「うか、身動きすらできない。

京香はさりにたたみかけてくる。

「紀州に帰してくれさえすれば、葵は死なかつた……私の腕の中で。寒い、寒いつて言いながら……」

突き飛ばされたまま動けない源三の田を見ずに、京香は続ける。

「あの子が……いえ、私達が何をしたって言つんです？ 私達はただ、父上や母上と共に、穏やかに暮らしていけるだけでよかつた。それなのに……」

何も映していない、虚ろなまなざし。

「御政道のため、江戸の平和のため……それが何です！ そのためには、何人の子供が犠牲になつたの！！ 私たちは……紀州に、帰りましたか？ 父上と、母上に逢いたかった。なのに……」

どうにか立ち上がった京香が、頬にこぼれる涙をぬぐつゝともせず、裸に向かつて歩き出す。

外へ面している障子に手をかけたが、激しく咳き込むと、足下からくず折れた。

大きな音とともに、障子が京香の指をなぞつた形で破れ、その跡が下へと流れていく。

「京香ー！」

慌てて立ち上がった源三は、京香の身体を支えた。

振り返った彼女の表情はうつりで、田は、源三のはるか後ろを見つめている。

「京香、辛抱しろ。今は耐えるのだ！」

源三が思わず大声をあげた瞬間、京香の目に何かが宿つた。

「……こないで」

「京香？」

「私が……私が悪いんじゃない！」

叫ぶと、京香の指が源三の襟元を握りしめた。そんな彼女の身体を、源三は強く抱きしめる。

「いやあああっ！　来ないで！　葵！」

腕の中で、今まで聞いたことのない声をあげ続ける京香。

痩せて、骨ばった拳が、彼の胸を何度も叩きつけた。その痛みは心にまで突き刺さる。それでも、今の自分にはこうすることしかできない。

一時の快楽のために果てのない苦しみを味あわせるより、今、堪うながえてもらひしきないのである。

けれど。

(……無力だ)

源三は、京香の苦しみに添つことすらできない自分を、呪つた。

葵を喪つた夜。京香に何があつたかは知らない。訊いたこともない。

しかし、あの日。

見知らぬ老人の家に彼女を迎えて行つた朝からずっと、自分が京  
香を守るのだと決めていたのに。

今の自分は、彼女の苦しみを代わってやることはあるか、軽くす  
ることもできず、ただ、抱きしめることしか。

## 第五章 五日目・永い夜・其の六・（後書き）

「んばんは。作者の笠原です。

現在呼ばれている「薬物汚染」。

京香が今置かれている状況も、まさに「それ」です。

彼女がその状況に置かれた背景は「風魔による洗脳」ですが、興味本位での「薬物使用」は、確実に人生を狂わせます。  
この話を書くにあたり、笠原はそれをまざまざと見せつけられました。

次回も、京香の苦しみは続きます。

苦手な方は、「」を頂く際お気をつけ下さい。よろしくお願ひいたします。

## 第五章 五日目・永い夜・其の七・（前書き）

今回も「現在の社会通念上好ましくない表現」が含まれているかも  
しません。  
ご覧頂く際にはお気をつけ下さいよつ、よろしくお願ひいたし  
ます。

## 第五章 五日目・永い夜・其の七

源三には見えぬ幻に向かつて叫ぶ京香がまた、激しく咳き込んだ。

「京香ー、しつかりしろー。」

少しども楽にしてやつたないと戒めを解き、背中をさする。

しかしそれがまた恐怖心を煽るのか……京香がまた、源三の腕から逃げ出した。

「京香ー。」

「やめて……来ないで！　お願ひー。」

今度は、源三を見て叫ぶ。

「何を言つてる、京香。俺がわからないのかー？」

「私のせいじゃない……私が悪いんじゃないわー。」

小刻みに震える体を護るよつて抱え込む京香の腕が、異様なほど白い。

結んである黒い髪は乱れ、こけた頬にいく筋もの線を描く。

「京香、落ち着いてくれ。ここは葵ではない。お前を苦しめるものは一つないのだ」

「うわ……嘘よ。葵はそこにはいるわ！　私を連れて行けりつゝ、手をのばして……」

源三の背後を見つめた京香が顔をひきつらせ、身を翻す。<sup>ひるがえ</sup>しかし、白い着物の裾に足を取られ、その場に倒れ込んだ。

「京香！　しつかりしろ！」

差し伸べた源三の手を、京香はものすごい力で握りしめて来た。

「京香？」

「…………くすり

ついに吐き出された京香の本音に、源三は、冷や水をかけられたよくな感覚に襲われた。

「先生、お願ひ」

「……京香」

「少しせいいの……。これで、最後にする、から。先生……」

「駄目だ。頼む、耐えてくれ」

息を荒く吐き出した京香が、幾度も首を振る。そしてまた、立ち上がった。

「京香？」

足下がおぼつかないまま、入口の方へ向かって歩く。源三は慌てて、その後を追つた。

「どこへ行く？ 京香…」

「くすりを、もらひに……」

「馬鹿を申せ！ そなたに薬を貰ふものは、この建物にはいない！」

「離して…！」

ものすごい力で振り回された彼女の手が、源三を強く打つた。頬に、生温かい液体が落ちる。

「『浪人さんの言つ』とを聞けば……くすりをもらひに、つて。あの人……」

「誰だ？ その浪人といつのは？ 何を聞くのだ！？」

嫌な予感に囚われた源三が、京香の背中に問いかけた。

すぐに、京香がこちらを振り返つた。そして、立ち上がるうとした源三の首に手をかける。

「…………」

「家族を壊した奴らを殺せば……好きなだけ、薬をくれる、つて……」

「……」

低く、よじみのない口調。敵と対峙する時と同じ、鋭い目。

京香の細い指が、源三の肌に食い込む。

「家族、を、壊したとは……どういふ、ことだ？」

京香の言葉の意味がわからない源三は、どうにか声を絞り出す。

「あのひとの、家族を……娘を、奪つた……」

娘を、奪つ？

源三の脳裏に、様々な光景が浮かんでは消える。

おみつが産まれて間もなく、同僚が小太郎に斬りかかり、お小夜を凌辱したあと、惨殺されていたと告げた軍太夫の苦渋の表情が。

お小夜が仕事場として使つている長屋の一角に落ちていた、京香の小袖が。

そして。

おみつを取り戻そうとしたお小夜とともに、うつな目で立ち尽くしていた、京香の姿が。

「そなたに……薬をやる、と言つたのは、平沼とひま、對馬だな？」

平沼の名前を出した瞬間、京香の目が見開かれた。

源三の首にかけた手の力が、さらに強くなる。

取り戻してなお、京香の心は未だに紀州の山の中をさまよい、風魔に囚われている。

駄目、なのか？

一度と、あの柔らかな笑みは、

『先生』

と呼んでくれた、涼やかな声は、還つて来ないのか ？

源三は、京香の手首を掴んでいた自身の力を抜き、目を閉じた。

何も知らなかつた幼い頃、天膳から厳しい教育を受ける兄の忠直を横目に見ながら、京香と遊んだ屋敷の庭も。

征夷大將軍に任命された紀州藩主、吉宗の命を直らに告げた父の厳しい顔も。

葵を喪い、直らを高めるために限界まで追い込んでいた、京香の真剣な横顔も。

薄れゆく意識の中で、ゆっくりとそれらが闇に墜ちて行こうとしたていた、その時 。

自身の首から、戒めが解かれた。

突然、大量の空気を取り込んだ源二は逆に苦しくなり、激しく咳き込む。

「京……香？」

何度も、大きく息を吐き出しながら顔を上げた源二の視線の先に、京香が倒れ込んでいるのが見えた。

「京香ー。」

気を失った京香を起こし、首筋に手をやる。

指先に触れる弱い脈。急速に冷えて行く肌。

「そのままでは、死んでしまう。」

京香を抱きあげた源二は、中央の布団に体を横たえ、自らも入って掛布団をかぶつた。

流れ出ようとすむ彼女の命を繋ぎ止めようと、強く京香を抱きしめる。

(頼む……生きててくれ。京香。そなたを助けようと深手を負つたおみつのためにも)

そして。

今までずっといた……自分のためにも。

## 第五章 五日目・永い夜・其の七・（後書き）

長らくお待たせして、申し訳ござりませんでした。

次回よりようやく第六章に移ります。

引き続き、よろしくお願ひいたします。

## 第六章 六日目・解放・

闇の中から、泣き声が聞こえる。

何かに導かれるように、京香は足を向けた。

ゆっくり歩く視線の先に、白い、かすかな明かりが見えた。

そこには、小さな少女。

『おねえちゃん?』

覚えのある幼子の声を聞いた京香の背に、冷たい霧が落ちた。

『……いつしょに行け。おねえちゃん』

立ち上がり、京香を見上げる幼子の顔には幾つかの擦り傷。

頼りなげな体には、無数の噛み傷。

そして。

『あの、夜、畠にかかった足の先はない。

「……葵」

片足がないのをもととせず、京香に近づく。

葵の手が、身動きできない京香に触れた。

氷のような冷たさに、体が震える。

『ひとりじや やびしよ、おねえちやん』

光を映さない葵の皿から、赤い雫が落ちた。

『父上も母上も、来てくれない……。すうっと、ひとりぼっち』

京香から手を離し、葵が泣きじやぐ。

ひとりぼっち 葵の言葉が、京香の胸を刺した。

葵を、こんな所で独りにしたのは、自分。

あの夜、自分が生き残るために、動かなくなつた少女を置いて逃げたのだ。

京香はしゃがみこみ、冷えきつてこる葵の頬をぬぐつた。

「「おんね……おねえちやん、行くわ。葵と一緒に」」

顔を手で覆つていた葵が京香を見下ろし、満面の笑みを見せた。

『「うひあは、おねえちやん』

小さな、冷え切つた葵の手を改めて握つて立ち上がつた京香は、闇の中へと歩き出す。

といひが。

「行くなー、京香ー！」

姿は見えない。だが、すぐ近くで聞こえる源三の声に、京香の足は止まる。

「戻つて来い！ そなたの行く道は、そちひではないのだー！」

『おねえちゃん？』

葵が、京香の手を引く。しかし、血の意思とは関係なしに、京香の足は動かない。

「お姐さんー！」

今度は、おみつの声が遠くから聞こえて来た。

「行かないで！ 先生も、兄さんも、康太さんも……おじいちゃんや、忠直様だつて待つてるー！」

待つてる？ 誰を？

「私だつて待つてる！ お姐さんが戻つてくるのを、みんな待つてるんだよー！」

……私を？ みんなが、私を……。

葵の手を離し、京香は振り向いた。

葵がいた場所にほのかに灯っていた光が、ゆっくり京香に近づいてくる。

『おねえちゃん……そっちに、行っちゃうの?』

涙をためて、葵が京香を見上げた。

行けるわけがない。たった今、自分は葵とともに行くと決めたのだから。

でも、自身にやつ言い聞かせる言葉とは裏腹に、京香の足は鉛のように重くなり、一步も踏み出すことができずにいた。

光がすぐ、そばに来た。

すると、その光は京香ではなく、葵の姿を飲み込んだ。

「葵ー」

叫んだ京香の耳に、どーからか、葵の寂しげな声が聞こえて来る。

『おねえちゃん……わよなー』

「葵ー? ドーに行つたの? 葵ーー!」

姿の見えなくなつた葵に向かつて手を伸ばした京香が、あまりの眩しさに目がくらんだその時。

ものすごい力で、手を引っ張られた。

「京香！ しつかりいたせ！ 京香！」

耳元で聞こえる大きな声に応えようと、京香は急いで目を開ける。するとすぐそばで、頬に傷を負い、結った髪の毛を乱した源三が真剣なまなざしを向けていた。

「先……生？」

かすれた声で、源三の通り名を呼ぶ。

「そうだ。俺がわかるか？ 京香」

伸ばしたままの京香の手を、源三がまた、強く握り締めて来る。

「先……生」

もう一度源三を呼んだ京香の胸が熱くなり、頬に零が伝つ。

「よく……戻つて來たな、京香」

声を震わせた源三が、寝たままの京香を包んだ。

そのぬくもりが、京香が深く、暗い闇から抜け出したことを教えてくれた。

追い詰められ、おみつとともに川へ飛び込んでから……いや、葵を喪ったあの夜から心の奥を苛んでいた闇すらも、降り注ぐ光に溶けて行くような感覚が、京香を包む。

今までにない晴れやかな思いが、胸を満たし始めたその時。

悲鳴とともに、多数の襖が倒れる音が、耳へ飛び込んで来た。

## 第六章 六日目・おみつの想い・

突然の物音の後、近づく大きな足音に、京香を包んでいた源三が、顔をこわばらせて体を起こす。

未だ横たわる自分はもちろん、源三も丸腰だ。万が一敵の襲来があつたなら、太刀打ち出来ないのは目に見えている。

「先生…」

京香の不安をよそに部屋へ飛び込んで来たのは、目を閉じたおみつを抱えた康太だった。

「何があつた？」

「風魔の残党が、良庵先生を」

「何？」

京香をかばうように膝を立てていた源三が、立ち上がる。

「林殿は？」

「今、新吉が部屋に行つてゐる。他の連中は清水様と忠直様が」

「わかつた。俺が行く」

源三に頷いた康太が、胸元から短刀を取り出す。

「康太。そなたの分は」

「心配するな」

もう一本、同じ長さの刀を取り出し、康太が微笑んだ。

「京香とおみつを……頼む」

「あいよ」

「じ」か余裕のある声で康太が頷くと、源三が彼の肩を叩いて部屋を出た。

「久しぶり……でもないよな。じ」まで人を心配させたら気が済むんだか。京香つて奴は」

襖を閉め、軽口を叩く康太に、京香は肩をすくめて応える。

「どうもすみませんね。それより早く、おみつさんを寝かせてあげなさいよ」

体を起こし、這いつゝ布団を出る。

「だけど」

「私は大丈夫。おみつさん、まだ眠つてないじゃないの」

「……背中に傷しそうてるくせに、明け方近くまでずっと起きてたからな。あなたのことを心配して」

京香が横たわっていた布団におみつを寝かせた康太が、つぶやく。  
あどけない表情で眠り続けるおみつのこけた頬に、涙の跡が幾筋  
もついている。

布団からはみ出たおみつの手を、京香は何も言わずにそっと握る。

おみつとともに川へ飛び込んだあの日。

縫物職人のお小夜に助けられたのもつかの間、屈強な男たちに押  
さえつけられ、すぐに煙管きせるで薬を嗅がされた。そこから『何をして  
いたのか』、京香は覚えていない。

ただ、何者かへの憎しみを強く持っていたことだけは、覚えてい  
る。

「薬を嗅がされてから私は……何をしてたのかしら」

「康太は、知っているんでしょう？ 私が何をして、あの場にいた  
のかを」

「京香」

京香を見つめていた康太の目が、宙をさまよつ。

突然のしかかった、葵を喪った時と同じ重み。

その後、頬に走った鋭い痛みで気がついた京香の膝元には、背中に傷を負つたおみつが倒れていた。

『あんだが殺したようなもんだ』

天膳や新吉と戻を仕掛けたあの夜、まんまとおびき出された浪人の言葉が、京香の脳裏によみがえる。

「私が……おみつさんを斬つたのね？」

「それは違う！」

唇を噛み締めた京香の言葉を、康太が即座に否定する。

「『』の子は、あんたを助けるために、自らの命を賭けたんだ。自身に流れる血を責めながら、それでも俺たちの元にお前を戻そつと、必死に……」

声を詰まらせた康太が、おみつを見下ろす。

「自身に、流れる血？」

京香の問いに、康太は小さく舌打ちをして顔をそむけた。

「『』の子は、林さんと縫物職人だつたお小夜さんの子供だ。……風魔の血を引いてるんだよ」

しばらくの沈黙ののち、絞り出すようにつぶやいた彼の言葉で、京香はすべてを悟る。

おみつが、あの晩助けてくれたお小夜の子供ならば。

記憶のない間、自分は風魔の手に墮ちていたのだ、と。

「私がいない間、つらい思いをしていたのね」

おみつを守るために川に飛び込んだことが、逆に、彼女を追い詰める羽田になってしまったのか。

京香は田を開じ、自らの浅慮を悔いた。

守りたいと願いながら、おみつを追い込んだのは、紛れも無い自分。

涙がこぼれそうになるのをこらえながら、京香は、おみつの手を強く握り締める。

それが眠りを妨げたのか、彼女の手がかすかに動いた。

「おみつちゃん」

傍らで康太がつぶやく声に田を開けると、田を覚ましたおみつが、京香と康太を交互に見つめていた。

「お姐さん」

「…………」めぐなさこね。私のせいだ」

じりえきれない涙が、京香の頬に落ちる。

「何で、お姉さんが謝るの？ 悪いのは……」

何かを思い出したように言葉を切ったおみつが、京香の手をそつと振り落とした。

動きづらそうに、でも、京香と康太から逃げるよつこ、寝がえりを打つて背を向ける。

「おい、どうしたんだ？」

心配そうに声をかける康太にも、答えない。

小さく肩を震わせて、声を押し殺して、おみつが泣いている。

そんな彼女に、京香は今、かける言葉を完全に失っていた。

## 第六章 六田田・おみつの想い・（後書き）

いつもありがとうございます。作者の笠原です。

3月28日に頂きましたWeb拍手コメントのお礼を、活動報告にてさせていただいております。

本当にありがとうございます！ ザハ、ハーハー確認くださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8039a/>

---

花ぐるま事件帳～恩讐の彼方～

2011年7月6日13時00分発行